西村遺跡 III

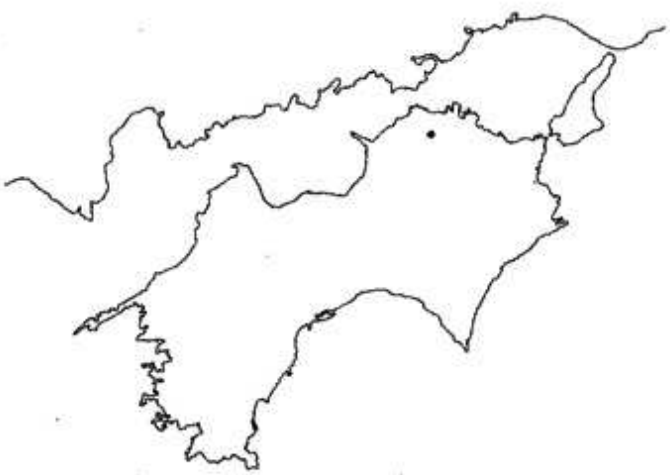
－国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査－

1982 年 3 月

香川県教育委員会

西　村　遺　跡　III

－国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査－



1982　年　3　月

香川県教育委員会

例　　言

1．本書は，香川県綾歌郡綾南町陶において香川県教育委員会が実施した西村遺跡第3次発掘調査の調査概報である。

2．この調査は，国道32号綾南バイパス建設工事にともなって，香川県教育委員会が建設省四国地方建設局より調査委託をうけて実施したものであり，調査費用は建設省が負担した。

3．調査は，香川県教育委員会文化行政課職員　廣瀬常雄，林　正弘，大砂古直生，玉城一枝が担当した。

4．本書で遺構に使用した略号は下記のとおりである。

ＳＡ（柵列状遺構）・ＳＢ（掘立柱建物遺構）・ＳＤ（溝・溝状遺構）・ＳＫ（土坑）・ＳＴ（土壙墓）・Ｐ（ピット）・ＦＰ（焼土坑）・ＳＸ（その他の遺構）

5．本書の遺構実測図中に記入したレベルの単位はメートルである。

6．図版の一部に国土地理院発行の25,000分の１　地形図「滝宮」・「白峰山」を使用した。

7．西村遺跡出土の人骨は，京都大学理学部人類学教室　池田次郎教授に鑑定を委託した。

8．昭和55年度に実施した川北地区の調査抄報を第３章に掲載した。

9．西村遺跡の発掘調査中に綾南町萱原で塚の伝承地を調査した。抄報を第５章に掲載した。調査は大砂古直生が担当した。

10．遺物整理・概報作成には下記の諸氏の献身的な協力をうけた。記して謝意を表したい。

和泉美香子，小田邦博，鍛治　隆，木村千鶴子，十川昌平，田村雅彦，星野佳美

11．本書の執筆分担は下記のとおりである。編集は廣瀬が担当した。

第２章第３節１(1)～(4)・２・３(1)～(6)・４……林
第２章第３節１(5)～(8)・５，第２章第４節10，第５章付編２……大砂古
第２章第３節３(7)，第２章第４節１(1)N23－ＳＫ01出土土器・７……玉　城
第２章第４節３～６，第３章第４節３・４……木　村
そ　の　他……廣　瀬

目　次

第1章　はじめに……1
第1節　調査の経過……1
第2節　昭和54年度，55年度の調査……2
1　昭和54年度の調査……2
2　昭和55年度の調査……4
(1)　西村北地区の調査……4
(2)　山原地区の調査……4
(3)　川北地区の調査……5
調査日誌抄……6
第2章　山原地区の調査……9
第1節　調査の概要……9
第2節　土層序……12
第3節　遺構……17
1　掘立柱建物遺構と棚列状遺構……17
(1)　S16－SB01……17
(2)　S17－SB01……17
(3)　N20－SB01……18
(4)　N20－SB02……18
(5)　N23－SB01……19
(6)　N23－SA01……19
(7)　S23－SA01……20
(8)　S23－SA02……20
2　古代・中世の溝……20
(1)　S16－SD02・04・05……20
(2)　S17－SD02・04・06・11……21
(3)　N20－SD01・02・06……21
(4)　N20－SD01・03・04・05……21
(5)　N20素掘り溝……21
3　土坑……22
(1)　I5～19W区の土坑……22
(2)　19E・20区土坑群……23
(3)　N20－SK01・02・03……23
(4)　S19E－SK20……23
(5)　S20－SK37……24
(6)　N20－SK23……24
(7)　N23－SK01……24
4　土壙墓……25
(1)　N17－ST01……25
(2)　S17－SK201……26
(3)　S15－SK201……26
5　その他の遺構……26
(1)　N24－SX01土坑……27
(2)　S24－SX01土坑……27
(3)　S24－SX02土坑……27
(4)　S24－SX03土坑……27
(5)　S24－SX04土坑……27
(6)　S24－SX05土坑……27
(7)　S24－SX06土坑……27
(8)　S24－SX07土坑……28
(9)　S24－SX08土坑……28
(10)　S24－SX09土坑……28
(11)　N・S24，S25－SD01……28
第4節　遺物……29
1　土　器……29
(1)　土坑・ピット出土土器……29
15～19W区出土土器(1)……29
19E・20区出土土器(1)……31
15～19W区出土土器(2)……31
19E・20区出土土器(2)……35
N23－SK01出土土器……40
(2)　溝状遺構出土土器……45
S16－SD02出土土器……45
S17－SD02出土土器……45
S17－SD06出土土器……45
N20－SD06出土土器……47
N20－SD02出土土器……47
N20－SD01出土土器……48
N20－SD03出土土器……48
N20－SD05出土土器……49
N20－SD04出土土器……49
S20－SD01出土土器……54
(3)　土壙墓出土土器……54

N17－ＳＴ01出土土器……54
Ｓ17－ＳＫ201出土土器 ……55
2　輸入磁器……55
(1)　青　磁……55
(2)　白　磁……58
3　小型羽釜……58
4　土　鈴……59
5　硯……59
6　瓦……60
7　竹製品……61
8　鉄　器……61
9　銭　貨……62
10　その他の遺物……62
(1)　N・Ｓ24, Ｓ25－ＳＤ01出土遺物…62
(2)　23～25区出土石製品……65
(3)　24区土坑出土遺物……66
N24－ＳＸ01土坑……66
Ｓ24－ＳＸ01土坑……66
Ｓ24－ＳＸ03土坑……66
Ｓ24－ＳＸ04土坑……66
Ｓ24－ＳＸ05土坑……67
Ｓ24－ＳＸ06土坑……67
Ｓ24－ＳＸ08土坑……67
第５節　小　結……68
第３章　川北地区の調査……71
第１節　調査の概要……71
第２節　土層序……72
第３節　遺　構……75
1　建物遺構……75
Ｓ31－ＳＢ01……75
2　土坑群……75
N35区土坑群……75
3　土　坑……75
Ｓ33－ＳＫ01……75
4　土壙墓……76
N33－ＳＴ01……76
第４節　遺　物……76
1　土　器……76
(1)　30～33区出土土器……76
(2)　Ｓ33－ＳＫ01出土土器……79
(3)　N35区出土土器……80
2　輸入磁器……83
(1)　青　磁……83
(2)　白　磁……83
3　瓦……83
4　硯……84
第５節　小　結……85
第４章　おわりに……87
第１節　西村遺跡出土の土器について　(試稿)…87
第２節　遺構について……92
第５章　付　編……95
1　香川県西村遺跡出土の中世人骨とその埋葬について……95
2　下所塚の調査……99

図 版 目 次

図版第1　綾南町陶航空写真
図版第2　1.遠望（城山より）
2.山原地区全景（東より）
図版第3　1.山原地区　N15～18全景(西より)
2.山原地区　N15～18全景(東より)
図版第4　1.山原地区　S15～18全景(西より)
2.山原地区　S15～18全景(東より)
図版第5　1.山原地区　S15全景（東より）
2.山原地区　S16全景（東より）
3.山原地区　S17全景（東より）
図版第6　1.山原地区　S17全景（東より）
2.山原地区　S18全景（東より）
3.山原地区　S19W全景（西より）
図版第7　1.山原地区　S19E全景（西より）
2.山原地区　S20全景（西より）
3.山原地区　S21・22全景(東より)
図版第8　1.山原地区　N15全景（西より）
2.山原地区　N16全景（西より）
3.山原地区　N17全景（西より）
図版第9　1.山原地区　N18全景（東より）
2.山原地区　N20全景（西より）
3.山原地区　N20全景（西より）
図版第10　1.山原地区　N23全景（西より）
2.山原地区　N24全景（西より）
3.山原地区　N25全景（西より）
図版第11　1.山原地区　S23全景（西より）
2.山原地区　S24全景（西より）
3.山原地区　S25全景（西より）
図版第12　1.川北地区　S31全景（東より）
2.川北地区　S32全景（東より）
3.川北地区　S33全景（東より）
図版第13　1.川北地区　N31・32全景(東より)
2.川北地区　N35・36全景(西より)
図版第14　1.山原地区　S17－SB01(西より)
2.山原地区　N20－SB01・02（東より）
図版第15　1.山原地区　N23－SB01
N23－SA01(西より)
2.山原地区　S23－SA01・02（東より）
図版第16　1.山原地区　N20－SK01・02・03
（南より）
2.山原地区　N23－SK01(東より)
3.山原地区　N20－SK23(南より)
図版第17　1.山原地区　N17－SK11(西より)
2.山原地区　S16－SK15～18(北より)
3.山原地区　S17－SD06(東より)
4.山原地区　N20－FP01～04(西より)
図版第18　1.山原地区　N17－ST01(西より)
2.山原地区　N17－ST01(東より)
3.山原地区　N17－ST01(南より頭部)
図版第19　1.山原地区　S17－SK201(東より)
2.山原地区　S17－SK201(東より)
3.山原地区　S15－SK201(東より)
図版第20　1.山原地区　S24－SX土坑群(西より)
2.山原地区　S24－SX04(北より)
3.山原地区　S24－SX01(西より)
図版第21　1.川北地区　S31－SB01(西より)
2.川北地区　N31・32－SD01（東より）
図版第22　1.川北地区　N35土坑群（西より）
2.川北地区　S33－SK01(南より)
3.川北地区　N33－ST01(北より)
図版第23　1.下所塚　発掘前（北より）
2.下所塚　SK01（南より）
図版第24　山原地区出土遺物　土器（S17－SD02・SD06，N20－SD06）
図版第25　山原地区出土遺物　土器（N20－SD01・SD02）
図版第26　山原地区出土遺物　土器（N20－SD03）
図版第27　山原地区出土遺物　土器（N20－SD04・SD05）
図版第28　山原地区出土遺物　土器（S20－SD01，S17－SK17・SK53，S18－SK03，N20－SK120・SK124・SK127）

図版第29　山原地区出土遺物　土器（S16－SK16・SK18・P36，S17－SK19・SK20・P07・P10・P68，S18－P09，N20－SK05・SK28）
図版第30　山原地区出土遺物　土器（N20－SK01・SK02・SK03・P44・P47・P40・P20，S20－SK37，S19E－SK20）
図版第31　山原地区出土遺物　土器（N20－SK17・SK15・SK14・SK25，N23－SK01，N17－ST01，S17－SK201）
図版第32　山原地区出土遺物　輸入磁器
図版第33　山原地区出土遺物　小型羽釜，土鈴，硯，鉄製品
図版第34　川北地区出土遺物　土器，硯（N31・32－SD01，S30－SK19，S33－P01，N33－SK01，N35－SD03・SK38・SK25，N3－SK01）

挿 図 目 次

第1図　綾南町陶周辺地形図……1
第2図　西村遺跡1号窯出土瓦拓影……2
第3図　昭和54年度調査出土弥生土器実測図3
第4図　山原地区出土石器実測図(1)……10
第5図　山原地区出土石器実測図(2)……11
第6図　山原地区土層実測図(1)……13
第7図　山原地区土層実測図(2)……14
第8図　山原地区土層実測図(3)……15
第9図　山原地区土層実測図(4)……16
第10図　S16－SB01実測図……17
第11図　S17－SB01実測図……18
第12図　N20－SB01実測図……18
第13図　N20－SB02実測図……18
第14図　N23－SB01実測図……19
第15図　N23－SA01実測図……19
第16図　S23－SA01実測図……20
第17図　S23－SA02実測図……20
第18図　S17－SD06遺物出土状態実測図…21
第19図　N20素掘り溝実測図……21
第20図　S16－SK15・16・18遺物出土状態実測図……22
第21図　S19E・20区土坑群実測図……23
第22図　N20－SK01・02・03遺物出土状態実測図……23
第23図　N20－SK23実測図……24
第24図　N23－SK01実測図……24
第25図　N17－ST01実測図……25
第26図　S15－SK201実測図……26
第27図　N24客土範囲実測図……26
第28図　S24－SX04土坑実測図……27
第29図　S24－SX08土坑……28
第30図　15～20区出土遺物実測図(1)……30
第31図　15～19W区出土遺物実測図(1)……32
第32図　15～19W区出土遺物実測図(2)……33
第33図　15～19W区出土遺物実測図(3)……34
第34図　19E・20区出土遺物実測図(1)……36
第35図　19E・20区出土遺物実測図(2)……37
第36図　19E・20区出土遺物実測図(3)……38
第37図　15～20区出土遺物実測図(2)……39
第38図　N23－SK01出土遺物実測図(1)……41
第39図　N23－SK01出土遺物実測図(2)……42
第40図　N23－SK01出土遺物実測図(3)……43
第41図　S16－SD02，S17－SD02・06出土遺物実測図……46
第42図　N20－SD06・02・01出土遺物実測図……50
第43図　N20－SD03・05出土遺物実測図…51
第44図　N20－SD04出土遺物実測図……52
第45図　S20－SD01出土遺物実測図……53
第46図　N17－ST01出土遺物実測図……54
第47図　S17－SK201出土遺物実測図……55
第48図　山原地区出土青磁実測図……56
第49図　山原地区出土白磁実測図……57
第50図　山原地区出土小型羽釜・土鈴・硯実測図……59
第51図　山原地区出土瓦拓影……60
第52図　竹製品……61
第53図　鉄　器……61
第54図　銭貨拓影……62
第55図　N・S24，S25－SD01出土遺物実測図(1)……62
第56図　N・S24，S25－SD01出土遺物実測図(2)……63
第57図　N・S24，S25－SD01出土遺物実測図(3)……64
第58図　23～25区出土石製品実測図……65
第59図　S24－SX04出土桶籠実測図……66
第60図　S24－SX土坑出土遺物実測図……67
第61図　暗紫色粘土で作成した土器……68
第62図　川北地区出土石器実測図……71
第63図　N31・32南壁土層実測図……73
第64図　N35・36南壁土層実測図……74
第65図　S31－SB01実測図……75
第66図　S33－SK01遺物出土状態実測図…75

第67図　N31・32－SD01出土遺物実測図…77
第68図　30～33区出土遺物実測図……78
第69図　S33－SK01出土遺物実測図……79
第70図　N35区出土遺物実測図(1)……81
第71図　N35区出土遺物実測図(2)……82
第72図　川北地区出土輸入磁器実測図……83
第73図　川北地区出土瓦拓影……84
第74図　川北地区出土硯実測図……85
第75図　N3－SK01出土遺物実測図……88
第76図　下所塚出土石鏃実測図……99
第77図　下所塚地形測量図 ……100
第78図　下所塚遺構・土層実測図 ……100

付　表　目　次

第1表　建物遺構および柵列状遺構柱穴計測表……付1
第2表　出土遺物観察表……付2

別　刷　図　目　次

別刷第1図　山原地区遺構配置図(1)
別刷第2図　山原地区遺構配置図(2)
別刷第3図　山原地区遺構配置図(3)
別刷第4図　川北地区遺構配置図
別刷第5図　西村遺跡出土土器編年表

第1章　はじめに

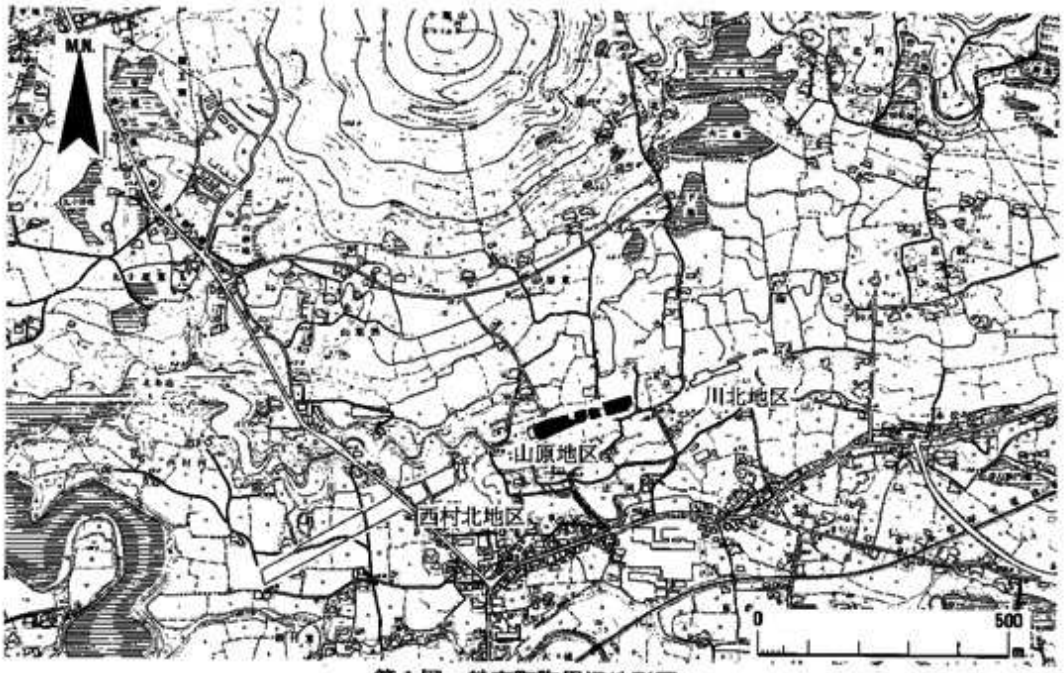
第1節　調査の経過

香川県高松市と仲多度郡琴平町とを結ぶ一般国道32号線のうち，綾南町陶宮藪から同町小野白梅までのバイパス工事が計画されていた。

香川県教育委員会は，昭和53年10月に国道バイパスに接続する県道府中・琴南線バイパス工事にともなう調査を二基の塚に対して実施した。その結果，塚だけではなく周辺に平安時代後期以後の遺跡が存在することが明確になった[1]。この地域には標高216mの十瓶山が位置し，その山麓を中心とし須恵器窯・瓦窯の分布することが古くより知られており[2]，同時期の遺跡が周辺に広がることは充分に予想された。そこで，香川県教育委員会は，建設省四国地方建設局との間に3年間にわたる西村遺跡調査計画を立て，随時実施してきた。

昭和54年度は，工事予定地区のうち，前述した県道府中・琴南線以西の工事予定地内で調査を行った。西村遺跡西村北地区と呼称したが，その調査は総延長320m，総面積11,870m²におよんだ。調査の結果，建物遺構5棟，窯業遺構2基などを検出し，それまでにはほとんど知られていなかった香川県における古代末より中世にいたる生活遺構の一端を明らかにし出した[3]。

ついで昭和55年度の調査は，前年度に発掘を実施した西村北地区のうち，県道府中・琴南線以東の部分と，谷をへだててその東側にあたる山原地区の一部，さらに東の川北地区の3地区



第1図　綾南町陶周辺地形図

の調査を実施した。総延長360m，総面積9,800㎡であった。この調査の結果は，前年度の成果をひきついだかたちで，建物遺構12棟，窯業遺構１基，土壙墓，土坑群などを検出し，当遺跡が十瓶山南麓を含めて広範囲に分布していることを明らかにした(4)。

昭和56年度の調査は，山原地区のうち，東西総延長210m，総面積6,400㎡について実施した。調査契約は，昭和56年４月23日付で香川県教育委員会と建設省四国地方建設局との間で結び，翌日より昭和57年３月25日までの期間とした。経費は4,255万円である。

調査の実施にともなう調査区の設定には，建設省の作製した「綾南バイパス実施計画工事平面図其の１」を使用した。今年度の調査地区は大きく彎曲しているため，前記した「平面図」のセンター杭，Ｐ－50とＰ－51を結ぶ線を調査の中軸線とし，東西を20m毎に区画した。前年度よりの通し番号で15～25区までの区画を設定し，また南北を中軸線で区画してＮ・Ｓのアルファベットで表示し，Ｎ15・Ｓ15のように呼称した。つまり，調査の一区画は東西20mであるが，前記したように調査地が大きく彎曲するため，南北は一定でなく，最大17m，最小10mとなった。

なお，山原地区の東西主軸はＮ103°25′Ｅである。

第２節　昭和54年度，55年度の調査

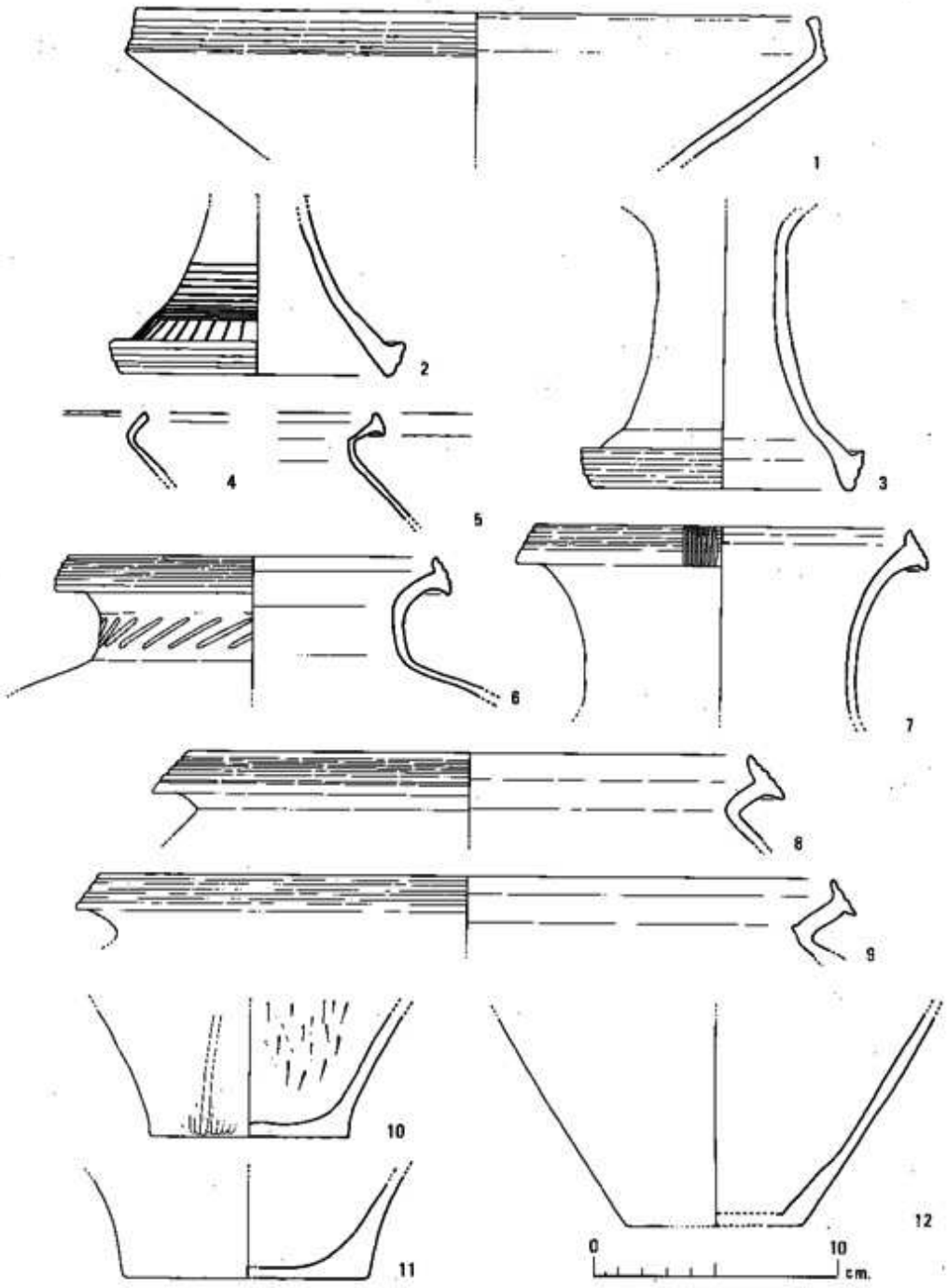
１　昭和54年度の調査

現在せきとめられて，北条池となっている谷筋に近接する微高地上を調査対象地としており，西村北地区と呼称し，地山面より多くの遺構を検出した。二基の窯業遺構を検出し，それぞれ西村遺跡１号窯，同２号窯と仮称した。いずれも窯本体の大部分を失ってはいるが，灰原を遺存しており，須恵器と瓦を出土している１号窯より検出した複弁八葉蓮華文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦（第２図）は，京都鳥羽離宮南殿跡出土のものと類似しており，おおむね11世紀末頃の年代観が与えられる可能性がある。２号窯は，大型の須恵器壺・甕などを中心に出土しているが，土層観察によって１号窯より先出するものと思われる。

第２図　西村遺跡１号窯出土遺物

地山面で掘立柱建物遺構を検出した。１間×２間と考えられるもの３棟，１間×４間と考えられるもの２棟の計５棟である。良好な遺物は認め難く，時期は不明とせざるを得ないが，遺構面からは中世後半までの遺物を出土する。

最大幅27m，深さ1.5mの落ち込みを検出している。用途は不明であり，調査者は池状遺構を考えている。出土遺物は，鎌倉時代前半のものを含むが，室町時代のものも含んでおり，幅が



第３図　昭和54年度調査出土弥生土器実測図

広いようである。

西村北地区は，平安時代末頃より室町時代にいたる時期を中心とした遺跡であり，それ以後の遺構はほとんど検出できなかった。しかし，平安時代以前の遺構として弥生時代の土坑を一基検出した。出土した土器は，凹線文を施した土器を中心としており，壺・甕・高杯などがある(第3図)。また，調査中に遺構より遊離した状態ではあるが，石鏃を中心とする石器を検出しており，かつて弥生時代を含めた平安時代以前の西村遺跡が存在したことは充分に想像できる。

2．昭和55年度の調査

(1) 西村北地区の調査

昭和54年度調査地の東方を調査の対象地とする。県道府中・琴南線以東で実施したが，標高49m台の洪積台地に存在し，北方500mに位置する十瓶山とは，現在北条地に流れ込む御寺川によって分断されている。現状では，水田に開墾されていたが，地表下30～80cmで第6層の地山面に穿たれている遺構を検出した。建物遺構・焼土坑・土坑・土壙墓・溝・ピットなどである。第4層より上層は，開墾や耕作によって大きく攪乱されており，また第5層は明黄色粘質土層であり旧水田の床土層と考えられる。この土層は西村北地区のうち，55年調査地区を大きく覆っている。

建物遺構は12棟を確認した。1間×2間棟6棟，1間×3間棟4棟，1間×4間棟・1間×1間棟各1棟である。いずれも掘立柱建物遺構であり，おおむね東西か南北を指向している。上面がすでに削平されていると思われ，建物遺構に付属する施設は確認できなかった。

人骨を直葬した土壙墓を一基検出したが，副葬品はない。また，成人を埋葬していたが土坑の長さが1mであり，伸展葬とは考え難い[6]。周辺には，人骨は遺存しなかったが，やはり土壙墓と考えられる土坑を検出している。それらも長さ1m前後の小規模なものであった。

西村北地区の東部で土坑群を検出した。各土坑は直径100cm前後，深さ50cm前後の規模をもっている。発掘調査した400m²程の範囲に約250基が認められる。56年度の調査においても，S19E，N・S20で同様の土坑を検出しているが，粘土採掘坑の可能性がある。

(2) 山原地区の調査

西村北地区より谷をへだてた東側の台地上で調査を実施した。約250m²の発掘であったが，西に向う崖面で窯跡を1基検出した。西村遺跡3号窯と呼称した。燃焼部と焼成部が残っていたが，その天井部はすでに削平されてなくなり，また灰原があったと考えられる部分も崖の崩壊で遺存しない。検出していた状態より，半地下式平窯と考えられる。粘土で作製した3条のロストルが認められる。残存した燃焼部の最大幅は1.5m，焼成部の最大幅1.2mであり，比較的小規模な窯である。遺物はほとんどないが，10片の平瓦片を窯内より検出し，また焚口と考えられる部分より黒色土器椀と，土師器鉢を各1点検出した。良好な遺物は認められないが，11世紀末頃を中心とした時期の窯跡と考えられる。

(3) 川北地区の調査

川北地区は全調査対象地域の東端にあたる。北に位置する十瓶山より，南に向うゆるやかな舌状地形を，標高45m前後の高さで分断して調査したことになる。全長160m，総面積4,402㎡である。

傾斜地であるため，現在は階段状の水田に開墾されている。地山面および，客土面より建物遺構，土坑，土壙墓，溝，ピットなどの遺構を多数検出した。遺構の時期は，出土している遺物より考えて，11世紀より12世紀末頃までを中心とする時期と，近世のものとがあり，同一遺構面で検出した。

建物遺構は1間×1間（175×350cm）の規模でしか確認できなかった。良好な遺物をともなわないため，時期は不明であるが，12世紀前半頃までの土坑群を破壊して建てられている。

土壙墓を1基検出したが，人骨が遺存しており，副葬品として土師器杯，黒色土器椀・輸入白磁椀・鉄製紡錘車，鉄鈴・刀子をおさめていた。12世紀前半頃の土壙墓と考えられるが，古代末以後の土器は現在，讃岐では不明な点が多い。この土壙墓出土の一括遺物の，共伴関係はその点では良好な資料と考えられる。

(注)

(1) 秋山　忠　「西村遺跡」　『香川県埋蔵文化財調査年報』　香川県教育委員会　1979年3月

(2) 寺田貞次　「陶村附近窯跡」　『史蹟名勝天然記念物調査報告第12』　香川県史蹟名勝天然記念物調査会　1941年3月

(3) 沢井静芳・六車　功　『西村遺跡』　香川県教育委員会　1980年3月

(4) 廣瀬常雄・竹下和男・田村雅彦　『西村遺跡II』　香川県教育委員会　1981年3月

(5) 第5章　池田次郎　「香川県西村遺跡出土の中世人骨とその埋葬について」　参照

調査日誌抄

1981年

4月3日　第3次調査開始。まだ肌寒い野外にて，調査区設定の杭打ち作業を始める。

6日　ユンボ，押しブルを使いS25～S23までの表土除去。

14日　作業終了直前，現場で指揮にあたっていた調査員A，右足首捻挫。入院加療の必要あり，との診断。

15日　N25第5層遺構面を出し終える。第4層までは染付けを含んでいた。午後，降雨のため遺物水洗い作業。

24日　N25，S25遺構の発掘開始。S24排水後客土（第3層）除去。

5月1日　N24，客土除去。S24ではS25で完結しなかったSD01を追いかける。川北地区遺構出土の遺物については，注記復原を終了する。

7日　連休明けから雨にたたられ，野外作業進まず。本日も土器洗浄。

9日　N24精査終了後遺構発掘を始めたが2，3石臼が出るだけで，ほとんど無遺物。S24の溝はS25から伸びるSD01と確認。暑い一日！

15日　N23で根石を伴うピット多数検出。N・S22～20の杭打ちを行う。

19日　N・S23の精査再開。N23－SK01のみ瓦質土器を出土する。他の土坑，ピットは比較的新しいものと考えられる。

23日　S24で径1m前後の土坑が数基認められ，中に木質を残すものがある。

25日　S24土坑内の木質は，桶であることが判明（SX01・03・04）。いずれも深さ50cmで底に到る。SX04では側板に箍が回る。遺物は少ない。

26日　S16から東側へユンボによる表土剝ぎ開始。

6月1日　23・24・25区の全景写真撮影，S24－SX04の内部写真終了。

3日　23・24区の実測開始。

8日　S19・20掘り下げ。主に第6層暗褐灰色粘質土層中より，計10数片の青白磁片を検出。

10日　S24－SX04内の桶取り上げ。側板を発泡ウレタンで固めて取り上げようとしたが困難を窮める。

15日　発掘現場の移動に伴い，プレハブ事務所の引越し。2階は土足厳禁となる。

23日　S23の柱列SA01を精査。棚列を考えるが東への伸びが不明。

25日　柱列の再精査をほぼ終了。

7月1日　N23，S22・21壁面写真終了後実測にはいる。

9日　S17第4層中より輸入青白磁出土。本日をもって21～25区の調査を終了する。

13日　15～20区が前日の雨で冠水状態。いつもながら排水作業に手間取り，予定作業の消化に苦しむ。

22日　S18を精査。SD02発掘開始。

27日　S17，16では多数の溝が認められるが，切り合い関係に鮮明さを欠く。

8月4日　高松市教育委員会主催「母と子の文化財教室」で，小学生達70名が見学に来る。無邪気な質問に調査員の顔が思わずほころぶ。

S21～25の埋め戻し開始。

7日　N21，22の表土を除去。S区同様遺構は少ない。S16遺構発掘開始。

13～15日　作業員盆休みのため，野外作業中止。

17日　S18土坑発掘。ほとんどが無遺物。

18日　S17－SD02の土器出土状態実測開始。S16全景写真撮影。

20日　N20調査開始。第4層を削平する。S16平面実測，レベル測定終了。

27日　N21，22土層写真，実測終了。S18全域の精査終了。

9月2日　以前に取り上げたS24－SX04出土の木

製桶の保存状態が良くないため，解体して水槽内で保存することに決定，本日より少数で作業にかかる。

14日　S16，17間の畦除去作業終了。S17精査。

17日　S15全景写真，平面実測終了。

29日　S17土坑発掘開始。室内では，水洗い終了分の遺物仕訳，整理作業を継続する。

10月2日　S17土坑発掘完了。2間×1間の建物遺構確認（S17－SB01）。写真終了後，平面実測に取りかかる。

5日　S15，16，21，22埋め戻し開始。

7日　N17表土除去開始。N16，20表土除去終了。

16日　N20第6層の除去を継続。輸入青白磁を伴う包含層である。

19日　N20素掘溝の発掘開始。N16－SB01を確認。

20日　N20東側に焼土坑を三基検出。上面は削平されている。

27日　N17第5層除去後精査。中央を南北に貫く溝1条が明確にみえる。（N17－SD19）

11月4日　N18遺構発掘完了。

12日　N17－ST01の鉄剣を抱いた人骨の発掘，写真終了。

14日　N17－ST01を取りはずす作業。周囲に溝を掘り，発泡ウレタンを流し込む。土が固く，切り離し作業は難航する。

17日　N20で囲繞する溝の南辺内側にピット列を確認。周溝に囲まれた2間×1間の建物と考えられる。（N20－SB01）

12月1日　N20地山（暗紫色粘土層）まで下げる。土坑内より十瓶山式甕片を検出。

5日　N20遺構完掘清掃後，全景写真撮影。

9日　N20平面実測継続。最後まで残しておいた焼土坑の取りはずし作業にかかる。
本日より，調査員B，32号線バイパス建設に伴う農道整備工事脇の小さな塚（後に「下所塚」と呼称）の調査に出向く。

12日　快晴，風強し。本日をもって，現場作業全て終了。「下所塚」は，ほとんど破壊されており，遺物は土師器細片と打製石鏃1点のみ。

17日　「下所塚」完掘後，寒風のなかで平面実測，地形測量完了。事務所内では大量に出土した遺物の山を前に，土器洗浄に励む。併行して遺構トレース（縮尺1/40）開始。

26日　土器洗浄，全体図トレース，写真整理等報告書作成前段階の仕事に明け暮れて，1981年の作業時間を完全消化。

1982年

1月5日　現場事務所にて整理作業再開。

9日　土器洗浄，大部分終了。

11日　本日より本格的な復原作業開始。併行して主な遺物の注記も行う。狭い事務所内は足の踏み場もない。S17，S16にまたがるSD02は遺物が多い割には復原可能な個体が少なく四苦八苦。

25日　N2－ST01，N17－ST01，S31－ST01の人骨鑑定を京都大学理学部人類学教室に依頼。保存が悪いため調査員Bが付き添う。

29日　2月を目前にして，調査員全員に焦りの表情。接合復原作業をきりあげ，膨大な遺物の図化作業にとりかかる。N23－SK01の遺物については，昨年の整理で終了。

2月6日　資料の図化作業継続。瓦，甕等の拓本，遺物の石膏復原も併行して進める。

22日　遺物のトレース，レイアウト，土器観察表作成等各々の作業を継続。

27日　石膏復原を継続しながら遺物写真の撮影にとりかかる。

3月2日　昨日来，夜を徹して行われた写真撮影，やっと終了。

4日　〆切を目前に連日の徹夜作業で報告書用図版のレイアウトを行う。原稿完成に全力をあげる。

15日　調査事務所の撤収の準備を継続。

18日　調査事務所の撤収を開始。

25日　調査事務所の撤収を完了。3年度にわたる現地調査を終了。

第2章　山原地区の調査

第1節　調査の概要

標高216mの十瓶山より，南に向ってゆるやかに下ってくる緩傾斜地を調査対象地としている。傾斜地を標高45m前後の高さで横断して調査したことになる。調査前の状況は，水田化されており，北から南に向って各水田は，いくらかの高低差をもっている。昭和55年度に，山原地区の一部（14区と15区の一部）の調査を実施したが，今年度は15区の残りの部分より25区までを調査した。

検出した遺構は，建物跡，柵列状遺構，溝状遺構，土坑・土壙墓，ピットなどである。

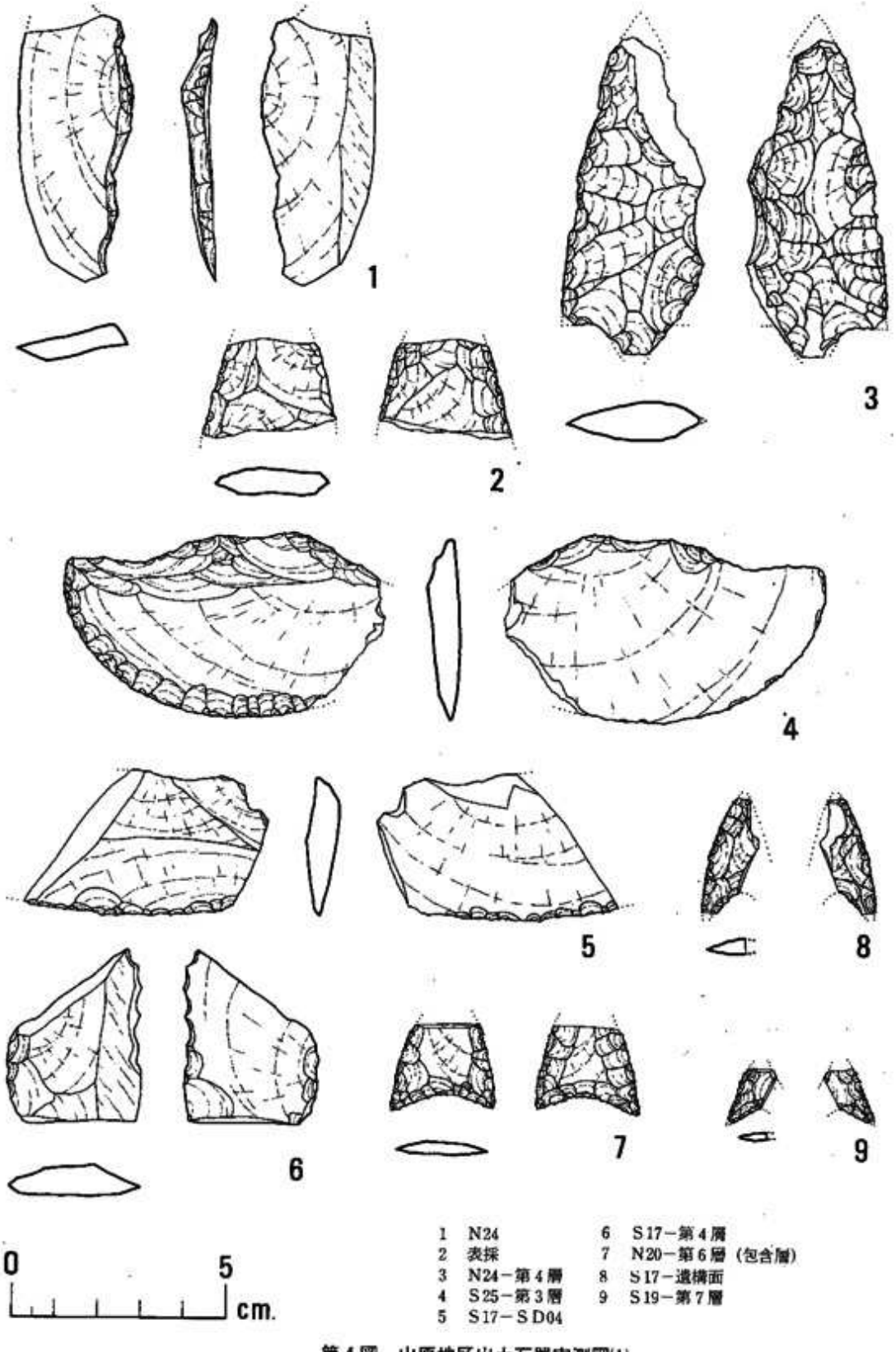
遺構は，現在の表土下約30～80cmで認められ，地山面に穿っている。土層観察で確認したが，調査地は数回の削平をうけているにもかかわらず，遺構・遺物の遺存状況は比較的良好であった。検出した各遺構の時期は，23～25区では近世のものも見られるが，そのほかの地区では平安時代後期より鎌倉時代の中で考えられるものである。

建物遺構は5棟を検出したが，いずれも掘立柱建物遺構である。1間×2間のもの4棟，1間×5間のもの1棟である。そのうち，1間×2間の建物遺構は各2棟づつが近接して建てられており，さらに幅約50cmの素掘り溝がその周囲をとりかこむ。今後の類例の増加を待ちたいが，雨落ち溝のようなものと思われる。東西棟は4棟，南北棟は1棟であり，昨年度までに検出している建物遺構が，やはり東西あるいは南北をほぼ指向するのと同じ傾向を示している。

人骨を遺存する土壙墓を検出した。頭を北に向けて埋葬されており，左腕で鉄刀を抱きかかえている。土師器杯を副葬していた。そのほか，鉄刀や漆器と思われる破片を出土した土坑もあり，土壙墓と考えられる遺構は数基が分散して位置し，集中する傾向はみられない。

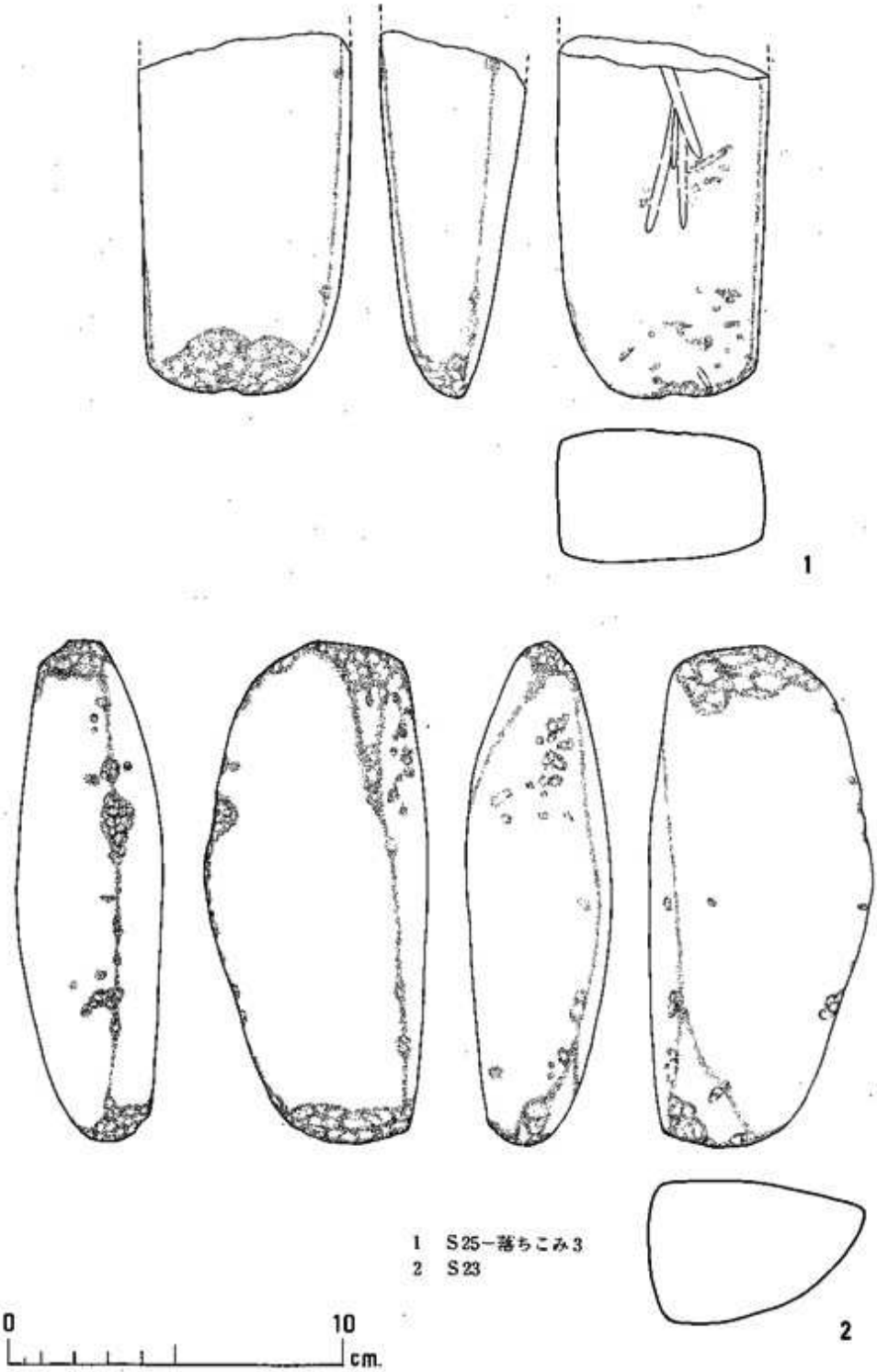
19･20区を中心として，複雑に切り合う土坑群を検出した。それぞれの土坑は，直径50～200cm程で，深さは100cm以内である。穿たれているのは暗紫色の粘土の地山土であり，土坑の中にはその壁をえぐるように掘り込んでいるものも認められる。このような状態で土坑の集中する部分は，西村遺跡の発掘調査中に数ヶ所で認められた。そして，そのほとんどが，この19・20区の土坑群と同じように地山土である暗紫色の粘土層に掘り込まれたものであり，良好な遺物を出土するものは少ない。それらの状況と，西村遺跡が窯業活動を行っていた地域であることを考え合わせれば，土坑群は土器製作にともなう粘土採掘坑の可能性もある。

今年度の調査で出土した遺物は，その大半が土師器・瓦質土器であり，須恵器や瓦は極めて微量である。掘立柱建物遺構の周辺から，輸入青磁・白磁片が出土している。また，遺構より遊離した遺物であるが，旧石器時代より弥生時代にいたる石器を検出している（第4・5図）。



1 N24
2 表採
3 N24－第4層
4 S25－第3層
5 S17－SD04
6 S17－第4層
7 N20－第6層（包含層）
8 S17－遺構面
9 S19－第7層

第4図　山原地区出土石器実測図(1)



第5図　山原地区出土石器実測図(2)

第2節　土　層　序

山原地区は，十瓶山より南に向って下ってくる洪積台地である。その東西幅は約200mである。今回の調査は，北より南に向って下る緩やかな傾斜地を，東西に横断して発掘するようになるが，標高は西端で約44m，東端で約45mをはかり，なだらかに東に上っている。調査地の南と東西は綾川に注ぎ込む小河川の御寺川が流れているが，この周辺には幾本もの旧河道があると思われる。調査によって検出した地山面にも大きく弧を描いて砂層が認められることもある。調査前のこの周辺は多少の高低差をもつ階段状の水田に開墾されていた。

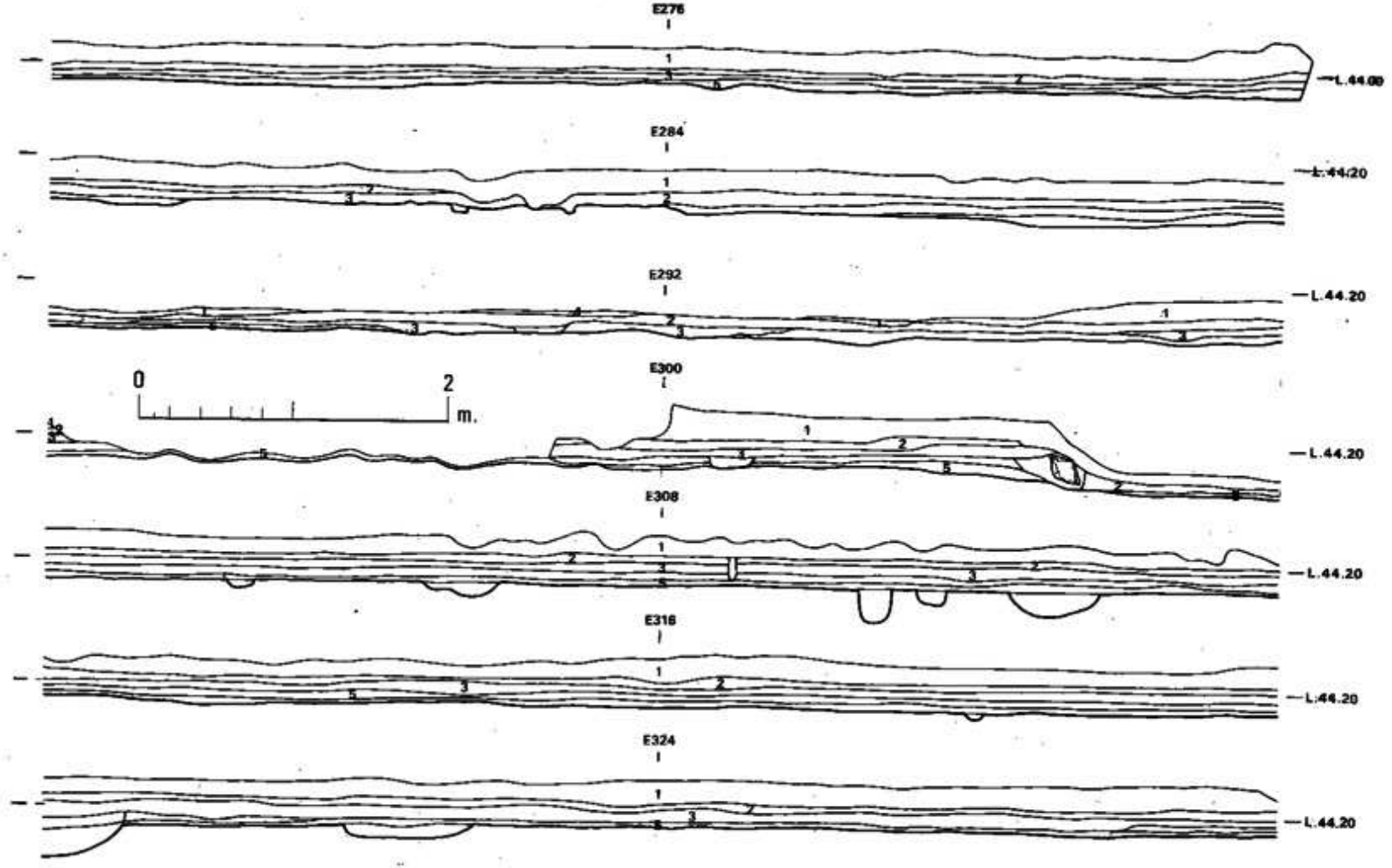
土層序は，第1層一暗灰色粘質土層，第2層一茶褐色粘質土層，第3層一灰茶褐色粘質土層，第4層一茶灰褐色粘質土層，第5層一淡明茶褐色粘質土層，第6層一黄茶褐色粘質土層，第7層一暗紫色粘土層となっている。第1・2層は現在の水田にともなう耕作土，床土層である。第6層，および第7層は，地山である。第5層は，昨年度までの調査でも各所で認められた，厚さ5.0cm程度の非常にしまった粘質土層であり，旧水田の床土層と考えられる。これらの堆積状況は，土層名の呼称は異なるが，昨年度の西村北地区の調査で確認した堆積状態と，類似するものであり，西村北地区より山原地区の東西約500mの範囲の同一性が認められる。前述したように，第5層の淡明茶褐色粘質土層は旧水田にともなう床土層と考えられ，それを除去した段階で，遺構面である地山を検出した。

第5層より上層は重機によって除去した。そのため，第5層までの状況を充分に把握したとは言い難いが，表土より人力で精査した範囲の調査結果では，ほとんど遺構は認められず，第4層までは近世の遺物を含んでいる。

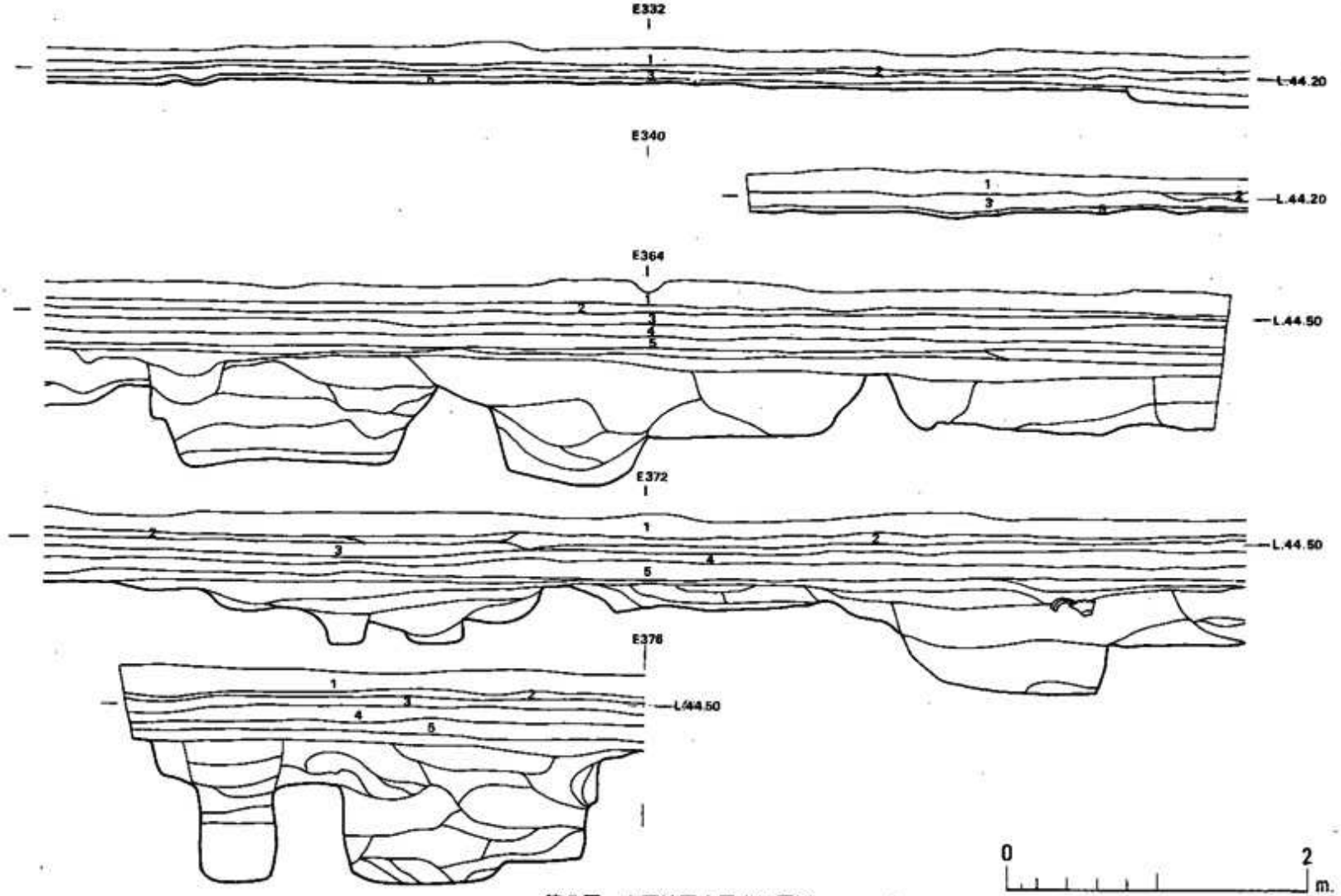
24・25区で比較的大規模な客土層が認められた。24区より25区に向って地山面がなだらかな傾斜を呈しているが，その上面に黄色土を中心とした不安定な土層が認められる。包含していた遺物は近世のものがみられ，やはり，ある時期における耕地化にともなう客土層と考えるべきであろう。

昨年度の調査で黄褐色粘質土層にともなう遺構を第1遺構面，白灰褐色土層にともなう遺構を第2遺構面と呼称し，2枚の遺構面があると報告した。今回の調査の結果，遺構はいずれも上層の黄褐色粘質土層に相当する黄茶褐色粘質土層より穿たれたものと考えるべきであると判断するにいたった。訂正する。しかしながら，遺構はその埋土や遺物などから，大きく2時期に分かれると考えられる。第5層で認められる水田化にともなう開墾事業の結果，遺構面の上部が削平され，2時期の遺構が同一遺構面で検出できる状態になったのであろう。

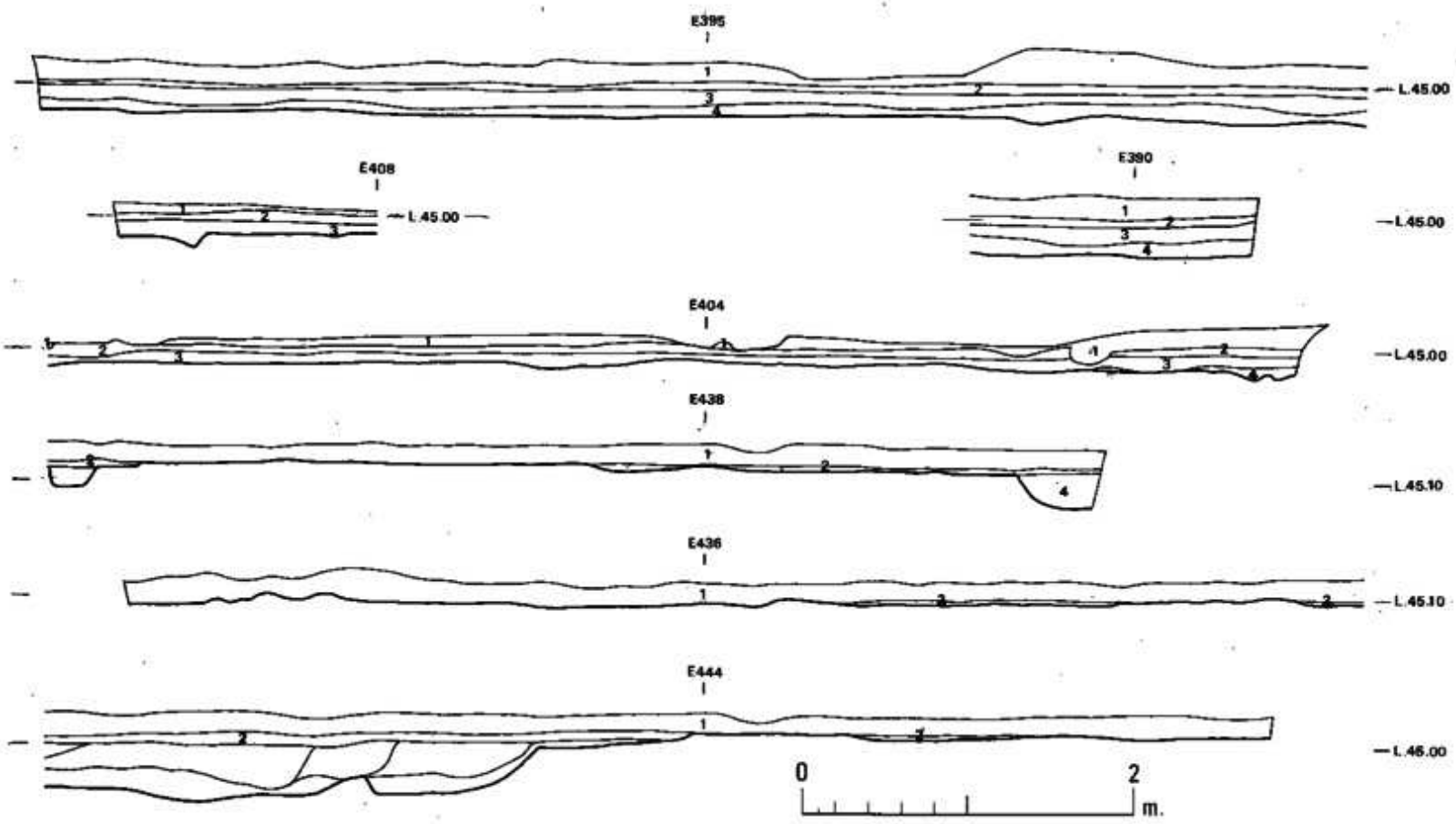
なお，15～18区，19・20区，21・22区，23～25区はそれぞれ段差をもって位置しており，細部において土層は大きく異なる。例えば，15～18区は黄茶褐色粘質土層を遺構面とするが，19・20区ではこの土層が見られず，暗紫色粘土層を遺構面とする。21・22区は大きく攪乱されており，少数の遺構，少量の遺物を除いては全く検出できなかった。前記の土層がかわると思われる部分は，用水路や生活道路となっているために調査を行えなかった。



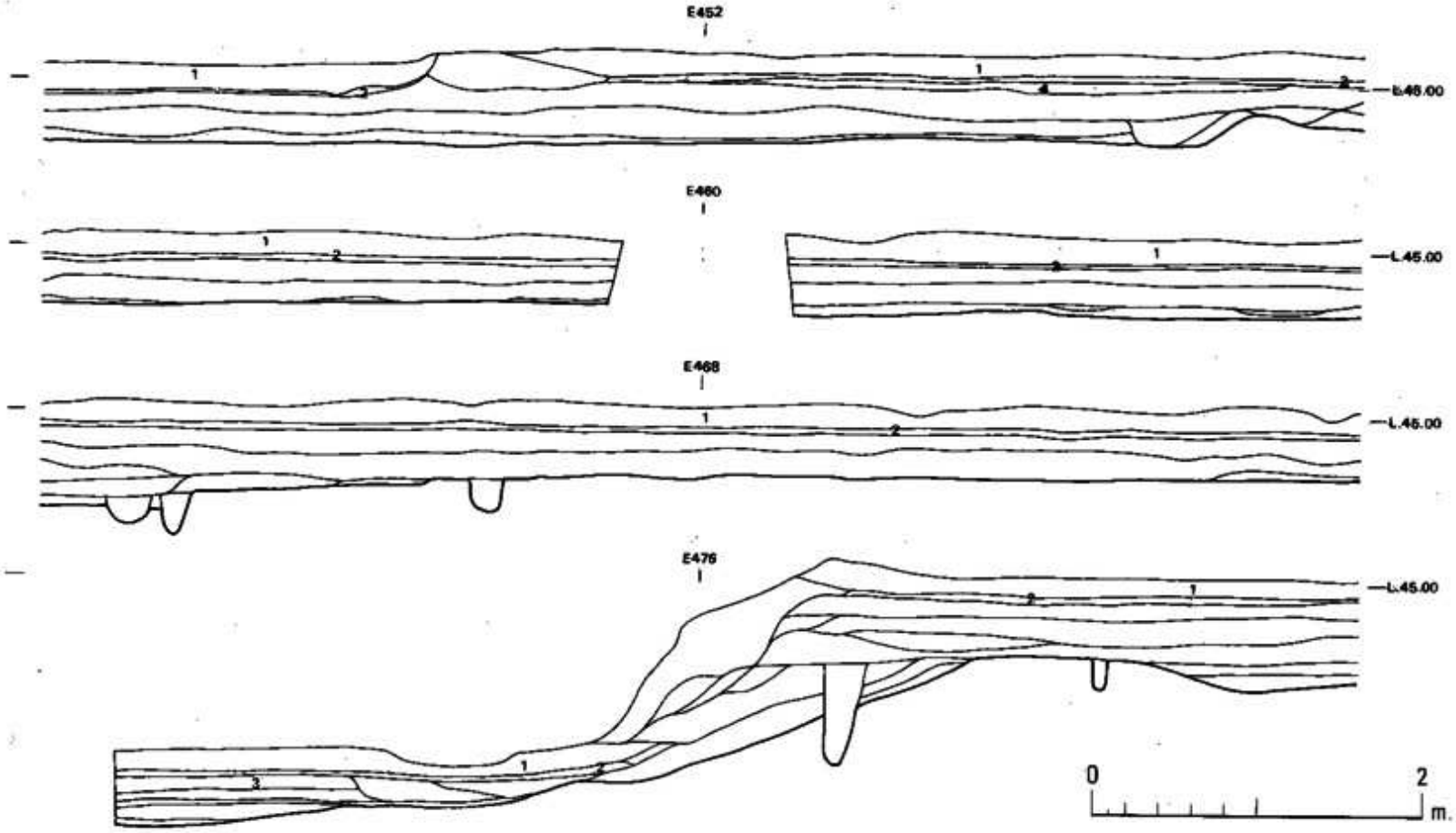
第 6 図　山原地区土層実測図(1)



第７図　山原地区土層実測図(2)



第8図　山原地区土層実測図(3)



第９図　山原地区土層実測図(4)

第3節　遺　　構

1　掘立柱建物遺構と柵列状遺構

掘立柱建物遺構として確認したものは，5棟である。西からS16－SB01，S17－SB01，N20－SB01，N20－SB02，N23－SB01と呼称した。16区より20区で検出した建物遺構は，いずれも1間×2間の規模で，N20－SB02を除く3棟は主軸がほぼ東西をさしている。N20－SB02のみ南北棟である。

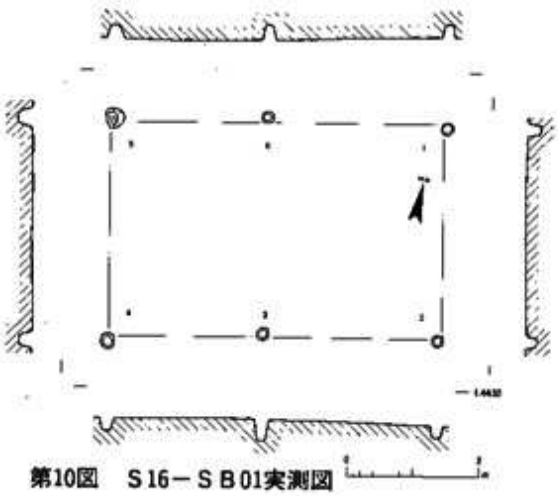
これら4棟を特徴づけるのは，いずれの建物遺構にも周溝と思われる溝がまわりをとり囲んでいることである。

N23－SB01は，1間×5間の規模をもつ比較的大きな東西棟である。この建物遺構の周辺には，一列に並ぶピット列があるが，いずれも調査対象地の南北両端で検出し，今回調査できなかったためピット列に建物遺構の可能性は残るが，柵列状の遺構と考えておく。

以下，各建物遺構について述べていくことにする。

(1)　S16－SB01　（第10図）

S16・S17にまたがって柱穴をもつ建物遺構である。1間×2間で主軸がN－78°－Wをさす。各柱穴の埋土は黒褐色粘質土で同一である。遺構上面は削平されていると思われ，柱穴の深さは約18cm～20cmである。柱間距離は梁部約330cm，桁部約240cmと270cmで比較的安定している。S16－SD02・04・05がまわりをとり囲む状態になっている。



第10図　S16－SB01実測図

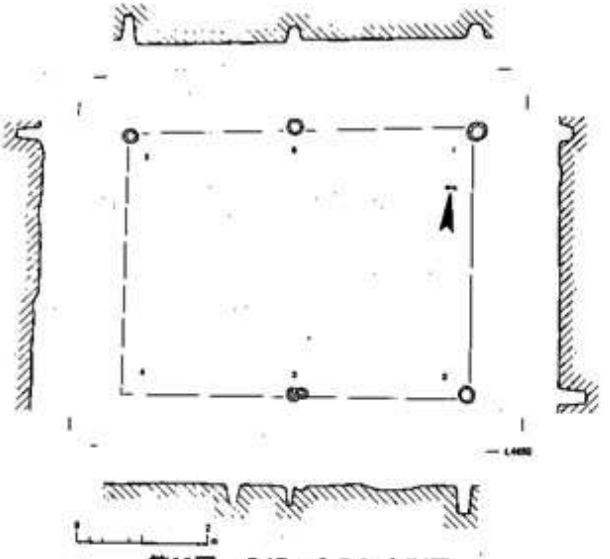
(2)　S17－SB01（図版第14－1，第11図）

S16－SB01の東，約2mのところに位置し，1間×2間の規模で主軸がN－85°－Wをさす東西棟。梁部の柱間距離は約420cm，桁部は約250cmと約270cmである。いずれの柱穴にも根石および柱根はなかったが，遺物は出土している。柱穴1（S17－P68）から比較的良好な状態で土師器小皿2点，瓦質土器椀3点が，柱穴6（S17－P111）からは完形の瓦質土器皿が，柱穴2・3・4・5からは土師器，瓦質土器の破片が出土している。

また，大量の遺物が出土しているS17－SD06が北に，SD04が南に，SD11・12が東に位置している。柱穴5はS17－SK20を，柱穴6はS17－SK18を破壊して掘られている。

なお，この建物遺構との関係は不明であるが，北東へ約10.5m離れた場所に焼土坑がある。

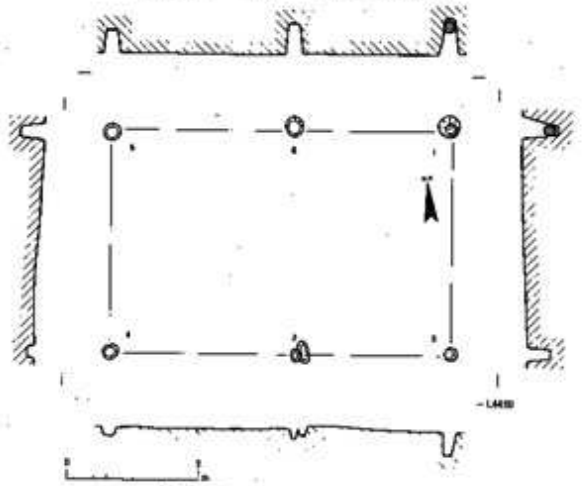
直径約80cm，深さ約32cmの円形の土坑(S17－SK03)が，長径約140cm・短径約42cm，深さ約10cmの長円形の土坑(S17－SK04)を破壊した状況で検出した。円形土坑の埋土は2層に分けられ，上層は焼土，下層は炭層となっている。長円形の土坑の埋土は1層であり，炭層であった。2基の土坑が切り合っている状態を呈するが，本来1基のかまど状の遺構であったと思われる。上部は削平されている。このような状態の焼土坑は，54年度調査で3基，55年度調査で3基を確認している。



第11図　S17－SB01実測図

(3)　N20－SB01（図版第14，第12図）

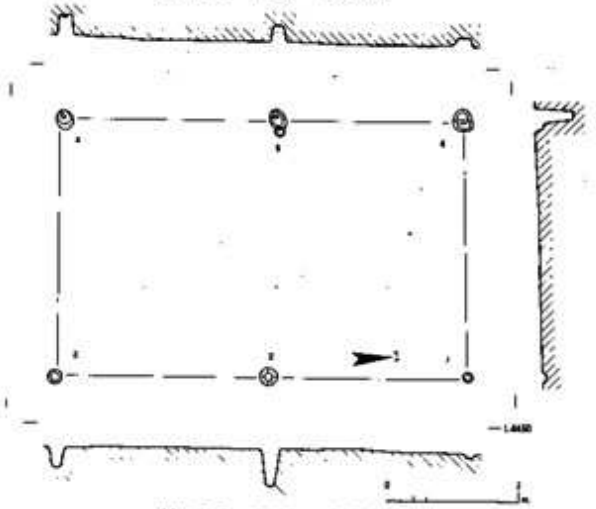
1間×2間の東西棟。主軸はN－83°－Eをさす。梁部の柱間距離は約340cm，桁部は約250cmと約280cmである。柱穴1（N20－P07）には根石が認められる。遺物は柱穴1・3（N20－P41）・5（N20－P02）・6（N20－P06）から出土しているが，柱穴5の須恵器甕の破片以外はいずれも土師器，瓦質土器の破片・細片である。まわりには，周溝と思われる溝N20－SD06が北に，SD01が東に，南にはSD02，西にはSD07がとり囲んでいる。



第12図　N20－SB01

(4)　N20－SB02（図版第14，第13図）

N20－SD01をはさむようにSB01より東へ4mの位置にあり，1間×2間の南北棟で主軸はN－4°－Wをさす。今年度調査で検出した南北棟はこの1棟のみである。梁部の柱間距離は約390cm，桁部は約300cmと330cmである。柱穴4には根石が認められ，柱穴5（N20－P47）・6（N20－P10）からは遺物が出土している。柱穴5からは土師器小皿が2点出土しているものの，柱穴6は土師器と瓦質



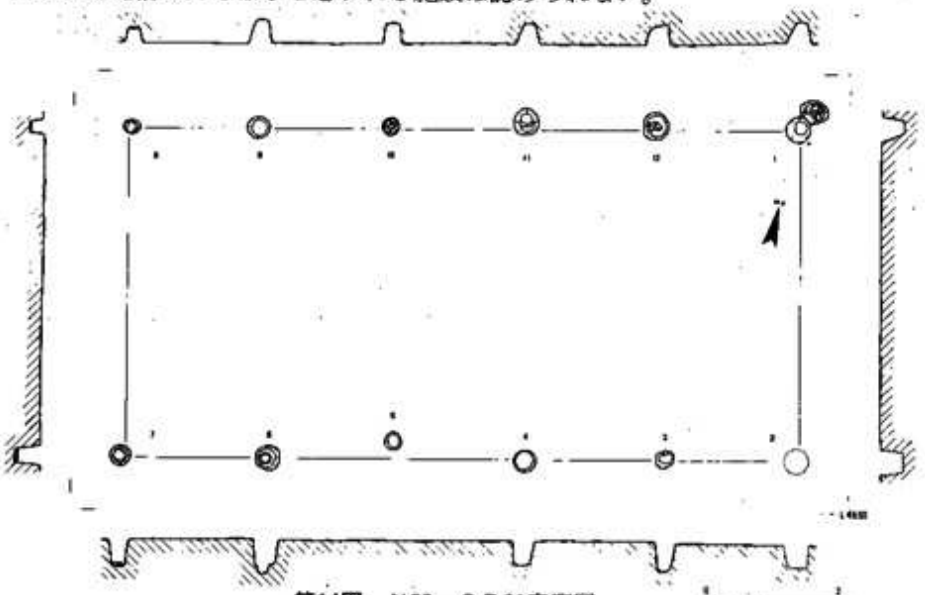
第13図　N20－SB02

土器の破片のみである。

この建物遺構も溝に囲まれており，東にＳＤ04，南にＳＤ03，西にＳＤ01が位置している。また，焼土坑のN20－ＦＰ01・02・03・04がこの建物遺構の東辺部に位置する。

(5)　N23－ＳＢ01　（図版第15－１，第14図）

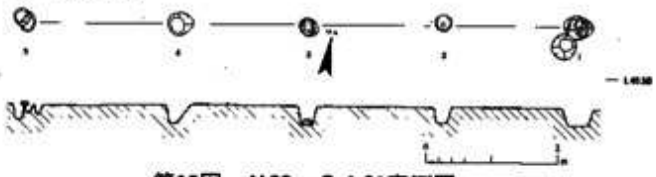
１間×５間の東西棟である。表土下20cmで検出した。削平をうけたと思われ，12本の柱穴はいずれも浅い。柱穴２は，砂質土に掘り込まれていたために，雨によって崩壊した。柱穴５（N23－Ｐ26）は，若干北側によっている。柱間は，梁部５ｍ・桁部2.2mをはかる。柱穴７・８には，根石が認められ，柱穴10・12には詰め石と考えられる石がある。遺物は，柱穴１（N23－Ｐ37）・３（N23－Ｐ20）・４（N23－Ｐ25）・５・６（N23－Ｐ05）・９（N23－Ｐ27）・11（N23－Ｐ32）より検出したが，いずれも土師器細片で少量であったため，時期決定は困難と思われる。この建物遺構にともなうと思われる施設は認められない。



第14図　N23－ＳＢ01実測図

(6)　N23－ＳＡ01　（図版第15－１，第15図）

N23－ＳＢ01の北側に位置し，7.5ｍの東西柵を検出した。柱穴は５本あり，いずれも浅く柱間は２～2.3mをはかる。柱穴１は，N23－ＳＢ01柱穴１によって切られている。柱穴１よりN23－ＳＢ01に対して約５度の角度をもち，北西方向に広がっている。柱穴１には詰め石，柱穴３（N23－Ｐ33）からは根石が検出された。遺物は，柱穴２（N23－Ｐ36）・３・４（N23－Ｐ29）・５（N23－Ｐ28）より検出したが，いずれも土師器細片であり少量であった。

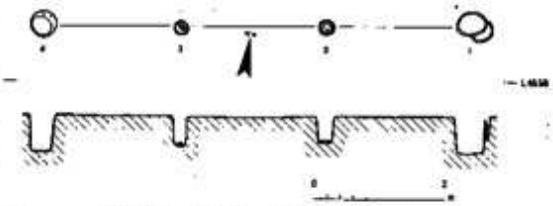


第15図　N23－ＳＡ01実測図

N23－ＳＡ01は，調査区北辺に位置しているために，調査区外に遺構の広がりも考えられ，柵列の延長とともに，建物遺構となる可能性が残る。

(7) S23－S A01 （図版第15，第16図）

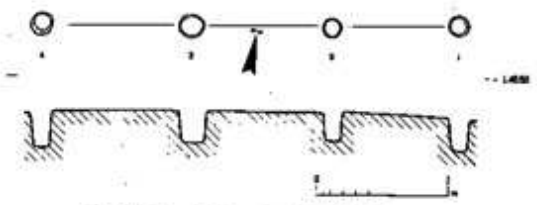
S23区南辺に位置し，6.5m東西柵を検出した。柱穴は4本あり，柱間は2～2.2mをはかる。深さ40～50cmあり，N23－S A01・S B01よりいくらか大きい柱穴である。柱穴2・3より詰め石が検出された。遺物は，柱穴1（S23－P21）・4（S23－P14）より検出されたが，いずれも土師器細片であり少量であった。



第16図　S23－S A01実測図

(8) S23－S A02 （図版第15，第17図）

S23－S A01に対して，ほぼ直線的に並ぶ6.2mの東西柵を検出した。柱穴は4本あり柱間は1.9～2.2mをはかる。柱穴1は，S24区に延びている。根石・遺物等の検出はなかった。



第17図　S23－S A02実測図

S23－S A01・02はともに，調査区南端に位置しており，N23－S A01と同じように建物遺構であった可能性を残している。

S23－S A01・02は，ほぼ直線的な柵列であり，同一柵列と考えることもできる。同一柵とすれば柱間1～2.8mとなり，いくらか線上より外れる柱穴もあるが，柵列が西に延び，新たに柵列の柱穴と考えられるピットもあり，その場合全長13.6mの柵列となるが，柱間距離の不均衡，柱穴のずれから，二つの柵列と分けて考えた。

2　古代・中世の溝

今回の調査で明確に把握でき，検出した溝は20溝近くになる。いずれも遺物を多量に含んでおり，方向はほぼ東西か南北をさしている。

特に，S16－S B01を囲むような形でS16－S D02・04・05，S17－S D04が，S17－S B01については，S17－S D04・06・11がとり囲んでおり，周溝としての意味合いが考えられる。

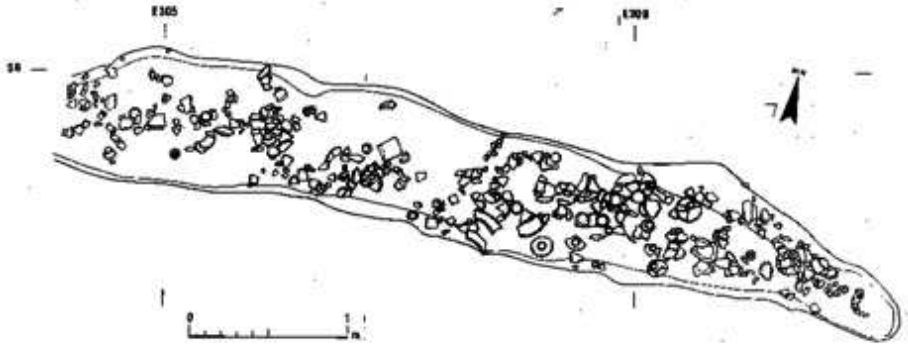
さらに明確な形を示すのは，N20の溝である。N20－S B01はN20－S D01・02・06・07がとり囲み，N20－S B02はN20－S D01・03・04がとり囲む。いずれの溝からも大量の遺物が出土している。（本来，囲繞する溝であるから溝番号を統一するべきであるが，出土遺物を細別するため，各辺の溝に番号をつけた。）

(1) S16－S D02・04・05

S16－S B01をとり囲むように検出した。S D02は，東西に長く伸びた溝であり，その西端は昨年度のN14区の調査で検出している。幅は約120cm，深さは約20cmをはかる。S D04は，S D02より南に曲った分流であり，S D02とほぼ同規模を呈す。S D05は，ほかの2溝に比較すれば，規模は極端に小さく，幅約30cm，深さ約10cmである。これらが，S16－S B01をとり囲む周溝であるならば，南北約470cm，東西約700cmの周溝となる。

(2) S17－SD02・04・06・11 （図版第17－3，第18図）

S17－SB01をとり囲むように検出した。SD02は，S16－SD02の延長の溝であり，四角形に囲繞する西辺である。SD04は，その流れの中で東に屈曲した溝であり南辺にあたる。SD06は，SD04と同じくSD02の分流であり北辺にあたる。SD06と呼称したこの部分には，多量に土器が含まれている（第18図）。これらは，幅約100cm，深さ約20cmをはかる。東辺にあたるSD11は，ほかの溝と比較すれば小規模なものであり，幅約40cm，深さ約20cmである。S17－SB01をとり囲む周溝であるならば，南北約550cm，東西約660cmの周溝となる。



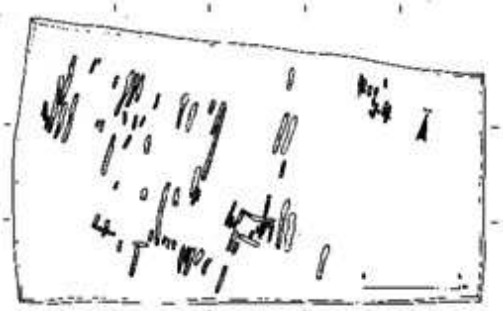
第18図　S17－SD06遺物出土状態実測図

(3) N20－SD01・02・06

N20－SB01をとり囲むように検出した。SD02は四角形に囲繞する溝の南辺にあたる。二段に落ち込む。幅約100cm，深さ約25cmをはかる。SD06は北辺にあたる。北岸がやや不定形であるが，幅約80cm，深さ約20cmである。東端を検出した状態ではSD01と合流しない。SD01は東辺にあたる。幅約80cm，深さ約25cmをはかる。N20－SB01をとり囲む周溝であるならば，南北約520cm，東西約790cmの周溝となる。

(4) N20－SD01・03・04・05

N20－SB02をとり囲むように検出した。SD01はN20－SB01をとり囲む溝と同じものである。SD03は幅約70cm，深さ約25cmをはかる。SD04・05は，本来同一の溝であり，05から04に向って二段になる。上端幅約150cm，深さ約30cmをはかる。これらは，二段になる溝を除けば，いずれもゆるやかに落ち込むU字形を呈する溝である。N20－SB02をとり囲む周溝であるならば，東西約670cmをはかる。北辺に相当する溝は調査区外になるため，検出できなかった。



第19図　N20素掘り溝実測図

(5) N20素掘り溝 （第19図）

N20において，遺物包含層であ

る暗褐色粘質土層（第6層）を除去した段階で地山面に検出した遺構である。東西方向に穿たれているのもあるが，ほとんどは南北に走っている。長さは一定していない。深さは約1～3cmぐらいで非常に浅く，ほぼ一定である。

3　土　　坑

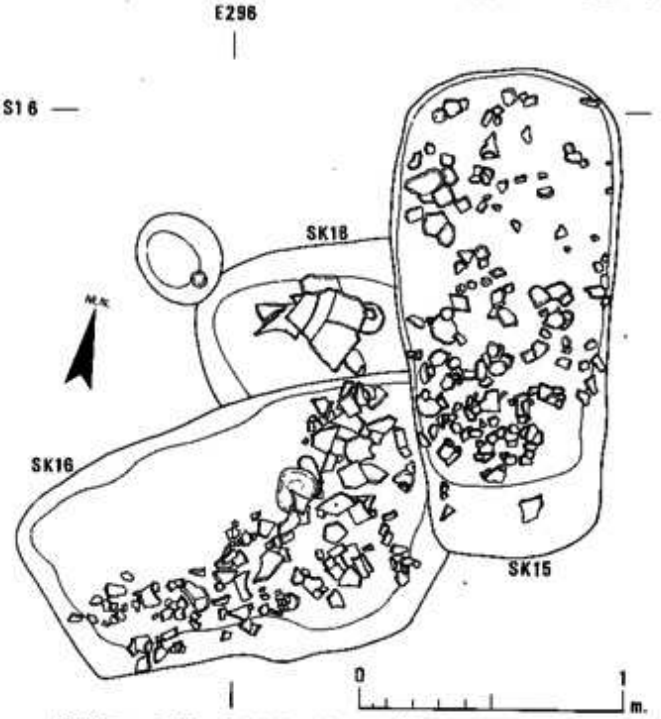
(1)　15～19W区の土坑

15～19W区で検出した土坑は約650基を数える。これらの土坑は，いずれも地山面より検出しているが，その深さは10～20cm程度のものである。遺構面の上面が削平されていると考えられる。これらの土坑は，その出土遺物によって大きく二時期に分けられる。

一つは，S16－SK18，S17－SK17，S17－SK40，S18－SK03などのように，比較的古い土師器，黒色土器を出土する土坑であり，おおむね土坑埋土は黄灰色粘質土である。

もう一つは，土師器，瓦質土器を中心に出土する土坑である。暗茶褐色粘質土を埋土とすることが多い。

たとえば，S16－SK15・16・18は，S16の南東部に位置する土坑で，4基の遺構が切り合った状態で検出できた。各土坑とも深さが10～15cmと浅いが，第5層までの水田耕作にともなう客土・削平を考えると，遺構面上部が削平された可能性がある。各土坑の切り合いと，少量ではあるが出土した遺物によって時期差が認められる。



第20図　S16－SK15・16・18遺物出土状態実測図

SK18は，南側をSK16，東側をSK15に破壊されている。切り合い関係から，最も古く考えられる。出土遺物としては，土師器，須恵器がある。

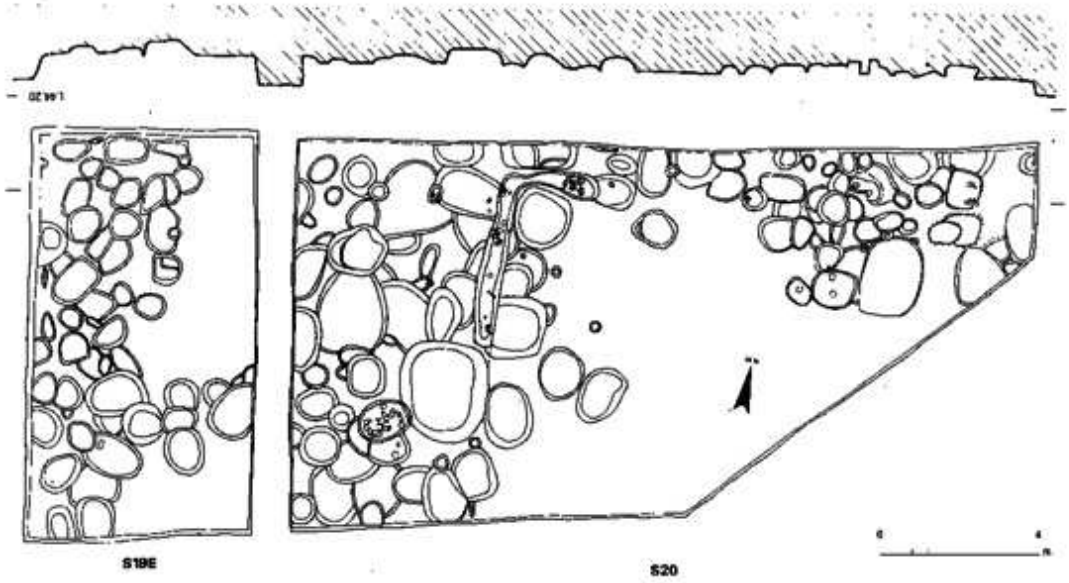
SK16は，SK18を破壊し，SK15に破壊されている。短径約100cm，長径がおそらく180cm前後となる長円形の土坑で，深さは約10cmである。土師器，瓦質土器，須恵器が出土している。

SK15は，SK16，18の両方を破壊しており，3基の中では最も新しい。80cm×190cm，深さ12cmの方形の土坑で，焼土と竈壁と考えられるものが土坑全体に散在しており，瓦質土器，須恵器，瓦などが出土している。しかし，土坑壁面は焼けた痕跡はなく，混在する土器も熱による変化は受けていない。これらの焼土と竈壁と考えられるものは土器の破片ともども投げこま

れたものであろう（第20図）。

(2) 19E・20区土坑群

S19E・S20・N20区にまたがって検出された土坑群である。土坑規模は，直径約60～200cm，深さ約30～100cmで，相互が複雑に切り合っている。ちなみにS19E・S20区での平面図，



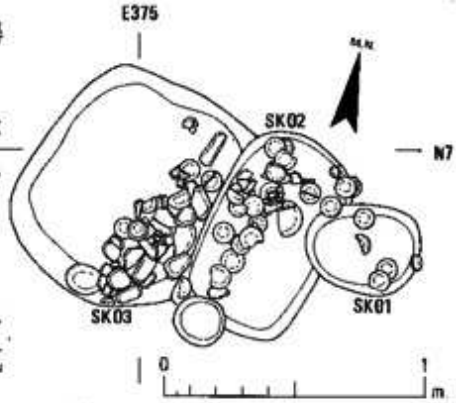
第21図　S19E・20土坑群実測図

東西断面図をつくると第21図のようになる。かなりの深さをもつ土坑がそれぞれ切り合うような形で連なっているのがわかる。いずれも垂直に近い角度で落ち込み，底にいたる形を呈しており，なかには，土坑壁をえぐるように掘り窪めているものもある。全体的に出土遺物は少なく，遺物を全く含まない土坑が数多くある。

(3) N20－SK01・02・03　（図版第16－1，第22図）

暗褐色粘質土の遺物包含層を除去した段階で大量の土器をともなって検出した土坑である。切り合い関係から，SK03・02・01の順で古い。いずれも長円形を示し，深さは約10～15cmである。SK01は，長径約45cm，短径35cm，SK02は，長径約80cm，短径約50cm，SK03は長径約90cm，短径約75cmである。

3つの土坑からは大量の小皿が出土しているが，瓦質土器小皿の数点を除いては土師器小皿である。そのほか，瓦質土器椀，土師器杯が出土している。



第22図　N20－SK01・02・03
遺物出土状態実測図

(4) S19E－SK20

S19E区西壁際で検出した。完掘できなかったが，土師器杯を約50点，集中して検出した。ほかに土師器小皿が数点，瓦質土器椀を1点検出している。

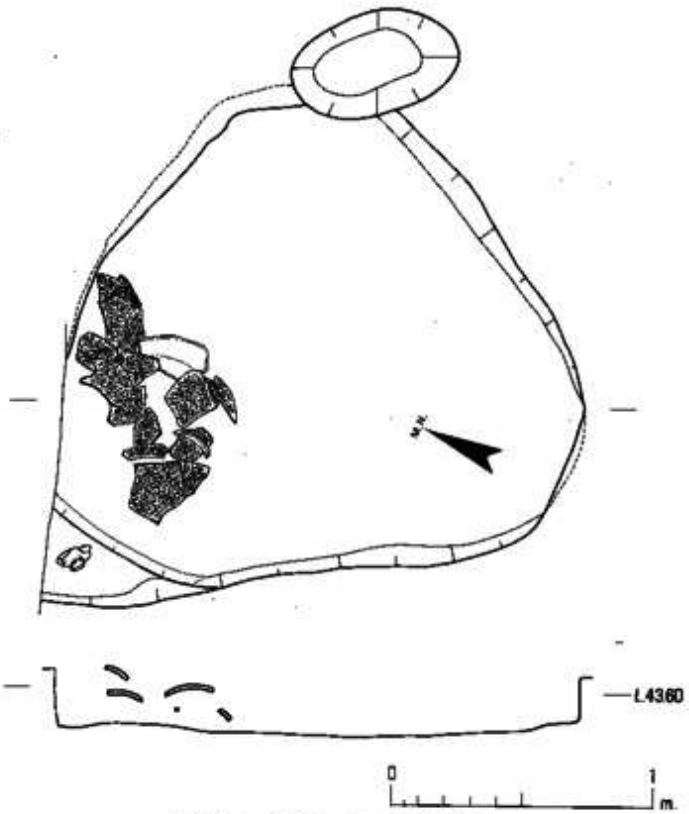
(5) S20－SK37

長径約138cm，短径約100cm，深さ約30cmの長円形の土坑で，土師器小皿・杯・片口鉢，瓦質土器椀などが出土している。

(6) N20－SK23(第23図)

直径約180cmの三角形状の円形を呈し，深さは約35cmである。N20区北壁際で検出した。土坑の北半分より，瓦質土器大甕の破片20数個が外面を上向きにして出土した（破片2個が内面上向き)。埋土は灰褐色粘質土であった。

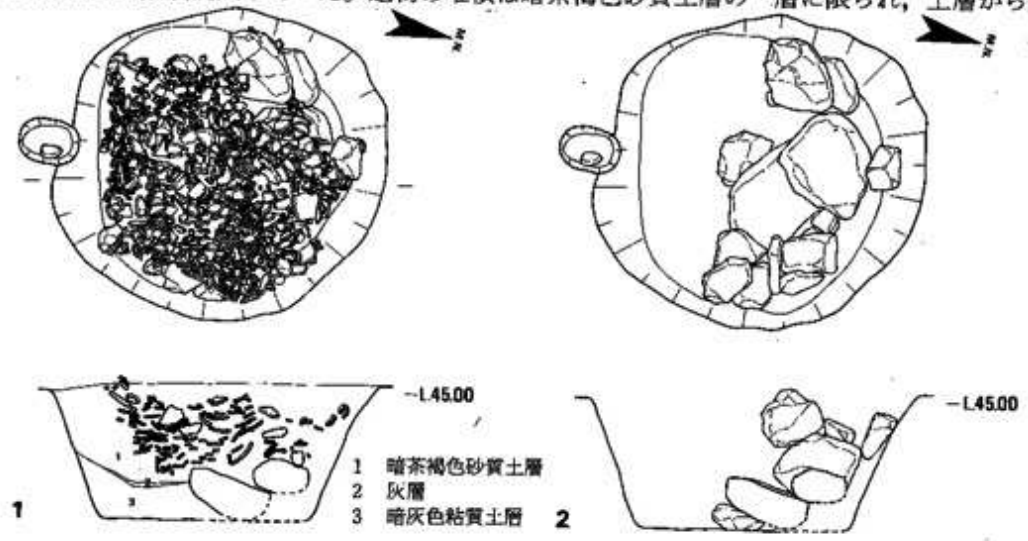
なお，N20－SK127がSK23に切られているが，そこから土師器椀1点が出土している。



第23図　N20－SK23実測図

(7) N23－SK01　(図版第16－2，第24図)

N23区の西端で，N23－SB01に隣接して検出した。直径約120cm，深さ約50cmのほぼ円形を呈している。掘り方と同じレベルから遺物が見え始め，30cm余の厚さでぎっしり埋まっている（第24図－1)。瓦質土器，土師器の椀・杯を主体とした遺物包含層中には，10cm内外の河原石，割石が20数個混入していた。遺物の堆積は暗茶褐色砂質土層の一層に限られ，上層から出



第24図　N23－SK01実測図

土したものと下層から出土したものが同一個体であったりする状況等から，短期間のうちにまとめて遺棄されたものと考えられる。なお，多量の遺物中には完形品は１点もみられず，大半が小破片であった。遺物包含層の下には，土坑中央から南に片寄った地点で，東西約26cm，南北約40cmの狭い範囲に灰層が認められた。この灰層は深いところで６cmを計り，炭化していない木質小片を含んでいる。

最下層は良質の粘質土層で，上層には多数の植物遺体を含有していた。これらの植物遺体は，ほとんどが本来の姿で出土したが，炭化米をはじめ，一部の種子が炭化している。また，土坑底部よりヘラ状に加工された竹製品を一点のみ検出した。

土坑の北側に片寄った部分には，大きな河原石（３個の花崗岩を含むが，他は安山岩）が10数個あった(第24図－２)。また，破損した石臼が土坑底部に接して１点出土した。これらは火を受けた痕跡もなく，単に廃棄されたものと考えられる。なお，南側の楕円形ピットは，当土坑より後世のものであり，関連性はないものと思われる。

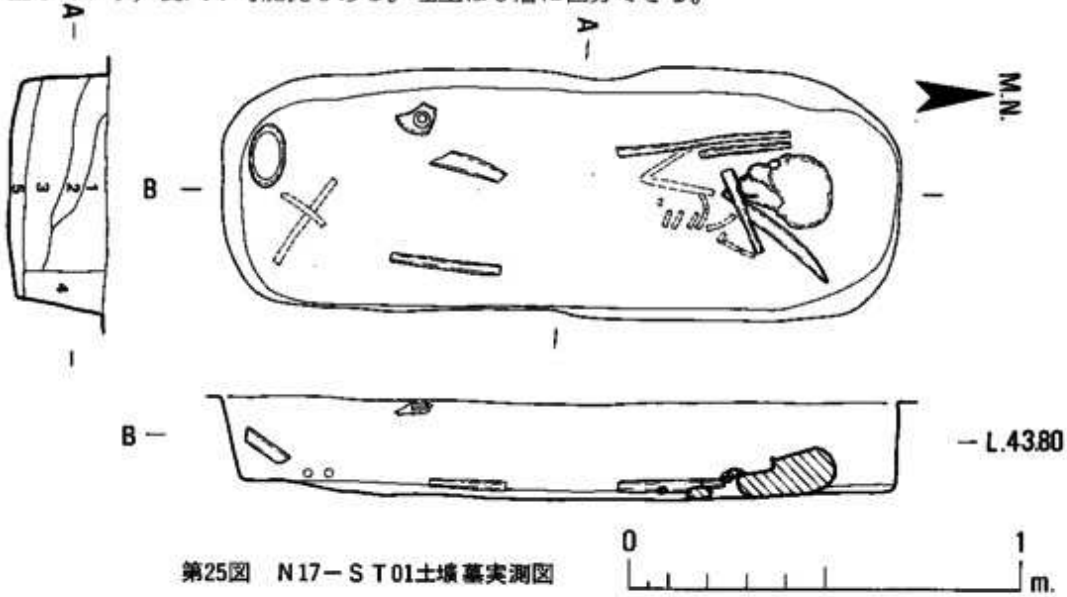
４　土　壙　墓

明確な形で人骨が遺存したものを１基，土壙墓の可能性があるものを２基検出した。順次述べていくことにする。

(1)　N17－ＳＴ01　（図版第18，第25図）

N17区の西よりの中央部で検出した。南北約173cm，東西約61cmで主軸はほぼ南北をさし，深さは約25cmで垂直に近い掘り方をもつ。人骨は頭骨・大腿骨・下腿骨が遺存しており，頭部を北に置いて顔を西に向けている。伸展葬と考えられる。

土師器杯と瓦質土器椀が各１点出土している。土師器杯は土壙の南部，大腿骨と土壙南辺の間で検出した。床面より約５cmうき上った状態で上を向けてあった。瓦質土器椀は上層から出土しており，混入の可能性もある。埋土は５層に区分できる。



第25図　N17－ＳＴ01土壙墓実測図

(2) S17－SK201 （図版第19図－1・2）

N17－ST01より南東約10mのところで検出した。南北約147cm，東西約70cm，深さ約30cmの土坑である。最下部に，拳大以上の大きさの河原石を敷きつめて床面をつくっている。昭和54年度に全域に実施した試掘調査で南半分が発掘されていたが，今回残りの北半分を発掘した。

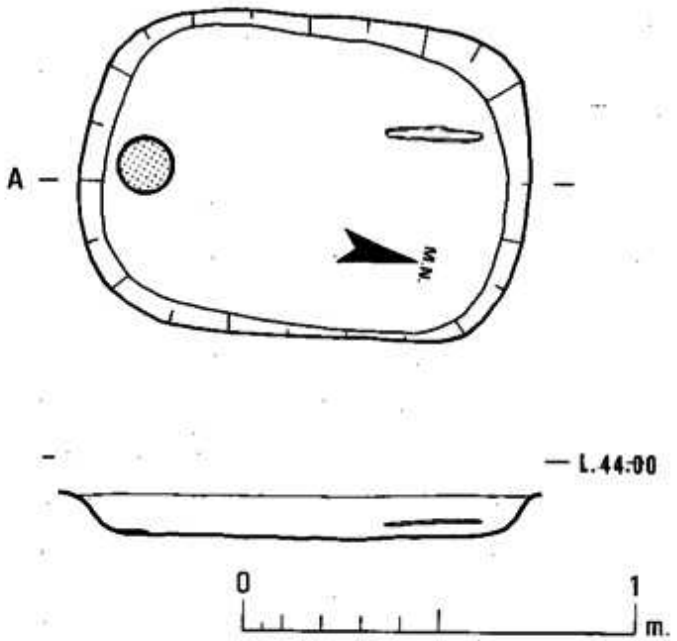
埋土は3層に区分できるが，基本的には茶灰色粘質土である。床面に敷かれた石の上面に接して厚さ約5cmの炭層が認められた。

土師器小皿，瓦質土器椀・鉢が出土している。

土壙墓と確定できないが，一応その可能性の強いものとしておく。

(3) S15－SK201 （図版第19－3，第26図）

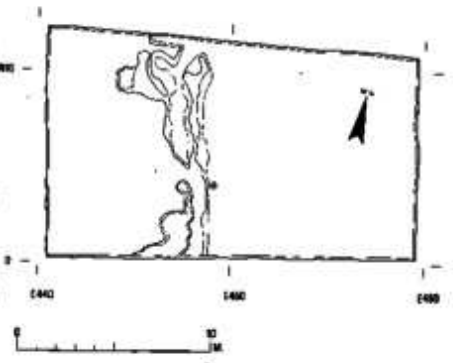
S15とS16間の畦部にあたり，畦を人力で除去する時に検出した。地山面に掘り込まれており，112cm×88cmの方形に近い土坑である。深さは現状で約10cmであった。上部は削平されたものと思われる。床面より鉄刀と漆の細片（アミ部）が出土したが，土器類は出土しなかった。この土坑もS17－SK201と同じく土壙墓と確定しえないが，その可能性が強いものであろう。



第26図　S15－SK201実測図

5　その他の遺構

15区～20区で古代より中世にいたる多数の遺構を検出した。しかし，21･22区は削平をうけており，少数の溝・ピットを除いては，ほとんど遺構を検出できなかった。23区～25区は，東の谷部に向う傾斜地であり数回の削平と客土を受けている。N・S24－SD01西側にみられた客土が古い客土層であり，客土後N・S24，S25－SD01が掘られ，続いてSX土坑群が形成された。その後，N24南東部・S24東半分が削平を受けたと考えられる。


第27図　N24客土範囲実測図

この削平後，客土が行なわれ現在の水田が造られた。これらの削平・客土は，近世後半の比較的短期間で行なわれた。この削平・客土はN・S23においてはみることができない。

(1) N24－SX01土坑

N24区北西隅に位置し，上部は削平を受けたのか，直径約70cm，深さ4～12cmの土坑である。土坑底部には，木製の桶底が残っていた。遺物は出土しなかった。

(2) S24－SX01土坑　(図版第20図－3)

S24区西中央部に位置し，直径約100cm，深さ約40cmの土坑である。土坑底部より木製の桶の破片が検出された。遺物は，土師器と須恵器の細片が少量と，古銭が一枚出土した。なお，古銭は非常に腐食が激しいため銭種は判別できない。

(3) S24－SX02土坑

S24－SX01の東1.4mに位置する。直径約100cm，深さ約50cmで，SX01と同規模の土坑である。遺物は検出できなかった。

(4) S24－SX03土坑

S24－SX02の東側に近接して位置する。直径約130cm，深さ50cmの土坑であり，S24－SX01・02より若干規模が大きい。土坑底部より木片数点が出土した。S24－SX01や後述するSX04にみられるような桶が存在していた可能性が考えられる。遺物は，土師器，須恵器，瓦細片を検出した。

(5) S24－SX04　(図版第20－2，第28図)

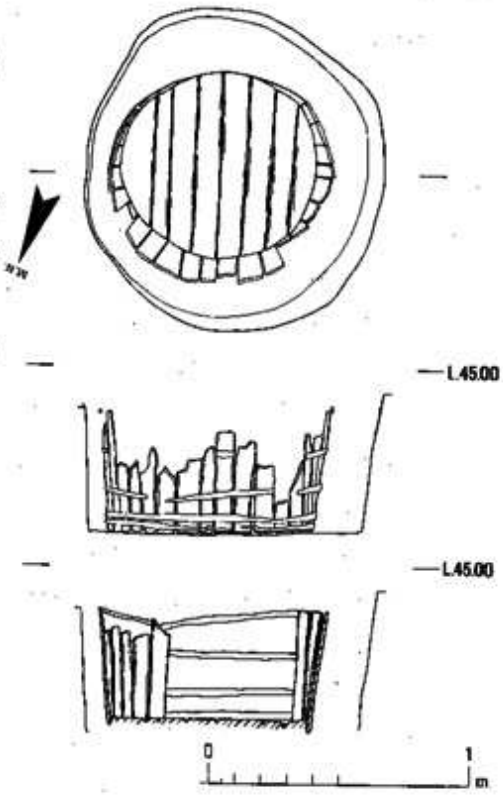
S24－SX01・02の南3mに位置し，直径約130cm，深さ約60cmの土坑であり，内部に底部直径73cm，側板残高45cmの木製の桶が据え置かれていた。遺物は，土師器細片少量と磁器皿1点を検出した。

(6) S24－SX05土坑

S24中央部を南北に貫くSD01の東側に位置し，直径約110cm，深さ約20cmの土坑である。遺物は，土師器・須恵器細片を少量検出した。

(7) S24－SX06土坑

S24－SX05南西に近接して位置する。直径約120cm，深さ約30cmの土坑である。底部には，直径60cm，幅10cmの浅い溝状の窪みが検出できたが，木片は出土しなかった。この窪みは桶状の容器の側板がつくり出したものと考えられる。遺物は，土師器・須恵器細片とともに磁器椀1点を検出した。



第28図　S24－SX04土坑実測図

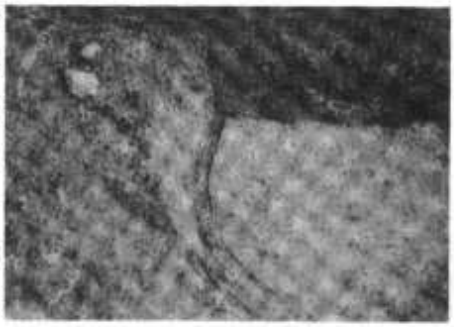
(8) S24－SX07土坑

S24－SX06の東2mに位置し，直径80～110cm，深さ約10cmの楕円形の土坑である。遺物の検出はなかった。

SX05～07が，非常に浅い土坑であることから考えて，この地区は，上部に大きい削平を受けたと思われる。

(9) S24－SX08土坑

S24を南北に貫くSD01が，S25に向ってほぼ直角に曲がる地点の南に位置する。土坑の一部が調査区外にかかるため，全体の検出はできなかった。直径約140cm，深さ約50cmの土坑であり，ほかの土坑よりいくらか大きい。内部に石の散乱がみられ，底部には，S24－SX06と同様の溝状の窪みを検出した(第29図)。遺物は，土師器細片・須恵器細片・円盤状土製品・石臼などである。なお微量の骨片があったが，とり上げることはできなかった。



第29図　S24－SX08土坑

(10) S24－SX09土坑

S24区中央部北側に位置し，SD01を切ってつくられた直径約125cm，深さ約40cmの土坑である。遺物の検出はなかった。

以上の10基の土坑は，その上面が削平されているために深さは不明であるが，直径は110cm前後を中心としている。S24－SK04は，明確に桶を遺存していた。また，木片を遺存した土坑もあった。出土する遺物のほとんどが細片であったために土坑の時期を限定することはできないが，近世のものと考えるべきであろう。また，桶は座棺の可能性がある。

(11) N・S24，S25－SD01

N・S24を南北に，S25を東西に流れる溝である。N24北端において南東方向に曲って始まり，S24に向って縦走する。S24では若干東に振れながら南走し，南端部で直角に近い角度で東に折れS25に向う。さらに，S25を東に向って横断し，東端にある谷部に向う落ち込みと交わって終了する。

溝は，全長44m以上あり，幅は80～200cmをはかる。深さは削平を受けたのか，わずか数cmの所もあるが，全体としては30cm内外のU字溝である。

N・S24の溝西側において，不定形な厚さ20～40cmの客土層がみられ，溝西岸は，客土層に掘り込まれていた。客土を取り除くとピット（遺物なし）が検出された。

S25東端には落ち込みが認められ，このSD01は，落ち込みに流れ込む。また落ち込み内には，河原石や石臼・砥石が混じり散乱しており，水田の拡張事業が行なわれたと思われる。

遺物は，土師器羽釜・鍋・すり鉢，磁器椀，砥石，石臼，五輪石（水輪）等が検出された。

第4節　遺　　物

出土遺物の大部分は土器である。土師器，それに今回，瓦質土器として報告するが椀を中心とした硬質の土器がその大半であり，十瓶山周辺の窯で生産されたと思われる甕を中心とした大型品の須恵器，それに軟質で大型のいわゆる瓦質土器などが少量出土している。

また量的には少ないが，輸入磁器，瓦，土製品，鉄製品，銭貨なども出土している。

1．土　　器

(1)　土坑・ピット出土の土器

15～19W区までの調査地区は，おおむね標高44mでその遺構面が検出できる。また，遺構が穿たれている地山土は，黄褐色粘土層である。しかし，19E・20区の遺構は，暗紫色粘土層に掘り込んで設けられており，遺構面のレベルは，約43.70cmであった。調査地に高低差があり，遺構の設けられているベース土も異なる。また，同一遺構面で検出した土器も，一括遺物として検討すれば，その共伴する土器の種類で大きく二時期に分かれると思われ，とくに，土坑出土遺物に顕著にそれがうかがえる。

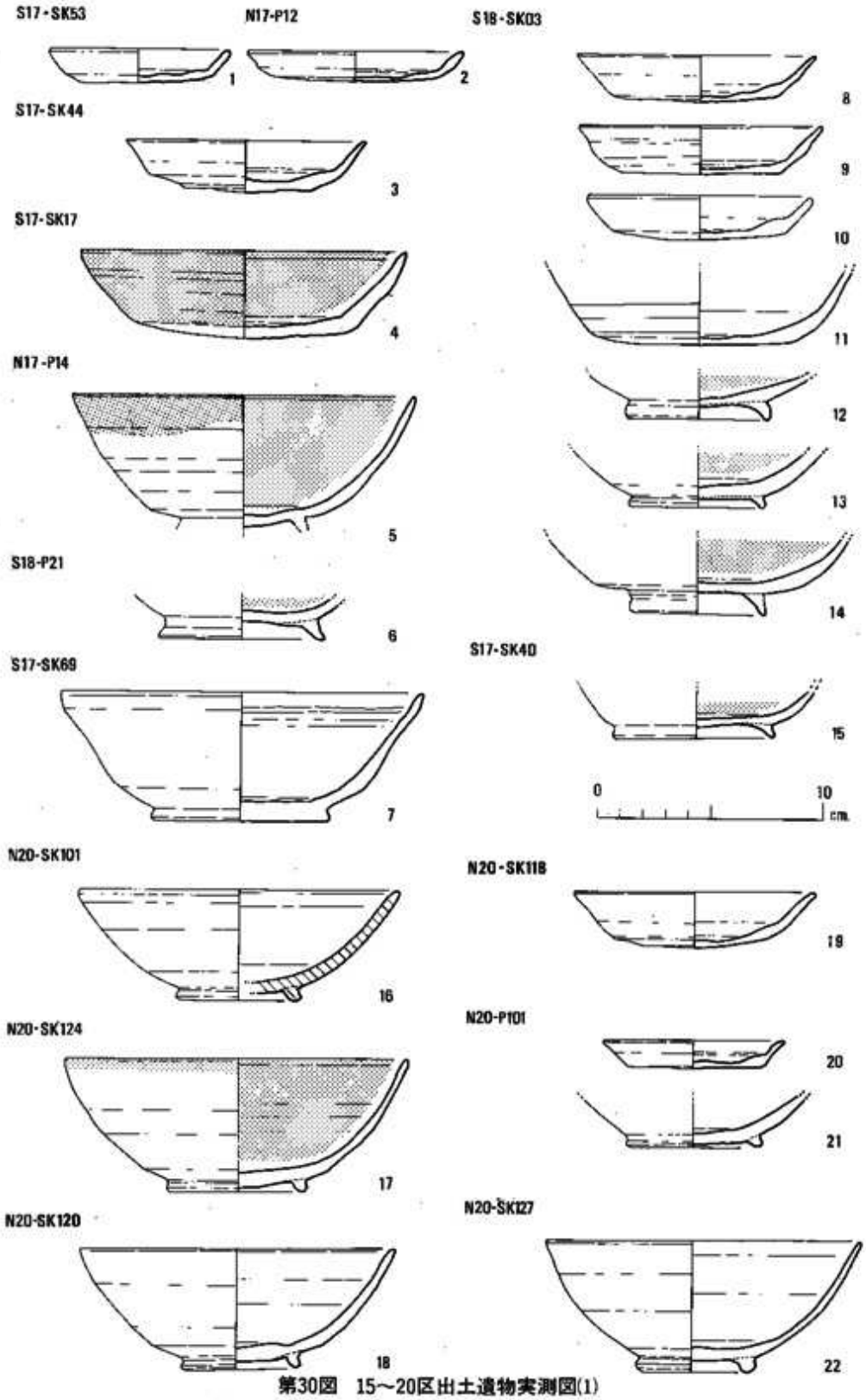
15～19W区出土土器　(1)　(図版第28・29，第30図1～15，第32図8～13)

土師器，黒色土器はあるが，瓦質土器をともなわないで検出した一括の土器群および，それらの土器と形態的に類似するものを抽出した。

S18－SK03は，土師器と黒色土器を出土している。

土師器は皿と杯がある(第30図8～11)。皿は，二形態に分けられる。8は全体的に器壁が薄く，平底より一気に立ち上り口縁端部にいたる。9・10は平底より彎曲しながら立ち上る。器壁は分厚である。ナデによって調整している。S17－SK44出土の皿（第30図3）は，9・10のタイプである。杯は1点を図化した(第30図11)。底径は，約9cmで平底である。明確な稜線をもって斜めに鋭く立ち上る。口縁部を欠失しており，体部上半は不明であるが，形態としてはS17－SK17出土の黒色土器杯（第30図4）に類似するようである。底部と体部は比較的薄く仕上げているが，底部より体部にいたる部分はかなり肥厚している。磨耗しているので，細部の調整は不明であるがナデによって調整されていると思われる。

黒色土器椀は3点を図化した(第30図12～14)。いずれも体部上半を欠失している。断面三角形，あるいはそれに近いかたちの貼り付け高台をもつ。体部内面に炭素の吸着が認められ，黒色土器椀A類の範疇で考えられるものである。体部下半は，強く外に張り出した形態を呈している。西村遺跡出土の黒色土器椀のうち，この12～14のように断面三角形の貼り付け高台をもつものは，体部下半が比較的外方に強く張り出す傾向がある。



第30図　15～20区出土遺物実測図(1)

19E・20区出土土器　(1)　(図版第28，第30図16～22)

土師器，黒色土器を出土する。

土師器は，小皿・皿・椀を図化した（第30図18～22)。N20－P101出土の小皿は平底より，やや外反気味に立ち上り，丸くおさめた口縁端部にいたる。立ち上る角度は急傾斜であり，内底部と体部内面の境には明確に稜線をともなう。磨耗しているが，ナデによって調整していると思われる。土師器椀は3点を図化したが，同一の形態であり，規模もほぼ同じである。口径14cm，器高5.4～5.8cmである。やや丸味をおびるが，断面が台形状を呈する貼り付け高台をもつ。ロクロを使用していると思われるが，体部下半の調整は粗雑であり，特に高台直上周辺は高台を貼り付けた時に，はみ出たと思われる粘土を指頭で押しつけている。18の体部外面に回転ヘラ磨きが認められる。幅0.2～0.4cmのヘラ磨きが1cm間隔ほどで施されている。土師器皿は，やや丸味をもった平底を呈する(第30図19)。形態は，S17－SK44出土の土師器皿に類似する。磨耗しているため，細部は不明である。

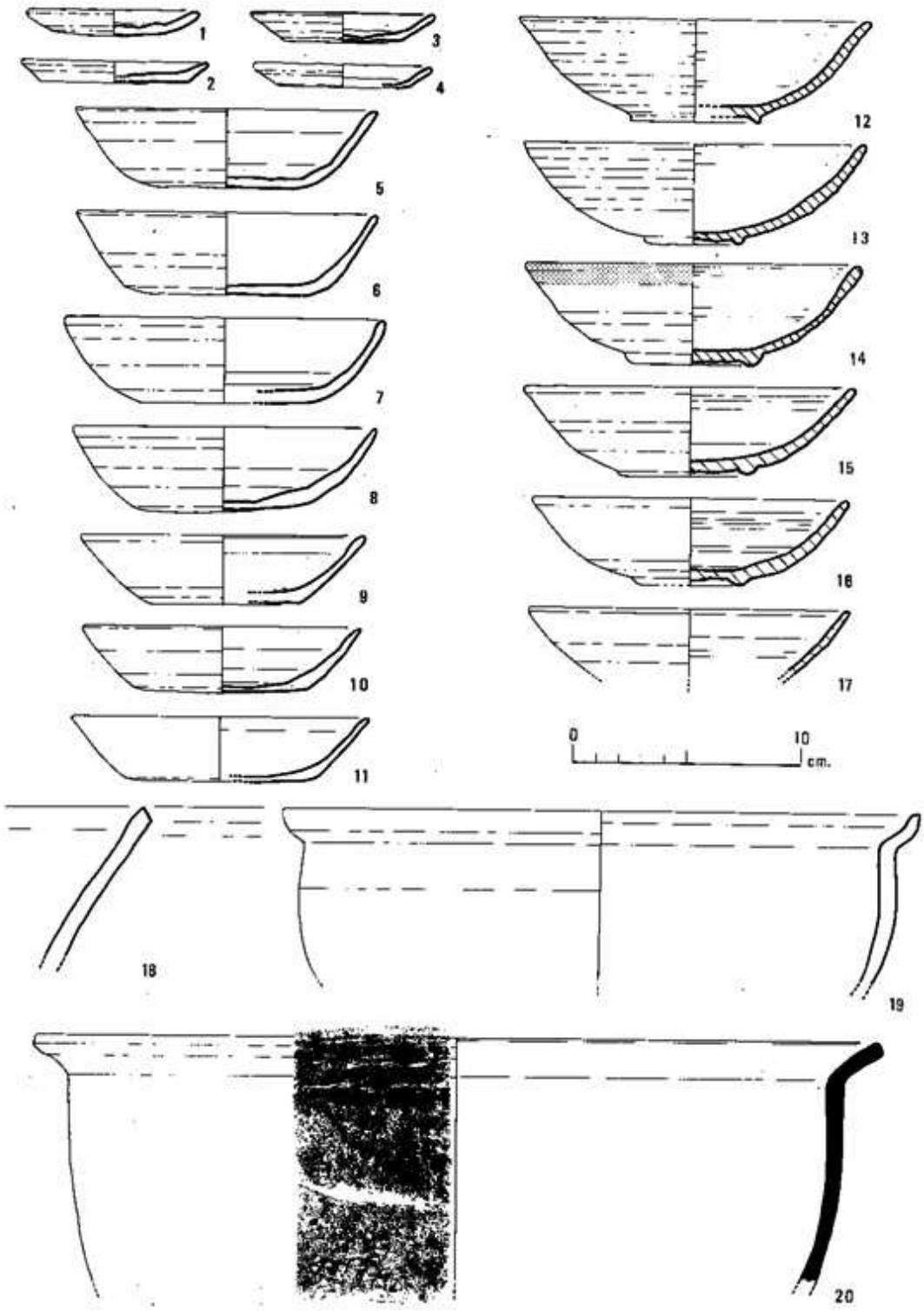
黒色土器椀を1点，図化した(第30図17)。高台は，丸味をもった断面台形状の貼り付け高台である。体部は内彎しながら立ち上り，口縁部直下でやや窪む。内外面とも磨耗しているが，体部外面には部分的に回転ヘラ磨きが認められる。第30図12～14と同じように体部下半の調整は粗雑である。内面と口縁外周にのみ炭素が吸着しており，黒色土器椀A類の範疇で考えられるものであろう。

N20－SK101出土の土器は，極めて硬質の瓦質を呈している。器高は，比較的低い。体部は，内彎しながら立ち上り，口縁部直下で幅0.2cmの凹線状の窪みをもつ。体部外面はナデののち回転ヘラ磨きで仕上げている。今回の調査で多量に出土している硬質の瓦質土器の範疇で考えられるものかどうか，判断できない。

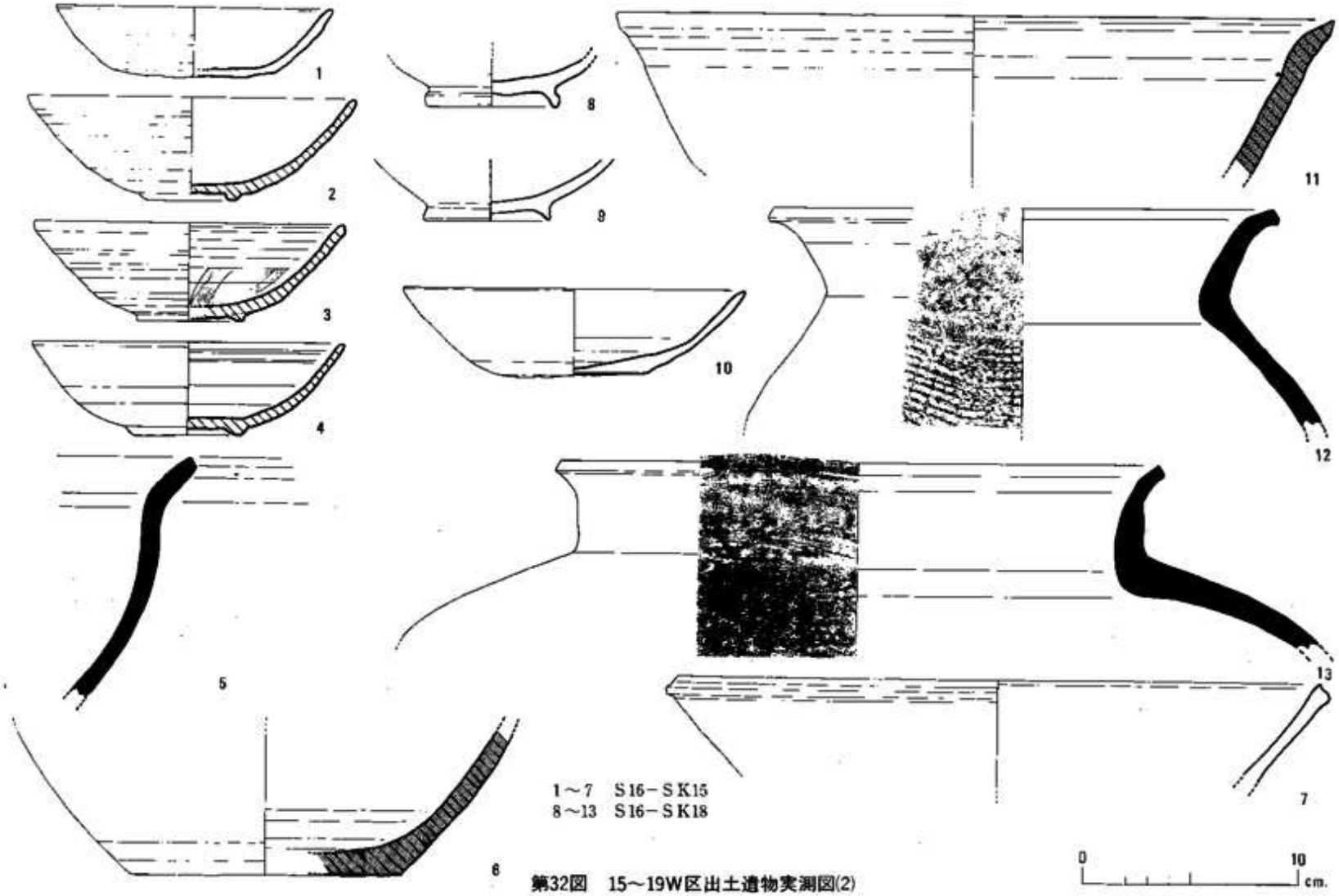
15～19W区出土土器　(2)　(図版第29，第31図，第32図1～7，第33図)

土師器，黒色土器，瓦質土器を出土する。

土師器は，小皿・杯・椀，それに粗雑なつくりの土鍋などの大型品がある。小皿はS16－SK16で検出したものに代表される(第31図1～4)。口径7.5cm～8.5cm程で，器高は1.2cm～1.5cm程度である。平底よりゆるやかに彎曲して体部につづき，外反気味に立ち上って丸くおさめた口縁部にいたる。内外面ともヨコナデの調整を施している。図化した小皿のうち，S17－P10出土の小皿（第33図23）は，比較的急角度で立ち上り，前述した範疇に入らない可能性もある。土師器杯もS16－SK16出土のものに代表される。口径12cm～14cm，器高3cm～4cm程度のものである。形態によって分けることができると思われる。底径7cm前後の平底より一気に斜め方向に立ち上って丸くおさめた口縁端部にいたるもの（第31図5）と，やや丸味をもった底部より，彎曲して体部にいたり内彎気味に丸くおさめた口縁部にいたるもの（第31図7）とである。どちらも回転ヨコナデの調整を施している。器高は，5の形態の杯がやや高い。土師器椀の出土数は少ない。S17－P112出土の椀を図化した。砂粒を混入した粗い胎土を使用し，淡橙色を呈する傾向がある。器高は一般的に低く，5cm前後である。回転のヨコナデを施した

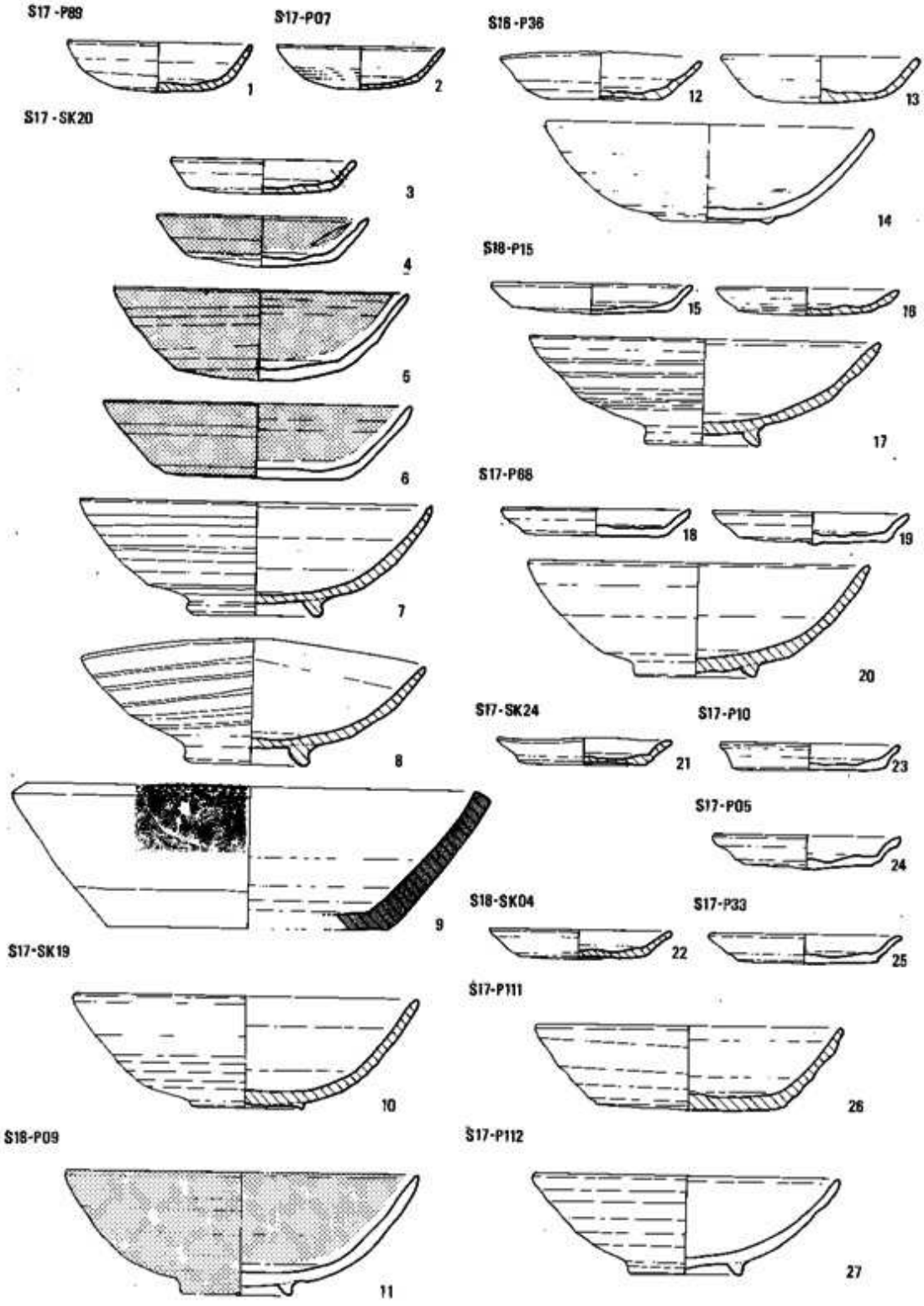


第31図　15～19W区出土遺物実測図(1)



1～7　S16－SK15
8～13　S16－SK18

第32図　15～19W区出土遺物実測図(2)



第33図　15～19W区出土遺物実測図(3)

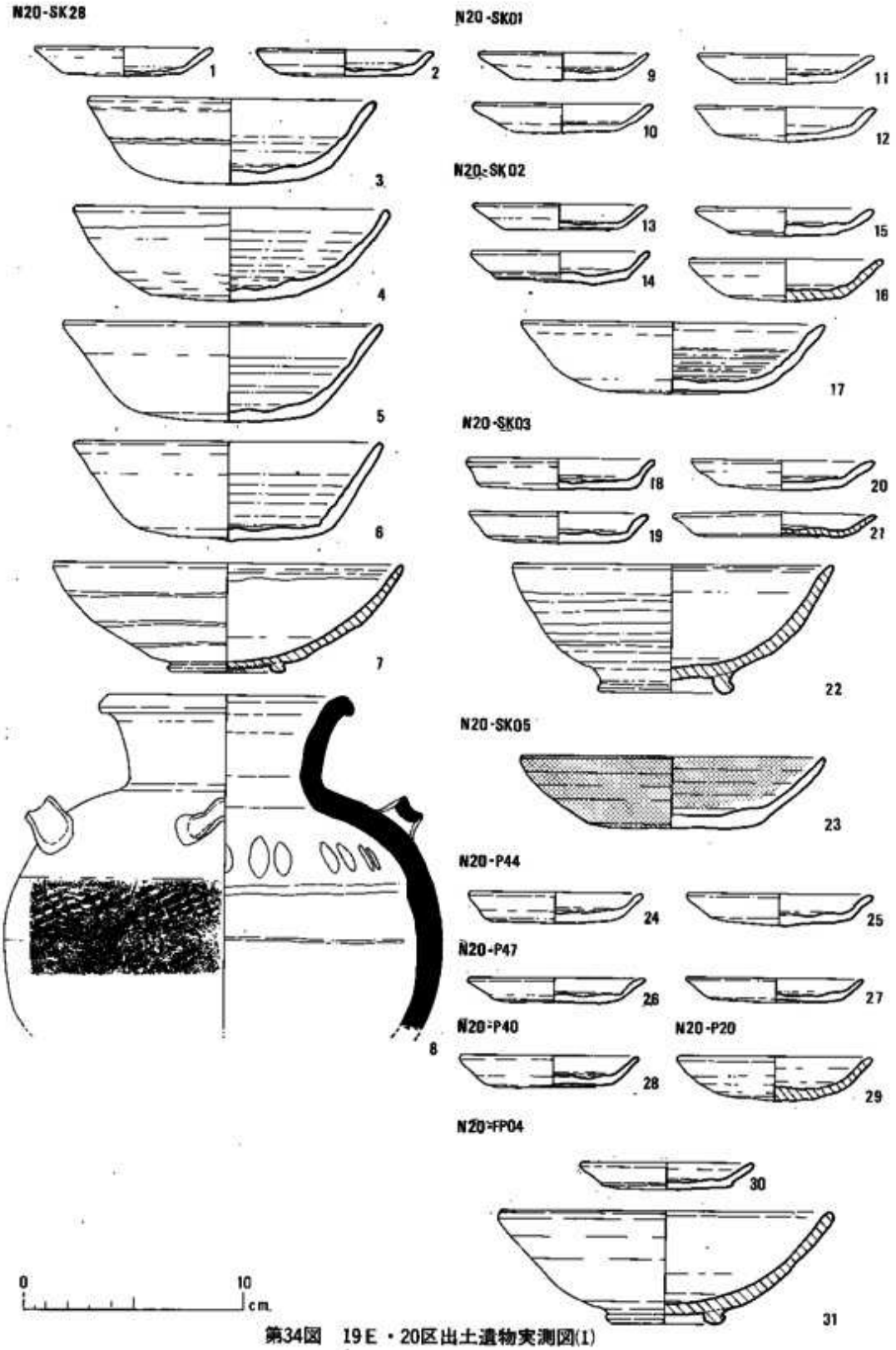
のち，回転ヘラ磨きを施すものと，ヨコナデ調整のみを行うものとがある。高台は貼り付けており，断面三角形を呈するものと，内側がやや肥厚するものとがある。

黒色土器は，皿と杯と椀がある。皿の出土点数は少ない。図化したS17－SK20出土の皿(第33図4）は，口径9.6cm，器高2.3cmをはかる。丸味をおびた底部より，ゆるやかに彎曲して体部につづき，一度屈曲するが外反気味に鋭く尖った口縁端部にいたる。体部の内外面が黒灰色を呈している。磨耗しており，細部の観察は充分にできないが，ロクロを使用していると思われる。体部外面に回転ヘラ磨きの痕跡が認められる。黒色土器杯もS17－SK20より出土している（第33図5・6)。形態としては，6が一般的であり，出土量は多い。平底より，何本かの稜線をもって立ち上り，やや尖った口縁部にいたる。器壁は，比較的薄い。口径14cm前後，器高3.5cm～4.0cmである。磨耗が著しく細部は不明である。胎土は淡黄色を呈するものと，赤褐色を呈するものがある。黒色土器椀は，S18－P09出土のものを図化した(第33図11)。15.5～16cm，器高5.5cm程度のものが多い。比較的小さな高台を貼り付けてつくっている。体部外面には数本の稜線が認められ，内彎して立ち上り，丸くおさめた口縁部にいたる。胎土は赤褐色を呈するものが多い。体部外面には，回転ヘラ磨きが施されているが，内面には不規則なヘラ磨きを施すものと，ヨコナデで調整するものがある。

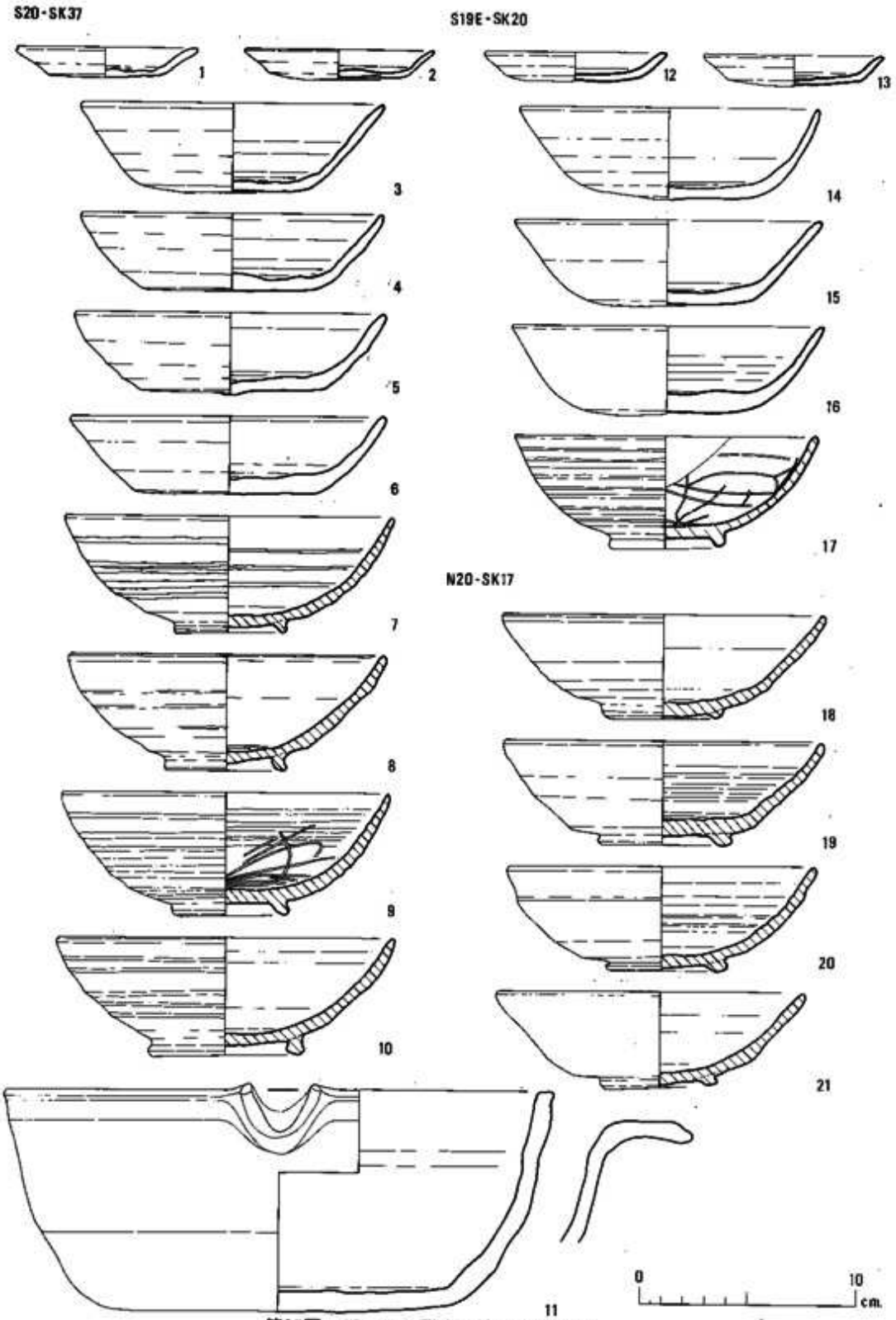
瓦質土器は，小皿・皿・椀がある。小皿は極めて焼成がよく須恵質を呈するものS18－P15出土（第33図16)・S17－SK24出土（第33図21)・S18－SK04出土（第33図22）と，軟質で形態もほかの小皿と異なるものS17－P89出土（第33図1)・S17－P07出土（第33図2)・S16－P36出土（第33図12･13)，それに硬質で後述する瓦質土器椀に類似するものS17－SK20出土（第33図3）がある。ここではS17－SK20出土の小皿に言及する。器形・法量は，土師器小皿と類似している。平底より外反しながら立ち上って丸くおさめた口縁部にいたる。外面はヨコナデ，内面体部にヘラ磨きが認められる。焼成・調整とも硬質の瓦質土器椀に類似しており，同じ土器の範疇で考えるべきであろう。しかし，出土量は少ない。瓦質土器椀は多数出土したが，S17－SK19出土のもの（第33図10)，S18－P15出土のもの（第33図17）を図化した。口径15.0～16.0cm，器高5.0cm程度のものが多い。17は，外に踏み出す断面形を呈する貼り付け高台をもち，内彎気味に立ち上って口縁部にいたる。体部外面には，ヨコナデののち，幅0.5cm以内の回転ヘラ磨きを，0.5cmほどの間隔で施している。内面は未調整のものもあるが，一般にその上半部に回転ヘラ磨きを施すものが多い。10は，小さな貼り付け高台をもつ。体部内面は口縁直下にのみ幅1cm程度のヨコナデを施す。体部外面は粗いナデが認められる。この形態・調整方法の違いは，時期差によるものであろうと思われるが，類例の増加を待って考えたい。瓦質土器の杯を1点図化している(第33図26)。しかし，これは，前述した瓦質土器小皿・椀とは，やや異なった土器と思われ，焼成から見るならば，軟質な小皿としたS17－P89出土の小皿などと類似しているように思える。

19E・20区出土土器　(2)　(図版第29・30・31，第34・35・36図)

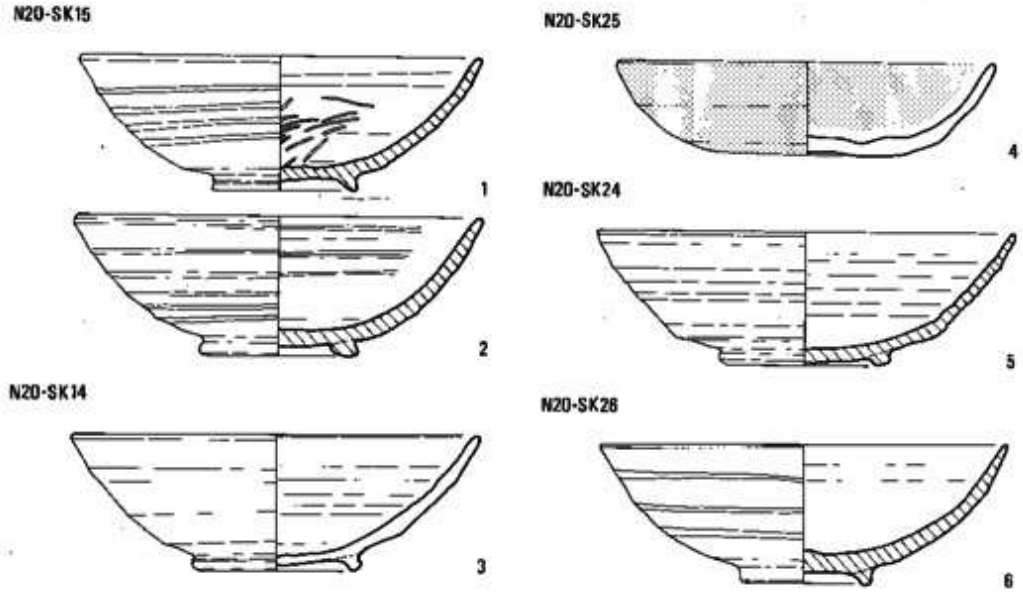
土師器，黒色土器，瓦質土器を中心に出土している。



第34図　19E・20区出土遺物実測図(1)



第35図　19E・20区出土遺物実測図(2)

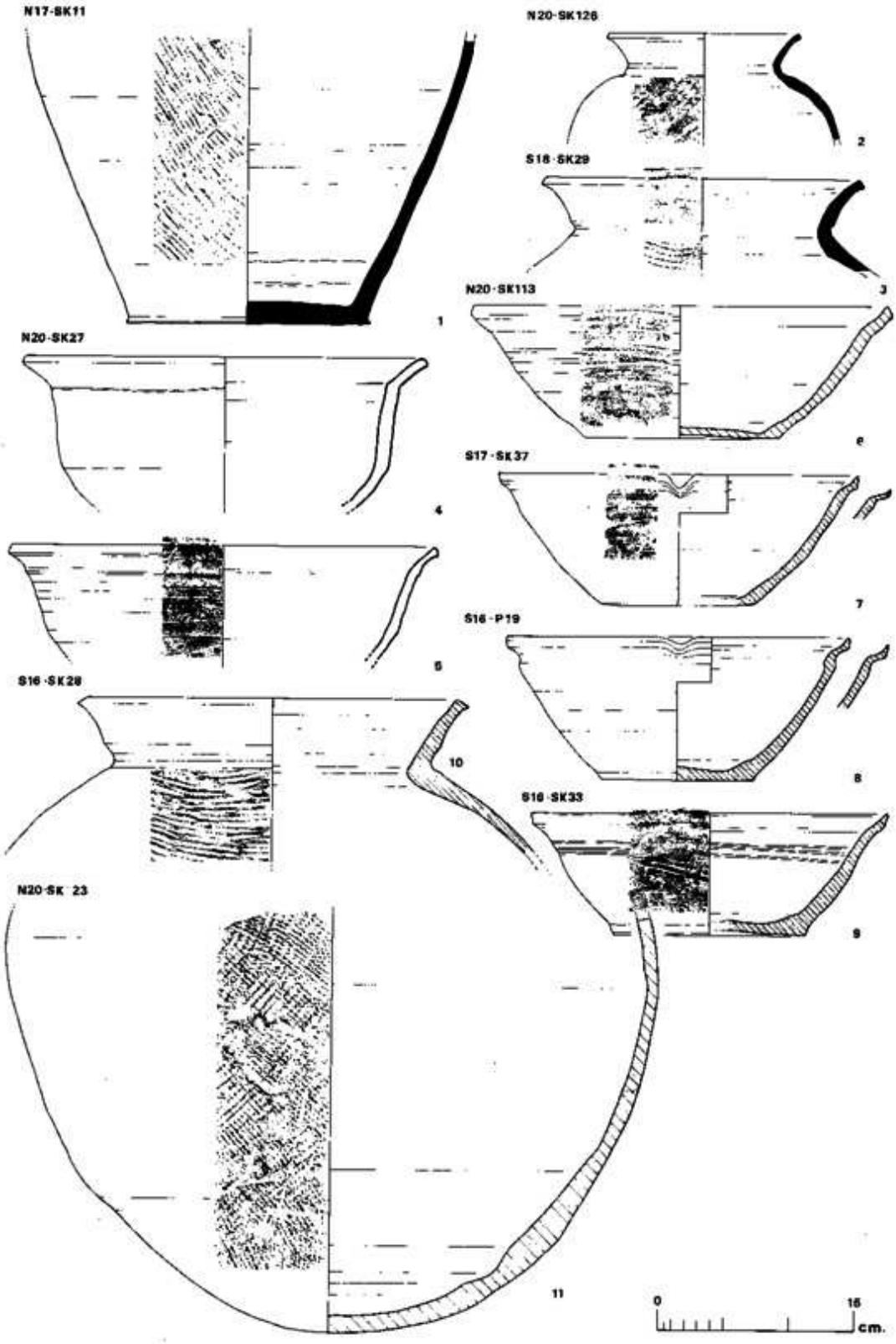


第36図　19E・20区出土遺物実測図(3)

土師器は，小皿・杯・椀がある。土師器小皿はN20－SK01・02・03出土のもの（第34図9～15，18～20）に代表される。同一遺構面出土の小皿であるが，この三基の土坑は相互に破壊し合っており，SK01が最も新しく，ついでSK02・SK03の順序であった。土坑の切り合いによって前後関係は認められるが，SK01の小皿とSK02の小皿は，形態にほとんど変化がないようである。しかし，SK03出土の小皿は平底より急傾斜で立ち上る傾向や，また立ち上る角度がゆるやかでも，やや丸味をもった底を呈するなどSK01・02の小皿と異った形態を呈している。さらに，伴出した瓦質土器が比較的古い要素をもっていることも指摘できる。SK01・02の土器はSK03より後出するものと思われる。口径は，8.0～8.8cm程度，器高は1.5cm以内を中心としている。ナデによって調整している。土師器杯は多量に出土しているが，最も一般的な形態はS19E－SK20出土の杯であろう。そのうち，第35図15は，直径約7cmの平底をもち，ゆるやかに彎曲しながら体部につづくが，そのまま一気に口縁端部にいたる。口縁部は丸くおさめている。口径は14～15cmでおさまる。器高は，3.7～4.3cmの範囲が一般的である。ナデにより調整する。椀の出土は少ないが，N20－SK14出土のものを図化した(第36図3)。口径15.6cm，器高5.2cmである。口縁部内周の1cm程度と外周の1cm程度を，つまむようにしてナデを施している。外周は，その幅だけ窪む状態を呈している。体部下半は，明確な調整をしていない。しかしながら，これは一般的な傾向とは思われず，後述する周辺の溝内出土遺物には回転ヘラ磨きを施したもの，ヨコナデを施したものなどがある。

黒色土器は杯が出土している(第34図23，第36図4)。口径は14.0～14.5cm程度であり，器高は3.3～3.6cm程度である。いずれも磨耗しており，細部の観察は不能であるが，体部外面には回転ヘラ磨きを施しているようである。N20－SK25出土の杯（第36図4）は，土師器杯にもある形態をとっている。

瓦質土器は椀が出土している。今回の調査で最も多量に出土しているのがこの器種の土器で



第37図　15～20区出土遺物実測図(2)

ある。時期差によるのであろうか，検出した土器の法量・調整技法が異なる。S20－SK37出土の椀（第35図7～10）は，口径14.6～15.6cm，器高5.4～5.7cmをはかり，高くてしっかりした高台を貼りつけている。胎土の色調はそれぞれ異なるが，これは焼成時における相違と思われる。体部外面はヨコナデののち，回転ヘラ磨きを施し，内面上半は回転ヘラ磨き，下半は不規則なヘラ磨きを行なっている。N20－SK17出土の椀（第35図18～21）は，口径14.4～15.0cm，器高4.5～4.9cmをはかる。貼り付けられた高台は，断面が丸くなっている。この土器群も胎土の色調が各々異なり，前出のS20－SK37出土椀と同じように焼成時における差異と考えられる。体部外面には粗い回転ヨコナデは認められるが，ヘラ磨きは観察できない。内面は，ほとんど調整を施さない。2基の土坑より一括して出土した土器を代表させて瓦質土器椀の形態・調整を略述したが，これ以外にもN20－SK03出土椀（第34図22），N20－SK15出土椀（第36図2）などがあり，これらは形態的には古いと思われる要素をもっている。

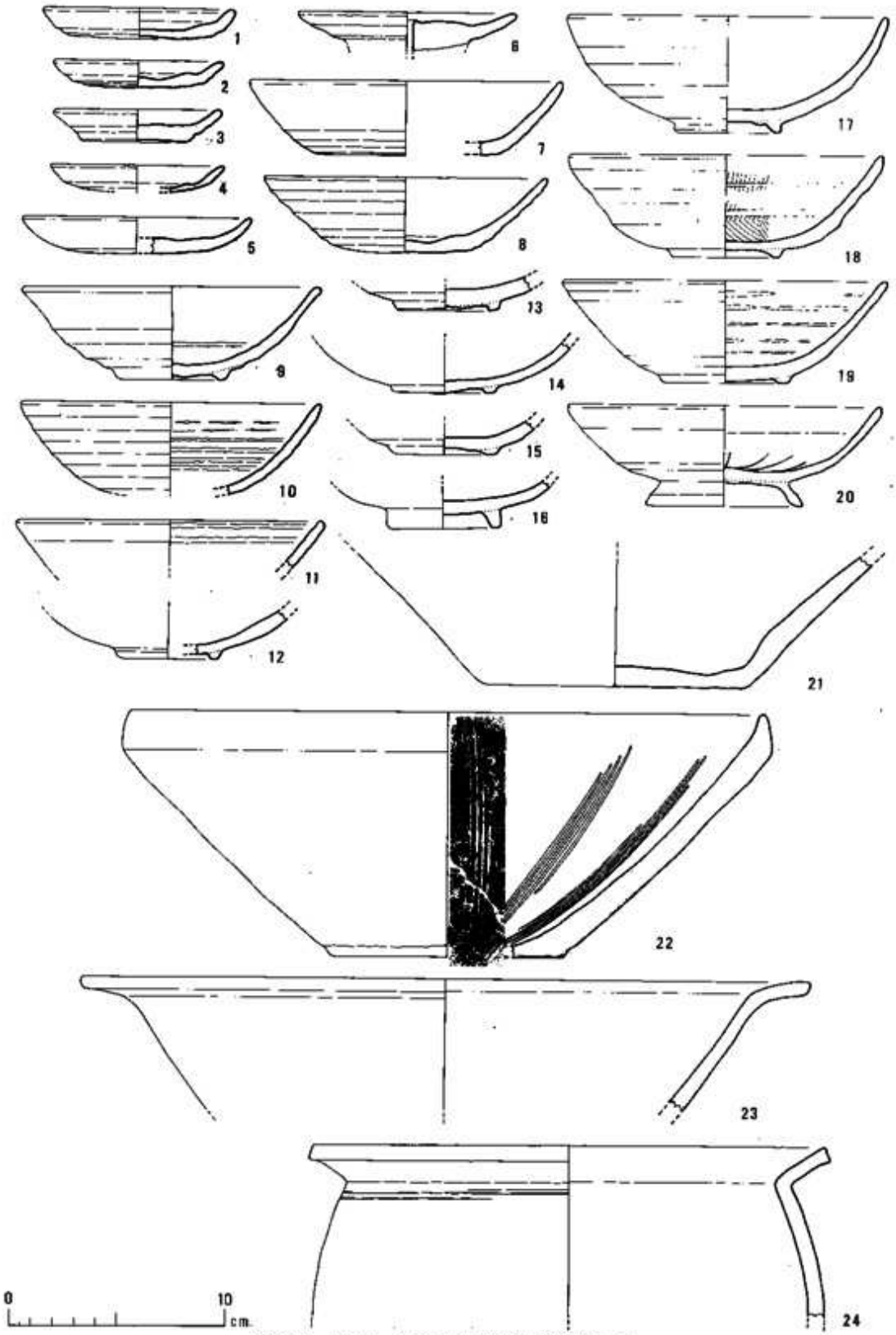
N23－SK01出土土器　（図版第31，第38・39・40図）

遺物は，3層に分かれる埋土のうち，第1層に集中していた。

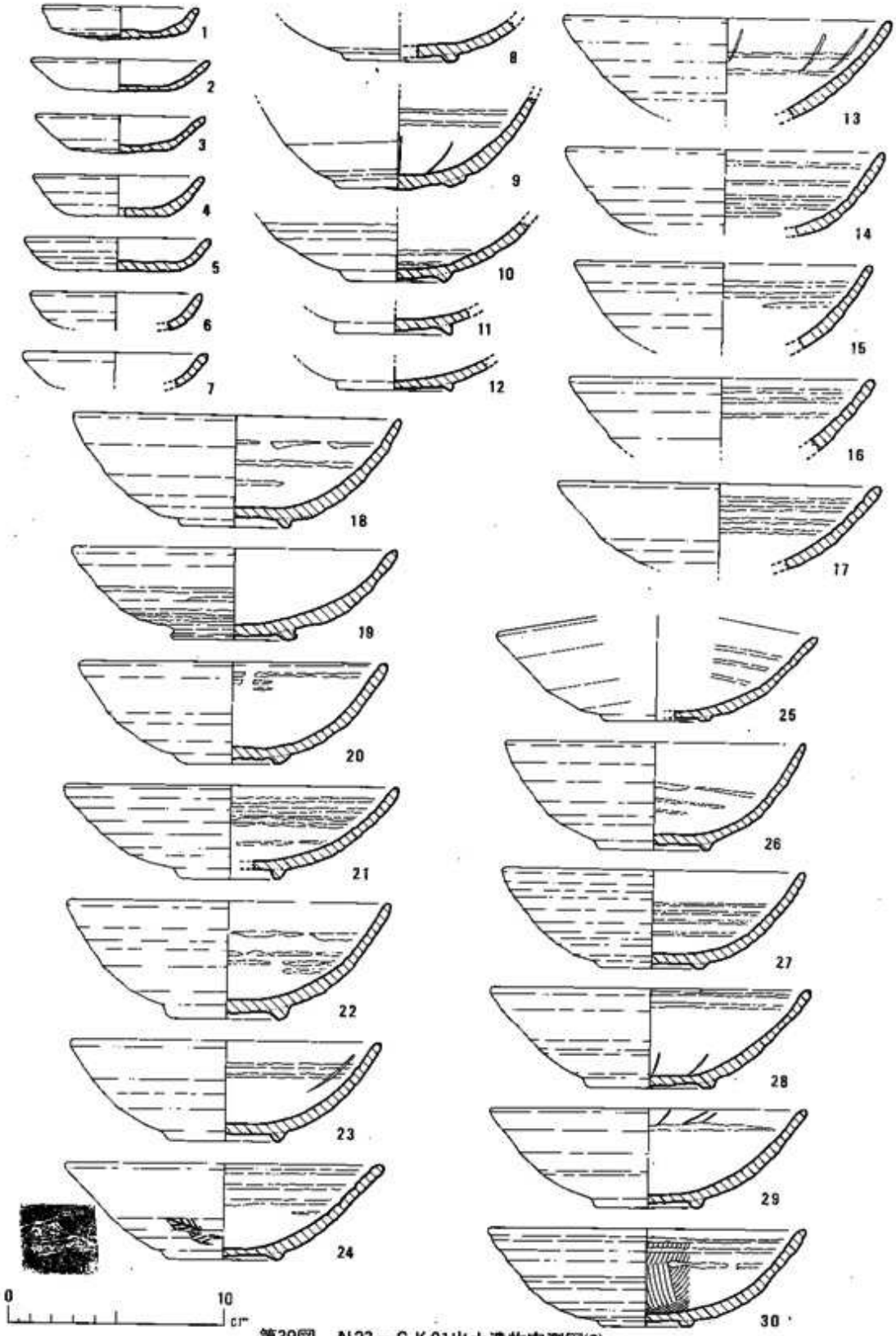
器種構成は，瓦質土器，土師器の椀・杯・小皿を主体とし，土師器すり鉢・鉢・土鍋・壺，瓦質土器すり鉢・鉢・壺，須恵器甕等の大型器種も少量ながら含まれている。また，竜泉窯系と考えられる青磁椀の高台部分（第48図4）を1点検出している。

個体数を底部の出土点数でみていくと，瓦質土器では椀が300個体以上を数え，小皿が10数個体であった。一方，土師器は，杯が250個体以上，小皿が150個体余である。土師器椀として報告した少量の土器については，後述のように若干問題を残している。遺物は細片が多く，ほとんどが本来の半分にも復原できなかったり，口縁部の小破片も多量にあることから，実際の個体数は上にあげた数値を大幅に上回るものと想像される。

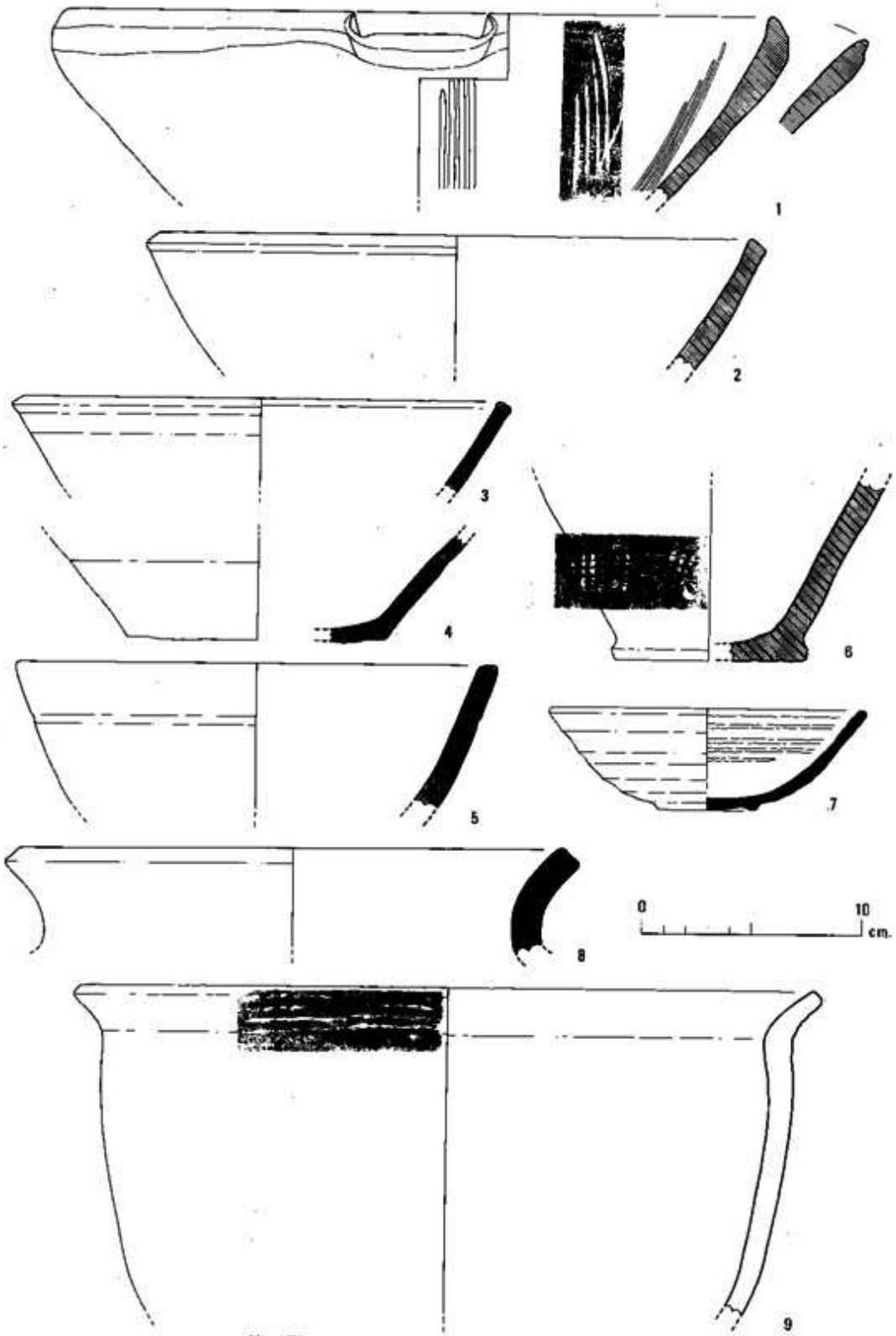
土師器小皿は，「く」字形に浅く立ちあがるものが一般的であり，器壁が厚いもの（第38図1～3），薄いもの（第38図4）の二種類に分けられる。しかし，3のように底部が特に肥厚するものもみられるなど，画一化されたものではない。これらの多くは，口径8cm弱～9cm弱のあいだに集中する。少数例としては，器壁が厚く，口径の大きい浅いもの（第38図5）が認められる。また，5と同じタイプの皿部に脚が付いていたであろうと思われるもの（第38図6）が，土坑最上面より，伏せたかたちで出土した。中央が穿孔された特異なものである。土師器杯（第38図7・8）は，形態の変化に乏しく，内外面とも回転ナデ調整を施している。土師器椀（第38図9～12・16）は，内面回転ナデ調整後に凹凸を消すように回転ヘラ磨きを施し，さらに不定方向のナデによって仕上げているものがみられる。これらは瓦質土器椀と手法，形態が酷似し，一般的な土師器よりやや硬質のものを含むなど，むしろ瓦質土器椀の範疇で考えるべき要素が多い。高台は粗雑な貼り付け高台がほとんどであるが，1点だけ断面四角形の丁寧なつくりのもの（第38図16）がみられる。内外面あるいは片面が黒灰色を呈し，黒色土器の可能性も考えられる土器（第38図13～15・17～20）が，土師器全体の2％程度含まれている。これらの土器は，形態・技法ともに変化に富んでおり，直線状の条痕が，底部内面中央を中心に放射状



第38図　N23－SK01出土遺物実測図(1)



第39図　N23－ＳＫ01出土遺物実測図(2)



第40図　N23－ＳＫ01出土遺物実測図(3)

に施されたまま残っているもの（第38図20）もある。これは，刷毛目の起点となった工具の端部が刻まれたものと考えられる。緩い稜をもって外方に張り出した特異な高台を持っている。

瓦質土器小皿の出土は少量である。形態的には，土師器小皿と傾向を異にし，器壁が厚く，丸味を帯びたもの（第39図4～7）が多い。口縁周囲に認められる黒っぽい部分は，内外面にはっきりみられるもの（第39図2・3・5），外面のみに薄くみられるもの（6・7），全くみられないもの（1・4）がある。瓦質土器椀（第39図8～30）は，外面回転ナデ調整，内面回転ナデ調整後に回転ヘラ磨き調整，さらに一定方向あるいは不定方向のナデを施すものが多数を占める。相対的に少数ながら，最終的な仕上げは刷毛目調整によるものもある。高台は，断面三角形で端部がシャープなもの（10～12），端部が外反ぎみに終わっているもの（18・19），断面三角形で端部は丸く内彎ぎみのもの（20～24），断面が四角形に近いもの（8・9・25～30）等に分けられるが，全般的に粗雑なつくりであり，特に形態を意識したものとは考えられない。口縁をまわる帯状の黒っぽい部分は，大半の土器に観察できるが，内面のみに薄くみられるもの（15），全くみられないもの（26・28・29）もある。

須恵器椀（第40図7）は，この土坑においては少量であったが出土した。技法・形態ともに一般的な瓦質土器椀とかわるところがない。これは，さきにあげた土師器椀同様，焼成時における火回り状態に起因するものと考えられ，偶然須恵器の焼きあがりを呈した可能性がある。

当土坑における椀の器高指数平均値は，土師器29.6（1点のみ），黒色土器の可能性のある土器29.8（4点の平均値），瓦質土器29.9（12点の平均値），須恵器31.3（1点のみ）と一応安定した数値を示すが，瓦質土器は25.2～34.7，黒色土器の可能性のある土器は，1点が24.7，他は30を越すなどの多少のバラつきが認められる。器高指数については昨年度調査の資料検討によっても，新しいものほど低くなるという顕著な傾向が示されている。ここでもほぼ安定した数値をとることや，高台のつくりが不統一ながら，低く極めて雑であるという共通の要素が認められることから，当遺跡における一連の同器種のなかでも比較的新しいグループに属するものと考えられる。

土器以外の遺物としては，灰層下の良質な粘質土層（第3層）より，植物遺体各種※とヘラ状竹製品（第52図）が出土している。

※　植物遺体は，10種類，計400個余りを検出した。ウリ科に属するものが大半を占め，これらはマクワウリ，キュウリの2種類に分類できる。いずれも，現在栽培されているものよりは，ひとまわり小さい祖先型とみなされる。野菜類としては他にナスの種子が少量含まれていた。また，小梅3個，ユウガオの種子数個と，未同定ではあるが5種類におよぶ雑草の種子が混入していた。穀物では唯一，ヤポニカ型の稲一粒が出土した。これらの植物遺体については，香川大学農学部　水暮　秩教授に御教示いただいた。ご多忙のなかを快くおひきうけくださったことに感謝したい。

(2) 溝状遺構出土土器

S16－S D02出土土器　（第41図1～5）

土師器，瓦質土器を検出した。

土師器は小皿と杯があり，小皿2点，杯1点を図化した。小皿は二形態あり，器壁が薄く浅いもの（第41図1）と器壁が厚く深いもの（第41図2）に分けられる。いずれもナデによって調整している。皿は全体的に丸味をもっており，赤褐色を呈している。底部より体部にいたる部分には明確な稜線は認められない。器種の内外面に数本の稜線を見る。底部外面には明瞭な板目状圧痕を残す。（第41図4）

瓦質土器は小皿と椀を図化した。小皿は，軟質のいわゆる瓦質土器の状態を呈している。口縁上端部は，直線状に内傾させておわっている（第41図3）。椀は，硬質の瓦質土器である。体部外面をナデによって仕上げている。内面は内底部より，体部の上半までを粗い刷毛状の工具によって調整している。通例の瓦質土器椀には，回転ヘラ磨きが内外面にみられるが，この土器にはない。口縁部の内外周は黒色を帯びている（第41図5）。

S17－S D02出土土器　（図版第24，第41図6～12）

土師器と瓦質土器を検出した。

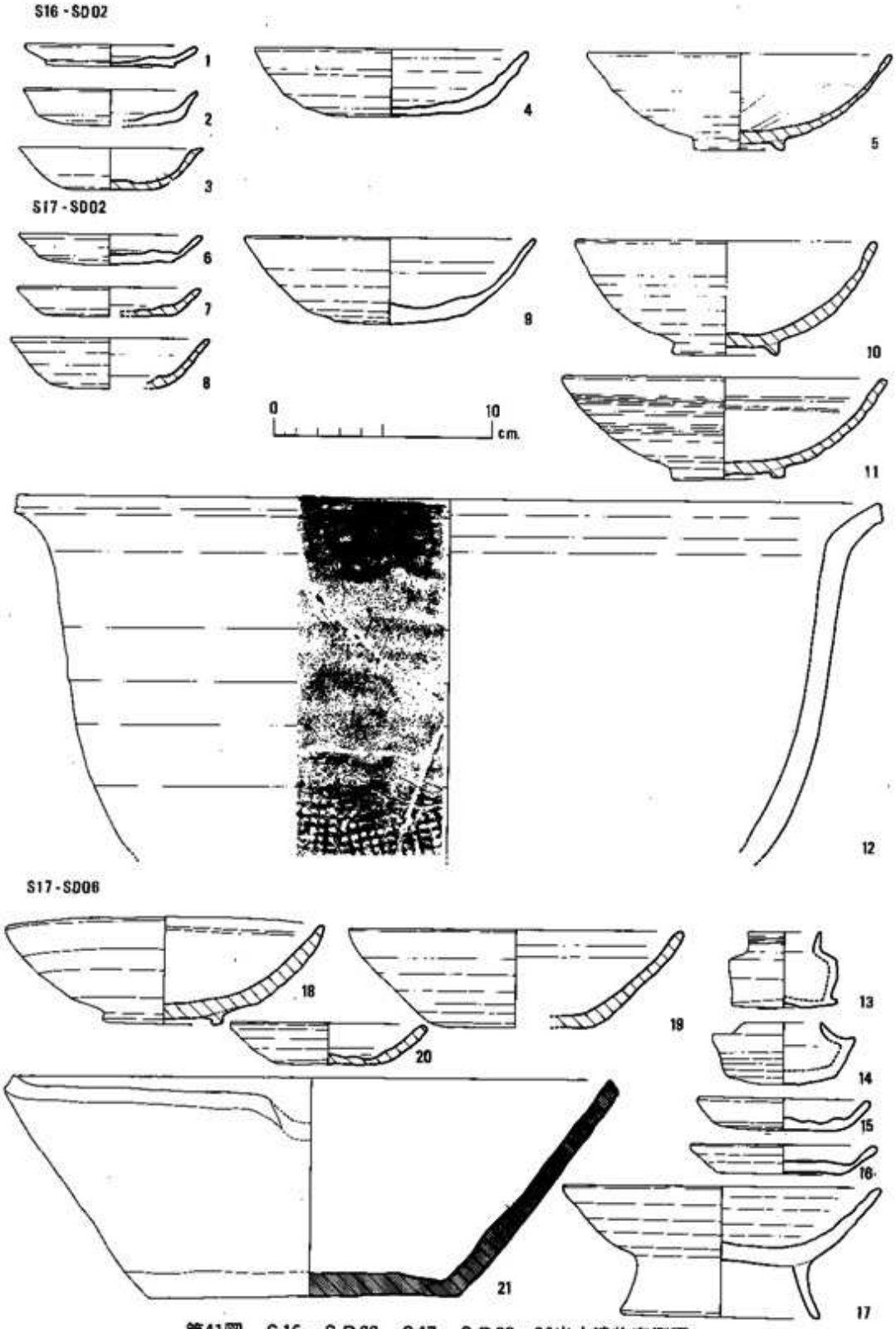
土師器は小皿と杯がある。小皿は，やや彎曲した平底状を呈し，なだらかな曲線を描いて立ち上り，体部途中より外反し，やや肥厚させた口縁部にいたる。ナデにより調整しているのだろう（第41図6）。杯は，全体的に丸味をおびている。直径8.0cmの丸底より，内彎して立ち上り，体部上半で外反して口縁にいたる（第41図9）。

瓦質土器は，小皿と椀がある。椀10は焼成が良好な土器であるが，土師器のような赤黄色を呈している。鈍い断面三角形の貼り付け高台をもち，内彎気味に口縁部にいたっている。本来，瓦質土器を意図したものが，焼成の段階で，灰色の土器にならなかったものと考えられる。11は器壁に回転ヘラ磨きを行なわない。

S17－S D06出土土器　（図版第24，第41図13～21）

土師器と瓦質土器を検出した。多量の土器を出土している。土師器は，5点を図化した。13・14は小型品である。14は小型羽釜に類似した形態を示し，底部外面に煤が付着している。小皿は比較的深いもの15と，浅いもの16に分けられる。量的には16の形態をとるものが多い。17は杯に脚を貼りつけた有脚杯である。類例は少ない。高さ2.5cmの脚は下端に向うに従って外に踏み出す。形態より見て，底部と体部の間に明確な稜線をもつ杯であろう。

瓦質土器は杯・椀と軟質の瓦質土器鉢・小皿がある。瓦質土器杯19は，現在のところ出土例が少なく，判断する材料を欠くが椀と同様の調整をしている。体部外面はナデののち，回転ヘラ磨きを施している。器形は直径約8cmの平底より，明確な稜線をもって鋭く立ち上って口縁部にいたる。18は椀である。粗雑な貼り付け高台をもっている。器壁内外面には明瞭な調整痕が認められないが，ナデによって仕上げているようである。内面全体と口縁外周が黒色をおびている。軟質の瓦質土器小皿20は胎土が橙黄色を呈している。ナデ痕が認められる。やや深いものであり，また15・16の土師器小皿とも形態的に異なる。21は片口を有するこね鉢である。



第41図　S16－SD02，S17－SD02・06出土遺物実測図

N20－S D06出土土器　（図版第24，第42図1～11）

土師器，黒色土器，瓦質土器を出土している。

土師器には小皿・杯・椀がある。小皿は，二形態に分かれる。1・2は比較的浅く，器壁は薄い。明確な平底をつくり，やや外反気味に立ち上る。3・4は深く，器壁は分厚である。ただし，3は淡茶褐色を呈しており，やや焼成がほかの小皿とは違うようである。また，内底中心が隆起している。底部外面には，ほかの小皿にみられないヘラ切り状の条痕をとどめている。杯は2点を図化した。二形態に分かれる。底部は分厚であるが，体部が薄い5と，全体的に同じ厚さで口縁端部を丸くおさめる6がある。いずれもナデで調整している。椀は1点図化した。体部外面はナデののち，回転ヘラ磨きを行なっている。内面はナデのみの調整である。

黒色土器と考えられるものを1点図化した。8は，口縁部の内外周縁に煤が認められる。色調は黄橙色を呈している。体部外面には，回転ヘラ磨きが施されている。内面には，一部ヘラ磨きが見られるが明確ではない。現在，この種の土器は少量しかなく比較する対象を欠くが，一応黒色土器の範疇で考えておきたい。

瓦質土器と考えたものを3点図化した。9は，白灰色を呈している。端部の鋭利な貼り付け高台をもち，器壁外面をナデののち回転ヘラ磨きで調整している。内面は，部分的に不規則なヘラ磨きを行なう。乾燥時のひずみであると思われるが，土器の平面観は楕円形を呈している。10は高台の内側を含めて，器壁全体が黒灰色を呈している。しかし，胎土は白灰色である。器壁の調整は9と同じく外面をナデののち回転ヘラ磨きによって調整し，内面に不規則なヘラ磨きを施している。この土器も平面形がひずんでおり，楕円形を呈している。11は，断面が直角三角形に近いかたちの貼り付け高台をもつ。体部は，ゆるやかに内彎しながら立ち上り，口縁部にいたり丸くおさめている。体部の全面にナデののち，幅0.4cm程の回転ヘラ磨きを1cm以内の間隔でめぐらしている。内面には明瞭な調整痕はないようである。

9～11の3点の土器を瓦質土器として報告したが，通例の硬質な瓦質土器は11のみであり，9は須恵器に，10はいわゆる瓦器に近い状態を呈している。類例の増加を待って判断したい。

N20－S D02出土土器　（図版第25，第42図12～19）

土師器，瓦質土器を出土した。

土師器は，小皿と杯がある。小皿は二形態に分かれる。比較的分厚で，深さのあるもの12と薄手で浅いもの13・14がある。いずれも平底であるが，12は強く外反して口縁部にいたる。14にくらべて13は，やや口径が小さい。3点ともナデ調整している。なお，13の底部外面には細かい板目状圧痕が残っている。杯は二形態ある。全体的に分厚く，丸味をおびる16と，平底より鋭く斜め方向に立ち上るもの17がある。両者ともナデによる調整がみられる。

瓦質土器は2点を図化した。器壁外面を回転ヘラ磨きによって調整している。18の内面には顕著な調整は認められないが，19の内面には上半部に回転ヘラ磨きが，下半部には見込み部分より上半部にいたる縦方向のヘラ磨きがある。15は小壺である。胎土は，粗雑であるが堅緻に焼成されており，須恵器のような状態である。

N20－SD01出土土器　（図版第25，第42図20～34）

土師器，瓦質土器を出土している。

土師器には，小皿・杯・椀がある。小皿は，その形態が多様である。20は平底に近く，体部の立ち上りも急角度である。21は，やや丸底気味で直線的に立ち上る。22は平底で，やや丸味をもって体部にいたり，そのまま直線状に口縁部にいたる。23は平底であり，明確に体部との境をつくり，やや外反するように口縁部にいたる。24・25は浅い。各形態の中で，22・23が多い。杯は3点を図化した。28は，器壁が分厚である。直径8cmほどの平底より，ゆるやかに体部にいたり体部下半は，やや内彎気味，上半は外反気味である。内外面ともナデにより調整している。29は直径7cm前後の平底より，明確な稜線をともなって立ち上る。やや外反気味に肥厚させた口縁端部にいたる。30は，直径8cm程度の平底を呈し，体部の途中まで内彎気味に立ち上り，口縁部の近くで一度屈接して分厚な口縁部にいたる。29と基本的には同じような形態である。28・29が出土した杯の中で多数を占める。椀31は，比較的器高の低いものである。ナデによって調整されていると思われるが明確でない。

瓦質土器椀を3点図化した。32・34は，ほぼ同一の形態をとる。調整は，器壁外面にはナデののち回転ヘラ磨きを施している。内面は上半部に回転ヘラ磨きを，また内底部より上半部にかけては不規則なヘラ磨きを行なっている。32は，やや青灰色を呈しており，高台内部は灰白色である。33の形態・技法は，32・34とほとんどかわらないが，器壁の色が灰白色を呈する。27の瓦質土器小皿としたものは，器壁内外面の色が黒灰色に混じって黄橙色を呈している。土師器の中で考える余地があるならば，黒色土器とするべきかもしれない。出土例が少ないため，今回は瓦質土器として報告しておく。

N20－SD03出土土器　（図版第26，第43図1～23）

土師器，瓦質土器を中心に検出した。

土師器は，小皿・杯・椀がある。小皿は多数出土したが，おおむね5形態に分けられる。4は，平底より比較的，鋭角に立ち上る。6・7は，やや丸味をもった平底より外反気味に立ち上る。5・9は平底より，やや外反気味に立ち上る。8は，器壁がやや分厚で，浅い。出土量では，5の形態が多い。杯は2形態に分かれる。13・14は，口径14cm程であり，一直線に斜め方向に立ち上り，丸くおさめた口縁部にいたる。15は，平底より丸味をもって体部にいたり，外反して口縁部にいたる。量は13・14の形態のものが多数を占める。16の椀は器壁外面に，わずかに回転ヘラ磨きを残す。

17・21の2点を黒色土器の範疇で考えている。いずれも体部外面をナデののち，回転ヘラ磨きで調整している。21の内面には，内底部まで不規則なヘラ磨きがある。21の内外両面および高台内部には黒色の煤が付着しており，黒色土器B類と呼ぶべきものであろう。17の外面も一部，高台付近まで煤が付着しているが，大部分は上半部でおわっている。

瓦質土器19は，固く焼きしまった椀である。器壁外面には，幅0.5cmほどの回転ヘラ磨きを，1cm間隔程度で逆時計まわりに巡らしている。内面は，その上半部を回転ヘラ磨き，下半部を

縦方向の不規則なヘラ磨きで調整している。20は瓦質土器の色調を呈するが，外面の一部分に，黒色土器のような状況を示す箇所が認められる。今回は，瓦質土器と考えておきたい。18は内外両面とも，灰黒色を呈する皿である。胎土に微砂粒を多く含んでいる。全面をナデ調整している。黒色土器の可能性もあるが類例が少ないため不明であり，今回は瓦質土器の範疇で報告しておく。

N20－S D05出土土器　　(図版第27，第43図24～27)

土師器と瓦質土器を中心としている。

土師器小皿は，2形態に分けられる。24は，薄く仕上げられており鋭く見える。

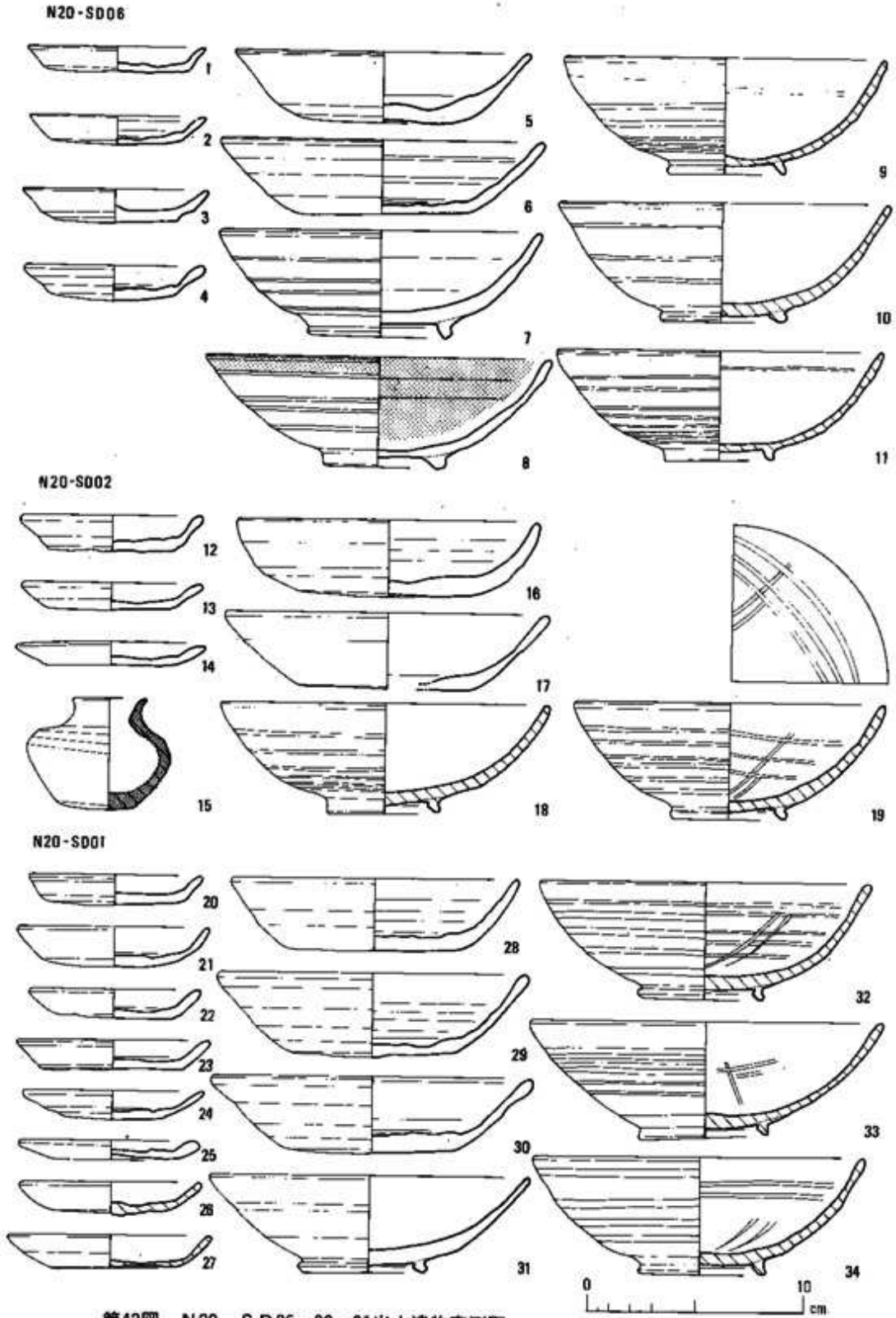
瓦質土器椀27は，焼成が良好で堅緻である。杯26は，胎土に微砂粒を含み，N20－S D03の杯（第43図18）に類似する。硬質の瓦質土器とは，胎土・焼成とも異なるが，良好な類例が少ないため，今回は瓦質土器として報告しておく。

N20－S D04出土土器　　(図版第27，第44図1～25)

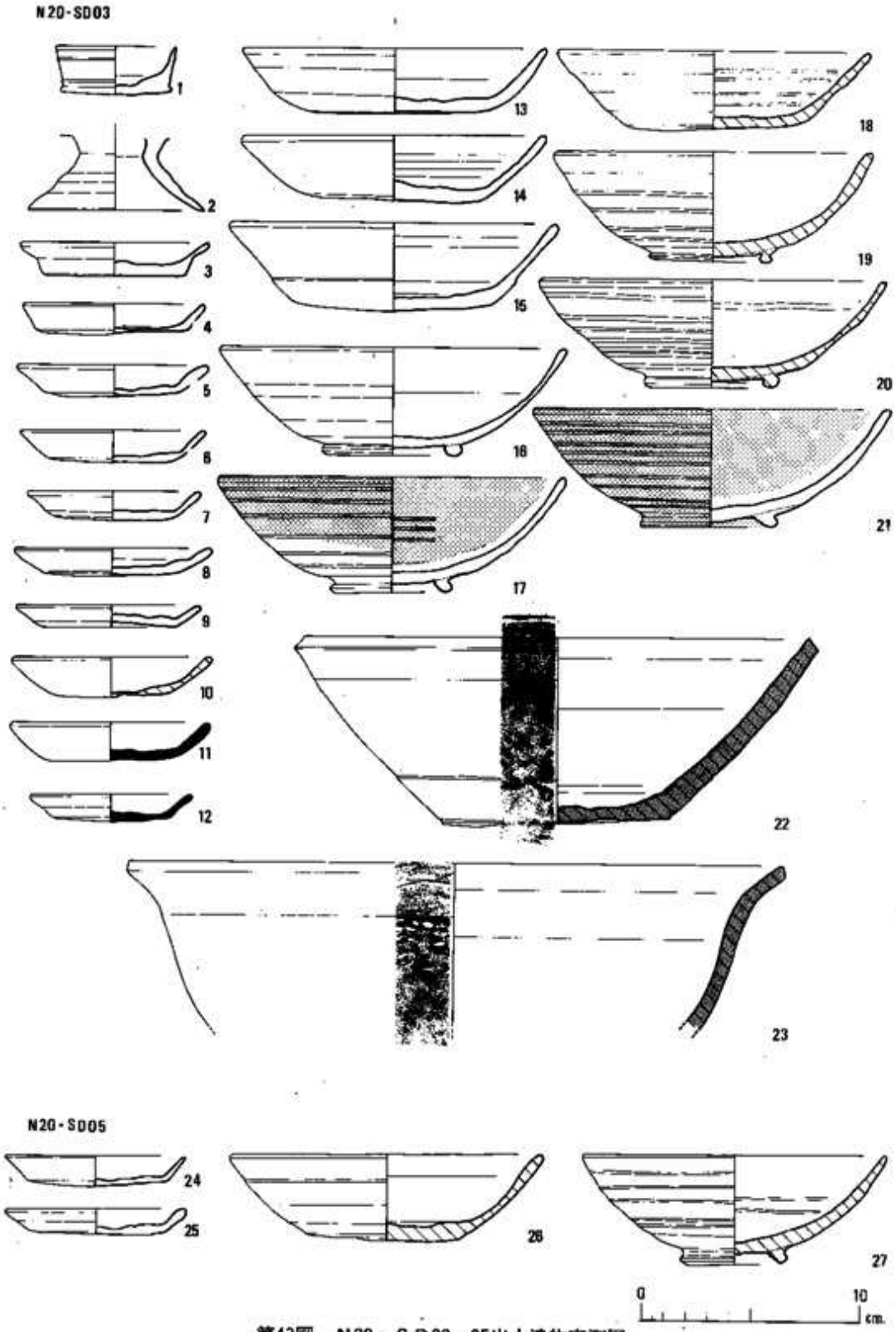
土師器，瓦質土器，須恵器を検出した。

土師器には，小皿・杯・椀がある。小皿は多数出土しており，そのうち7点を図化したが，4形態に分かれる。1・2の平底より鋭く立ち上り，体部上半部で大きく外方に屈折するもの，3・4のやや丸味をもった平底より，外反しながら立ち上るもの，5・6の体部の外傾が強いため，底部が小さく見えるもの，7の扁平なものの4形態である。量的には5・6の形態が多い。7の形態は少量である。杯は4点を図化した。11・13は，やや上げ底気味の底部をもち，内彎気味に肥厚した口縁端部にいたる。ナデ調整を行なっている。12は，直径6cm程度の平坦で明確な底部をもつ。体部は，内彎しながら伸びている。14の形態は類例が少ない。いわゆる切り高台のような底部をもち，非常に粗雑なつくりをしている。圧倒的に11・13と12の形態が多数を占めている。土師器椀と考えられるもの1点を図化した(第44図15)。通例の土師器に比較して，胎土が粗雑で器壁があれている。土師器を意図した土器ではあろうがほかの土師器とは異なると思える。類似した土器はS20－S D01出土のもの（第45図12）がある。

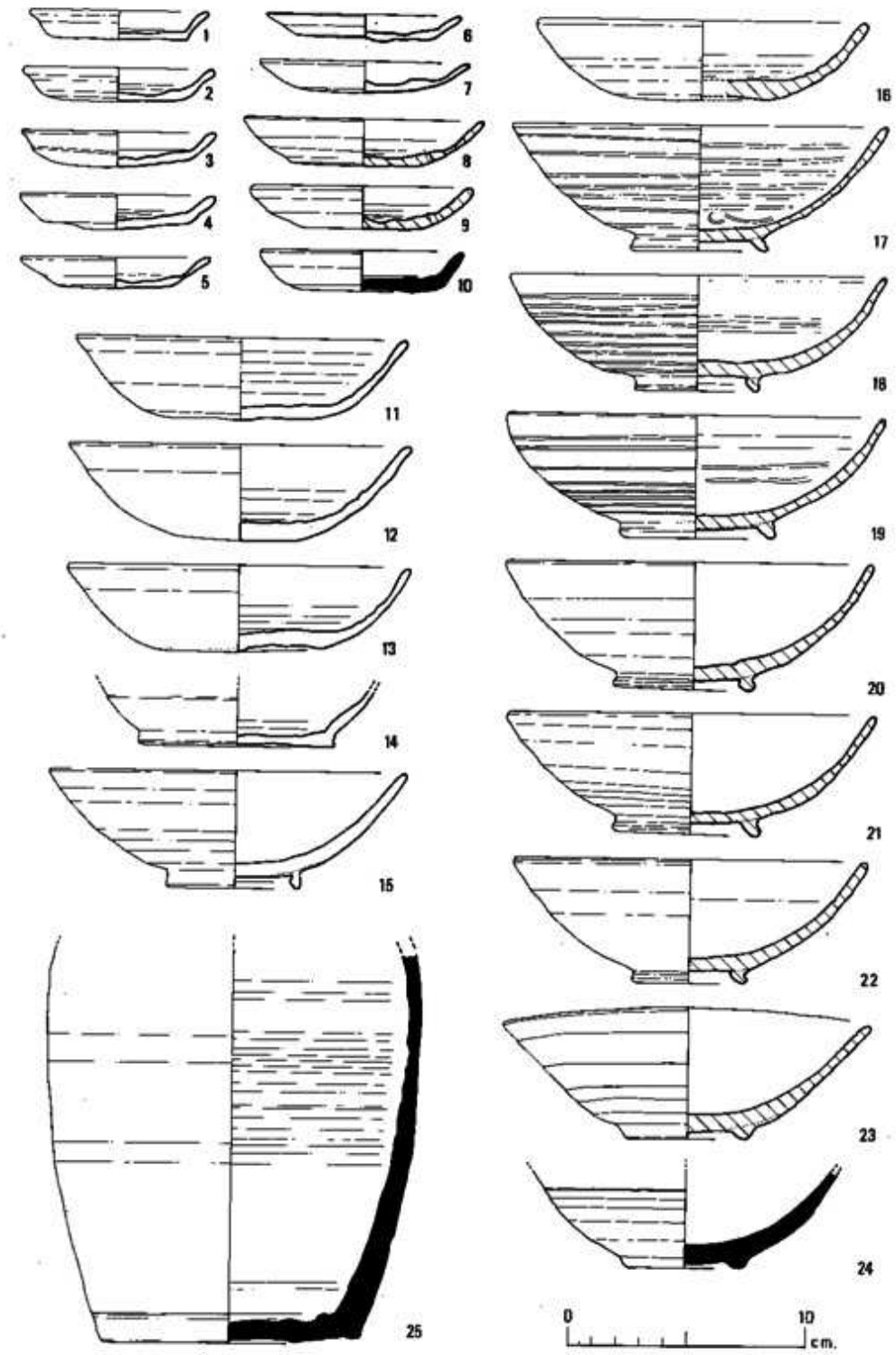
瓦質土器は椀を中心に出土している。8点を図化した。そのうち17・18は硬質で灰色を呈した土器である。器壁外面には，幅0.3cmほどの逆時計まわりの回転ヘラ磨き，内面の下半部と見込みの部分には不規則なヘラ磨きを施している。19・20・21は，17・18と同じように器壁外面に回転ヘラ磨き，内面の上半部に回転ヘラ磨き，下半部に不規則なヘラ磨きを行なっている。調整技法上は異ならないと思われるが，部分的に煤の付着が認められる。その範疇では黒色土器の可能性もあるが，判断する材料に欠ける。22は，一部にヘラ磨きのあとを残しているが，ほとんど調整されていない土器である。胎土は灰白色を呈する。しかし，高台の内側を除いては，全て黒灰色を呈している。類例は，N20－S D06にある（第42図10)。23・24は，非常に固く焼かれた土器である。須恵器のような状態を呈している。貼り付けただけのような粗雑で低い高台に，分厚な器壁をもち，平面形が楕円形にひずんでいる。いずれにも，ヘラ磨きは認められない。



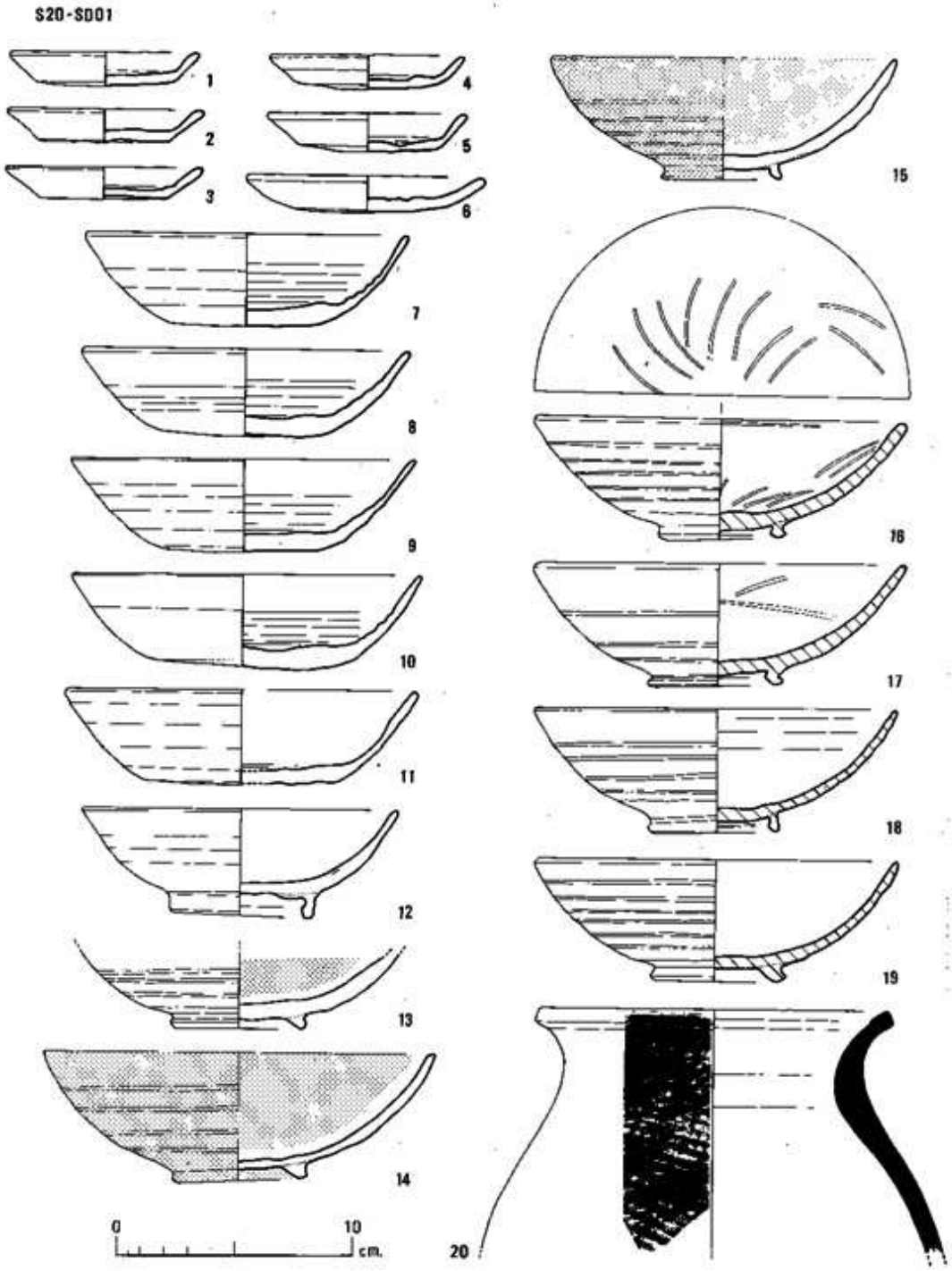
第42図　N20－SD06・02・01出土遺物実測図



第43図　N20－SD03・05出土遺物実測図



第44図　N20－ＳＤ04出土遺物実測図



第45図　S20－SD01出土遺物実測図

通例の瓦質土器と判断できるものは17・18の椀であり，そのほかは黒色土器，須恵器の可能性があるが，類似が乏しいため即断するのは困難である。瓦質土器小皿を2点図化した。瓦質土器椀と同じ焼成の土器であり，ヘラ磨きが認められる。

須恵器小皿は粗いナデによって仕上げている。

S20－SD01出土土器　　(図版第28，第45図1～20)

土師器，黒色土器，瓦質土器，須恵器を検出している。

土師器小皿は，3形態に分かれる。1・2・3・4は，平底あるいは，それに近い底部より明確な稜線をつくってやや外反する体部をもつ。5は同形態であるが，器高がやや高い。6は，直径10cmをこえる大きめのものである。1～4の形態の小皿が大多数である。杯は5点を図化した。3形態に分かれる。7・8・9は，直径6cm程の平底より少し内彎しながら立ち上っている。口縁端部は，やや厚めで丸くおさめている。10は，底径が大きい。11は，大きめの平底をもち，鋭く立ち上って口縁部にいたる。出土量は圧倒的に7～9の形態が多い。椀は1点を図化した。器高，口径ともに小さな土器である。高台は高く，粗雑な貼り付け高台である。

黒色土器は，13・14・15であるが，13は内面のみ黒色を呈している。体部下半の破片であるため全体を把握できないが，体部外面の下半は灰白色を呈している。回転ヘラ磨きを行なっている。14・15は，内外両面を黒くいぶすことを意図している。体部外面は逆時計まわりに回転ヘラ磨きを施し，内面にも不規則なヘラ磨き状の暗文が認められる。

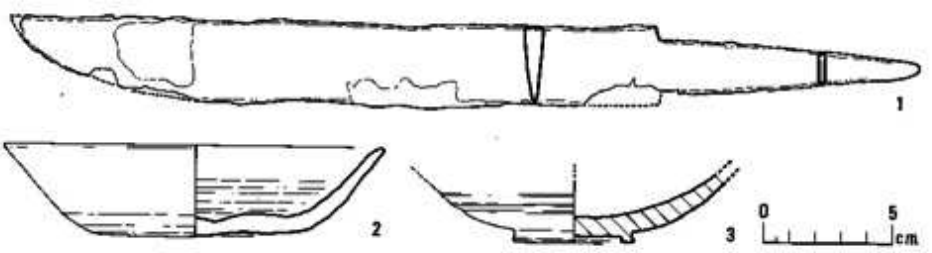
瓦質土器は，椀が出土している。4点を図化した。いずれも，直径の小さな高台をもつ。体部外面は回転ヘラ磨き，内面は不規則なヘラ磨きを施す。ただし，17の土器は淡黄色を呈している。形態・技法より瓦質土器の焼成不良のものと考えたが，高台の形態や胎土が12の土師器椀と類似する。そのため，土師器の可能性もある。

(3) 土壙墓出土土器

N17－ST01出土土器　　(図版第31，第46図2・3)

土壙墓の副葬品として土師器杯を1点，検出している。胎土は赤褐色を呈する。器壁表面は，濁黄色を呈している。磨耗が著しいが，ナデが部分的にみられる。

墓壙の底より20cm上で器壁表面が黒灰色を呈する土器椀を一点，検出した。胎土は白灰色を呈している。調整痕は認められない。土器の類例としては，N20－SD06で出土したもの（第42図10）がある。硬質の瓦質土器の範疇では考えられない。



第46図　N17－ST01出土遺物実測図

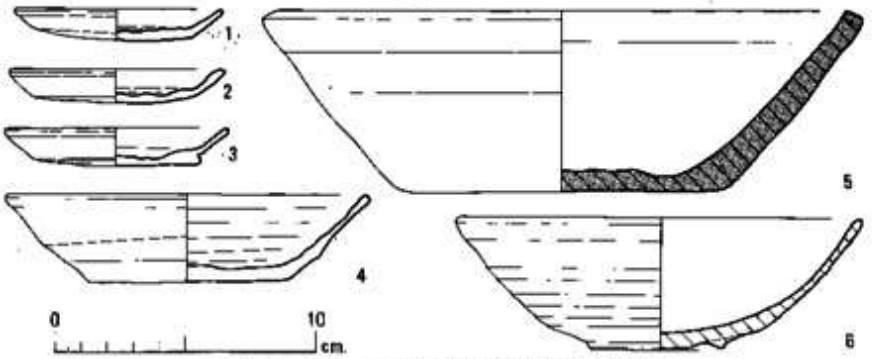
S17－SK201出土土器　（図版第31，第47図）

土師器，瓦質土器を出土した。

土師器は，小皿と杯がある。小皿を3点，図化した。口径8.0cmより8.6cm，器高は1.2cmより1.5cmの範囲である。ひずみのため規模が違うが，おおむね同一タイプである。杯は1点を図化した。直径7.7cmの明瞭な平底より2本の稜線をもって外反して立ち上る。口縁端部は肥厚する。

瓦質土器椀を1点図化した。灰色に焼きしまったもので須恵器のようにみえる。口縁外周が黒色を帯びている。器壁外面は横ナデ，内面は縦方向のナデを残している。

黒灰色を呈する鉢を検出した。焼成が良いために黒色土器のようにみえる。胎土は，土師器にみられる赤色を呈している。ナデによって調整している。黒色土器の大型品の類例がないため，軟質の瓦質土器の範疇で考えておきたい。



第47図　S17－SK201土坑出土遺物実測図

2　輸　入　磁　器

(1)　青　　磁　（図版第32，第48図）

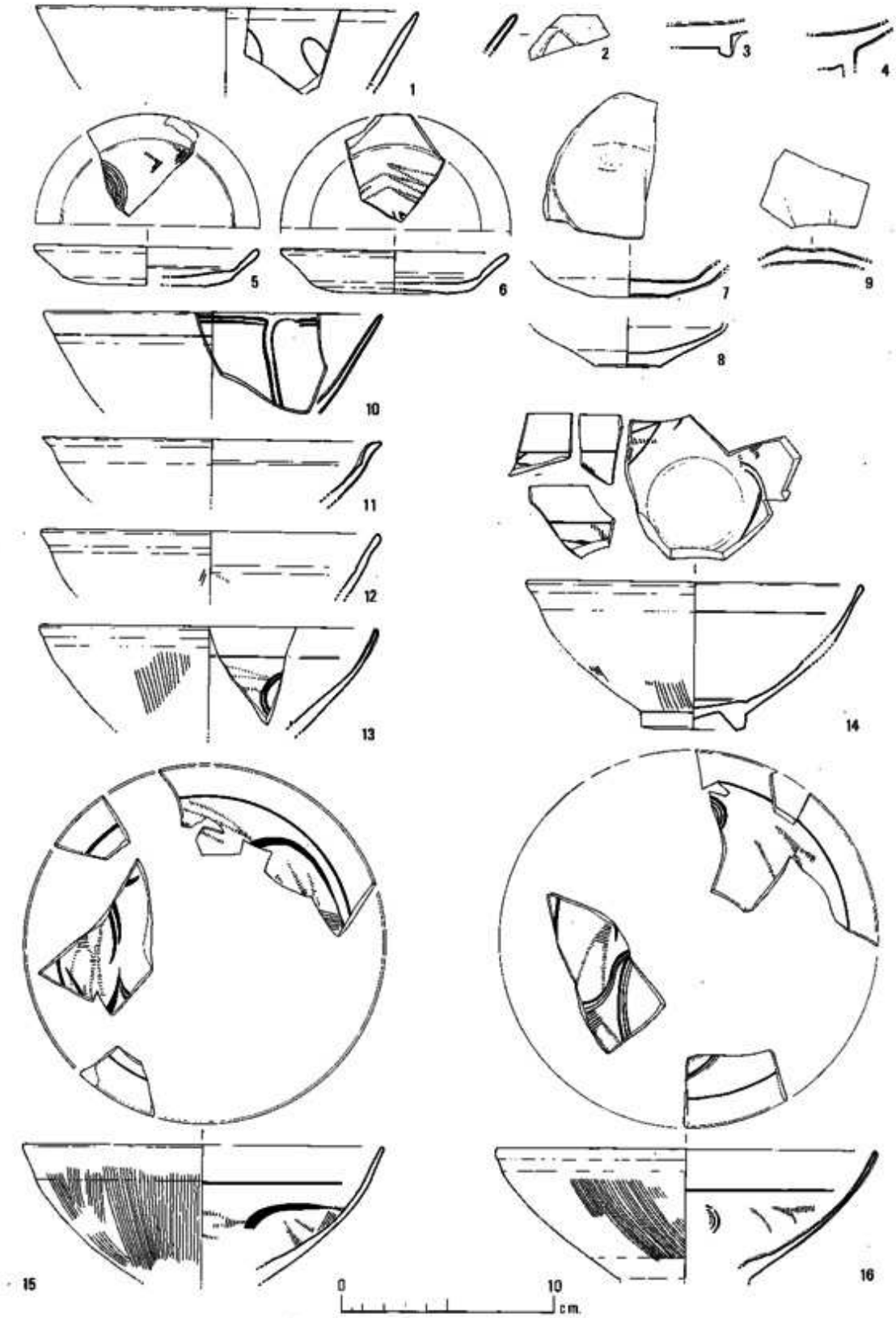
17区を中心とする地区と，20区を中心とする地区で検出した。接合した破片は1片として数えて，17区を中心とした地区で同安窯系と考えられるもの23片，竜泉窯系と考えられるもの16片，不明1片であり，また20区を中心とした地区では，同安窯系と考えられるもの31片，竜泉窯系と考えられるもの5片，不明2片である。皿と椀を出土している。

皿　（第48図5～8）

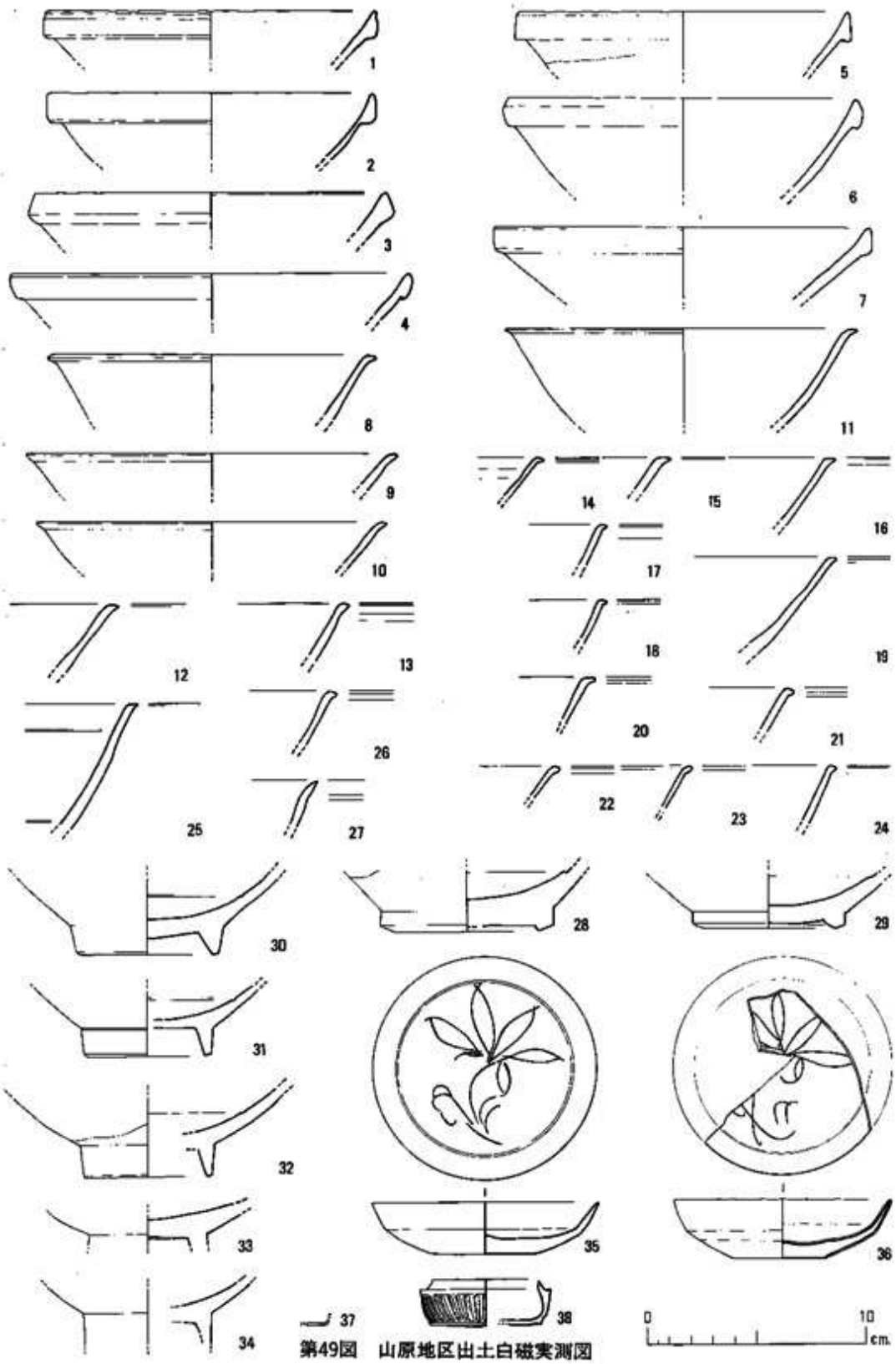
4点出土した。5.6は櫛描き文を施したものであり，文様が少々読みとりにくい。淡灰色の胎土をもっている。6の釉は光沢を失っている。底部のみ露胎となっている。20区を中心とした地区で出土している。同安窯系のものと思われる。7.8は17区で検出している。体部の中位で屈曲する。7は内底部に削り出しの文様があるが，読みとれない。底部のみ露胎となっている。8は体部中位の屈曲する部分までの破片である。下半と底部は露胎となっている。白磁皿の可能性もあるが，緑色の釉がかかっているため，青磁としておく。

椀　（第48図1～4，9～16）

14～16は，全形がほぼ推定できるものである。櫛描き文と，ヘラ状の工具による文様を刻し



第48図　山原地区出土青磁実測図



第49図　山原地区出土白磁実測図

ている。台形状の分厚で高い高台を削り出している。器壁外面には，櫛描き文を有す。内彎気味に立ち上り，口縁部直下で外反する。内面は，櫛描き文とヘラ状工具による文様を施しており，体部上半と内底部にそれぞれ一条の沈線を刻している。

なお，11は小破片のため，下半部が復原できなかったが，小椀の可能性もある。また，4は，S23－SK01より出土した。

(2) 白　　磁　（図版第32，第49図）

17区と20区の遺構，およびその上層にある包含層を中心として多数，出土している。接合したものは1片として数えたが，17区を中心とし18片，20区を中心として56片の計74片を出土している。皿・椀・合子がある。

皿　（第49図35・36）

2点出土した。同じような皿である。35は底径4.7cm，器高2.4cm，36は底径4.2cm，器高2.7cm，直径はいずれも10cmである。胎土は，黄色味をおびた濁乳色を呈し，釉は透明に近い白色である。底部外面は削りとって露胎となっている。体部上半部で屈接し，鋭い口縁部にいたる。屈接した部分の内面に沈線状の条痕をもつ。底部内面の見込み部に草花文様がある。大宰府での分類で皿Ⅷ類に相当するものであろう。

なお，35はその出土時に第34図15の土師器小皿を内部にともなっていた。

椀　（第49図1～34）

口縁部と底部の破片を図化した。口縁部は，玉縁状になるもの，折り曲げて平坦になるもの，鋭く尖るものの3タイプがある。底部は，高く削り出すもの，低いものがある。全ての内底部には，釉が遺存する。

口縁部が玉縁状を呈する破片は，おおむね白灰色の胎土をもち，透明のガラス質の釉をかけている。口径14.8～17.1cmである。

大宰府の分類で椀Ⅳ，Ⅷ類を中心とするものであろう。

合子　（第49図37・38）

2片を検出した。37は小片である。乳白色の胎土をもつ。釉は認められない。底部の破片と思われる。38は合子の$\frac{1}{6}$程度の破片である。胎土は灰白色を呈している。器壁外面には，体部にのみ青灰色の釉が認められ，受け部より上部，底部外面にはない。内部には，全面に同色の釉が認められる。

なお，体部下端に一本の沈線がある。

3　小　型　羽　釜　（図版第33，第50図1～10）

黒くいぶされた瓦質と，土師質の2種類があり，瓦質32片，土師質46片となっている。大きさを脚部で比較すれば，全体的に瓦質の方が土師質のものよりも2倍ほど大きくなっているのが特徴といえる。

胴部，脚部，蓋の各小片が出土し，胴部と脚部の接合可能なものはなかった。出土地点とし

ては遺構面からが多く，遺構出土のものは12片であり，全体の15%である。S17区の遺構面から出土したものは，35片あり，最も多い。次いで，N20の遺構面14片となっている。遺構では，S17－S B01にともなう周溝S D02・04，N20－S B01にともなう周溝S D03，N20－S B02にともなう周溝S D04から出土しているのが特徴である。

1は，脚部を欠失しているが，取付部分は丁寧にヘラで調整がほどこされている。土師質で焼成は良好であるが，底部全面が変色している。2・3はともに土師質であるが，遺存状態はあまりよくない。

4～7は脚部の破片で，4・5が土師質，6・7が瓦質である。脚部はともに，ヘラ状工具による調整がほどこされている。

8～10は，小型羽釜の蓋と考えられる。3点とも瓦質である。ともに焼成は良好である。10の裏面には，ナデによる調整が丁寧にほどこされている。

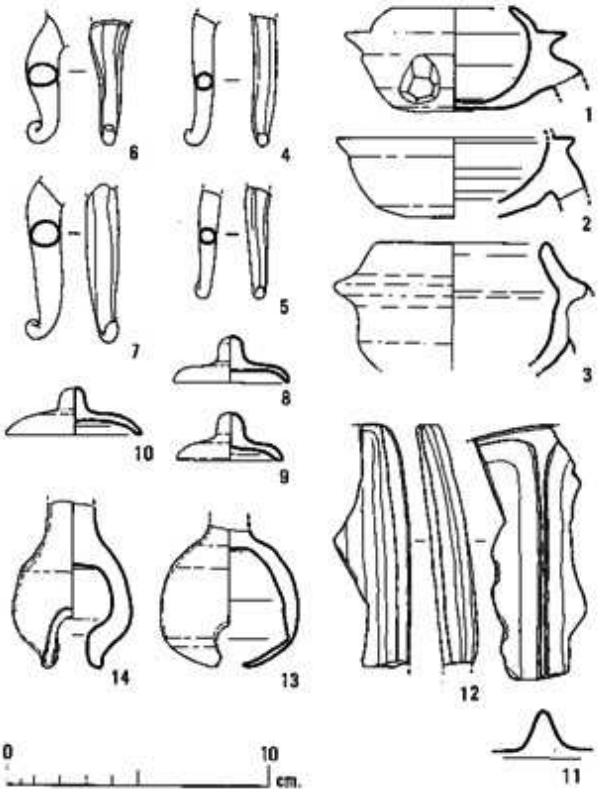
4　土　　鈴　（図版第33，第50図13・14）

今回，土鈴と思われるものは，2点出土している。13はS18の遺構面，14はS17の遺構面より出土した。いずれも土師質で，焼成は不良である。2点とも，体部内面に指頭圧痕が残っており，それからみると，下半部はあとから取り付けたものと思われる。なお，14の体部下半には，粘土で，厚く突出部分を取り付けている。また遺構面に付着していた部分が黒く変色している。2点とも表面が磨耗していて，調整は観察できないが，全体につくりは雑である。

5　硯　（図版第33，第50図11・12）

硯は，48点出土しているが個体数としては，それほど多くはないと考えられる。

瓦質と須恵質の2種類があり，瓦質が30片，須恵質が18片である。いずれも，胎土は密であり，焼成は良好である。



第50図　山原地区出土小型羽釜，土鈴，硯実測図

遺構面より38片，遺構より10片出土している。出土するグリッドで最も多いものは，N20区が18片，ついでS19E区，S20区，S17区となっている。遺構からの出土のうち8片は，N20区の土坑，溝である。

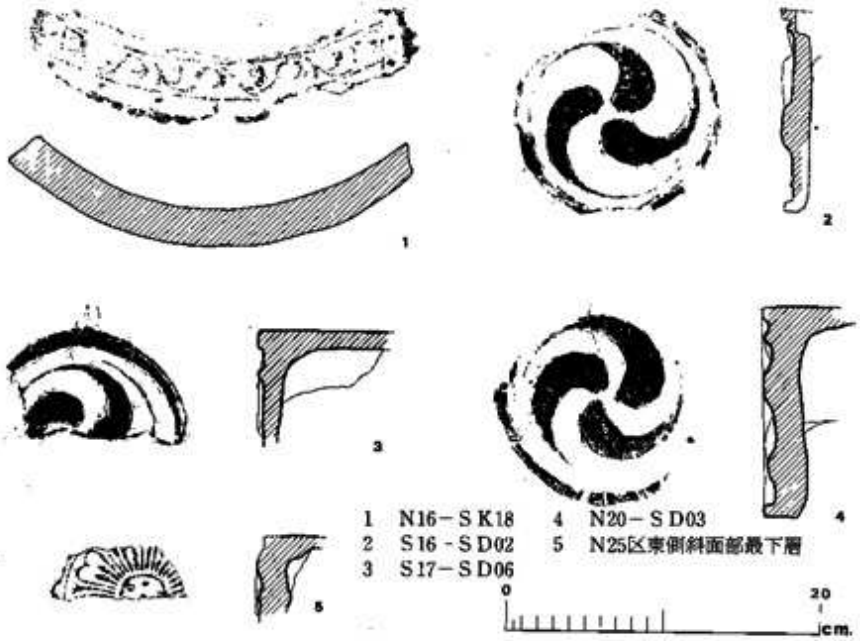
11は，N20－ＳＢ02の周溝であるＳＤ04から出土した。中心部しかなく，しかも背面が剝離している破片なので，形態に関する観察はできないが，表面はヘラ状工具で調整がほどこされており，仕上げはていねいである。瓦質で，表面は黒く，断面は灰色の二面硯である。12は，須恵質で，N20－ＳＫ19から出土した。右側面しか残存していないが，二面硯と思われる。

6　瓦　（第51図）

遺構からは，平瓦の小片７点，丸瓦７点が出土した。このうち軒先瓦は，Ｓ16－ＳＫ18の偏行唐草文平瓦（第51図１）と，Ｓ16－ＳＤ02（第51図２），Ｓ17－ＳＤ06（第51図３），N20－ＳＤ03（第51図４）の三巴文丸瓦３点である。

１は，赤褐色でやや磨耗した偏行唐草文軒平瓦であり，幅24.8cm，厚さ４cmである。中心部上縁がひずんでいる。周縁は細く底い。外区・内区を画する線は，井桁状に交叉する。外区には，左右３個，上下５個の大きな珠文を配している。内区には，左から右へ波状線が流れ，上１個，下２個の頭部が旋回する唐草を配している。

２，３，４はいずれも右巻の陽刻巴文軒丸瓦である。２は丸瓦が接続部分で剝離している。瓦当部の周縁は幅0.6cm，高さ0.3cm，巴文は薄く，表面が幾分偏平になっている。尾は長く，円周の$\frac{1}{6}$を占める。仕上げは，丁寧ではない。３は瓦当部の下半分を欠失している。丸瓦は周縁と同じ高さで接合されており，表面はヘラ磨きがほどこされている。４の瓦当部周縁は，幅0.8cm，高さ0.5cmで，巴文は厚く，先端部分は多少とがっている。尾は円周の$\frac{1}{4}$程度である。丸瓦は，周縁と同じ高さで接合されている。瓦当部，丸瓦ともに仕上げは，丁寧にほどこされている。

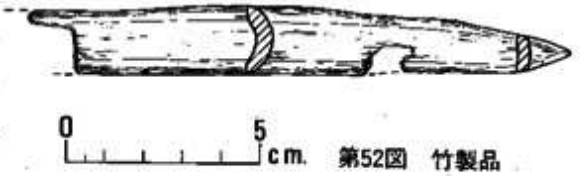


第51図　山原地区出土瓦拓影

5は，複弁八葉蓮華文であると思われる。内区中房には，1×6の蓮子を配していると考えられる。花弁と間弁を配した内区は，盛り上っており，立体感がある。花弁は外に向かって大きくふくらんだ形をしており，中には2個の子葉を配している。外区には，唐草文の一部が残存している。周縁部がほとんど欠失しているので丸瓦の取付は明確ではない。

なお，5は遺構より遊離し，N25区の東端にみられる傾斜面の最下層で検出した。

7 竹　製　品　（第52図）



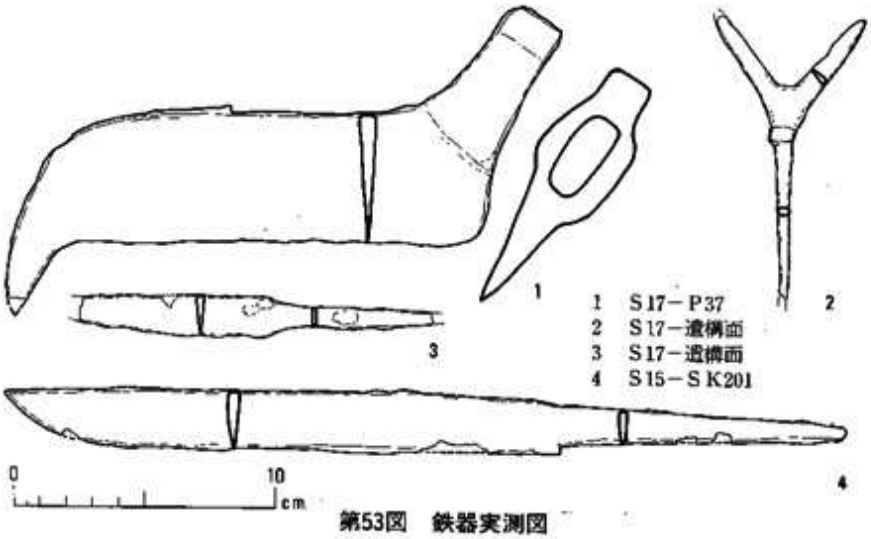
第52図　竹製品

良好な木製品の出土はないが，わずかにN23－SK01からヘラ状製品を1点検出した。基部を欠失しており，現存長14cm，最大幅1.7cmを計る。竹を素材とし，加工は，尖らせるようにした先端のみに観察される。良質の湿った粘質土層中にあったため保存は良好である。。

8 鉄　　器　（図版第33，第46図1・第53図）

鉄刀，刀子，鉄鏃，鉈鎌を検出している。

鉄刀は2本出土している（第46図1，第53図4）。第46図1はN17－ST01より出土した。刀身先端部を錆のために欠失しているが，全長34.6cmを残している。茎部の長さは10.0cmである。第53図4はS15－SK201より出土した。錆化は，それほど進んでおらず比較的，遺存状態は好い。全長32.4cmをはかる。茎部の長さは，10.0cmである。刀子は，S17遺構面で検出した。錆のために両端を欠くが現存長13.6cmを残す。鋭利な刃部が認められる（第53図3）。鉄鏃はS17の遺構面で検出した。雁又鏃である。一方の先端部と茎基部を失っている。現存長11.0cm。刃部は内面を向いている。茎の断面形は隅丸の長方形を呈している。鉈鎌と考えられるものを



第53図　鉄器実測図

S16－P09で検出した。比較的錆化が進んでいない。刃部先端を欠失するが，現存長23.7cmを残している。刃部の長さは，約17cmをはかる。秘穴の内径は，1.4×3.3cmである。形態・錆化の度合よりみて新しい時代のものの可能性もあるが，同一遺構面で検出したため報告する。

9 銭　　貨　（第54図）

2点出土した。第54図はN20区の第5層で検出した。腐食が著しく銭種は明確ではないが「□□元寶」が判読できる。

もう一点は，S24－SX01土坑より出土している。全面が錆化しており，銭種は不明である。

第54図　銭貨拓影

10 その他の遺物

(1) N・S24，S25－SD01出土遺物　（第55・56・57図）

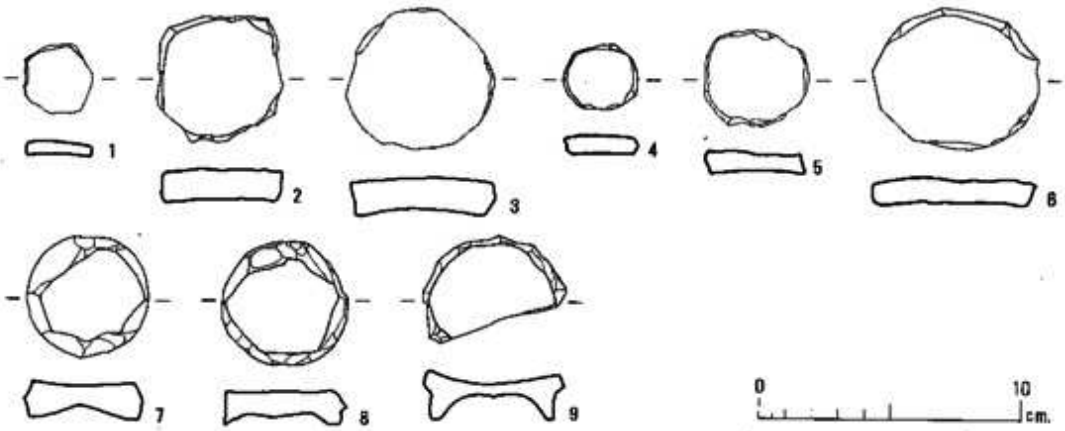
溝内は全域において，河原石の散乱がみられ，遺物の多くは河原石と混在して検出された。ほとんどが小片であり完形に復原された遺物は皆無であった。土師器，須恵器，陶器，磁器，石製品が出土した。出土点数は，土師器が最も多く，磁器が最も少ない。

円盤状土製品は，総数22点出土したが代表的な9点（第55図1～9）を図化した。須恵器1～3，土師器4～6，陶器7～9の破片を素材としており，そのうち，6は鉢の体部を，7～9は陶器の高台部を使用している。

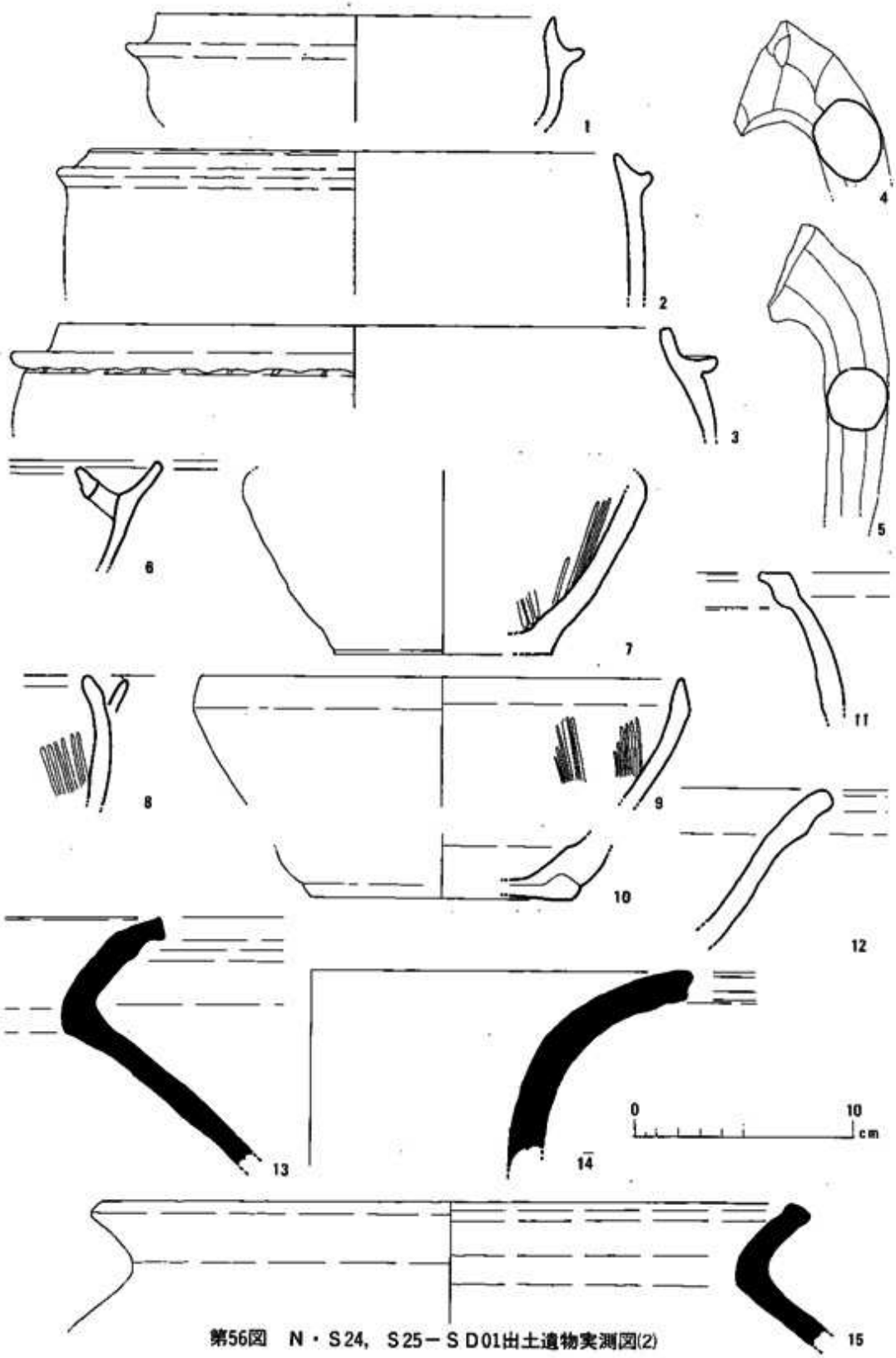
土師器は，12点（第56図1～12）を図化した。器種構成は，小皿・椀・羽釜・鍋・すり鉢・鉢であるが，小皿・椀は細片のため図化できなかった。いずれの遺物も磨耗が激しく細部の観察が困難であった。また，胎土に金雲母を含むものが数点みられた。

須恵器は，3点（第56図13～15）を図化した。3点はいずれも口径30cm以上をはかる甕の口縁部破片である。これらは，近世における混入と考えられる。

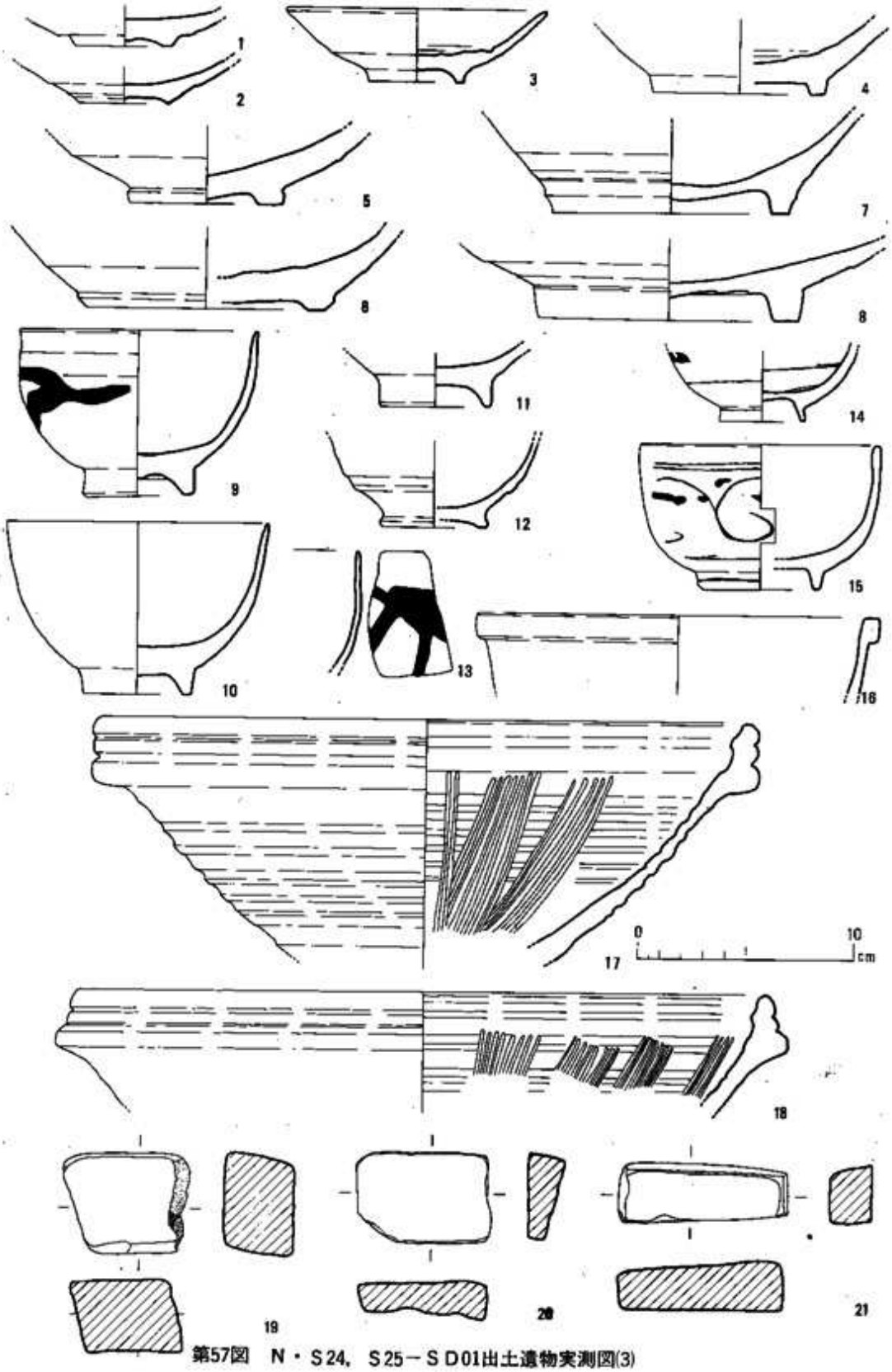
陶器は，16点（第57図1～13・16～18）を図化した。器種構成は，皿・椀・鉢・すり鉢である。皿1～8は，いずれも削り出し高台をもつ。高台径は4.2～12cmとさまざまであるが，内面



第55図　N・S24，S25－SD01出土遺物実測図(1)



第56図　N・S24，S25－SD01出土遺物実測図(2)



第57図　N・S24, S25－SD01出土遺物実測図(3)

底部が水平に近いもの1～3と，彎曲するもの4～8の二形態に分類できる。椀9～13は，京焼の流れを汲むものと思われる。なお，10は，N24区第2層出土の遺物と接合できた。鉢16は，体部が外反気味に立ち上り，口縁断面が隅丸方形を呈する。すり鉢は代表的な2点17・18を図化した。摺目は1単位7条17と8条18で両者とも単位間は狭い。17は左回りの摺目である。

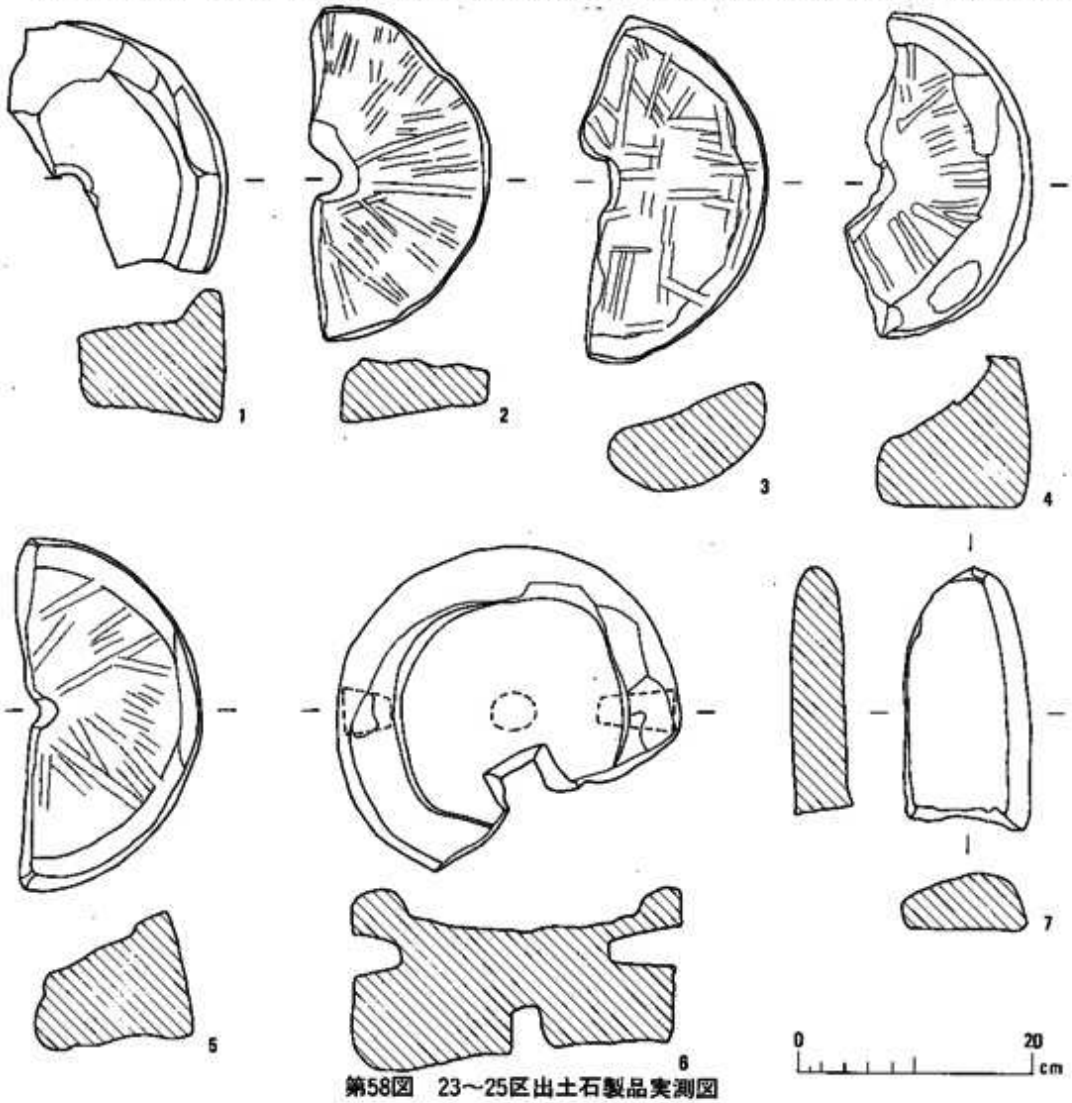
磁器は椀が大部分である。2点（第57図14・15）を図化した。ともに削り出し高台である。15は，溝東端のS25区にみられる落ち込みから検出された。

(2) 23～25区出土石製品 （第58図）

石製品は，砥石，石臼，五輪石が出土している。

砥石は，N・S24－SD01とS25東端落ち込みから出土している。溝出土の砥石（第57図19～21）は，小型の仕上げと，中仕上げの砥石と思われる。S25区東端落ち込み出土のもの（第58図7）は，河原石を素材にした大型の砥石である。

石臼は，N23～S25区にかけて14点出土したが，完形品は1点もなく，半分以上残っている



第58図 23～25区出土石製品実測図

6点（第58図1～6）を図化した。石臼の多くは，S25－SD01東端の落ち込みで，河原石と混在して出土した。1は，N23－SK01，4は，N24－SD01よりの出土である。完形の$\frac{1}{4}$以下のため図化していないが，S24－SX08からも出土している。2～5には，溝がみられるが，いずれも使用による摩耗か風化のため，はっきりしない。1は，上面形態，7は，側面穴・下面芯孔・供給口より上臼と確認できるが，他の臼は判断できない。

五輪石は，N24－SD01より水輪を1点出土した。最大径約30cm・高さ約30cmであった。風化が激しいため図化しなかった。

(3) 24区土坑出土遺物

N24・S24区で直径70cm～140cmの規模で，垂直に掘り込まれた土坑を10基検出しているが，一括して遺物を略述する。なお，S24－SX02・07・09から遺物の出土はない。

N24－SX01土坑

土坑底部より，直径約55cmの木製の桶底が出土した。桶底は，幅6～8cmの柾目板8枚を使用して作られていた。土器類の検出はなかった。

S24－SX01土坑　（60図1・2）

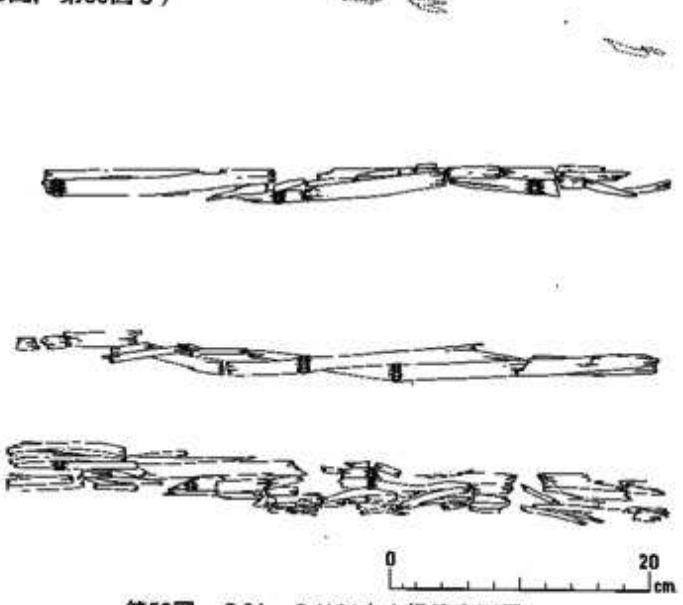
土坑底部より，直径約70cmの木製の桶の残骸が検出された。幅8～10cmの柾目板の側板が桶の内側に散乱していた。土器類は，土師器鉢・椀，須恵器壺の細片を少量検出したが，図化できたのは，須恵器壺底部，土師器鉢の各1点である。古銭を一枚検出したが，腐食が激しいために銭種は確認できなかった。

S24－SX03土坑

底部より，S24－SX01においてみられた桶の側板と同様な木片を検出した。土器類は，土師器椀・羽釜，須恵器甕，平瓦の細片であり図化できなかった。

S24－SX04土坑　（第59図，第60図3）

土坑内に，底部直径73cm，側板残高45cmの桶が据え置かれていた。桶は底板8枚，側板31枚を使用し，箍は竹3本を寄り合わせて作られる。底部近くに2本，上部に向かって10～15cm間隔で3ヶ所各1本づつ巻かれており計5本の箍が数えられた。底板は，幅8～10cmの柾目板が使用され，左右側面に2ヶ所づつ穴を開け，木釘で底板を連結することにより強度を増している。側板には，幅6～10cmの柾



第59図　S24－SX04出土桶箍実測図

目板が使用されており，底板と比べると薄い。土器類は，土師器椀の細片と磁器皿(第60図３)が出土した。磁器椀は，見込み部分の釉を環状に削りとっている。

S24－SX05土坑

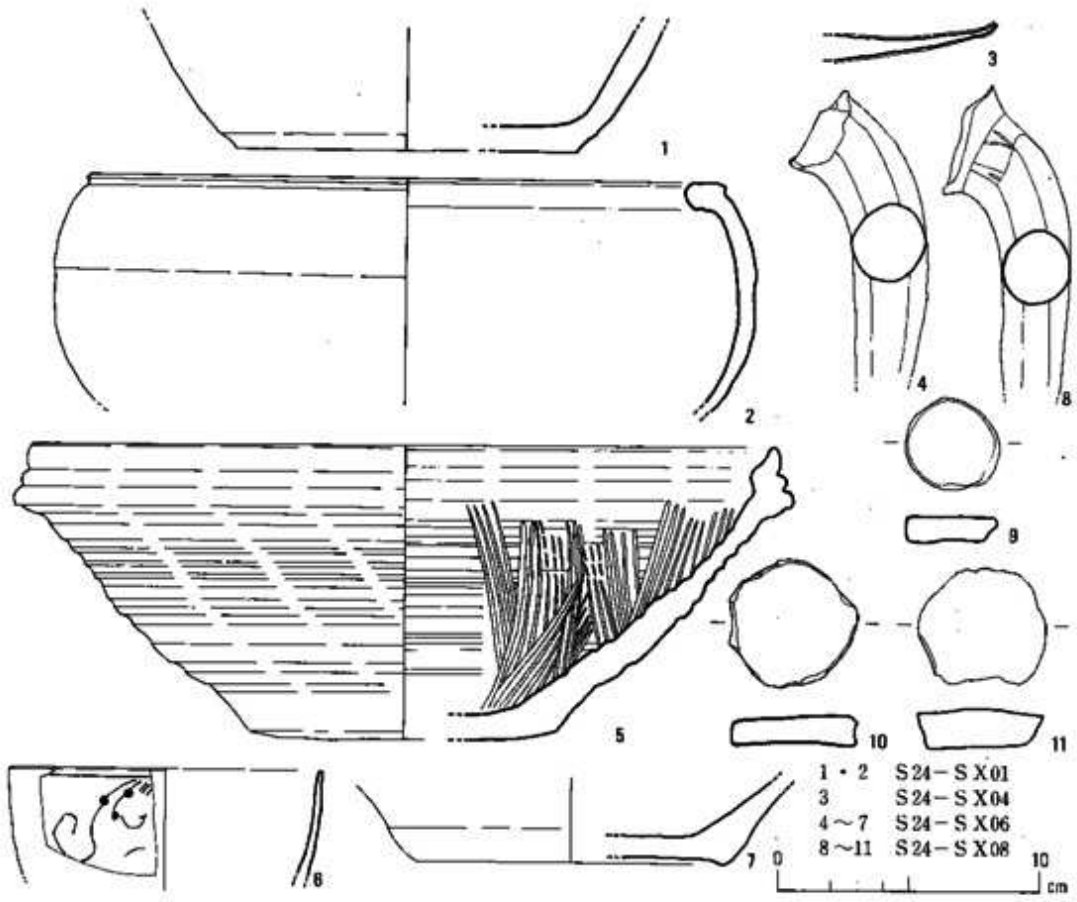
遺物は，土師器，須恵器でともに細片が少量出土したが，図化できるものはなかった。

S24－SX06土坑　　(60図４～７)

遺物は，土師器，須恵器，陶器，磁器，瓦が出土したが，いずれも細片であり図化できたのは少量である。陶器すり鉢（第60図５）は，S25－SD01の遺物と接合できた。摺目は10条１単位で下から上に向って右回りで刻されている。

S24－SX08土坑　　(第60図８～11)

遺物は，土師器，須恵器細片，円盤状土製品，石臼が検出された。円盤状土製品，第60図９は土師器片が使用され，第60図10・11は，陶器片が使用されている。石臼は，原形の$\frac{1}{4}$以下の大きさで風化が激しいため図化できなかった。これらとともに微量の骨片が検出されたが，人骨か動物の骨か確認できない。



第60図　S24－SX土坑出土遺物実測図

第5節　小　　結

昨年度にひきつづき山原地区の調査を実施した。昨年度の調査では，西村遺跡3号窯と呼称した平窯を1基検出した[1]。また，窯跡に近接して土坑を1基検出し，その内部より極めて硬く焼成された土器を多量に得た。

今年度の調査地は，上記の遺構を検出した地区に隣接し，その東側にあたる15～25区であった。調査の結果，15～20区の調査区で同一遺構面に2時期の遺構を検出した。まず，15～19W区の調査で地山に設けられた多数の土坑・ピットを認めた。遺構は各々より出土した土器の検討によってA）土師器，黒色土器のみを出土した遺構と，B）土師器，黒色土器，瓦質土器を出土した遺構の二種類があることが指摘できるにいたった。このうち，Aの遺構は第30図に図化したS18－SK03のように，土師器小皿・杯，黒色土器椀などの小型の土器を出土している。これらの土器は，西村遺跡出土の土器の中では比較的古い要素をもっており，11世紀の後半までで考えられるものである。この時期に，15区～19W区の黄灰色を呈する粘土である地山に遺構が設けられている。土坑・ピットは散在して位置し，現状ではその性格は不明とせざるを得ない。

つぎに，Bの土器の組み合せをもつ遺構を選び出すと，16・17区を中心に認めることができる。多数の土器を出土した溝があり，それが四角形を呈するように囲繞するものを2ヵ所で検出した。また，その内部にピットを検出したことによって，1間×2間の掘立柱建物遺構を想定できた（S16－SB01・S17－SB01）。溝は雨落ち溝状の周溝と考えられる。土師器は，小皿・杯・椀，黒色土器は杯を中心としている。これらの土器は，前述したAの土器よりもかなり後出する要素をもっている。12世紀末より13世紀前半を中心とする時期のものと思われる。

つぎに19E・20区を見てみると，地山面に穿たれた遺構を検出した。地山土は，15～19W区が黄灰色粘土層であったのに対し，砂粒をほとんど含まない，細かい粘土の暗紫色粘土層であった。土坑・ピット・溝などがある。遺構の埋土は，地山土をそのまま埋土とするものと，黒褐色粘質土を埋土とするものに分けられる。地山土の暗紫色粘土を埋土とするものは，そのほとんどが直径100cm以上，深さ50cm以上の土坑であり，極めて複雑に切り合っている。また，黒褐色粘質土を埋土とするものは溝・ピット・土坑などであり，暗紫色粘土を埋土とする土坑群を破壊している。暗紫色粘土を埋土とする土坑・ピットからはほとん

第61図　暗紫色粘土で製作した土器

ど土器が出土しない。例えば，N20－SK127で土師器椀を1点，N20－P101で土師器椀・小皿を出土した例などにとどまり，ほとんどの土坑が遺物を包含しないものであった。また，これらの土坑からは瓦質土器は出土しない。少量の土器の出土しかない状態で遺構の時期を判断するのは適確ではないかもしれないが，一応11世紀後半頃のものと考えられる。この土坑群の性格は，土坑の状態や周辺が大窯業地帯であることなどを考え，土器製作にともなう粘土採掘坑の可能性がある。

次に，土坑群を破壊して，黒褐色粘質土を埋土とする遺構をみてみよう。溝・土坑・ピットを検出している。溝は，16・17区でみられた状態と同じように，四角形を呈するようにまわっている。幅80cm程度のものである。溝が囲繞した内部にピットが検出でき，1間×2間の掘立柱建物遺構が考えられる。2棟が，「L」字形で配置されており（N20－SB01・02），いずれも周溝をめぐらしているが，そのうち一辺の溝を共用している(N20－SD01)。N20－SB02の内部より焼土坑を4基検出しており，屋内炉と考えられる。溝・ピットより出土する土器は前述したBの土器の組み合せをもっている。土師器小皿・杯・椀，黒色土器椀・皿，瓦質土器椀を出土している。土器の形態としては，16・17区出土のものよりも，やや先行するものとも思われるが，細分する資料が充分でないため，12世紀末葉より13世紀初頭を中心とする時期のものと考えておきたい。

21～25区は，大規模な削平・客土をうけていると思われる。古代より中世にいたる時期で考えられる遺構はN23－SK01のみである。瓦質土器椀を中心として多量の遺物を出土しているが，遺物の出土する状態より考えて，その上面は削平されていると思われる。1間×5間の建物遺構と考えたN23－SB01や建物遺構の可能性は残っているが柵列と考えたN23－SA01・SA02は，周辺を含めて柱穴からもほとんど良好な遺物を出土していないので，現状では建設時期を不明とせざるを得ない。23～25区は近世の遺物を出土している。昭和55年度調査において確認したが現在の水田以前に最低2回の水田面があると思われる。23～25区の削平・客土は現在の水田にともなうものと思われ，下層にある2回の水田面は近世以前の可能性がうかがえる。

(注)

(1) 竹下和男　「山原地区の調査」　『西村遺跡II』　香川県教育委員会　1981年3月

(2) 第61図に掲載した写真の壺は，綾南町に隣接する綾上町で窯業活動を行われている西尾明生氏が，S20区の地山土である暗紫色粘土を用いて製作されたものである。

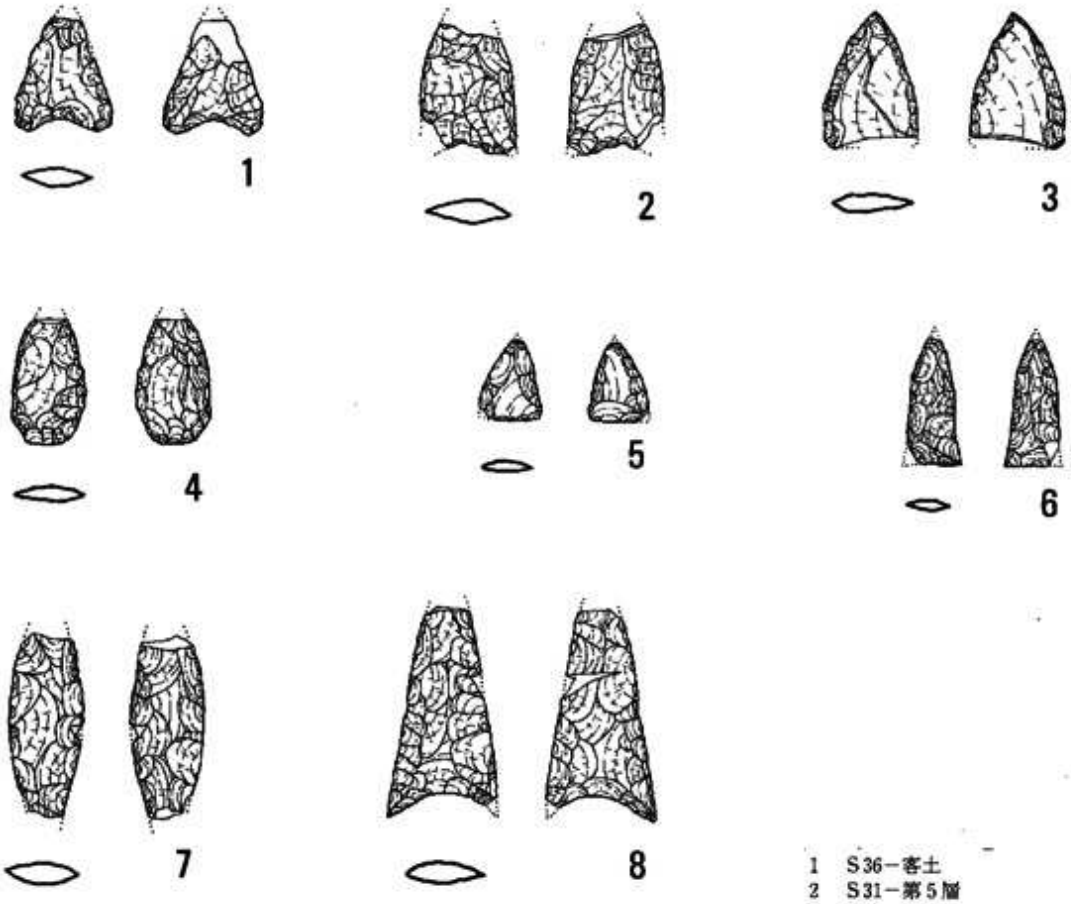
第３次発掘調査参加者

雨山浩史	綾田キタ	綾田良太郎	伊豆野秀徳	和泉美香子
上原久枝	太巻房子	小田邦博	尾松フサエ	鍛治　隆
葛西智恵美	河江　満	川田房太郎	川田美恵子	木村千鶴子
坂上カオリ	四宮モト子	白井テル	須田寿子	須田秀子
須田弘子	善生亀太郎	相津久之	十川昌平	田井トヨ子
多田包美	田村恵美子	田村季代子	土井繁次	土井ヨシエ
長尾キミ	西尾明生	西谷政江	西村タマノ	西村虎雄
浜田重人	林田フクエ	福山ミチ子	星野佳美	細谷幸子
細谷久子	細谷ヨシエ	前　淑子	松井久子	松村マサエ
松本百合子	宮内浩美	宮武道則	宮脇キクエ	三好直樹
三好義夫	森下浩行	山地キシノ	淀谷圭二	米田由美子

第3章　川北地区の調査

第1節　調査の概要

川北地区は，総延長1,100mにおよぶ西村遺跡の調査範囲のうち，その東端にあたっている。地形上は，十瓶山の東南麓に広がる緩傾斜地になる。調査地区は北より南に向って下っている地形を東西に横断したかたちをとる。調査前は，周辺一帯が階段状を呈する水田に開墾されていた。調査の対象地は総延長160m，面積は4,402㎡であった。東西を20m毎に，30区より38区の区画を設定し、またそれぞれを南北に区分してN，S区に分けて調査を実施した。調査期間



1　S36－客土
2　S31－第5層
3　S31－SK18
4　S33－排土
5　S30・31間畦
6　S33－表採
7　S33－第5層
8　S31－遺構面

第62図　川北地区出土石器実測図

中の区画設定、および実測用に使用した東西主軸はN87°42′Eであった。この調査は第2次調査である昭和55年度に実施したものであるが，大部分が未報告であるため，今回その一部を報告することによって抄報としたい。

遺構は地山面で検出した。しかし，前述したように調査地が階段状を呈する水田に開墾されていたため，客土，削平が各所にみられた。そのため，遺構面のレベルは一定ではなく，著しい高低差を示す部分もある。検出した遺構は，建物遺構，溝，土坑，土壙墓，ピットなどである。

遺物は，遺構より遊離して石器を数点検出したが，大部分が土師器，黒色土器，須恵器，瓦質土器であった。

川北地区の遺構は，出土している遺物より，大きく二時期に分けられる。平安時代の後期を中心とした時期と，大きく下って江戸時代の遺構である。ここでは，平安時代後期を中心とした遺構，遺物について略述する。

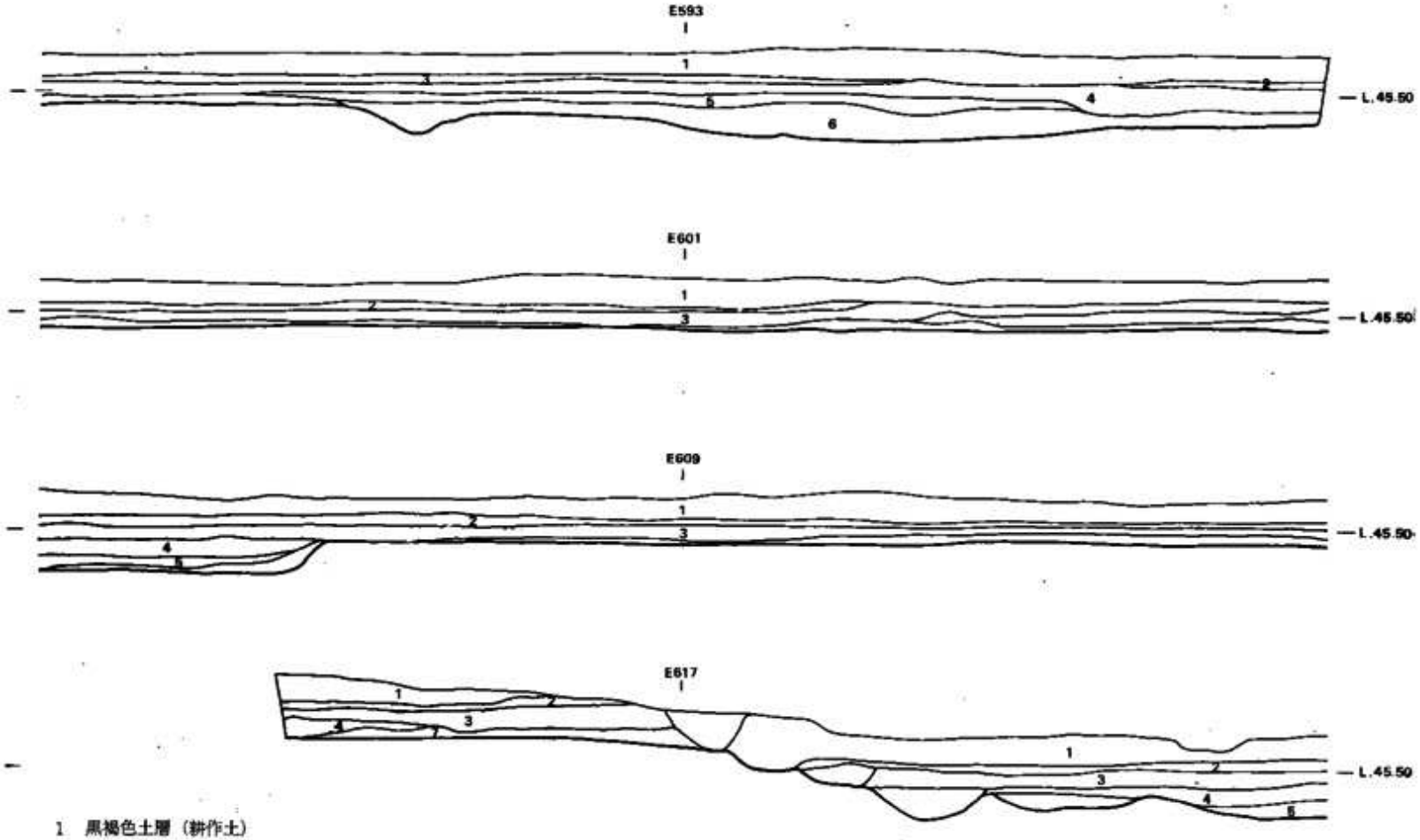
第2節　土　層　序

前述したように，調査地区は現在階段状に水田化されているが，本来は傾斜地であった。開墾時に，かなりの削平・客土をうけたと思われ，各所にその痕跡が認められる。

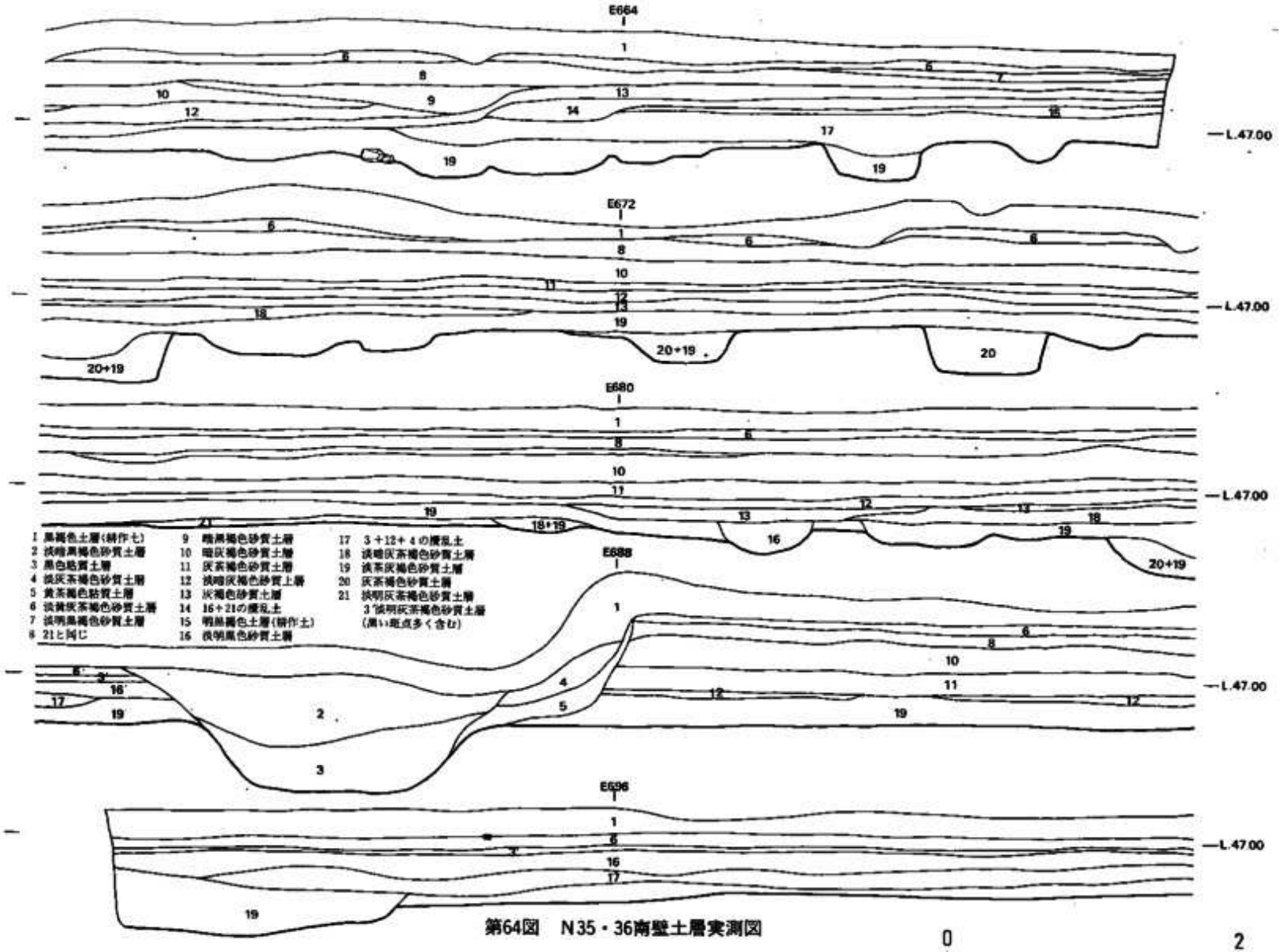
遺構は31・32区とN35区に顕著に認められた。両区画の土層について略述する。

31・32区は最も低い場所に設定した区画である。東西40m,，南北20mのこの区画内でも，北から南へ，あるいは東から西に下る段差が認められ，かならずしも土層序は同一ではない。N31・32南壁の土層を図化した（第63図）。第3層より上層には，明らかに最近の磁器を含んでおり，この区画には安定して堆積している。整地層と考えられる。第6層は，暗茶灰色粘質土層で，地山土である暗紫色粘土層や暗黄色粘土層上の窪みに行われた客土層と考えられる。また，その上面を覆うように広がり，窪地に認めることのできる第4層—灰茶色粘質土層，第5層—茶灰色粘質土層も客土層と考えられる。この区画では，第6層を除去した段階で広範囲な遺構の広がりを確認できた。

N35・36の区画は，調査地区のうちで最も高い場所に設定した。現状は水田であった。厚さ5～20cmの薄い層が多数，堆積している（第64図）。1より8は現状の水田にともなう土層と考えられる。13より急激に遺物を出土しはじめ，それ以下の19までに多量に遺物を包含する。これらの13～19の各層は，黒味がかった粘質土層で，遺物を包含する状態や堆積する状態などから遺構面とは考え難く，何らかの理由で置かれた土層と思われる。遺構の穿たれていたのは，地山土である暗黄褐色の粘土層であり，基本的にその上面に堆積するのは19の黒色粘質土である。細く区分したが，1は耕作土，2～8はそれにともなう床土層，13～21は遺物包含層であり，この4層が基本層序となる。



第63図　N31・32南壁土層実測図



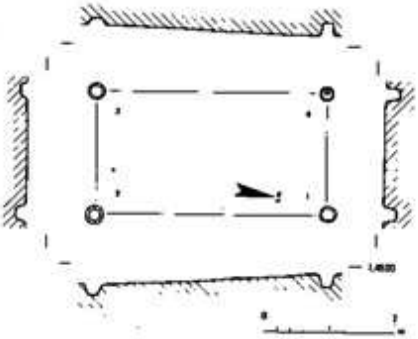
第64図　N35・36南壁土層実測図

第3節　遺　　構

1，建　物　遺　構

S31－SB01（図版第21－1，第65図）

暗紫色粘土の地山土に穿たれており，S31の西辺で検出した。1間×1間，350×175cmの規模をもつ南北棟である。検出した規模が小さいため，東西両辺に対峙する柱穴を求めたが確認できなかった。一応，この状態の掘立柱建物遺構を考えておく。柱穴はいずれも直径が小さく浅い。上面が削平されていると思われる。柱穴より良好な遺物は検出できなかった。後述する土坑群を破壊している。



第65図　S31－SB01実測図

なお，S31－SB01の東方に等間隔に柱穴を検出している。建物遺構を考えたが，充分に把握できなかったため，今回は除外して考えておく。

2，土　坑　群

N35区土坑群（図版第22－1）

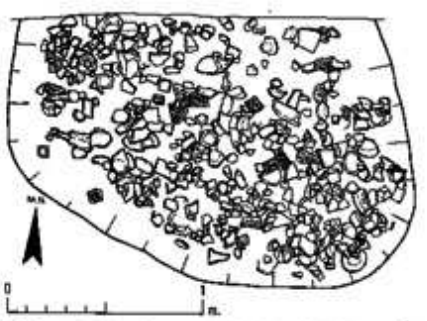
暗黄褐色粘土の地山層に掘り込まれている。径100～200cm，深さ30～80cmの土坑が複雑に切り合っている状態を検出した。ほとんどの土坑が硬質の瓦質土器椀を包含している。幅約3.5m，長さ約20mの範囲で約50基を検出しており，おおむね東西2群にわかれている。性格は不明とせざるを得ない。

土器を包含しない土坑群は，西村北地区の7・8区，山原地区19・20区，川北地区31区で，それぞれ検出しているが，それらとは性格を異にすると思われる。

3，土　　坑

S33－SK01（図版第22－2，第66図）

地山面で検出した。205×155cm，深さ20.5cmの不定形な土坑である。土坑内には，上面より底面いたるまで，器壁の薄い粗雑なつくりの瓦質土器を多量に包含している。



第66図　S33－SK01遺物出土状態実測図

4，土　壙　墓

N33－ＳＴ01（図版第22－３）

N33区の南西隅部で検出した。地山面に穿たれている。土壙は東西主軸をとり，約125×60cm，深さ約30cmの規模を有している。人骨の遺存状況は極めて不良であった。頭部を東に置いて横たわっていると思われる。

第４節　遺　　物

30～33区の地山面で検出した遺構出土の遺物と，N35区出土の遺物を中心に略述する。

１　土器

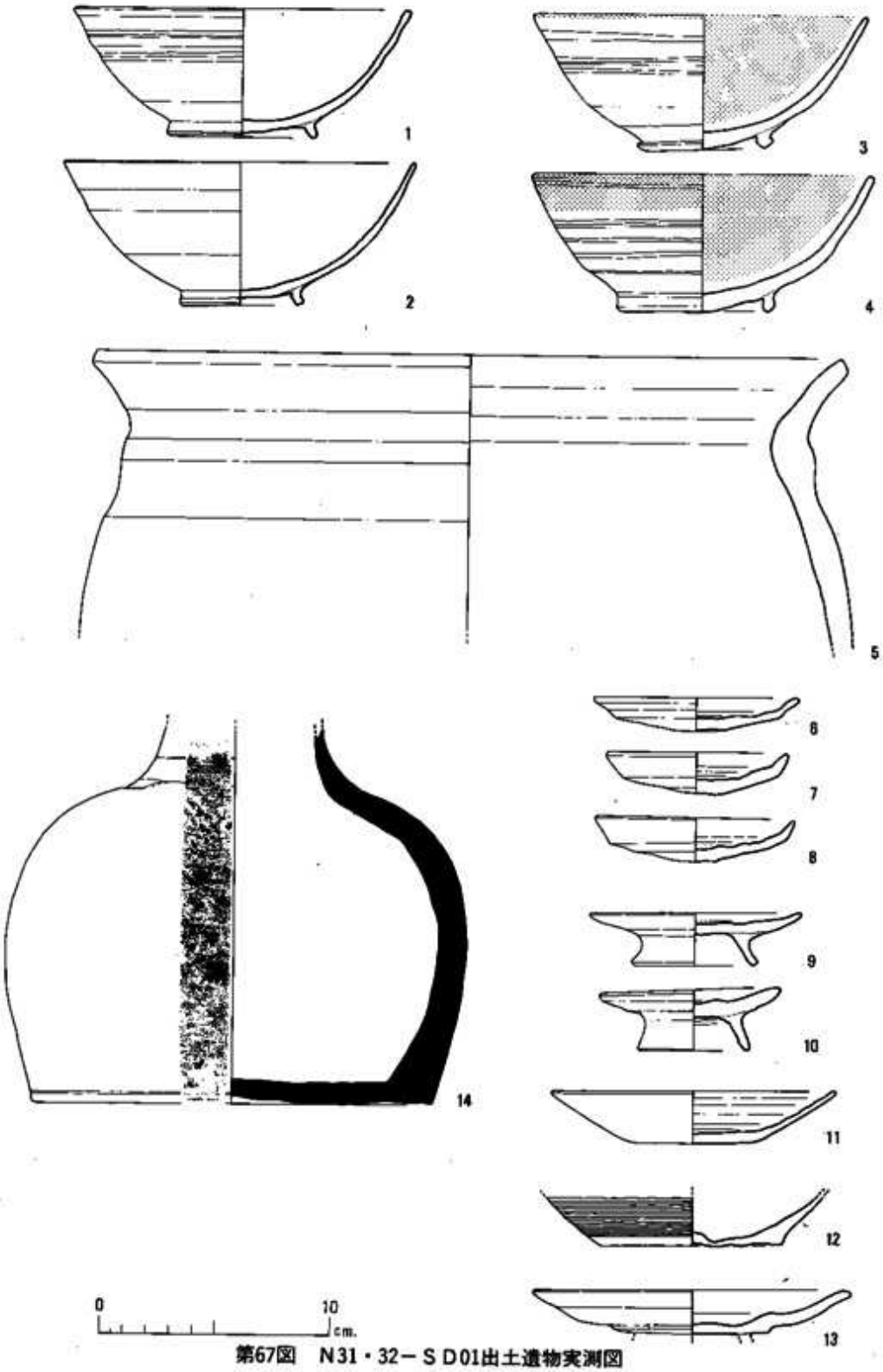
(1)　30～33区出土土器（図版第34，第67・68図）

土師器，黒色土器，須恵器を出土しており，椀を中心とした硬質の瓦質土器は，ほとんど出土していない。

土師器は，小皿・皿・杯・有脚小皿・有脚皿・椀，それに粗雑なつくりの鍋がある。一括の土器群としてN31・32－ＳＤ01出土のものを図化した。小皿は，二形態に分けられるが，一般的に底部の中心が，外にやや突出する傾向がある。器壁が薄く，体部が外反するもの（第67図６）と比較的分厚な器壁をもち，急角度で立ち上るもの（第67図７・８）とがある。磨耗しており，観察し難いがナデによって調整していると思われる。口径は，いずれも８～９cm以内であるが，器高は６のタイプが1.5cm，６・７のタイプが1.8～２cmであり，やや後者のタイプが高い傾向を示す。皿は比較的出土点数が少ない。第67図11は，口径12.5cm，器高2.8cm，底径5.5cmをはかる。体部内面は数本の稜線をもつ。器壁は薄い。杯と考えられるものも出土点数が少ない。第67図12は，いくぶん凹凸はあるが平底であり，明確な稜線をもって外反気味に立ち上る。体部には，カキ目のような粗い条痕をともなう調整を施している。有脚小皿は，高さが１～２cmの脚を貼り付けたもので，皿部の器壁は分厚である。口縁端部は丸くおさめる傾向があるが，Ｓ31－ＳＫ12出土（第68図12）の土器のように鋭くなるものもある。脚は外方に強く踏み出す。回転のナデによって調整している。有脚皿は，脚部を欠失している。脚部のみが出土している例では，外方に張り出すようである。非常に扁平な皿部をもっている（第67図13）。椀は口径14.5～15.5cm，器高5.6～6.3cmである。体部外面の上半に回転ヘラ磨きを行うもの（第67図１），ヘラ削りを行うもの（第67図２）がある。しかしながら，ヘラ削りを行う例は極めて少ない。１・２とも内面に井桁状になる一方向のヘラ磨きがある。

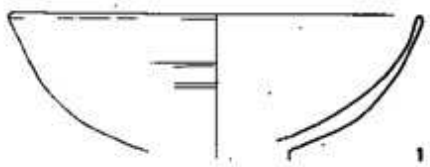
黒色土器は，椀が多数出土している。内面全体と，口縁部の外周に炭素が吸着している。体部外面の上半部に回転ヘラ磨きを施すが，下半部は粗雑な調整を行う。これは，断面が方形状を呈する高台を貼り付けた時，その周辺部も指頭によって押しつけたような状態で調整したた

N31-32-SD01

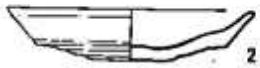


第67図　N31・32－ＳＤ01出土遺物実測図

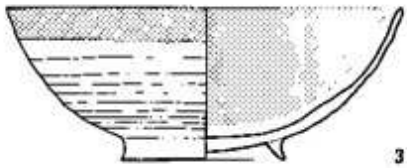
S30 - SK19



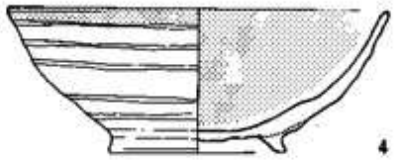
1



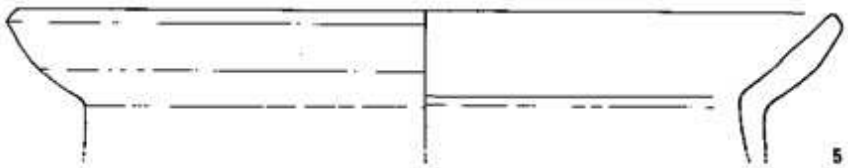
2



3

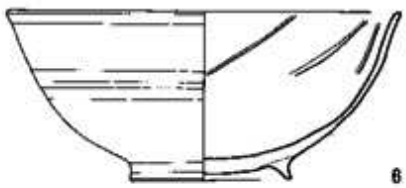


4



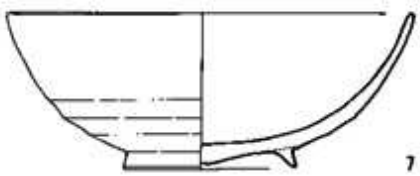
5

N33 - SK01



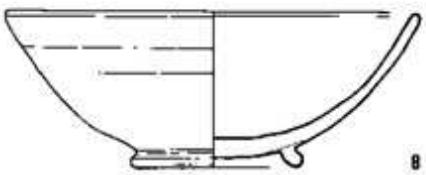
6

S31 - SK15



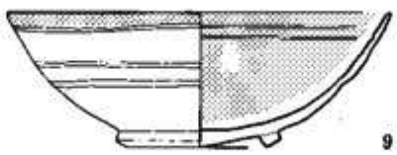
7

S33 - P01



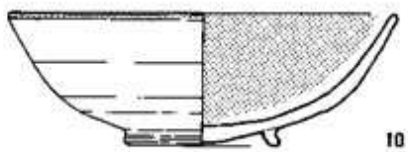
8

N31 - P12



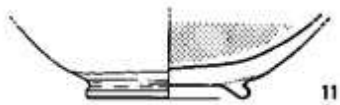
9

S33 - P06



10

S30 - SK21

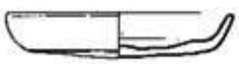


11

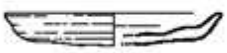
S31 - SK12

12

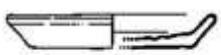
S31 - ST01



13

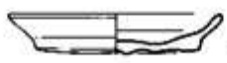


14



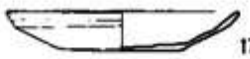
15

S31 - P07



16

S31 - P34



17

S31 - P02

18

第68図　30～33区出土遺物実測図

めであり，上半部の調整に比較すれば極めて雑である。椀部は深く，その底が高台端部よりも突出する例がある（第67図３・４）。

須恵器は，甕・壺などを中心とする。第67図14は，調整が非常に粗雑な平底をもつが，体部は丁寧に仕上げている。胴部上半の一部に格子状の叩き目を残している。

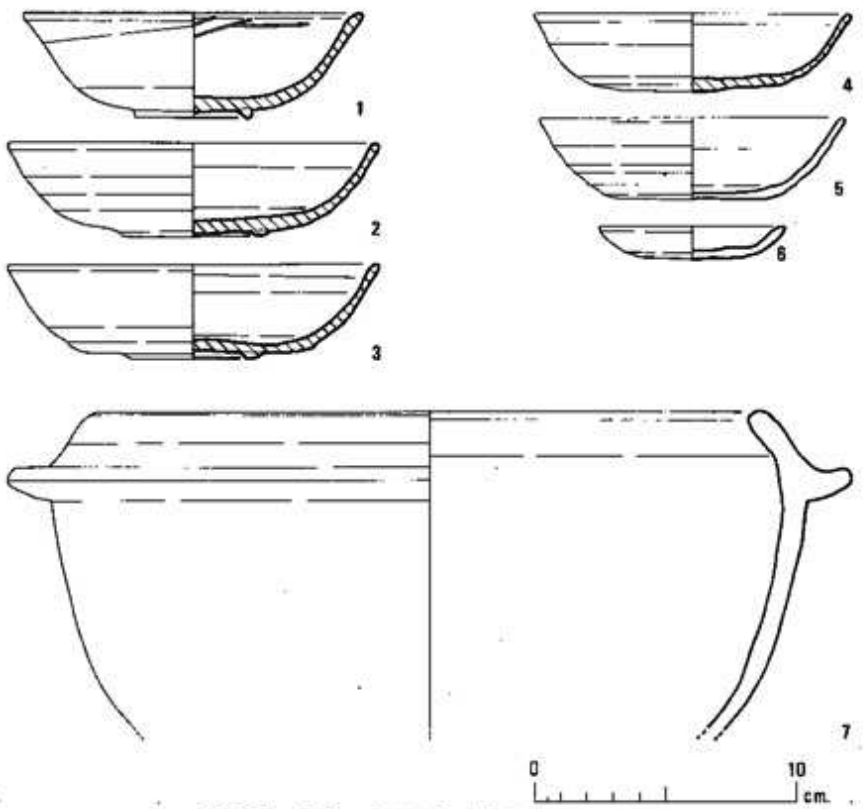
なお，第68図13～15の土師器小皿は，昨年度に一部を報告したＳ31－ＳＴ01土壙墓の埋土に含まれていたものである。13・14に比較すれば，15はやや新しい要素をもつ小皿とも思え，混入の可能性もあるが今回報告しておく。

(2)　Ｓ33－ＳＫ01出土土器　（第69図）

土師器小皿・杯・羽釜，それに多量の須恵器の焼成に近い瓦質土器を検出した。

１～４は，瓦質土器椀と杯である。西村遺跡の他の遺構からは全く検出できなかった土器群である。いずれも胎土中に微砂粒を多く含み，器壁は薄い。粘土紐の輪積みをロクロで調整したと思われる。４が杯であり，１～３の椀は，それに扁平な小さい高台を貼りつけた状態を示す。内外面をナデにより調整するが，２の内底部にのみ粗い刷毛目が認められる。口径は12.0～14.0cm，器高は椀が3.6～4.0cm，杯が3.0cm程度の小型品である。

土師器は５・６の杯と小皿がある。杯は丸味をおびた平底より，ゆるやかに体部にいたる。体部には，数本の稜線が認められ，外反気味に丸くおさめた口縁部にいたる。小皿とともに小



第69図　Ｓ33－ＳＫ01出土遺物実測図

型品である。

7は土坑の上層より検出した。本来，この土坑にともなうものか，どうか疑問が残る。

(3) N35区出土土器 (第70・71図)

土師器，黒色土器，瓦質土器の一括遺物としてN35－SK25・26出土土器を抽出じた。

土師器は小皿・杯・椀がある。小皿は口径8.1～8.6cm，器高1.3～1.6cmをはかる。丸味をもった平底を呈す。内面の底部と体部の境は，明確に稜線をともなう。体部は外反して立ち上る。口縁端部は肥厚する。回転のヨコナデによって調整している(第70図13～15)。杯は二形態に分けられる (第70図17・18)。17は切り高台のような底部より内彎気味に立ち上り，体部中位で外反する。黄白色を呈し，内外面ともナデで調整している。18は，やはり平底より丸味をもって体部にいたり，内彎気味に立ち上る。口縁直下でやや外反する。橙色を呈し，底をのぞいた体部内外面を回転ナデで調整している。椀は1点を図化した(第70図19)。比較的しっかりしたつくりで体部外面はナデののち，幅0.5cm以下の回転ヘラ磨きを1cm以下の間隔で施している。内面はヘラ磨きを不規則な方向に施している。

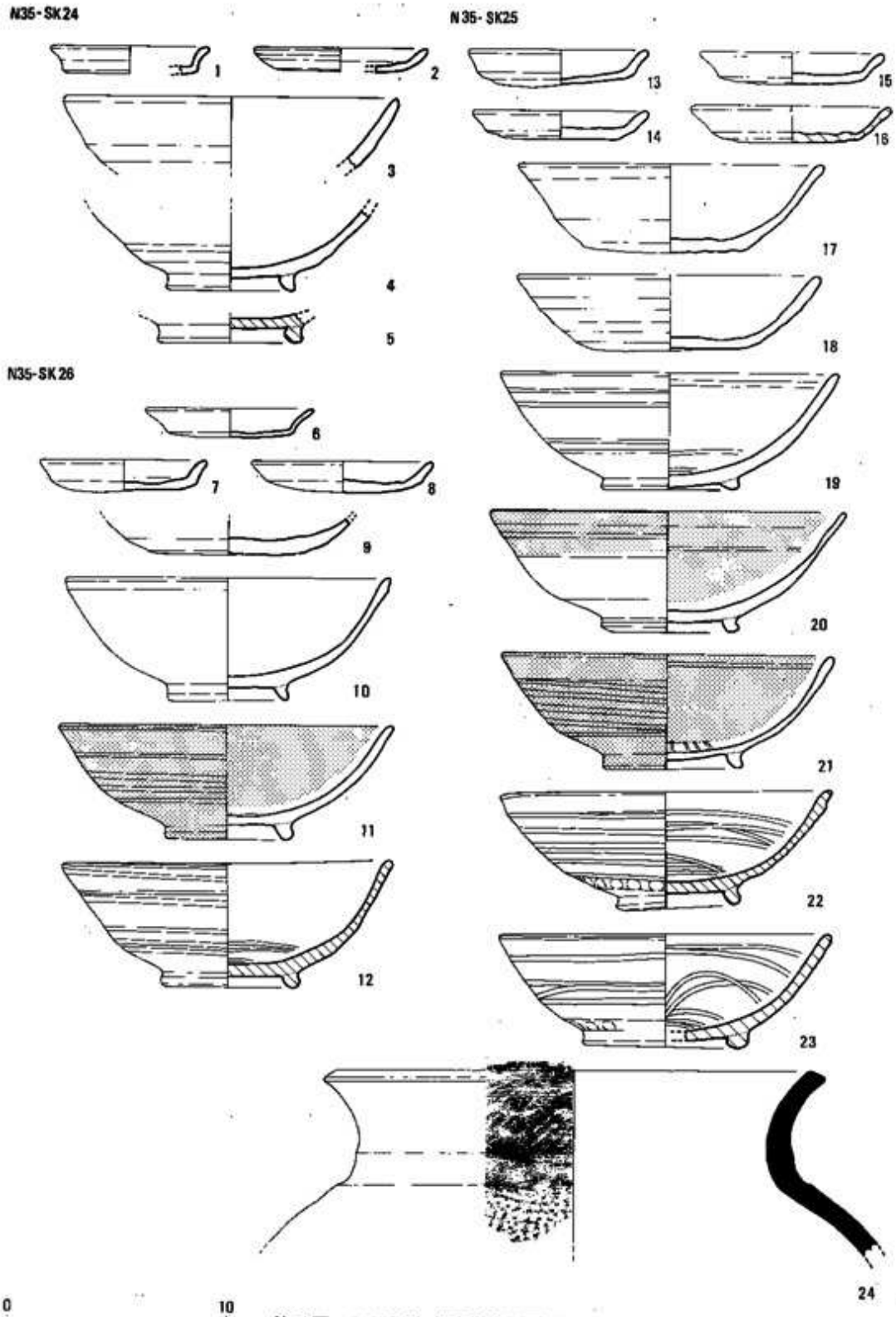
黒色土器は椀を出土している。内面に炭素が吸着したA類と，内外両面とも黒灰色を呈するB類がある (第70図20・21)。20は内面に炭素が吸着している。高台は貼り付けており，端部がやや丸味をおびた方形状を呈している。体部外面の上半部に回転ヘラ磨きを施す。内底部には，磨耗のため不鮮明ではあるが直線状のヘラ磨きの痕跡がある。21は内外両面とも炭素が吸着しており，黒灰色を呈している。体部外面の上半部に回転ヘラ磨きが認められる。下半部には指頭痕がある。内面は内底部に直線状のヘラ磨きがある。口縁部直下でやや窪む。高台は，断面三角形状であるが，やや外方に踏み出す。

硬質の瓦質土器は小皿と椀が出土した。小皿は土師器小皿よりも多少大きい。調整や形態は土師器小皿と類似する (第70図16)。椀は多量に出土しているが2点を図化した (第70図22・23)。22の体部は内彎して立ち上り，口縁部下約0.8cmで一度大きく窪み，丸くおさめた口縁部にいたる。外面はナデののち，幅0.5cm以上の回転ヘラ磨きを細かく周回させている。下半部に指頭痕がある。内底部に直線状のヘラ磨きがある。23の体部は内彎して立ち上る。口縁部下1.2cmで一度窪む。外面はヨコナデののち，上半部に幅0.3cm程度の回転ヘラ磨きを1cmほどの間隔で施す。下半部は精緻に仕上げている。高台直上に指頭痕を残す。

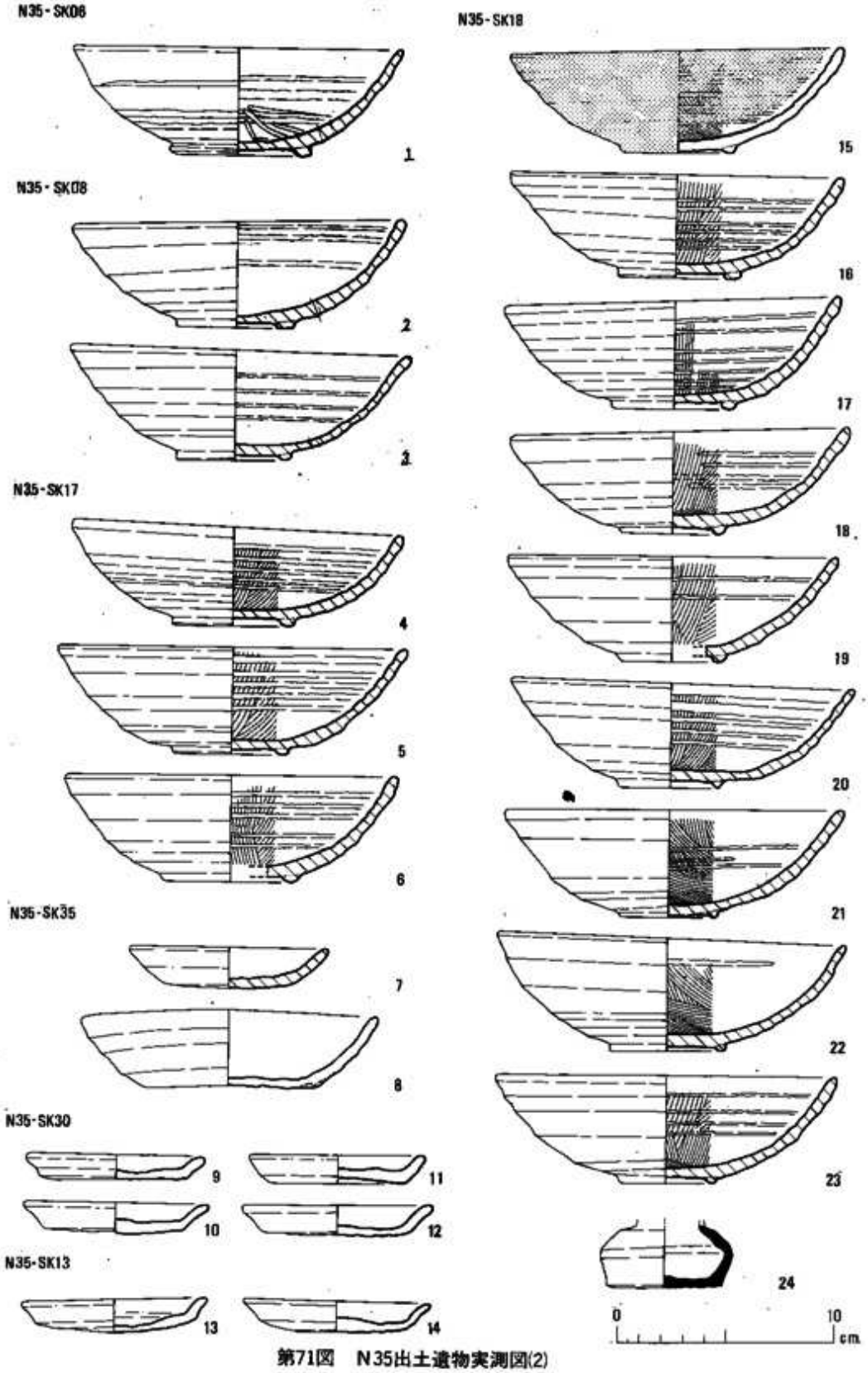
N35－SK26は，N35－Sと25を破壊して掘られた土坑である。土師器小皿・杯・椀，黒色土器椀B類，瓦質土器椀を出土している (第70図6～12)。

土師器小皿は6をのぞいて，ほぼ同一の形態をとる。ナデによる調整も同じである。杯9は17が切り高台のような底部を呈したのに対して，体部立ち上りの傾斜が曲線状になっている。上半部を欠失しているが，下半部と内面全体をナデによって調整している。土師器椀は体部が内彎気味に立ち上り，中位より外反する。高台は19に比較して薄く，より断面三角形に近い。

黒色土器椀は体部外面をナデののち，幅0.5cm程度の回転ヘラ磨きを施す。口縁部下で一度窪む。下半部の高台直上には，指頭痕が残っている。内面は磨耗のため，不明である。



第70図　N35区出土遺物実測図(1)



第71図　N35出土遺物実測図(2)

瓦質土器は椀を1点，図化した。体部は中位まで内彎し，それより上半部は外反する。幅0.2～0.5cmの回転ヘラ磨きを約1cm間隔で施す。内面は内底部にのみ，乱雑ではあるが円形を呈するヘラ磨きを行う。高台の形態は22に近い。

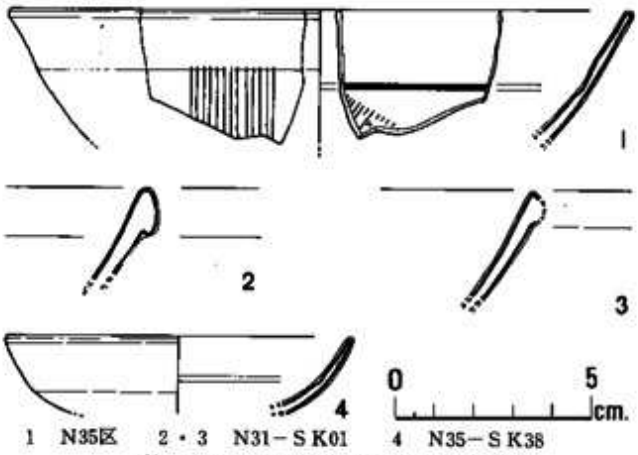
N35－SK24出土の土器には良好なものが少ないが，いずれの土器もN35－SK25出土のものに形態・調整とも類似すると思われる（第70図1～5）。

N35－SK17・18より多量の瓦質土器椀を検出している。体部内面に回転ヘラ磨きを施すことは，ほかの遺構より出土するこの種の土器にも認められる。しかしながら，ほかの遺構より出土する瓦質土器椀が，回転ヘラ磨きを施す前にナデ調整を行うのに対して，SK17・18出土の椀は粗いタテ方向の刷毛目を遺存する調整を行っている。また，外面の回転ヘラ磨きも顕著には行なっていない（第71図4～6，16～23）。

2　輸入磁器

(1) 青　磁　（第72図1）

35区で9片が出土している。そのうち1点を図化した。復原した直径は，16cmである。椀の破片であり，内彎気味に立ち上ってきた体部は，口縁下部で外反している。淡灰色の粗い胎土で，淡緑色の釉をかけている。同安窯系のものであろう。



1　N35区　2・3　N31－SK01　4　N35－SK38

第72図　川北地区出土輸入磁器実測図

図化できなかった破片も，全て同安窯系の椀と思われる。

(2) 白磁　（第72図2～4）

31・32区を中心とした範囲で3片，35区で8片を検出した。

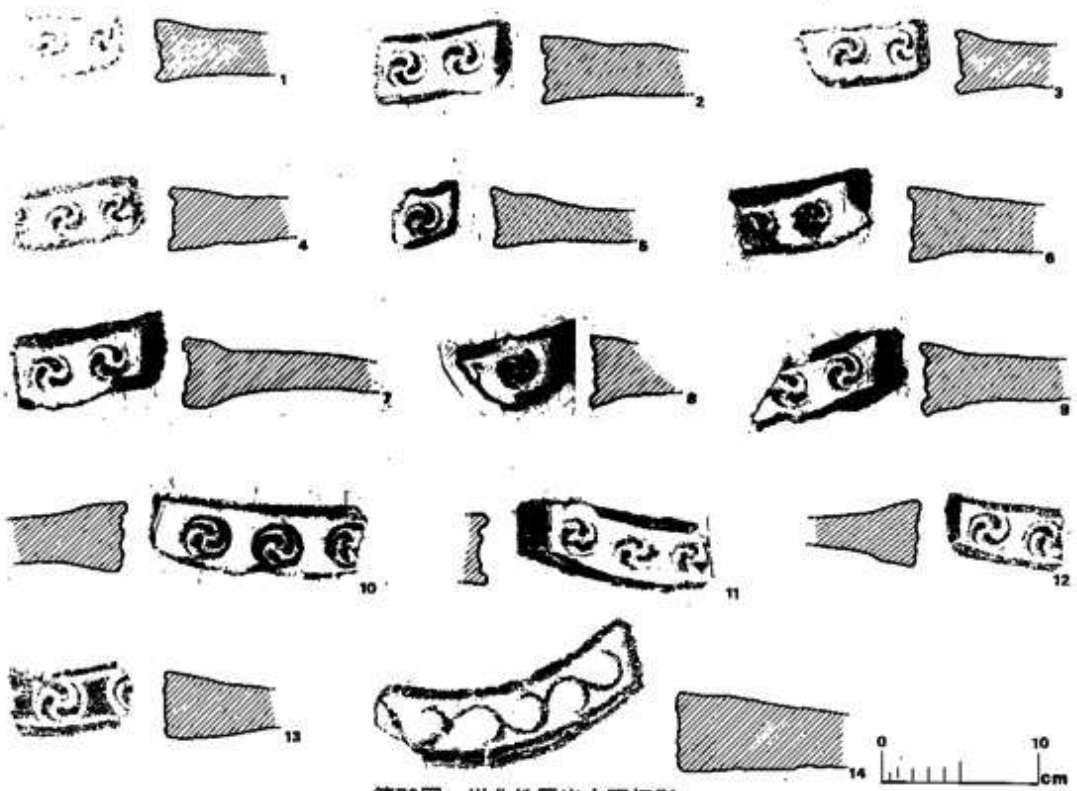
2・3はN31－SK01で検出した。いずれも白灰色の堅緻な胎土をもち，ガラス質の透明な釉をかけている。大宰府での分類で椀のIV類に相当するものであろう。

4は，35区で出土した。淡白灰色の堅緻な胎土をもち，内外面ともにガラス質の透明な釉がかけられている。体部は，ゆるやかに内彎して立ち上る。内面の中位に，一条の凹線をめぐらす。口径は9.0cmに復原した。IIIの破片と思われる。

3　瓦　（第73図）

軒平瓦の拓影を掲載した。1～12は，全て右巻きの陽刻巴文軒平瓦である。表は布目，裏はナワ目の条痕が残っている。瓦当面が完形で残存していないので，文様全体は不明である。9，10，11は，調整不良であるが，その他は，比較的丁寧に瓦当部文様の仕上げがほどこされている。

13は，右巻きの陰刻巴文軒平瓦である。周縁は，幅0.5cm，高さ0.2cmである。表面は布目，



第73図　川北地区出土瓦拓影

裏面はナワ目を残し，周縁端部から4cmほどは，丁寧に仕上げがほどこされている。

14は，偏行唐草文軒平瓦である。周縁は，細く浅い。文様は，左から右へ波状線が流れ，上下1個づつ頭部が旋回する唐草を配した簡単なものである。

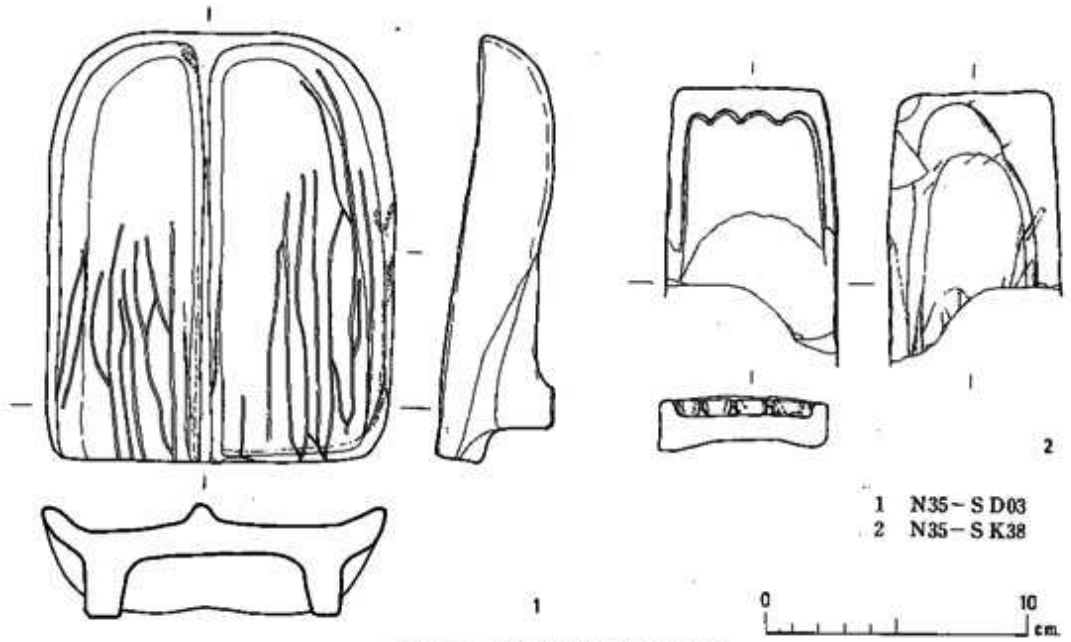
4　硯　（図版第34，第74図）

N35区で8片が出土した。そのうち5片が黒灰色を呈する瓦質であり，3点が須恵質である。形態及び手法の特徴が，よく観察できる2点を図化した。

1は，須恵質の二面硯である。陸部と海部の境は，傾斜がなだらかなため，不明瞭である。海部の深さは最も深いところで2cmである。裏面には，中心から左右に各々3.5cmほどはなれ，陸部の先端から1cmのところに，幅1cmの脚を有する。表面には，幅0.3cm以内のヘラ磨きが施されているが，側面，裏面，および脚部には，粗いヘラ削りが認められる。

2は，須恵質の方形硯である。半分を欠失しており，一方の面に海部，他方の面に陸部がある。海部は，前面および両側に縁を有している。傾斜はゆるやかで，深さは，最大で0.8cmである。海部前面の内縁は，直線状ではなく，4ヶ所が，半径0.4cmほどの半円柱形に，0.2cm間隔で削りとられている。

一方，陸部の先端右側縁は，一部が欠失と磨滅しているため，陸部と周縁との境界が明確ではない。傾斜は，ゆるやかである。仕上げは，全体的に丁寧である。



第74図　川北地区出土硯実測図

第5章　小　　結

川北地区の遺物整理は，現在も行っており，大半が未整理の状態である。その中で，わかり出したことを列挙し，小結にかえたい。

31・32区で硬質の瓦質土器椀を，ほとんど出土しない遺構面を検出した。出土土器の中心は，土師器，黒色土器である。

S31－S T01は地山に掘り込まれた土壙墓であり，土師器杯，黒色土器椀，輸入白磁椀を副葬していた。香川県における，古代より中世にいたる時期の土器は不明確な点が多かったが，一括遺物として新しい資料となった。輸入白磁椀は大宰府の分類で椀のIV類に相当するものである。黒色土器椀は2点出土した。西村遺跡出土の同種の土器としては，それ程古い要素を持つものではない。型式的には，それに先行するものとしてS K19出土の黒色土器（第68図3・4），さらに先行するものとしてN31・32－S D01出土のもの（第67図3・4）があげられ，現在のところ，最も古く考えられるものはN 3 －S K01出土の黒色土器椀（第75図）である。11世紀前半の中で考えようとしているが，それらから判断すればこの31・32区の遺構は11世紀半ばより12世紀半ばの生活面と考えられる。

N31・32－S D01は極めて明確に検出できた溝である。深さ約40cm，幅20～25cmの規模で，ほぼ垂直に掘り込まれている。南方部はすでに削平されていたが，一辺13mの「コ」字型を呈して検出している。柱穴の組み合せとしては把握できなかったが，建物遺構に付属する雨落ち溝状の遺構とも考えられる。

N35区の土坑群で硬質の瓦質土器椀を多量に検出した。西村遺跡の出土土器として普遍的に

見られる土器であるが，いくらかの土坑に切り合いがあり，前後関係が判断できる。そのうち，N35－SK25出土の瓦質土器椀は器高が高く，貼り付けられた高台も高くしっかりしている。体部外面には回転ヘラ磨きを，内面は底部に不規則なヘラ磨き，上半部に回転のヘラ磨きを施している。瓦質土器椀の中でも古い要素をもつタイプと考えられる。この土坑出土土器に数点の黒色土器椀がある（第70図20・21）。20は，形態・技法から前述したS31－ST01出土の黒色土器椀より若干後出する要素をもつと思われる。このことより，古い要素をもつ瓦質土器の一応の時期が判断でき，おおむね12世紀の後半の中で考えられる。

S33－SK01より焼成の良好な瓦質土器椀・杯を多量に検出した。椀は，口径13.0～14.1cmで，器高は3.6～3.9cmである。極めて小さな高台をもつ。この土器は西村遺跡のほかの遺構からは，全く出土していない。比較的新しい時期の土器と思われるが，類例が増加することを待って判断したい。

S34・35，N37・38は削平されているのであろうか，古代・中世の遺物を少量検出したのにとどまる。

第4章　お　わ　り　に

西村遺跡の調査は3年間を要したが，発掘した部分は遺跡のうちの一部分であろう。調査地域は，東西が1,100mにおよぶが，南北は最大幅でもわずか40mである。現地形から推測すれば，南北幅は200mをこすと思われる。

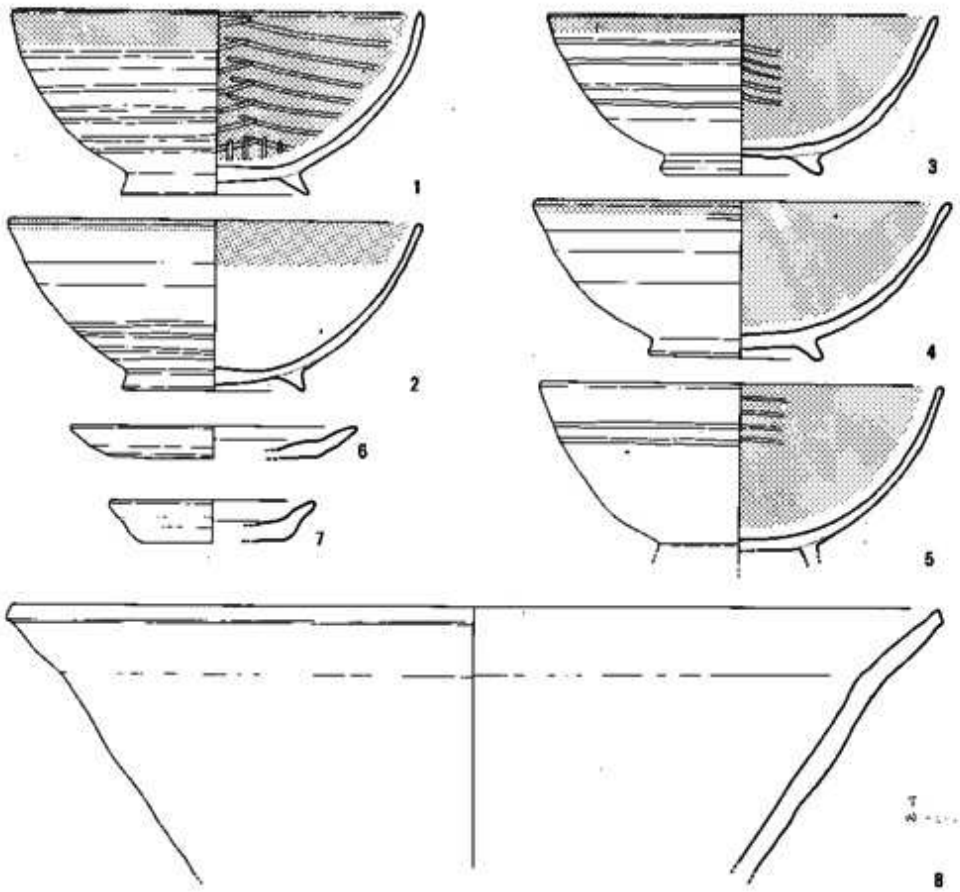
限られた範囲の調査であったが，多数の遺構と遺物を検出し，これまで不明な点が多かった香川県の古代後期より中世にいたる時代の資料を得た。略述しておわりにかえたい。

第1節　西村遺跡出土の土器について（試稿）

出土する土器は，土師器，黒色土器(1)，瓦質土器(2)の杯・椀など，小型品を中心としており，大型の須恵器や，壺・鉢などを中心とした軟質のいわゆる瓦質土器の出土は少ない。これらの土器を出土する遺構を，それぞれの組み合せ関係で分類すると，土師器，黒色土器を一括して出土する遺構Aと，土師器，黒色土器，瓦質土器を一括して出土する遺構B，さらに土師器と瓦質土器を出土する遺構Cとに分けられる。大型の須恵器である甕・壺などを出土する遺構はA，それにBのうちのいくらかの遺構であり，軟質のいわゆる瓦質土器である壺・鉢などを出土する遺構はB，Cとそれ以外の単独の出土に限られる。これによって西村遺跡は大きく3時期に分かれると思われる。

つぎに土器の型式による変遷をみてみると，黒色土器椀が比較的良好な状態で出土しており，形態・技法の変遷が顕著にうかがえる。また，共伴関係にある土器も多い。黒色土器椀を，その形態・技法によって7型式に細区分した。それを中心にみてみると，最も古く考えられる黒色土器椀はN3－SK01より出土している(第75図)。体部内面に炭素を吸着させた土器で，黒色土器A類の範疇で考えられるもののみの一括遺物である。第75図1は，体部外面にヨコナデを行ったのち，回転ヘラ磨きを施している。内面には井桁状になる一方向のヘラ磨きを行っている。器高が極めて高く，器高指数（器高に対する口径の百分比）は，45をこす。高台は強く外方に踏み出した断面三角形を呈する貼り付け高台である。成形段階ではロクロを使用していない可能性がある。1期と仮称しておく。土師器小皿・鍋，須恵器を共伴している。

つぎに，瓦質土器をともなわない一括遺物として，N31・32－SD01出土遺物があげられる。細部の調整は，1期と仮称したN3－SK01出土土器と異ならないが，高台端部が角張り，方形状を呈している。しかし，このN31・32－SD01出土土器と型式上は同一と思われるS30－SK19出土の黒色土器椀の高台は断面が三角形を呈しており高台の形態による時期差は認め難い。器高指数は減少する傾向を示しており，40.1～39.6となる。また，共伴している土師器椀は40.6～37.8の器高指数で黒色土器椀と近似した数値を示している。土師器椀の調整は，体部



第75図　N３－ＳＫ01出土遺物実測図

内面は黒色土器椀と同じように一方向にヘラ磨きを施すが，外面にヘラ削りを行っているものがある。土師器皿をはじめ，有脚皿・有脚小皿・鍋，須恵器壺を出土するなど器種，器形は豊富である。２期と仮称しておく。

現在までの資料では，この段階までが土師器，黒色土器を共伴する遺構Ａより出土した一括の土器群である。つぎに，昭和55年度の調査で検出したＮ２－ＳＫ02の一括土器がこれらにつづくと思われる。

Ｎ２－ＳＫ02より土師器椀・杯・皿，黒色土器椀，瓦質土器椀，須恵器大甕・壺などを検出している。黒色土器椀の内面は磨耗しており，調整は不明であるが，体部外面の上半に回転ヘラ磨きを施している。１・２期の黒色土器椀に比較して器壁は分厚である。直線状に外方に踏み出した断面三角形の貼り付け高台をもっている。共伴している土師器椀は，黒色土器椀とほとんど同形態である。体部外面は粗いヨコナデを行ったのち，中位まで回転ヘラ磨きを施している。内面には口縁部直下に回転ヘラ磨きが認められる。黒色土器椀，土師器椀のいずれにも認められるが，全体的に調整が粗雑になり出している。器高指数はそれぞれ36～35.6，38.3とさらに減少している。土師器杯は，いわゆる切り高台に近い状態を呈する底部をもつものを含

めて二形態にわかれる。この土坑より，硬質の瓦質土器椀で考えた土器が一点出土している。内外面ともにヨコナデののちに，外面には高台の直近にまで回転ヘラ磨きを施し，内面は上半部に回転ヘラ磨きを，中位より内底部には一方向のヘラ磨きを施している。体部中位まで内彎して立ち上り，その後一気に口縁部にいたるため，やや角張ったかたちにみえる。高台の直上に指頭によると思われる圧痕をかすかにのこしている。高台は高く，断面が方形状を呈するように貼り付けている。器高指数は40をこす。器壁，胎土ともにうすい灰色を呈している。3期と仮称しておく。

つぎに共伴する土器は少ないが，S31－ST01出土の黒色土器椀をみてみよう。外面はヨコナデを行ったのち，高台の直近まで回転ヘラ磨きを行っている。内面は磨耗のため，やや不鮮明であるが口縁直下に回転ヘラ磨きを，それ以下には粗雑な縦方向のヘラ磨きが認められる。口縁部直下で外反する。高台は外方に踏み出し，断面は方形状を呈する。器高指数は35.2～33.6である。土壙墓の副葬品であるため，土師器杯・小皿，須恵器大甕，輸入白磁椀を共伴するのにとどまる。また，土壙埋土を洗浄したが，3期に認められた瓦質土器は混入と思われる細片が3片あったのみである。4期と仮称しておく。

つぎにN35－SK25・SK26より出土している黒色土器椀があげられる。SK25より黒色土器椀A類を検出している。磨耗しているため観察し難いが，内外面ともに上半部にはヨコナデが認められ，口縁部の内外周には回転ヘラ磨きが施されている。体部の上半で2度窪み，口縁部は外反するかたちを呈する。器高に対して口径が大きくなり，器高指数は34.3である。黒色土器B類の範疇で考えられる内外面ともに炭素が吸着した椀もSK25・26で出土している。1～4期には見られなかった土器である。両方の土坑出土椀の外面は，口縁部より高台の直近までヨコナデを施しており，さらに中位までに回転ヘラ磨きを行っている。下半はヨコナデを行う前につけられた，指頭によると思われる圧痕が認められる。内面の上半部には顕著な調整痕は認められないが，SK25出土土器の内底部に一方向のヘラ磨きが，かすかに観察できる。口縁直下で外反する。高台はA類の椀と同じく丸味をおびている。器高指数は34.8～34.2である。なお，高台内部に炭素の吸着はみられない。土師器椀は主にヨコナデによって調整している。SK25出土椀の内外上半部には，かすかに回転ヘラ磨きが観察でき，内面の中位に不規則なヘラ磨きがみられる。高台のかたちは異なり，SK25出土椀は押えつけたように丸味をおび，またSK26出土椀は垂直に伸びた状態を呈している。土師器には椀のほかに杯が認められるが皿はないようである。杯はSK25で切り高台のような平底を呈する土器が出土しているが一般的でない。硬質の瓦質土器椀をこれら二基の土坑で検出している。3期と仮称したN2－SK02出土の1例を除けば，この段階までほとんど出土していない土器であるが大量に出土した。いずれも体部外面をヨコナデで調整したのち，高台の直上まで回転ヘラ磨きを精緻に施している。なお，ヨコナデの前にB類の黒色土器椀と同じく指頭によると思われる圧痕が体部外面下半にある。内面は不規則なナデののち，内底部を中心に渦巻き状のヘラ磨きを施している。高台は高く，他の器種の椀に比較して径が大きい。器高指数はSK25出土椀が35.0～33.8，SK26出

土椀が37.3を示す。ＳＫ25はＳＫ26を破壊していた。しかし，二基の土坑出土土器の全体的な検討で，その型式差を認めることができなかった。そのため，一括して５期と仮称しておく。

つぎにＮ20－ＳＤ06出土の遺物が挙げられる。黒色土器椀はＡ類のみを出土している。体部外面には不鮮明であるがヨコナデを施しており，その上から高台の直近まで回転ヘラ磨きを施している。内面には，ほとんど調整痕が認められない。高台は押し付けたように丸く低い。器壁は分厚である。調整の粗雑さが目立つ。器高指数は32である。土師器は椀・杯・小皿がある。椀は，これまでの土師器椀に用いられてきた胎土と異なり，粒が粗い。体部外面には粗いヨコナデを施したのち，回転ヘラ磨きを高台の直近まで行っているが，内面にはほとんど調整を行っていない。瓦質土器は，体部外面をヨコナデののち，回転ヘラ磨きを行っている。しかし，内面はほとんど調整を行っていない。刷毛状工具による粗い条痕が認められるにすぎない。器高指数は34.2である。Ｎ20－ＳＤ06出土の土器を６期と仮称しておくが，５期と仮称したＮ35－ＳＫ25・26の出土土器とは型式上，直続しないと思われる。もう一段階，未確認の土器群があると考えられる(3)。

つぎに昭和55年度に調査をしたＮ６－ＳＫ02の一括土器があげられる。器高・口径ともに縮少し，扁平な外観を呈している。器高指数は黒色土器椀Ａ類が32.0～29.0，同Ｂ類が33.3である。Ａ類椀の外面は，粗いヨコナデののちに回転ヘラ磨きを施す。内面は磨耗しているためにもよるが，顕著な調整は全く認められない。高台は粘土紐を粗雑に押しつけており，断面が丸くなるものと，断面が扁平になるものとがある。椀Ｂ類は，外面にヨコナデを施したのち，回転ヘラ磨きを行う。内面は粗雑なヨコナデを行うのみである。高台は椀Ａ類と同じように粘土紐を粗雑に貼りつけており，突出するが端部は丸味をおびている。硬質の瓦質土器は当土坑から出土しなかった。土師器杯を共伴している。高台付き椀は認められない。７期と仮称しておく。

現在までの一括土器では７期の段階で黒色土器椀はＡ類，Ｂ類ともに姿をけし，それ以後明確なものはみられない。土器の共伴関係では，前記したＢの範疇で考える遺構がなくなり，ついで土師器杯と瓦質土器椀を中心としたＣの遺構があらわれる。瓦質土器の変遷でみてみよう。

昭和55年度に調査したＮ６－ＳＫ01出土の土器があげられる。７期の段階としたＮ６－ＳＫ02が瓦質土器椀を出土していないために明確に形態上の差異を追求できないが，Ｎ６－ＳＫ01出土瓦質土器椀は口径に対して器高が減少し，小型化している傾向が認められる。器高指数は，35.3～32であり，平均値は33である。体部外面は部分的に粗雑なヨコナデを行ったのち，回転ヘラ磨きを行う。内面には口縁部より内底部に向う斜目方向のナデを施している。調整時におけるヨコナデの省略化が認められ，全体的に粗雑なつくりが読みとれる。体部は中位で外反する。高台は断面が方形状を呈し，外方に踏み出している。土師器は杯のみを出土している。体部の内外面はヨコナデによって調整しているようである。８期と仮称しておく。

形式上，つぎにつづくと思われる一括土器は，Ｎ７Ｗ－ＳＫ15出土のものである。瓦質土器椀は外面に粗いヨコナデを行ったのち，回転ヘラ磨きを施している。内面は，上半部にヨコナデ，下半部に不規則な方向のナデを行なっている。体部は中位より外反する傾向がある。高台

は粘土紐を輪状に押しつけたままのような粗雑なものもみられるが，低い台形状になることを意図しているようである。器高指数は36～31であるが，32前後が中心である。土師器杯を伴出しているが，他の器形には良好なものが認められない。9期と仮称しておく。

これ以後，明確な共伴関係をもつ土器群は見当らない。西村遺跡で最も出土量の多い瓦質土器椀も良好な状態で抽出できない。

以上が西村遺跡出土の一括資料で比較した土器の変遷であり，黒色土器椀の変遷により1期より7期を，瓦質土器の変遷により8期・9期を考えたい[4]。しかし，土器の形態変化の中では，さらに細区分できそうであり，2期と3期の間にはS30－SK19出土土器や西村遺跡3号窯出土の土器が，5期と6期の間，6期と7期の間には未確認の土器が存在する可能性がある。

1・2期は土師器，黒色土器が使用されており，特に2期における土師器の器形は富豊である。杯・皿・小皿（各々に脚がつくものを含む）・椀・鍋など土師器のほとんどの器形がみられる。3期に硬質の瓦質土器椀が出現する。しかし，一般的ではなく，4期の遺構からの出土はほとんどない。後述するが，3期に相当する時期に十瓶山周辺の須恵器窯が急激に衰退し出す。瓦質土器は，土師器の技法に類似した技法でつくられている。しかし，その焼成は平窯あるいは，それに近い状態の窯では不可能と思われる。須恵器工人の技術が導入されている可能性がある。5期より急激に瓦質土器椀が使用されたと思われ，出土遺物の半数近くを占めるようになる。器形としては椀が中心であり，少量の杯・小皿が認められる。土師器皿の出土は激減する。また，この時期より黒色土器椀B類が現われる。7期になると土師器椀が姿を消すようである。土師器椀は，すでに6期にそれまでとは違った胎土を使用するものや，粗雑なものが認められていた。これは，瓦質土器椀の普及によるものと思われる。8期になると黒色土器はA・B両類ともなくなっている。それ以後，一般的な傾向として，西村遺跡出土の土器は粗雑化している。

土器の形態と調整技法の差異でみた1～9期の小区分を大きくまとめると，1・2期，3～5期，6・7期，8・9期が大きな区画となる。それぞれ，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと仮称しておく。

では，これらの土器の実年代は，どこに求められるのだろうか。資料は極めて乏しい。西村1号窯灰原出土の黒色土器椀が3期の段階を考えたN2－SK02出土の黒色土器椀に類似している。西村遺跡1号窯出土の瓦（第2図）は，京都鳥羽離宮南殿跡出土の瓦と同文関係，あるいは類似している[5]。南殿は，11世紀末頃に築造されたものである[6]。それによって1号窯は，11世紀末頃の年代を与えられる可能性があり，3期の段階を11世紀末頃を中心とした時期に比定しておく。4期としたS31－ST01土壙墓より輸入白磁椀が1点出土している。大宰府出土遺物の分類ではⅣ類に相当するものである[7]。また，S31－ST01の上部より，細かく割られ埋置された状態で須恵器大甕を検出しているが，その大甕は西村遺跡1号窯出土須恵器大甕より，やや後出する要素がうかがえる。4期を12世紀前半を中心とする時期と考えておきたい。6期としたN20－SD06のある遺構面，およびその直上に堆積する遺物包含層より，輸入青白磁を検出した。青磁と白磁の比率は，おおむね1：1.5を示す。青磁は同安窯系のものと，龍泉窯系

のものとが出土しており，その比率は6：1である。明確な比較材料を欠くが，12世紀末葉より13世紀初頭を中心とする時期を考えておきたい。1期の時期を考える材料は全くない。今回は，区分した土器型式の変遷よりみて，10世紀にはさかのぼらない時期としておく。7～9期を考える材料もない。西村遺跡出土遺物の全体的な把握から9期は，14世紀に大きくは，入り込まないと考えておきたい[8]。

極めて稀薄な資料より実年代を想定しようとした。資料の増加を待って細区分したい。

第2節　遺構について

調査地区全域で検出した遺構は，掘立柱建物遺構が23棟，竈跡3基をはじめ，土坑，土壙墓，溝，ピットなどである。調査地区が4地区にわたるため，それぞれの遺構を同一には扱えないが概観してみることにする。

掘立柱建物は昭和54年度に実施した西村北地区調査で5棟を，昭和55年度西村北地区調査で12棟を，川北地区で1棟を，昭和56年度山原地区調査で5棟をそれぞれ検出した。このうち，建設時期が把握できるものは山原地区のS16－SB01，S17－SB01，N20－SB01・02である。いずれも建物遺構に接して，その外側を長方形にとりまく幅80～30cmの周溝をめぐらしていた。雨落ち溝状の遺構と考えられるが，溝内より土器を検出した。それらより考えるならばN20－SB01・02は6期と仮称した時期に建てられ，使用されていた建物と考えられる。S16－SB01，S17－SB01は，やや後出する可能性はあるが，それに近い時期のものと考えられる。昭和55年度西村北地区の調査で12棟を検出した。遺構面上面がいくらか削平されており，かろうじて柱穴を検出した状態である。良好な遺物もほとんどなく，周辺の遺構より検出した土器も1期～9期，あるいはそれ以後のものも認められ，時期を限定するのは困難である[9]。川北地区の調査で検出した小規模な1棟は2期に相当する土坑群を破壊しているが，下限は不明である。昭和54年度西村北地区の調査で検出した5棟も，時期差の大きい遺構面で検出しており，建設時期は不明とせざるを得ない。現状では，S16，S17，N20各区で確認した建物についてのみ時期を限定しておきたい。これらの建物遺構の規模を列挙すると，1間×1間が2棟，1間×2間が13棟，1間×3間が6棟，1間×4間が1棟，1間×5間が1棟である。最も広い面積をもつ建物はN23－SB01で約52㎡である。最小の建物は，S31－SB01で約6㎡の規模である。平均値は，約22㎡であり，S17－SB01の面積に近い。建物の性格は不明であるが，1間×2間のものが一般的である。前述したように各建物を同時期として扱えないが，傾向として2棟以内が近接して検出でき，1単位として把握できそうである。N20－SB01・02は周溝をめぐらしているが，この2棟はその間にある溝を共用する形態をとっている。また，近接して3棟以上を確認した建物遺構も，切り合い関係によって2棟以内の共存の可能性を示している。建物の主軸は，ほぼ東西か，南北を指向している。

窯跡を3基，検出している。西村遺跡1～3号窯と呼称したが，1・2号窯は須恵器，瓦などを出土しており，遺物の状況より1・2号窯は窖窯であったと思われる。3号窯は平窯で，窯本体より瓦のみを出土している。1号窯は，京都鳥羽離宮南殿跡出土の瓦と同文，あるいはそれに近似する瓦を出土しており，11世紀末を中心とした時期を与えられる。2号窯は1号窯に近接して検出しているが，土層観察によって1号窯よりも古く位置づけられる。3号窯の焚口から出土している黒色土器椀は，2号窯から出土している黒色土器椀より若干先行する形態をもっており，3期の先行形態の土器と考えられる。現在の資料では3基の窯は2号窯→3号窯→1号窯の順番で配列できるであろう。西村遺跡周辺，特に十瓶山山麓を中心として，須恵器窯，瓦窯が多く分布し，陶窯跡群と呼ばれている[10]。そのうち，須恵器窯は「12世紀になると急速に衰退するようである」との指摘がある[11]。年代観からみると1号窯は陶窯跡群のうちの須恵器窯の終末期に位置している。

西村遺跡の調査で検出した遺構のうち，遺跡の性格をあらわしているものは掘立柱建物と窯跡であろう。居住遺構と生産遺構と表現しておくが，現在の資料では粘土採掘坑と考えた土坑群を含めて，生産遺構が時期的には先行しており，土器形式の区画で言うならば5期までが，その範疇で考えられよう。それ以後，掘立柱建物や溝があらわれる。溝には建物を囲繞するもの以外に単独で検出されるものも多い。そして，その穿たれている方向は建物遺構の主軸が指向する方向と同じようにほぼ南北，あるいは東西をさす。当時，そのような地割りが施されていたことは充分に想像でき，明確に検出することはできなかったが，水田にともなう遺構と考えることもできる。昭和55年度西村北地区の調査で，遺構面上を広範囲に覆う第5層，明黄色粘質土層を確認し，旧水田にともなう床土層と考えた。さらにN1・2区では，第5層の下層，遺構面直上に灰色粘質土層の堆積が認められ，第5層にともなう水田以前の耕作土，つまり第1次水田面を検出している。残念ながら良好な土器を出土していないために，時期判断の材料を欠くが，このような状況から考えてN20－SB01・02の建設時期に近い頃には西村遺跡周辺は耕地化されていた可能性が指摘できる。西村遺跡は本来，窯業生産遺跡であった。要因が何であったのかは今後検討を要するが，周辺一帯の開墾とともにその性格を変える。

注

(1) 黒色土器として把握しているものは，皿・高台付椀と杯である。その他の器形については今後検討したい。高台付椀には，内面のみが漆黒色を呈している黒色土器A類と，内外面とも漆黒色を呈している黒色土器B類とがある。

(2) 昨年度の調査概報『西村遺跡II』では，良好なカワラ質の土器であり，香川県の他の地域ではほとんど類例がない土器とし，瓦質土器の名称を用いた。讃岐国府跡の最近の調査などで類例が増加し出しているが，本年度の西村遺跡の調査でも，この土器が土器のどのような流れの中で生まれてくるものなのかが明確にできなかった。そのため，瓦質土器の名称を踏襲する。硬質の瓦質土器などと呼称した。また，この土器は重ね焼きされたと思われ，内底部が輪状に変色する土器や口縁部の内外周が灰色あるいは，灰黒色に変色している土器が認められる。『西村遺跡II』では，口縁部の内外周の灰色，あるいは灰黒色を焼成後のいぶしによって付着した煤と考えた。しかし，これらの土器はいぶされたとは考え難い。そのため，今回の調査では，重ねて焼成されている状態で火があたり，灰黒色に変色したものと考えた。

(3) ＳＫ25・26はＮ35区土坑群の中の土坑である。土坑群全体の整理が充分に進行していないため，さらに細区分できる土器が未抽出である可能性を残している。

(4) 『西村遺跡II』で使用したⅠ～Ⅴの区分は，本年度の調査でさらに細分する資料が増加したため撤回し，あらたに１期～９期の区分を使用する。

(5) 細谷義治 「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」 『京都府埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1968年３月

上原真人 「古代末期における瓦生産体制の変革」 『古代研究』13・14合併号 1978年５月

(6) 『扶桑略記』 応徳３年丙寅10月20日甲辰

(7) 横田賢次郎 森田 勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について――型式分類と編年を中心として――」『九州歴史資料館研究論集』 4 九州歴史資料館 1978年３月

(8) ９期に土器を区分したが，これら以後も西村遺跡は存続する。昭和55年度に調査したＳ５－ＳＫ01出土土器，Ｓ33－ＳＫ01出土土器などは現在の資料では，９期以後にどのようにつづいていくのか詳らかにできない。資料の増加を待って検討したい。

(9) 『西村遺跡II』では，Ｓ３－ＳＢ01，Ｎ6－ＳＢ01は鎌倉時代前半までに建てられたものと考えた。今回，資料の増加を待って再検討したが，それよりも後出する可能性が出てきた。一応，撤回し保留とする。

(10) 寺田貞次 「陶村附近窯跡」 『史蹟名勝天然記念物調査報告第12』 香川県史蹟名勝天然記念物調査会 1941年３月

「香川県陶邑古窯群調査報告」香川県教育委員会 1968年３月

森 浩一・伊藤勇輔 「香川県綾南町十瓶山北麓窯跡調査報告」『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』 同志社大学考古学研究室 1971年11月

(11) 渡部明夫 「讃岐国の須恵器生産について」『鏡山 猛先生古稀記念古文化論攷』 1980年10月

第5章　付　　編

1　香川県西村遺跡出土の中世人骨とその埋葬について

京都大学理学部教授　池　田　次　郎

昭和55・56年，香川県教育委員会が行なった香川県綾歌郡綾南町西村遺跡の発掘調査で，12世紀末～13世紀初頭に築造されたと推定され，人骨が遺存している土壙墓が3基発見された。人骨の残存状況はきわめて不良で，それから被葬者の身体特徴はむろんのこと，性，年齢さえ判別することは不可能であるが，幸い3体とも僅かであるが歯の歯冠だけを残している。

歯の大きさから性を判定する方法としては，埴原・小泉[1]の方法が優れている。彼らは，第3大臼歯を除く上下片側の14本の歯冠近遠心径を用いて判別関数をつくり，その結果，76%の的中率をえている。ところが，西村遺跡出土のものでは，歯冠近遠心径が計測できた歯数はN2－ST01人骨の5本が最高であるから，この判別関数を利用することはできない。そのため，個々の歯の計測値を現代日本人男女の平均値[2]と比較し性判定を試みたが（表1），その判定結果の信頼性はきわめて低いものであることを断っておきたい。また，歯の磨耗の程度から年齢を推定したが，これもまた精度が高いとは言い難い。

	西村遺跡			現代日本人		
				男性	女性	標準偏差
S31－ST01	下左第2小臼歯	近遠心径	8.1	7.42	7.29	0.472
	下左第1大臼歯	厚　径	11.1	10.89	10.55	0.498
N2－ST01	上右側切歯	近遠心径	7.5	7.13	7.05	0.533
	上左第1大臼歯	近遠心径	11.2	10.68	10.47	0.541
	上右第1大臼歯	近遠心径	11.2			
	下左側切歯	近遠心径	6.5	6.20	6.11	0.370
	下左第1大臼歯	近遠心径	11.9	11.72	11.32	0.547
N17－ST01	下左第1大臼歯	近遠心径	(11.7)			
		厚　径	10.8	10.89	10.55	0.498
	下左第2大臼歯	近遠心径	11.4	11.30	10.89	0.673
	下右第1小臼歯	近遠心径	7.4	7.31	7.19	0.451
		厚　径	8.2	8.06	7.77	0.492

表1　歯冠の近遠心径と厚径

S31－ST01人骨

下顎左の第2小臼歯と第1大臼歯だけである。第2小臼歯の近遠心径，第1大臼歯の厚径はともに男性平均値よりかなり大きく，大臼歯の磨耗度はかなり強いので，壮年後半もしくは熟年前半の男性と推定しておく。

残存する骨は，頭蓋，下顎，左右の上腕骨，大腿骨，下腿骨および左の前腕骨であるが，埋葬姿勢は南頭位左側臥屈葬で，左上肢の肘をまげている。

N2－ST01人骨

歯冠近遠心径が計測できた上顎左の第1大臼歯，右の側切歯，第1大臼歯，下顎左の側切歯，第1大臼歯のほか，上顎左右の中切歯，下顎左右の第2大臼歯，左の犬歯が同定でき，また小臼歯の細片も残存する。5本の歯の近遠心径は，いずれも男性の平均値をやや上まわる程度で，大臼歯の磨耗はS31－ST01人骨ほどではないがかなり強いので，壮年後半の男性であろう。

頭蓋は残っていないが，歯や残存する左右の大腿骨と下腿骨の配置から，北頭位右側臥屈葬と見られる。左の上腕骨と前腕骨が存在するが，S31－ST01人骨と同様，肘をまげている。

N17－ST01人骨

頭蓋は，3体中もっとも保存良好であるが，その上顎骨には左の第1・第2小臼歯，下顎骨には左の第1小臼歯，第1・第2大臼歯，右の第1・第2小臼歯，第1大臼歯が釘植している。この8本のうち歯冠計測が可能であったのは，下顎左の第1・第2大臼歯と右の第1小臼歯だけで，この3本の近遠心径，厚径は男性の平均値にほぼ一致する。大臼歯の磨耗の程度は，他の2体ほど強くなく，壮年と推定される。

頭骨，下顎骨，左右の上腕骨と前腕骨，左の手骨の一部，上位の椎骨と肋骨など上半身の骨は比較的よく残っているが，下半身の骨で確認できたのは左右の大腿骨だけである。この人骨を埋納する土壙は，他の2基と異なり南北方向に長く，頭蓋はその北側にあるので北頭位伸展で埋葬されたと見て間違いなかろう。肋骨の状態から，体幹部は仰臥と右側臥の中間で，顔は西を向いていたようである。右肘は伸ばしているが，左肘は強く折りまげ，左手は右の肩関節付近，顔の前に位置する。

最近，中世墓の発見が相次ぎ，この時代の墓制が次第に明らかにされつつある。中世の葬法には土葬と火葬とがあるが，そのうち土葬で，しかも土壙内に人骨が遺存していた報告例について検討してみよう。

多数の中世墳墓が発掘された熊本県尾窪（鎌倉～室町）[3]および塚原[4]では，座臥，仰臥，側臥あるいは稀に俯臥も見られたが，いずれも屈葬で，座臥の場合は西向き，それ以外の形式では北頭位が圧倒的多数を占める。尾窪では，座臥形式のものは円形土壙，その他のものは方形土壙から発見されており，土壙によっては鉄釘が残っているので，円形土壙－座臥埋葬には桶が，方形土壙－側臥埋葬（側臥29にたいし仰臥2）には木棺が使用されたと推定されているが，塚原の土壙には棺や桶の使用を示す遺物は認められない。塚原で木棺や桶が使用されなかったことについて，この遺跡の埋葬が尾窪より時期的に古いためではないかと考えられている。側臥埋葬の場合，尾窪では全例が右を，塚原では8例が右を，1例が左を下にしており，多くのものが北頭位をとっているので顔を西に向けるのが一般的であることも注目される。

中世墓の典型的な例として尾窪，塚原の埋葬について概観したが，この時代の葬法はこれほど画一的なものでなく，かなり変異に富んでいる。まず木棺使用の例は，熊本県北牟田塚（平

安～鎌倉）[5]，福井県阿納塩浜（鎌倉前期）[6]，京都市常盤東ノ町（鎌倉末～室町）[7]，鳥羽離宮跡（中世後期）[8]などで知られており，人骨が遺存しない土壙墓で鉄釘が残っていた墓も多数報告されているが，一方，塚原をはじめとし木棺使用の痕跡が認められない場合も少なくない。

次に埋葬姿勢について見ると，伸展葬に比し屈葬が圧倒的に多い。すなわち，伸展葬は北牟田塚，常盤東ノ町などで認められているが，屈葬は上記の尾窪，塚原，阿納塩浜，鳥羽離宮跡のほか，熊本県杉谷（14～15世紀）[9]，大分県立石貝塚[10]，山口県朝田第III地区（室町）[11]，広島県福礼（戦国末）[12]，帝釈寄倉（鎌倉）[13]，草戸千軒（室町）[14]，京都市同志社女子大図書館付近（室町後期）[15]，愛知県佃（中・近世）[16]，柳が坪（鎌倉末～室町）[17]，鎌倉市長勝寺（室町）[18]，栃木県赤塚（15～16世紀）[19]，小松原[20]など枚挙にいとまが無い。

軀幹部の状態に注目すると，伸展葬の場合は一般に仰臥であるが，屈葬例では座臥，仰臥，側臥の3種が認められる。座臥は福礼，佃に，仰臥は杉谷の7基全部，柳が坪に，側臥は福礼，帝釈寄倉，草戸千軒，阿納塩浜，鳥羽離宮跡，同志社，長勝寺の10基全部，赤塚，小松原などに見られる。尾窪，塚原ではこの3種類が全部存在するが，その比率は尾窪で座臥6，仰臥2，側臥29，塚原で座臥6，仰臥6，側臥9と俯臥1で，また朝田第III地区では座臥2，仰臥1，側臥7であった。このように最も多数を占める側臥位をとるものでは，尾窪の29例全部，塚原の9例中8例，立石，帝釈寄倉，福礼，草戸千軒，同志社，柳が坪など右を下にするものが多く，左を下にしたものは塚原の1例，阿納塩浜，鳥羽離宮跡などに見られるにすぎない。長勝寺の場合には，右が6，左が4で相半ばするが，全体としてみると右側臥が多いといえる。

最後に頭位について検討すると，北頭位，すなわち北東から北西の範囲内に入るものが最も多く，西頭位の帝釈寄倉，常盤東ノ町，西南を向く福礼などはむしろ例外である。多数の墓が発見されている尾窪では，座臥は別とし，西1，南1，北29，塚原では西2，南5，北17，朝田第III地区では西1，南2，北6，長勝寺では西2，南2，東1，北6とやはり北頭位が多く，杉谷の場合は7例全部が北頭位である。また，静岡県平畦[21]の如く，人骨は遺存していないが，土壙の長軸方向から北頭位であった可能性が高いという報告が数多く見られる。軀幹部の姿勢では右側臥が多く，その大部分が北頭位であるとすれば，顔は西を向く。座臥の場合にも顔を西に向けるのが普通であることを考えあわせると，中世埋葬の原則は西顔にあるといえよう。

京都における中世墓地の展開を論じた五十川[22]は，中世初頭には10世紀の木棺土壙墓の系統をひく構造のものが多いが，室町時代に入ると，葬法が多様化するが，これは14世紀以降の葬式仏教化の結果生じたものであり，小規模な土壙内に屈葬するという簡便な埋葬の普及は，前代にくらべて墓の造営が庶民の間にも一般化したことを反映するものだろうと推考している。中世の葬法には，時代的，地域的，さらには階層による違いなどが複雑に関連しているので，それらを整理し系統だてて論ずることは困難であるが，土壙墓に埋納された庶民の土葬に限って言えば，北頭位右側臥屈葬が鎌倉時代以降，圧倒的に多く，伸展葬は五十川の指摘のように比較的古い時期だけに行なわれたようである。鎌倉時代初頭と推定される西村遺跡の4基の被

葬者が，伸展葬，右側臥屈葬，左側臥屈葬とそれぞれ異なる姿勢を示しながら，２体が北頭位，１体が南頭位，１体が東頭位（N33－ＳＴ01）であることは，北頭位右側臥葬がまだ一般的でなかったことを示唆している。

人骨，実測図など本稿の基礎的データを提供して頂いた香川県教育委員会の各位に感謝の意を表したい。

注

(1) 埴原和郎・小泉清隆 「歯冠近遠心径に基づく性別の判定－判別関数法による－」 『人類学雑誌』87 1979
(2) 権田和良 「歯の大きさの性差について」 『人類学雑誌』67 1959
(3) 坂田邦洋 「尾窪 熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査－埋葬－」『熊本県文化財調査報告』 第12集 熊本県教育委員会編 1973
(4) 坂田邦洋 「塚原 熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査－中世墳墓群の調査－」「熊本県文化財調査報告』 第16集 熊本県教育委員会編 1975
(5) 田添夏喜 「おさき墓地古塔群 中・近世墳墓の調査－北牟田塚墳墓－」 『熊本県文化財調査報告』 第36集 熊本県教育委員会編 1979
(6) 小浜市教育委員会 『阿納塩浜遺跡』 1972
(7) 京都市埋蔵文化財研究所 『常盤東ノ町古墳群』 1977
(8) 京都市埋蔵文化財研究所 『鳥羽離宮跡調査概要』 1981
(9) 大城康雄・松村道博 「大園山・杉谷遺跡－中世土壙墓－」 『熊本県荒尾市文化財調査報告』 第３集 1978
(10) 岩尾松美・坂田邦洋 「立石貝塚－埋葬－」 『大分県文化財調査報告 第31輯』 大分県教育委員会編 1974
(11) 河村 和 「国道９号山口バイパス朝田墳墓群II 鴻ノ峰１号墳－中世の墳墓群」 『山口県埋蔵文化財調査報告』 第33集 山口県教育委員会編 1977
(12) 小都 隆 「中世墳墓」『福礼古墳発掘調査報告』 広島県教育委員会編 1973
(13) 池田次郎 「帝釈寄倉岩陰遺跡出土の中世人骨について」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報III』 帝釈峡遺跡群発掘調査室編 1980
(14) 小都 隆 「Ｇ２－ｇ区の埋葬土壙」『草戸千軒町遺跡 1971年度発掘調査概報』 広島県教育委員会編 1972
(15) 同志社大学校地学術調査委員会 『同志社女子大学図書館建設予定地発掘調査概要』 1976
(16) 中山英司 「愛知県宝飯郡佃遺跡」 『日本考古学年報６ 昭和28年度』 1963
(17) 宮川芳照・大下 武 「人骨の出土状況」『柳が坪遺跡』 東海市教育委員会編 1971
(18) 森本岩太郎・平本嘉助 「長勝寺遺跡出土人骨について」 『長勝寺遺跡－中世鎌倉の民衆生活を探る－』 長勝寺遺跡発掘調査団編 1979
(19) 栃木県教育委員会 「赤塚遺跡」 『栃木県埋蔵文化財調査報告書』 第36集 1981
(20) 栃木県教育委員会 「県営開場整備事業地内遺跡発掘調査報告」 『栃木県埋蔵文化財調査報告書』 第27集 1979
(21) 平川昭夫 「土壙」 『陣場上・平畦遺跡』 椙野バイパス発掘調査実行委員会編 1976
(22) 五十川伸夫 「平安京・中世京都の葬地と墓制」 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター編 1981

2　下所塚の調査

下所塚は，香川県綾歌郡綾南町大字萱原字下所519番地に所在する。

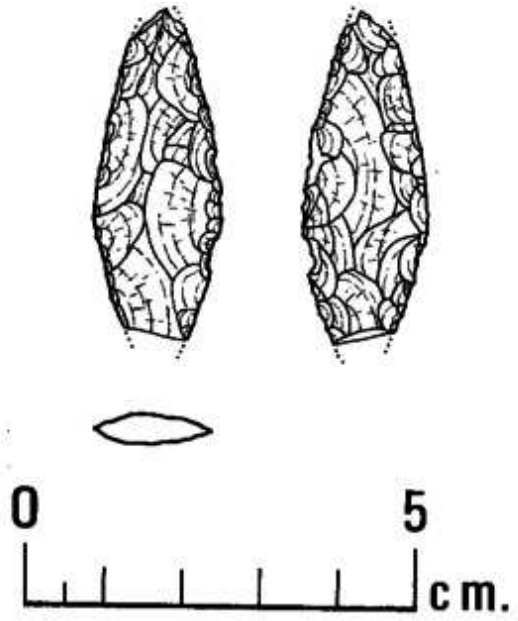
一般国道32号線綾南バイパス工事にともなう農道整備の実施にあたり，地元において塚であるとの伝承があったため，建設省四国地方建設局より調査依頼があり，昭和56年12月９日より15日までの間で，調査を実施した。西村遺跡の関連調査として報告する。

塚は，国道32号バイパス予定地の南側に位置しており，畑地と用水路間にある幅約１mの農道上にかすかな高まりをとどめるにすぎない。バイパス側，つまり北側は道路建設工事によって花崗土に覆われていた。

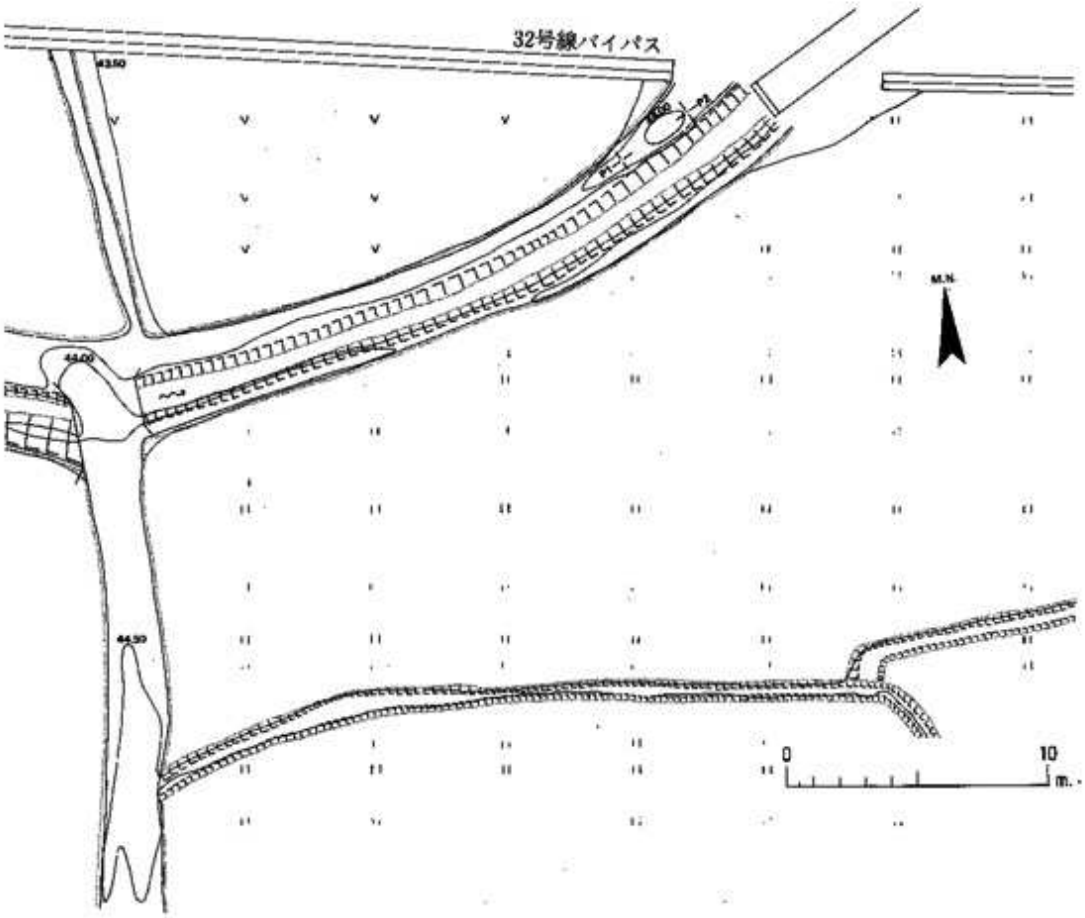
表土を除去すると，東西約２m，高さ約30mの高まりを見ることができた。南北は，用水路と畑地によって破壊されており，明確ではなかった。調査の結果，二基の土坑状の遺構を検出した。長径170cm，短径70cm，深さ２～４cmの土坑が，長径170cm，短径20cm，深さ10cmの土坑によって破壊されている。

土坑下層の調査を行なったが，赤黄褐色および，淡青灰褐色の粘質土がつづき，遺構は認められなかった。

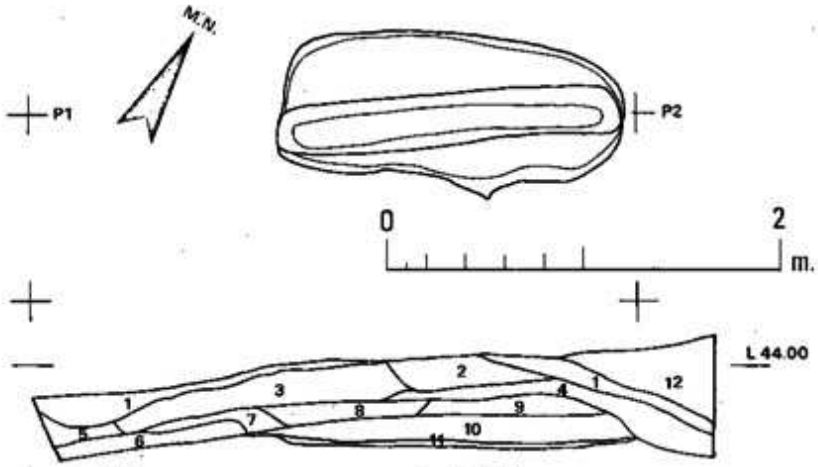
下所塚の遺構は，小規模な土坑を検出したのにとどまる。遺物は，土坑および，その下層からは出土していない。遺構面より上層で石鏃を１点（第76図）と土師器片を少量検出している。



第76図　下所塚出土石鏃実測図



第77図　下所塚地形測量図



1　褐植土
2　黄灰褐色土
3　暗黄灰褐色土（2よりやや粘質）
4　明黄灰褐色土（2より砂粒を多く含む）
5　赤黄色粘質土（黄灰色を帯びる）
6　赤黄色粘質土
7　淡灰褐色土
8　淡灰褐色土（7より灰色が濃い）
9　灰褐色土（茶褐色の斑点あり）
10　茶褐色土（内側土坑）
11　茶褐色土（外側土坑）
12　バイパス工事により花崗土

第78図　下所塚遺構・土層実測図

付　表

付表　第1表　掘立柱建物および柵列状遺構柱穴計測表

遺構番号 (cm.)	柱穴番号	(南北)直径 (cm.)	(東西)直径 (cm.)	深さ (cm.)	柱間距離 (cm.)
S16－S B01 (331×509)	1	20	18	75	331
	2	19	18	71	274
	3	20	19	79	235
	4	25	21	67	330
	5	30	27	70	241
	6	18	19	72	
S17－S B01 (418×532)	1	28	29	71	418
	2	25	23	97	270
	3	20	19	88	—
	4	—	—	—	—
	5	22	23	94	253
	6	24	24	72	
N20－S B01 (345×521)	1	34	33	90	345
	2	20	20	80	236
	3	21	14	57	285
	4	23	24	55	344
	5	26	26	66	279
	6	32	27	78	
N20－S B02 (628×393)	1	16	16	47	304
	2	28	27	93	324
	3	22	22	69	393
	4	26	30	77	333
	5	25	32	64	285
	6	30	34	94	
N23－S B01 (506×1025)	1	40	38	82	506
	2	38	38	82	204
	3	25	29	89	214
	4	33	34	81	202
	5	27	26	—	194
	6	38	37	95	211
	7	31	30	86	504
	8	22	26	67	197
	9	33	35	81	201
	10	28	27	76	208
	11	42	38	76	200
	12	42	39	75	
N23－S A01 (－×838)	1	37	43	72	203
	2	25	25	70	205
	3	28	28	75	198
	4	35	40	73	232
	5	30	24	58	
S23－S A01 (－×659)	1	36	47	110	224
	2	23	24	95	220
	3	21	22	99	215
	4	40	40	109	
S23－S A02 (－×634)	1	32	33	51	194
	2	31	28	46	213
	3	37	40	50	227
	4	36	34	55	
S31－S B01 (352×175)	1	25	23	19	352
	2	27	27	16	175
	3	27	25	12	353
	4	22	22	21	

付表　第２表　出土遺物観察表

S17－SK53

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －1	図版第 28－9	土師器小皿	A 8.0 B 1.4	普通	黄色がかった乳白色	良好	内外面ともナデ調整	

N17－P12

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －2		土師器小皿	A 9.6 B 1.3	粗 (微砂粒を含む)	橙色	不良	口径のわりに器高が低く，底部は薄い。	

S17－SK44

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －3		土師器皿	A 10.6 B 2.3	普通	淡橙色	普通	底部は厚く，口縁に向って尖っていく。	

S17－SK17

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －4	図版第 28－12	黒色土器杯	A 14.3 B 3.9	密	灰褐色	不良	全体に厚い。磨耗が激しい	

N17－P14

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －5		黒色土器椀	A 15.2 B 5.8	粗	淡赤褐色＋黒色	不良	高台が破損している。全体に薄い。 内外とも粗雑なナデを施している。	

S18－P21

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －6		黒色土器椀	C 7.4	やや粗	内 黒色 外 淡橙色	やや不良	高台は断面三角形に近く高い。外方に張り出している。	

S17－SK69

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －7		土師器椀	A 16.0 B 5.8 C 7.9	粗 (砂粒を多く含む)	淡灰白色	不良	口縁端部が肥厚している。いわゆる切り高台の状態を呈する。	磨耗

S18－SK03

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －8		土師器皿	A 10.6 B 2.1	粗	淡黄色	不良	底部から体部へ移行するあたりが厚く，体部は直線的にのびている。	
－9			A 10.8 B 2.1	やや粗	淡黄色	やや不良	口縁端部に近づくほど先細りになり，極端に薄くなる。底部中央もかなり薄い。	
－10	図版第 28－10		A 10.0 B 2.0	やや粗	淡黄色	やや不良	底部，体部が非常に厚い。磨耗が激しく調整痕は明瞭でない。	
－11		土師器杯			淡灰橙色	やや不良	底部外面に板目状圧痕をのこす。	磨耗
－12		黒色土器椀	C 6.4	粗 (微砂粒を多く含む)	橙色	普通	内面の一部に煤が付着している。高台はやや高い。	
－13	28－11		C 6.2	粗 (微砂粒を多く含む)	内 黒色 外 淡橙色	やや不良	高台は端部が押えつけられた形になっている。	
－14			C 6.0	やや粗	暗灰色	やや不良	内外面とも煤がほとんどとれている。 高台は高く，外に張り出している。	

S17－SK40

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －15		黒色土器椀	C 7.0	やや粗	内 淡橙色＋黒色 外 淡橙色	やや不良	高台は外に張り出し，口径が大きい。底部内面の見込み部分にいぶされた痕跡がみられるが，内面の他の部分は磨耗が激しいため観察できない。	

N20－SK101

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －16		瓦質土器椀	A 14.2 B 4.9 C 5.5	やや粗	暗赤褐色	やや不良	高台は外に張り出している。	

N20－SK124

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －17	図版第 28－15	黒色土器椀	A 15.2 B 5.9 C 6.2	やや粗	内 黒色 外 淡灰白色	やや不良	全体に薄く，体部は特に薄い。高台は粗雑な貼り付け。	

N20－SK120

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30 －18	図版第 28－13	土師器椀	A 14.0 B 5.4 C 5.2	普通	淡橙色	普通	内面下部にヨコナデを施す。	

N20－SK118

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －19		土師器皿	A 10.8 B 2.5	普通	淡橙色	普通	内面回転ナデ。底部から体部へ移行するあたりが特に肥厚している。	

N20－P101

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －20		土師器小皿	A 8.0 B 1.2	やや粗	淡灰橙色	普通	底部が大きく，器高が低い。	
－21		土師器椀	C 6.0	普通	淡橙色	普通	高台は低く粗雑な貼り付けである。	

N20－SK127

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第30図 －22	図版第 28－14	土師器椀	A 14.0 B 5.8 C 5.5	やや粗	灰褐色	やや不良	体部から口縁にかけて，器壁は薄い。	

S16－SK16

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第31図 －1	図版第 29－1	土師器小皿	A 7.4 B 1.2	普通	内 淡橙色 外 淡橙色	やや不良	内外面ともに磨耗しているため細部観察不能	
－2			A 8.2 B 1.0	普通	内 暗茶褐色 外 暗紫褐色	普通	平底から比較的鋭角に立上り，ゆるやかに内彎しながら口縁に至る。器壁は厚い。	
－3			A 8.0 B 1.3	普通	内 茶褐色 外 茶褐色	やや不良	内外面ともに磨耗が激しく観察不能。 平底から1㎝ほど直に立上がりあとはゆるやかに内彎しながら口縁に至る。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第31図 －4		土師器小皿	A 7.6 B 1.0	普通	内 橙色 外 橙色	やや不良	小片なので，細部観察は不能。	
－5		土師器杯	A 13.0 B 3.4	普通	内 赤味を帯びた淡橙色 外 淡橙色	普通	外面はヨコナデによる調整をうけていると思われるが，明確ではない。	
－6			A 13.0 B 3.6	普通	内 橙色 外 橙色	普通		磨耗
－7			A 14.0 B 3.7	普通	内 暗茶褐色 外 茶褐色	やや不良		磨耗
－8			A 13.2 B 3.7	やや粗 1㎜大の砂粒が多く含まれている。	やや赤味を帯びた淡橙色	普通	内外面ともにヨコナデ調整。	
－9			A 12.4 B 3.0	良好	茶褐色	普通	底部から体部にかけてゆるやかに内湾している。	磨耗
－10			A 12.0 B 3.9	普通	淡橙色	普通	平らな底部から角度をもって立ち上がりゆるやかに内湾する。内外面ともにヨコナデ調整がほどこされていたものと思われる。	
－11			A 12.8 B 2.9	良好	やや赤味を帯びた淡橙色	普通		磨耗
－12		瓦質土器椀	A 15.6 B 4.5 C 5.2	普通	内 明乳灰白色 外 明灰白色	不良	外面 回転ヘラ磨きの後ヨコナデ調整。 内面 磨耗が激しいため観察不能。	
－13			A 15.0 B 4.5 C 3.8	やや粗 砂粒を多く含む。	内 明乳灰白色 外 灰白色	不良	内外面ともにヨコナデ調整。	
－14			A 14.8 B 4.4 C 4.8	やや粗 砂粒を多く含む。	内 明灰白色 外 明灰白色	不良	内外面ともにヨコナデによる調整をほどこしていると思われるが，磨耗が激しいため細部観察は不可能。	
－15			A 14.4 B 4.0 C 5.0	やや粗 砂粒を多く含む。	灰白色	良好	内外面ともにヨコナデによる調整。	
－16			A 13.8 B 3.8 C 4.4	やや粗 砂粒を多く含む。	灰白色	普通	内外面ともにヨコナデによる調整。	
－17			A 14.0	良好	暗灰色	良好	内外面ともにヨコナデによる調整。	
－18		土師器鉢		良好	内 橙色 外 橙色	不良		磨耗
－19		土師器甕	A 30.0	粗 小砂粒を多く含む。	内 赤味を帯びた橙色 外 橙色	不良		磨耗
－20		須恵器甕	A 37.0	粗 0.5～1㎜の砂粒を多く含む。	暗灰色 (内面は若干明るい)	普通	外面 格子状の叩き目を施した後ヨコナデによる調整。 内面 ヨコナデ調整	

S16−SK15

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第32図 −1		土師器 杯	A 12.8 B 3.3	普通	淡橙色	普通		磨耗
−2		瓦質土器椀	A 12.8 B 3.3	やや粗 砂粒を含む。	内 灰白色 外 灰白色	やや不良	外面 ヨコナデ調整の後回転ヘラ磨き調整。 内面 磨耗が激しいため細部観察不能。	
−3			A 15.4 B 4.9 C 3.4	普通	内 灰白色 外 灰白色	やや不良	外面 ヨコナデ調整。 内面 荒い刷毛目で縦方向に調整がほどこされている。	
−4			A 14.4 B 4.6 C 4.4	やや粗 砂粒を多く含む。	明灰白色	不良	内外面ともにヨコナデ調整の後，回転ヘラ磨きで調整。	
−5		須恵器 甕		やや粗 砂粒を多く含む。	暗灰色	普通	内外面ともにヨコナデ調整。	
−6		瓦質土器鉢		普通	灰白色	普通	内外面ともにヨコナデ調整がほどこされている。	
−7		須恵器 鉢	A 30.0	普通	黄灰色	普通		

S16−SK18

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第32図 −8		土師器 椀	C 5.6	粗 1㎜大の砂粒を含む。	内 乳灰白色 外 乳灰白色	普通	全体が磨耗しており細部観察不能。	
−9			C 6.0	不良	内 灰白色 外 灰白色	やや不良	内面ヨコナデと思われるが磨耗が激しいため明確でない。	
−10	図版第 29−2	土師器 杯	A 16.0 B 4.0	普通	乳白色	良好	全体が磨耗しており細部観察不能。	
−11		瓦質土器鉢	A 33.6	良 砂粒を含む。	内 灰白色 外 灰白色	普通	外面 格子状の叩き目をほどこした後ヨコナデ調整。 内面 ヨコナデ調整。	
−12		須恵器 甕	A 23.4	良	内 暗灰色 外 暗灰色	良好	胴部外面に格子状叩き目あり。 肩部内面は青海波文による成形の後ヨコナデ調整がほどこされている。	
−13			A 28.0	良	暗灰色	良好	胴部外面に格子状叩き目あり。 胴部内面は青海波文による成形の後ナデ調整。	外面および口縁部内面に自然釉が認められる。

S17－P89

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －1		瓦質土器小皿	A 8.4 B 2.2	普通	青灰色	良好	内外面ともヨコナデ。 全体に丸味を帯びている。	

S17－P07

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －2	図版第 29－3	瓦質土器小皿	A 7.6 B 1.9	やや粗	暗灰白色	不良	全体的に丸味を帯びている。 口縁周縁が黒っぽい。	

S17－SK20

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －3		瓦質土器小皿	A 8.4 B 1.6	密	淡灰白色	良好	外面はヨコナデ。 内面の体部にヘラ磨きあり。	
－4	図版第 29－4	黒色土器皿	A 9.6 B 2.3	やや粗 0.2～0.3mm大の砂粒を含む。	淡灰褐色	やや不良	内外面ともヨコナデ。口縁に向かって尖っていく。口縁外周は黒っぽい。	
－5		黒色土器杯	A 13.4 B 4.1	普通	白灰色	普通	底部から体部にかけてはなだらかに丸味を帯びている。	
－6			A 14.0 B 3.4	普通	淡黒灰色	やや不良	底部はいぶされていないためか明褐色を呈している。磨耗が激しいため明確ではないが，外面はヨコナデのようである。	
－7		瓦質土器椀	A 15.0 B 5.2 C 6.2	やや密	暗灰色	良好	外面に幅の広いヘラ磨き。 高台は厚く，やや張り出している。	
－8	29－5		A 15.6 B 5.7 C 5.6	やや粗	淡灰白色	やや不良	長楕円形に歪んでいる。外面にヘラ磨きを施す。高台は高く，肥厚している。	
－9		瓦質土器鉢	A 20.4 B 6.5	密	淡黒灰色	良好	口縁直下に刺突文あり。	

S17－SK19

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －10	図版第 29－6	瓦質土器椀	A 15.0 B 5.1 C 5.2	密	黒灰色	良好	高台が非常に低い。体部外面上部に回転ナデ。	

S18－P09

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －11	図版第 29－7	黒色土器椀	A 16.0 B 5.5 C 5.1	やや粗	淡褐色	やや不良	体部外面の下部に回転ナデ。内面はヨコナデ。タテナデの部分もある。内外面とも黒色を呈す。	

S16－P36

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －12	図版第 29－9	瓦質土器小皿	A 9.2 B 2.2	やや密	明灰白色	普通	体部から口縁にかけ直線的にのびる。内外面ともナデ。内外面とも大半が黒っぽい。底部外面に板目状圧痕。	
－13			A 9.2 B 2.1	やや密	灰白色	普通	底部から体部い口縁部にかけて丸味がある。内外面とも回転ナデ。内面と口縁部外面が黒っぽい。	
－14		土師器 椀	A 15.0 B 4.4 C 5.0	密	灰白色	やや良好	外面回転ナデ。口縁周縁は黒い。	

S18－P15

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －15		土師器小皿	A 9.2 B 1.4	普通	淡灰褐色	普通	底部は薄い。	
－16		瓦質土器小皿	A 8.4 B 1.2	やや粗 砂粒を少量含む。	暗青灰色	普通	内外面ともナデ。口縁端部はやや尖がりぎみ。	
－17		瓦質土器椀	A 16.0 B 4.8 C 5.2	やや密	灰白色	良好	体部外面は回転ナデのあとヘラ磨き。高台はやや外へ張り出しぎみ。口縁周縁は黒っぽい。	

S17－P68

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －18	図版第 29－10	土師器小皿	A 8.6 B 1.2	やや良好	淡橙色	良好	体部は丸味をもつ。底部外面に板目状圧痕。	
－19			A 9.0 B 1.5	やや粗	橙色	普通	全体に厚い。体部から口縁にかけてやや外反しながら広がっている。	
－20	29－8	瓦質土器椀	A 15.6 B 5.2 C 5.5	普通	暗灰白色	良好	底部内面にタテナデ。外面回転ナデ。口縁周縁は黒っぽい。高台は断面三角形。	

S17－SK24

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －21		瓦質土器小皿	A 8.0 B 1.2	やや密	暗緑黒色	普通	底部中央が薄い。	

S18－SK04

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －22		瓦質土器小皿	A 8.4 B 1.3	やや密	黒色	普通	内外面ともにナデ調整。器形が不定形であるが，乾燥・焼成時の所産と思われる。	

S17－P10

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －23	図版第 29－11	土師器小皿	A 8.2 B 1.3	やや粗	淡赤橙色	普通	全体に分厚く，浅い。体部はたちぎみ。体部外面回転ナデ。底部外面に板目状圧痕。	

S17－P05

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －24		土師器小皿	A 8.6 B 1.5	普通	灰褐色	普通	口縁部は肥厚している。	

S17－P33

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －25		土師器小皿	A 8.8 B 1.3	やや粗	淡橙色	やや良好	体部外面回転ナデ。	

S17－P111

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －26		瓦質土器杯	A 14.0 B 3.7	普通	灰色	やや良好	底部から体部への移行は鋭角的。底部外面に板目状圧痕。内外面とも黒っぽい部分あり。	

S17－P112

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第33図 －27		土師器 椀	A 14.0 B 4.5 C 5.2	粗 0.5～0.8mm大の砂粒含む。	濃橙色	普通		

N20－SK28

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －1	図版第 29－12	土師器小皿	A 8.2 B 1.3	普通	淡橙色	やや不良	体部に比べて底部が薄い。	
－2			A 8.2 B 1.3	普通	淡黄橙色	普通	内面ヨコナデ。全体に厚く，体部に稜線が明確に認められる。	
－3		土師器 杯	A 13.2 B 3.9	密	淡明赤橙色	良好	内外面とも回転ナデで丁寧な仕上がり。底径が小さく口縁まで直線的にのびる。	
－4	29－14		A 14.4 B 4.3	やや密	赤褐色	普通	底部から口縁部にかけて丸味がある。内外面とも回転ナデ。	
－5			A 14.6 B 4.5	やや密	灰赤褐色	良好	内面回転ナデ。	
－6			A 14.2 B 4.6	普通	灰赤褐色	やや良好	器高は高い。体部から口縁にかけて直線的にのびている。	
－7	29－13	瓦質土器椀	A 16.0 B 5.0 C 5.3	密	暗青灰色	良好	外面にヘラ磨き。高台は低い。	焼成は非常に良好で，須恵器のような状態を呈している。
－8	29－15	須恵器 四耳壺	A 10.8	密	灰黒色	良好	体部外面にタタキ目。体部上部から口縁部にかけて，内外面とも回転ナデを施す。頸部内面直下に指頭痕あり。	

N20－SK01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －9	図版第 30－1	土師器小皿	A 7.8 B 1.3	普通	淡橙色	やや良好	内面底部付近にナデ痕あり。	
－10	30－2		A 8.4 B 1.4	普通	淡橙色	普通		
－11			A 8.2 B 1.4	普通	赤褐色	普通	底部から口縁へやや外反ぎみに広がる。体部外面にかすかに回転ナデ痕が残る。	
－12			A 8.4 B 1.6	普通	淡橙色 （赤味がある）	やや不良	比較的肥厚している。体部から口縁部にかけてやや立ちぎみ。	

N20－SK02

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －13	図版第 30－4	土師器小皿	A 8.0 B 1.2	普通	淡黄橙色	普通	器高は低く，体部は広がりながら立ちあがる。	
－14	30－3		A 8.2 B 1.4	粗 微砂粒を含む	赤褐色	不良	口縁にかけてやや外反ぎみではあるが，体部自体はたちぎみ。成形・調整は雑。	
－15			A 8.2 B 1.3	普通	淡橙色	普通	底部から体部への移行部分に段があり，口縁にかけて丸味をもって広がる。	
－16		瓦質土器小皿	A 9.0 B 1.9	やや密	黒色	やや良好	底部から体部にかけて丸味を帯びている。内面と外面口縁部周縁の一部が黒っぽい。	
－17	30－5	土師器 杯	A 14.0 B 3.3	やや密	黄灰色	良好	外面の一部に明確でないが回転ナデの痕跡あり。	

N20－SK03

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －18	図版第 30－6	土師器小皿	A 8.6 B 1.4	粗 (微砂粒を含む)	橙色	普通	底径が大きく，体部は直立ぎみ。口縁端部は丸くおさめている。	
－19			A 8.2 B 1.4	普通	淡橙色	やや良好	内外面とも丁寧なナデ。体部はやや直立ぎみ。	
－20	30－7		A 8.4 B 1.4	普通	淡赤褐色	良好	口縁に向かって，外反ぎみに広がっている。全体に厚い。	
－21	30－8	瓦質土器小皿	A 9.4 B 1.1	やや密	灰黒色	普通	全体に薄手で，形に歪みがある。外に広がり，扁平な感じをうける。	
－22	30－9	瓦質土器椀	A 14.8 B 5.9 C 6.2	密	灰黒色	やや良好	外面にヘラ磨き。高台はやや外へ張り出している。 内面と外面の一部が黒っぽい。	

N20－SK05

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －23	図版第 29－16	黒色土器杯	A 14.0 B 3.3	普通	黒色	やや不良	底部内面にタテナデ。	

N２０－Ｐ４４

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －24	図版第 30－10	土師器小皿	A 8.0 B 1.5	普通	淡橙色	普通	内外面とも回転ナデ。底部外面に板目状圧痕。	
－25			A 8.6 B 1.5	普通	淡橙色	普通	底部から体部への移行はなだらか。内外面ともナデ。	

N２０－Ｐ４７

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －26		土師器小皿	A 8.2 B 1.3	普通	淡橙色	普通	明確ではないが，内面回転ナデ。器高は低い。体部から口縁部へは外反ぎみ。	
－27	図版第 30－11		A 8.2 B 1.1	普通	淡橙色	普通	内外面とも粗雑なナデ調整。器高は低い。	

N２０－Ｐ４０

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －28	図版第 30－12	土師器小皿	A 8.2 B 1.5	やや密	淡橙色	良好	内外面とも丁寧な回転ナデ。底部は厚い。底部外面に板目状圧痕。	

N２０－Ｐ２０

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －29	図版第 30－13	瓦質土器小皿	A 9.0 B 2.0	普通	黒灰色	普通	内外面とも回転ナデ。 内外面とも黒っぽい部分あり。	

N20－FP04

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第34図 －30		土師器小皿	A 8.0 B 1.3	密	淡橙色	良好	内外面とも回転ナデ。底部から体部に至るところに明確な段あり。	
－31		瓦質土器椀	A 15.4 B 5.2 C 5.4	普通	暗灰色	不良	内外面とも回転ナデ。外面は回転ナデの後にヘラ磨きを施している。	

S20－SK37

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第35図 －1	図版第 30－14	土師器小皿	A 8.4 B 1.4	普通	暗橙色	やや不良	体部から口縁にかけ，やや外反ぎみ	
－2			A 8.8 B 1.4	普通	淡橙色	やや不良	全体的に薄い。	磨耗
－3		土師器杯	A 14.0 B 4.2	普通	淡橙色	普通	体部から口縁部にかけて外反している。内外面とも回転ナデ。	
－4	30－15		A 14.0 B 3.6	普通	淡橙色	普通	外面回転ナデ。	
－5			A 14.4 B 3.8	普通	淡橙色	普通	内外面とも粗雑なナデ調整。	
－6			A 14.6 B 3.7	粗 (微砂粒を含む)	淡橙色	普通	内外面とも回転ナデ。底部はかなり分厚い。	
－7	30－17	瓦質土器椀	A 15.2 B 5.4 C 5.0	普通	灰白色	良好	内外面ともヘラ磨き。 口縁周縁は黒っぽい。	
－8			A 14.6 B 5.4 C 5.7	やや密	灰白色	良好	内外面とも回転ナデ。特に内面は丁寧。 内外面の一部が黒っぽい。	
－9	30－16		A 15.2 B 5.7 C 5.5	やや密	灰白色	良好	内面不規則なヘラ磨き。外面は回転ヘラ磨きが認められる。 口縁外周は黒っぽい。	
－10			A 15.6 B 5.4 C 7.0	やや粗	暗白灰色	不良	一部の焼成が悪く，赤褐色の部分が認められる。外面ヘラ磨き。 口縁周縁の一部がぼんやりと黒っぽい。	
－11	30－18	土師器鉢	A 24.0 B 10.3	普通	淡橙色	やや良好	内外面とも回転ナデ。	

S19E－SK20

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第35図 －12		土師器小皿	A 8.5 B 1.4	普通	乳灰白色	やや不良	口縁部にかけてやや外反ぎみに広がっている。	
－13			A 8.4 B 1.5	普通	乳灰白色	やや不良	体部から口縁部にかけて外反ぎみ。器形の歪みは乾燥・焼成時のものであろう。	
－14		土師器杯	A 15.0 B 4.3	粗 (粗砂粒を含む)	乳灰白色	やや不良	体部の器壁は薄い。	
－15			A 14.0 B 4.0	粗 (粗砂粒を含む)	乳灰白色	やや不良	底径がやや小さい。	
－16	図版第 30－19		A 14.4 B 4.1	普通	乳灰白色	良好	口縁部はやや丸味を欠く。	
－17	30－20	瓦質土器椀	A 14.0 B 5.0 C 5.5	やや密	灰白色	良好	内面に不規則なヘラ磨きあり。 外面ヘラ磨き。 内外面とも黒っぽい部分が認められる。	

N20－SK17

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第35図 －18	図版第 31－1	瓦質土器椀	A 15.0 B 4.9 C 5.6	密	青灰黒色	良好	外面回転ナデ。高台は低い。口縁周縁は黒っぽい。	
－19			A 14.8 B 4.8 C 6.2	普通	灰白色	やや良好	底部と体部は比較的はっきりした稜線で画されている。口縁周縁は黒っぽい。	
－20			A 14.4 B 4.8 C 5.6	普通	黄灰色	やや不良	外面は回転ナデ。高台は低く，やや外方に張り出すような形態を呈す。	
－21			A 14.4 B 4.5 C 5.3	密	青灰黒色	良好	口縁にかけてやや外反ぎみである。口縁周縁は黒っぽい。	

N20－SK15

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第36図 －1		瓦質土器椀	A 15.4 B 5.1 C 5.6	普通	黒灰色	普通	内面には不規則なヘラ磨きがあり，外面は回転ヘラ磨き。	
－2	図版第 31－2		A 15.6 B 5.4 C 6.0	普通	黒灰色	普通	体部外面下部にヘラ磨き。 内外面の大半が黒っぽい。	

N20－SK14

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第36図 －3	図版第 31－3	土師器椀	A 15.6 B 5.2 C 6.4	普通	淡橙色	良好	口縁直下には明確な回転ナデの痕跡あり。	

N20－SK25

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第36図 －4	図版第 31－4	黒色土器杯	A 15.4 B 3.6	普通	黒色	やや不良		

N20－SK24

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第36図 －5		瓦質土器椀	A 15.6 B 5.2 C 6.6	普通	淡灰黒色	やや不良	外面ヘラ磨き。高台は不定形である。内外面は黒っぽい。	

N20－SK26

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第36図 －6		瓦質土器椀	A 15.6 B 5.4 C 6.0	普通	白灰色	やや良好	外面ヘラ磨き。 体部は比較的丸味をもっている。 口縁周縁は黒っぽい。	

N17－SK11

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －1		須恵器甕		普通	黒灰色	普通	体部の全面に叩き目あり。	自然釉が認められる。

N20－SK126

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －2		須恵器壺	A 14.4	密	青灰色	良好	内面回転ナデ。頸部直下に叩きのあと回転ナデ調整。	

S18－SK29

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －3		須恵器甕	A 24.0	密	濃灰色	良好	内面回転ナデ。頸部外面に叩き目あり。	

N20－SK27

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －4		土師器鍋	A 31.0					
－5			A 32.7					

N20－SK113

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －6		瓦質土器鉢	A 31.4 B 10.2	やや密				

S17－SK34

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －7		瓦質土器鉢	A 27.3					

S16－PI9

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －8		瓦質土器 片口鉢	A 26.2 B 11.1	普通	淡黄灰色	普通	外面は回転ナデ。口縁端部直下は強く圧力が加えられたためか,少し窪みぎみとなっている。	

S16－SK33

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －9		瓦質土器鉢	A 27.2 B 8.3	普通	明灰白色	普通	底部内面にタテナデ。体部内面上部にヘラ削り調整。 体部外面中央に叩き目が残り上部に回転ナデ調整が認められる。	

S16－SK28

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －10		瓦質土器壺	A 28.0	密	灰黒色	やや良好	頸部直下から体部にかけて全面に叩き目。体部内面は回転ナデ。	

N20－SK23

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第37図 －11		瓦質土器 大甕		やや粗	暗黒灰色	普通	体部全面に格子状の叩き目あり。	

N23－SK01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第38図 －1		土師器小皿	A 8.8 B 1.4	密 細砂粒を若干含む	茶色がかった乳白色	良好	体部は「く」字形に立ちあがり，端部は厚い。体部内外面とも回転ナデ調整。	
－2			A 7.8 B 1.3	やや密 細砂粒を含む	内 赤茶色がかった乳白色。 外 乳白色をベースにするが部分的に赤い。	良好	体部はやや外反ぎみに立ちあがる。 体部内外面とも回転ナデ調整。 底部内面仕上げナデ。	
－3	図版第 31－6		A 7.8 B 1.5	やや密 小砂粒を含む	褐色がかった乳白色。内外面とも部分的に黒っぽい。	良好	底部は成形時に粘土円盤を付着させたため，同器種の一般例と比べて著しく厚い。体部外面回転ナデ調整。若干焼きひずみが認められる。	
－4			A 8.1 B 1.3	密	赤茶色がかった乳白色。	良好	体部はやや外反ぎみで内外面とも回転ナデ調整。薄手である。	
－5			A 10.7 B 1.7	やや粗 小砂粒を含む	乳白色	良好	体部は底部からなだらかに立ちあがり，口縁端部は丸い。体部内面回転ナデ調整。	やや磨耗
－6	31－7	土師器 脚付皿	A 10.2 (B 1.8 以上)	やや密	乳白色	良好	中央に径5.5cmの穿孔。皿部分の体部は若干内彎ぎみに浅い角度で立ちあがる。体部内外面とも回転ナデ調整。	
－7		土師器杯	A 14.6 B 3.5	密 細砂粒を若干含む	やや褐色がかった乳白色	良好	体部内外面とも回転ナデ調整。 (外面のナデは粗い。)	
－8			A 13.2 B 3.5	密 小砂粒を含む	乳白色	良好	体部外面は滑らかさを欠き明瞭に段を有す。内外面とも回転ナデ調整。	
－9		土師器椀	A 14.0 B 4.3 C 4.9	やや粗 小砂粒を多く含む。	やや黄色がかった乳白色（外面部分的に赤い）	良好	内外面とも回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ。	瓦質土器の可能性あり。
－10			A 14.0	やや密 細砂粒を若干含む。	やや赤味を帯びた乳白色	良好	内外面とも回転ナデ調整。内面は五周以上にわたって回転ヘラ磨きを施している。	瓦質土器の可能性あり。
－11			A 14.3	やや密	やや褐色がかった乳白色（内面はやや明るい）	良好	端部は若干面取りを意識している。	瓦質土器の可能性あり。
－12			C 4.6	密	内 白っぽい茶褐色 外 灰色	良好	内面は10条/cmの細かい刷毛目と，やや粗い刷毛目が交差している。	瓦質土器の可能性あり。
－13			C 4.7	密	内 灰色 外 白っぽい茶褐色	良好	断面四角形貼り付け高台。口縁端部は平ら。 内面は磨耗しているが7条/cmの粗い刷毛目が認められる。	黒色土器の可能性あり。
－14			C 4.7	やや密 細砂粒を含む。	黒灰色	普通	断面四角形貼り付け高台。	黒色土器の可能性あり。磨耗。
－15			C 4.9	やや密 細砂粒を若干含む。	内 やや黒っぽい灰色 外 やや暗い茶褐色	普通	貼り付け高台は低く丸味を帯びている。内面は粗い刷毛目が認められる。	黒色土器の可能性あり。磨耗。
－16			C 5.3	やや密 小砂粒を含む。	やや赤味がかった乳白色	良好	貼り付け高台は，唯一しっかりしたつくりのものである。外方に長く踏み出し，口縁端部はやや平ら。 底部内面仕上げナデ。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第38図 −17		土師器椀	A 15.0 B 5.5 C 4.9	密	黒っぽい茶褐色	やや不良 軟質	高台はやや外反ぎみで小さい。 内面は不定方向ナデ調整。外面は回転ナデ調整。	黒色土器の可能性あり
−18			A 14.6 B 4.5 C 4.9	密 細砂粒を含む。	内 黒灰色の部分とやや赤っぽい部分がある。 外 やや暗い茶褐色	普通	底部から胴部中ほどにかけて器壁が厚い。口縁端部近くで再び肥厚する。内面は12条／cmの細かい刷毛目が不定方向に施される。外面は回転ナデ調整。	黒色土器の可能性あり 外面磨耗
−19			A 15.2 B 4.8 C 5.7	やや密 細砂粒を含む。	内 灰白色をベースとしているが部分的に黒っぽいところと赤味がかったところがある。 外 黒灰色。(部分的に白っぽい。)	普通	貼り付け高台は部分によって断面形が異なる粗雑なつくりである。 内面は回転ナデの後，不定方向ナデ調整。外面は回転ナデ調整。	法量Cは反転復原による誤差を含んでいる。 黒色土器の可能性あり
−20			A 14.6 B 4.7 C 7.3	密 細砂粒を含む。	黒灰色	普通	極めて特異な形態である。高台は大きく外方に踏み出している。 底部内面には刷毛目の起点となった板状工具の端が直線状に刻まれている。外面回転ナデ調整。	黒色土器の可能性あり やや磨耗
−21		土師器鉢		やや粗 小砂粒を比較的多く含む。	茶色がかった乳白色	良好	底部は平らで「く」字形に折れて，体部に至る。	磨耗
−22		土師器すり鉢	A 29.5 B 11.5	粗 小砂粒を多く含む。	茶褐色（内外面とも口縁部付近は黒っぽい。）	普通	器壁はほぼ9㎜の一様な厚さで，口縁部はやや内彎気味である。 櫛描の擂目は4条を単位としているが，一部3条の部分がある。 外面は回転ナデ調整が一部認められる。	磨耗
−23		土師器土鍋	A 34.0	やや密 細砂粒を多く含む。	やや白っぽい茶褐色	普通	口縁部はやや鈍く外反しほぼまっすぐのびている。 口縁部外面は回転ナデ調整，胴部外面に指頭痕が認められる。	
−24		土師器壺	A 23.9	やや密 やや大粒の砂粒を多く含む。	やや暗い乳白色	良好	口縁部は鋭く「く」字形に折れ，端部の面取りは丁寧である。口縁部内外面ともに回転ナデ調整。 胴部内面は不定方向ナデ調整。	
第39図 −1		瓦質土器小皿	A 7.2 B 1.5	やや密 小砂粒を含む。	灰白色（内面はやや黒っぽい。）	普通	体部はやや外反し，口縁端部は丸い。内外面とも回転ナデ調整。 底部内面仕上げナデ。	
−2			A 8.3 B 1.5	やや密 細砂粒を含む。	白灰色	良好	体部はなだらかに立ちあがり器壁は薄い。 内外面とも回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ。 口縁端部は内外面とも黒っぽい。	
−3			A 7.9 B 1.7	密 細砂粒を若干含むが堅緻。	青灰色	良好	薄手で滑らかな器壁をもつ。 内外面とも回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ。 口縁周縁は黒っぽい。	
−4	図版第 31−8		A 7.9 B 1.9	やや密 大粒の砂粒も含んでいる。	灰白色	良好	厚手でやや深い。 内外面とも回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第39図 －5		瓦質土器小皿	A 8.6 B 1.5	やや密 細砂粒を含む。	青灰色	良好	内外面とも回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ。 口縁周縁は黒っぽい。	
－6			A 7.9	やや密 細砂粒を含む。	青灰色	普通	体部はやや内彎気味に立ちあがり，口縁端部は丸い。 内外面とも回転ナデ調整。 口縁周縁は黒っぽい。	
－7			A 8.5	密 細砂粒を若干含む。	灰白色	普通	体部は若干内彎気味。 内外面とも回転ナデ調整。口縁部外面の一部がうすく黒味を帯びている。	
－8		瓦質土器椀	C 5.2	密 細砂粒を若干含む。	内外 うすい茶灰色若干燈色がかった灰色	普通	貼り付け高台は断面四角形。 底部内面は不定方向ナデ調整。	
－9			C 6.0	やや密 小砂粒を含む。	灰白色	普通	高台が低くすぎるため，安定性を欠く。 貼り付け高台は大きく雑なつくりである。 内面は一定方向ナデ調整。 口縁外周がうすく黒味をおびている。	
－10			C 4.5	やや密 小砂粒を多く含む。	灰白色	普通	貼り付け高台は断面三角形で，端部は丸味が少ない。 器壁は滑らかさを欠く。 内面は一定方向ナデ調整。	
－11			C 5.4	密 小砂粒を若干含む。	灰白色	普通	貼り付け高台はやや外方に張り出し断面三角形を呈す。 底部内面は一定方向ナデ調整。	
－12			C 5.3	やや密 小砂粒を若干含む。	灰白色	普通	断面三角形の貼り付け高台は，小さくシャープである。 内面は粗い回転ナデの後，回転ヘラ磨きを施す。底部内面は不定方向ナデ調整。	
－13			A 15.3	やや粗 比較的大粒の砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨きを施し，さらに不定方向ナデ調整。 体部内面にはヘラ状工具の痕跡が認められる。 口縁内外面は黒っぽい。	
－14			A 14.9	密 細砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨きを施す。部分的に一定方向ナデ調整が認められる。外面は回転ナデ調整。口縁周縁は黒っぽい。	
－15			A 14.0	密 小砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨きを施し，さらに不定方向ナデ調整。(ヘラ磨きは不明瞭) 口縁周縁は内外面とも黒っぽい。	
－16			A 14.2	やや密 細砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨きを施し，さらに不定方向ナデ調整。外面は回転ナデ調整。口縁周縁は内外面ともに黒っぽい。	
－17			A 15.1	やや密 細砂粒を多く含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨きを施している。ヘラ磨きのうえには一定方向の弱いナデが認められる。 外面は回転ナデ調整。 口縁周縁は内外面とも黒っぽい。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第39図 −18		瓦質土器椀	A 15.7 B 5.2 C 5.0	やや密 細砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨きを施し，さらに一定方向ナデ調整。 外面は回転ナデ調整。 口縁部付近に一部焼きひずみがあり，口縁周縁は内外面ともに黒っぽい。	
−19			A 15.1 B 4.2 C 5.8	密 細砂粒を若干含む。	青灰色	良好	内面は不定方向ナデ調整。外面は回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨き調整。 高台は先端がやや外反する。 口縁周縁は黒っぽい。	
−20			A 14.3 B 4.8 C 4.6	密 細砂粒を若干含む。	青灰色	良好	内面は粗い回転ナデ調整が口縁部付近に一部観察されるがほとんどが一定方向ナデ調整によって消されている。 外面回転ナデ調整。 口縁周縁は黒っぽい。	
−21			A 15.5 B 4.4 C 4.5	やや密 小砂粒を含む。	灰白色（外面は体部下半から底部にかけて赤茶色を帯びている。）	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨き調整，さらに一定方向ナデ調整が施されている。 外面は回転ナデ調整。 口縁周縁は黒っぽい。	
−22			A 15.0 B 5.5 C 5.4	やや密 細砂粒を多く含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨き調整，さらに一定方向ナデ調整が施されている。 外面回転ナデ調整。 口縁周縁は黒っぽい。	
−23			A 14.4 B 4.6 C 5.0	やや密 小砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨きを施している。体部下半から底部にかけては滑らかな壁が形成され，一定方向ナデ調整が認められる。長さ約3cmのヘラ疵が4ケ所施されている。外面は回転ナデ調整。 口縁周縁はうすく黒味を帯びている。	
−24			A 14.8 B 4.4 C 5.4	密	青灰色	良好	釘状の工具で木の葉を思わせる線刻が施されているが，部分的に不明瞭。内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらに一定方向ナデ調整が施されている。外面に回転ナデ調整。やや黒っぽい部分があるが体部の色調と融合し明瞭でない。	
−25			A 15.0 C 5.0	やや密 小砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整の後，ヘラ磨き調整，さらに一定方向ナデ調整を施す。外面回転ナデ調整。	高台が底部中央からずれたため，腰部に傾きが生じた。
−26			A 14.0 B 5.0 C 5.2〜5.7 （楕円形）	密 砂粒をほとんど含まず。	やや明るい灰白色（部分的に赤色を帯びている。）	普通	底部外面に6条／cmの板目圧痕がある。内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨き調整を施したものと思われるが磨耗が進んでおり詳細不明。 外面は回転ナデ調整。	
−27			A 14.2 B 4.6 C 4.9	密	青灰色	良好	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨き調整，さらに底部中央から放射状にナデ調整を施している。底部は仕上げナデ。 外面は回転ナデ調整。 口縁周縁はうすく黒味を帯びている。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第39図 −28		瓦質土器椀	A 15.0 B 4.7 C 5.6	密 砂粒をほとんど含まず。	内外 橙がかった灰色 灰白色（部分的に赤っぽいところもある。）	普通	内面体部上半は粗い回転ナデ調整。下半から底部に至る器壁は滑らかで，底部中央を中心に断続的な刷毛目の手法がみられる。外面に回転ナデ調整。	
−29			A 14.8 B 4.7 C 4.9	やや密	灰白色	普通	内面口縁部付近は刷毛目(?)の起点となった工具の痕跡が直線状に刻まれている。内面は粗い回転ナデ調整の後，不定方向にナデ調整を施す。一部に刷毛目と考えられる痕跡が認められる。外面は回転ナデ調整。	
−30			A 14.8 B 4.6 C 4.2	やや密 小砂粒を比較的多く含む。	青灰色	良好	断面四角形貼り付け高台は他と比べて口径が小さい。 内面は粗い回転ナデ調整の後回転ヘラ磨き調整。体部下半から底部にかけて疎密多様な刷毛目による調整がみられる。外面は回転ナデ調整。	
第40図 −1		瓦質土器すり鉢（片口）	A 32.2	やや粗 大粒小粒の砂粒を含む。	灰白色（内外面とも部分的に黒っぽい。）	普通	器壁は口縁部付近で肥厚し，やや内彎気味に終っている。 櫛描の擂目は4条を単位としている。内面は回転ナデ調整が認められる。	
−2		瓦質土器鉢	A 27.0	やや密 小砂粒を若干含む。	内 黒灰色 外 灰白色	普通	口縁端部は面取りし，丁寧に仕上げている。 内外面とも回転ナデ調整。 口縁周縁は黒っぽい。	
−3			A 21.0	やや密 小砂粒を若干含む。	灰白色（部分的に黒くなっている。）	良好	口縁部の成形は2同様丁寧である。内外面とも回転ナデ調整。	
−4				やや密 小砂粒を多く含む。	灰白色（部分的に黒っぽい。）	普通	体部は「く」字形に立ちあがる。底部と体部は器厚がほぼ等しい。底部内面に粗いナデ調整が認められるがその他の部分の調整は不明である。	
−5			A 21.9	粗 大粒の砂粒を多量に含む。	青灰色	普通	口縁端から2.5cmほど下がったところに不明瞭ながら段を有する。 厚手で丸味を帯びている。 内面口縁付近と外面は粗い回転ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
−6		瓦質土器壺		やや密 小砂粒を若干含む。	青灰色	良好	底部は外反して終っており先端は未調整。 内面底部付近に回転ナデ調整がみられる。外面は格子状叩き目のうえを一部ヘラ磨きで消している。 底部未調整。	
−7	図版第31−5	須恵器椀	A 14.4 B 4.7 C 4.3	やや密 細砂粒を少し含む。	青灰色	良好	内面粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨き調整。さらに一定方向に細かいナデを施している。 外面は回転ナデ調整。 口縁外周は黒っぽい。	
−8		須恵器壺	A 24.8	やや密 大粒の砂粒を含む。	青灰色	良好	口縁部は外反し，端部は平ら。 内外面とも回転ナデ調整。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第40図 －9		土師器鍋	A 33.0	やや密 小砂粒を多く含む。	明るい茶褐色（外面は部分的に黒っぽい。）	普通	体部から口縁部にかけて緩やかに彎曲し，口縁部はまっすぐに伸び，端部は丸い。 口縁外面は格子状タタキが消されずに残っている。 外面は回転ナデ調整。	

S16－SD02

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第41図 －1		土師器小皿	A 7.7 B 1.0	普通	橙色	良好	ヨコナデ	
－2			A 7.8 B 1.7	普通	橙色	普通		磨耗
－3		瓦質土器小皿	A 8.4 B 1.9	普通	灰色	普通		
－4		土師器杯	A 12.5 B 3.1	普通	橙色	良好	やや丸味をもった底より外反気味に立ち上がる。ヨコナデ。	
－5		瓦質土器椀	A 14.0 B 4.5 C 4.2	良好	灰色	良好	口縁部周縁は黒っぽい。 内面を粗い刷毛で調整。	

S17－SD02

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第41図 －6	図版第 24－1	土師器小皿	A 8.3 B 1.4	良好	淡橙色	普通	体部途中で屈曲し，外反。	磨耗
－7		瓦質土器小皿	A 8.3 B 1.4	良好	内 灰黒色 外 灰色	普通	体部外面に黒っぽい部分が認められる。	磨耗
－8			A 9.0 B 2.3	不良	灰白色	不良		磨耗
－9	24－2	土師器椀	A 13.2 B 4.0	普通	淡黄色	普通	ヨコナデ調整	磨耗
－10	24－3	瓦質土器椀	A 13.8 B 5.3 C 4.9	良好	黄灰色	良好	ヨコナデ	本来，瓦質土器であろうが，土師質を呈す。
－11			A 14.7 B 4.7 C 5.2	良好	灰色	良好	ヨコナデ	
－12		土師器鍋	A 39.5 B 16.3	普通	茶褐色	普通	口縁部周辺と体部下半に格子状の叩き目あり。火をうけている。	

S17－SD06

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第41図 －13	図版第 24－7	土師器小甕	A 3.4 B 3.5	普通	淡黄色	良好	ヨコナデ	
－14	24－8		A 3.6 B 2.9	普通	淡黄色	良好	ヨコナデ	
－15		土師器小皿	A 7.9 B 1.5	普通	淡黄色	普通		磨耗
－16			A 8.5 B 1.4	普通	淡黄色	普通	ヨコナデ	磨耗
－17	24－5	土師器有脚杯	A 14.7 B 6.0 C 9.1	普通	淡黄色	普通	ヨコナデ。通例の杯に脚をつける。脚は先端部近くで外方に踏み出す。	
－18	24－9	瓦質土器椀	A 14.6 B 4.9 C 5.5	普通	内 灰黒色 外 灰白色	普通	内面と口縁外周が黒っぽくなっている。外面に回転ヘラ磨き。	
－19	24－6	瓦質土器杯	A 15.4 B 4.5	普通	灰白色	普通	外面に回転ヘラ磨き。	
－20	24－4	瓦質土器小皿	A 9.0 B 1.9	普通	灰黒色	普通	外面の上半部に回転ヘラ磨き。	
－21	24－10	瓦質土器鉢	A 27.4 B 10.0				口縁外周に格子状叩き目あり。ヨコナデ	

N20－SD06

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第42図 －1		土師器小皿	A 8.1 B 1.1	普通	橙色	普通	ヨコナデ	
－2			A 8.0 B 1.3	普通	内 暗橙色 外 灰橙色	普通	ヨコナデ。	
－3			A 8.4 B 1.6	普通	茶褐色	普通	ヨコナデ。	
－4			A 8.0 B 1.7	普通	淡黄灰色	普通	ヨコナデ	
－5		土師器杯	A 13.5 B 3.3	不良	内 淡橙色 外 橙色	良好	平坦な底部より鋭角に体部にいたる。比較的分厚い。ヨコナデ。	
－6	図版第 24－11		A 14.7 B 3.4	普通	内 淡橙色 外 黄灰色	普通	ヨコナデ	
－7		土師器椀	A 14.7 B 4.9 C 6.7	普通	淡黄色	普通	外面は回転ヘラ磨き。	
－8	24－12	黒色土器椀	A 15.7 B 5.1 C 5.7	普通	黄褐色	普通	口縁内縁に煤が付着。外面に回転ヘラ磨き。	
－9	24－13	瓦質土器椀	A 14.8 B 5.4 C 5.5	普通	灰白色	普通	外面はヨコナデののち回転ヘラ磨き。内面は回転ヘラ磨き。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第42図 −10		瓦質土器椀	A 15.2 B 5.5 C 5.9	普通	黒灰色	普通	器壁表面は全面が黒灰色を呈する。外面は回転ヘラ磨き。内面も一部不規則なヘラ磨き。	
−11	図版第 24−14		A 15.3 B 5.1 C 5.1	普通	灰色	普通	外面回転ヘラ磨き。	

N20−SD02

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第42図 −12	図版第 25−1	土師器小皿	A 8.2 B 1.7	普通	淡橙色	普通	体部途中で屈曲。ヨコナデ。平らな底に板目状圧痕あり。	
−13	25−2		A 8.1 B 1.3	良好	淡橙色	良好	やや丸味をもって底より体部に至る。底部外面に板目状圧痕。	
−14			A 8.6 B 1.1	普通	淡橙色	普通	ヨコナデ	
−15	25−3	瓦質土器小壺	A 3.3 B 5.2	普通	灰色	普通	底部の仕上げは粗雑。体部に一部ヘラ磨きを施す。	
−16	25−4	土師器杯	A 13.8 B 3.6	普通	黄灰色	普通	平底よりやや丸味をもって口縁部にいたる。内外両面に一部煤が付着。ヨコナデにより調整。底部外面に板目状圧痕。	
−17	25−5		A 14.8 B 3.5	良好	橙色	普通	平底より鋭く立ち上がる。ヨコナデにより調整。	
−18	25−6	瓦質土器椀	A 14.9 B 5.2 C 5.2	良好	灰色	普通	口縁部内外周は黒っぽくなっている。外面はヨコナデののちヘラ磨き。内面不規則なヘラ磨き。	
−19	25−7		A 14.2 B 5.4 C 5.4	良好	灰色	普通	口縁部内外側は黒っぽい。内外面に回転ヘラ磨き。底部内面に不規則なヘラ磨き。	

N20－SD01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第42図 －20	図版第 25－8	土師器小皿	A 7.9 B 1.4	普通	淡黄色	普通	底部に板目状圧痕を残す。	
－21	25－12		A 8.7 B 1.9	普通	橙色	普通	丸味をもった底。やや深い。板目状圧痕を残す。	
－22			A 7.7 B 1.4	良好	淡橙色	良好	ヨコナデ	
－23	25－9		A 8.7 B 1.3	良好	淡橙色	良好	大きい平底。ヨコナデにより調整。	
－24	25－10		A 8.3 B 1.3	普通	橙色	普通	小さい平底。ヨコナデにより調整。	
－25			A 8.9 B 0.9	良好	橙色	良好	ヨコナデ。	
－26	25－11		A 8.1 B 1.5	良好	灰色	良好	ヨコナデ。	
－27	25－13		A 9.2 B 1.6	良好	灰色	普通	ヨコナデ。	
－28	25－14	土師器杯	A 13.2 B 3.3	良好	淡黄色	良好	平底より内彎しながら立ち上がる。比較的分厚。ヨコナデ。	
－29	25－15		A 14.0 B 3.9	良好	淡黄色	良好	平底よりやや外反気味に立ち上がる。ヨコナデ。	
－30	25－16		A 14.7 B 3.5	普通	橙色	普通	小さな平底をもつ。体部途中で外方に屈折する。	
－31	25－17	土師器椀	A 14.7 B 4.5 C 6.0	普通	橙色	普通	貼り付け高台をもつ。ナデ調整。	
－32	25－18	瓦質土器椀	A 15.2 B 5.5 C 5.9	良好	内 灰黒色 外 灰黒色	良好	口縁部外周は帯状に黒い。外面は，ヨコナデののち回転ヘラ磨き。内面は回転ヘラ磨きと不規則なヘラ磨き。	
－33	25－19		A 16.2 B 5.4 C 6.1	良好	内 灰白色 外 灰白色	良好	外面はヨコナデののち回転ヘラ磨き。内面は不規則なヘラ磨き。	
－34			A 15.1 B 5.4 C 6.0	良好	内 灰色 外 灰色	普通	口縁部外周は黒っぽい。外面は回転ヘラ磨き。内面は不規則なヘラ磨き。	

N20－SD03

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第43図 －1		土師器小鉢	A 5.5 B 2.2	普通	橙色	普通	丸味をもった底部。体部下端に2本，上部に1本の凸帯状の帯がある。	
－2	図版第 26－10	土師器 有脚小皿		普通	橙色	普通		脚部のみ

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第43図 －3	図版第 26－1	土師器小皿	A 8.6 B 1.6	良好	淡黄色	良好	平底。垂直に近く立ち上がり，体部途中で屈折し，丸くおさめた口縁端部にいたる。ヨコナデ。	
－4	26－2		A 8.3 B 1.4	普通	橙色	普通	平底。鋭く立ち上る。ヨコナデ調整。	
－5			A 8.7 B 1.5	普通	淡黄色	良好	ヨコナデ調整。外反して立ち上がる。	
－6	26－3		A 8.5 B 1.5	普通	淡黄色	良好	ヨコナデ	
－7	26－4		A 7.9 B 1.4	普通	淡黄色	良好	平底より丸味をもって立ち上る。ヨコナデ	
－8	26－5		A 9.0 B 1.3	普通	淡黄色	良好	ヨコナデ	
－9			A 8.4 B 1.0	普通	淡黄色	良好	ナデ。底に板目状圧痕。	
－10	26－6	瓦質土器小皿	A 9.1 B 1.8	普通	灰色	良好	口縁周縁は黒っぽい。 ヨコナデ	
－11	26－7	須恵器小皿	A 9.2 B 1.8	普通	灰色	良好	ヨコナデ	
－12	26－8		A 7.4 B 1.3	不良	灰色	不良	ヨコナデ。底に板目状圧痕。	
－13	26－9	土師器杯	A 13.9 B 3.0	良好	内 橙色 外 淡黄色	良好	比較的小さな平底よりゆるやかに立ち上り，丸くおさめた口縁端部にいたる。ヨコナデ。底部外面に板目状圧痕あり。	
－14			A 13.9 B 3.0	良好	淡黄色	良好	ヨコナデ	
－15			A 15.0 B 4.1	良好	淡黄色	良好	外反気味に立ち上る。 板目状圧痕あり。	
－16	26－11	土師器椀	A 16.0 B 4.9 C 6.4	良好	淡黄色	良好	外面は回転ヘラ磨き。高台は貼り付けており，全体的に丸味をおびている。	
－17	26－15	黒色土器椀	A 15.9 B 5.3 C 5.7	良好	内 黒灰色 外 黒灰黄色	普通	外面はヨコナデののち，回転ヘラ磨き。内面は回転ヘラ磨き。貼り付け高台は丸味をおびている。	16.20に形態・技法が類似。
－18	26－12	瓦質土器杯	A 14.4 B 3.6	普通	内 黒灰色 外 黒灰色	普通	全面黒色をおびる。ナデにより調整。	
－19	26－13	瓦質土器椀	A 14.7 B 5.1 C 5.7	良好	灰白色	良好	外面に回転ヘラ磨き。口縁周縁は黒味をおびる。	
－20			A 16.0 B 4.9 C 6.2	普通	灰白色	普通	口縁外周は黒っぽい。外面回転ヘラ磨き。	
－21	26－14	黒色土器椀	A 16.5 B 5.5 C 6.3	普通	黒灰色	普通	外面は回転ヘラ磨き。	
－22	26－16	瓦質土器鉢	A 24.0 B 8.5	普通	内 黒灰色 外 灰黄色	普通	口縁外縁に格子状叩き目を残す。	
－23		瓦質土器鍋	A 30.0	普通	灰色	良好		

N20－SD05

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第43図 －24	図版第 27－1	土師器小皿	A 8.2 B 1.4	普通	淡黄色	普通	平底より外反しながら立ち上る。口縁端部は薄く仕上げる。	
－25	27－2		A 8.3 B 1.2	良好	淡黄色	普通	口縁端部は肥厚。ヨコナデ	
－26	27－3	瓦質土器杯	A 14.4 B 3.9	普通	灰白黄色	普通	小さな平底をつくる。ヨコナデ	
－27	27－4	瓦質土器椀	A 14.0 B 5.0 C 4.9	普通	灰白色	普通	外面は回転ヘラ磨き。	

N20－SD04

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第44図 －1	図版第 27－5	土師器小皿	A 7.4 B 1.2	普通	淡橙色	普通	平底より立ち上り，体部途中で鋭く屈折。内面ヨコナデ。	
－2			A 7.7 B 1.4	良好	淡橙色	良好	ヨコナデ	
－3			A 8.0 B 1.5	普通	橙色	普通	やや丸底気味	磨耗
－4	27－6		A 8.0 B 1.5	普通	淡橙色	普通	ヨコナデ	
－5	27－7		A 7.8 B 1.3	良好	淡橙色	良好	やや小さい平底。ナデ調整，底部外面に板目状圧痕。	
－6	27－8		A 8.0 B 1.0	普通	橙色	普通		磨耗
－7	27－9		A 8.2 B 1.3	普通	淡橙色	普通	底部外面に板目状圧痕あり。	磨耗
－8		瓦質土器小皿	A 10.0 B 2.0	良好	内 灰白色 外 黒灰色	普通	口縁内周は黒っぽい。内底部にヘラ磨きが認められる。	
－9			A 9.0 B 1.8	良好	内 内白色 外 黒灰色	良好	口縁内周は黒っぽい。内底部にヘラ磨きが認められる。	
－10	27－10	須恵器小皿	A 8.8 B 1.7	良好	灰色	良好	ヨコナデ	
－11	27－11	土師器杯	A 13.3 B 3.5	良好	内 灰色 外 淡黄色	良好	内面には煤付着。外面の一部に煤の痕跡。ヨコナデ	瓦質土器杯16と類似。
－12	27－12		A 14.1 B 4.1	普通	内 橙色 外 淡橙色	普通	直径5cm程の平底をもつ。ヨコナデによる調整。	
－13	27－13		A 14.2 B 3.2	普通	淡黄色	良好	ヨコナデによる調整。	
－14	27－14	土師器椀	A 11.8 B 3.0	やや不良	淡橙色	良好	ヨコナデによる調整。	
－15	27－15		A 14.7 B 5.0 C 5.6	良好	淡橙色	良好	外面に回転ヘラ磨き。	瓦質土器椀20と類似。

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第44図 −16		瓦質土器杯	A 13.7 B 3.4	良好	黒灰色	良好	内外面に煤付着。	
−17		瓦質土器椀	A 15.6 B 3.0 C 5.9	良好	灰色	良好	口縁外周は黒っぽい。外面はヨコナデののち回転ヘラ磨き。内面は，ラセン状のヘラ磨きと不規則なヘラ磨き。	
−18			A 15.7 B 4.9 C 6.2	良好	灰色	良好	外面はヨコナデののち回転ヘラ磨き。内面は上半部を回転ヘラ磨き，下半部・内底部を不規則なヘラ磨き。	
−19			A 15.8 B 5.2 C 6.5	良好	灰色	良好	体部の一部が黒っぽい。外面は回転ヘラ磨き。内面は回転ヘラ磨きと不規則なヘラ磨き。	
−20			A 15.3 B 5.4 C 5.9	良好	内 灰黒色 外 淡黄橙色	良好	内面は煤付着。外面は回転ヘラ磨き。	
−21	図版第 27−16		A 15.3 B 5.1 C 7.2	普通	内 灰白色 外 灰黄色	やや不良	外面は回転ヘラ磨き。内面は不規則なヘラ磨き。	
−22			A 14.7 B 5.3 C 4.9	普通	灰黒色	普通		
−23			A 15.2 B 5.2 C 5.0	普通	灰白色	普通	口縁外周と体部内面の一部が黒っぽい。	
−24		須恵器椀	A 12.9 B 4.1 C 5.1	普通	灰黒色	良好	極めて良好な焼成。 瓦質土器か須恵器か不明。	瓦質土器23と類似。
−25	27−17	須恵器壺	A 15.1 B 16.5	普通	暗茶緑色	良好		底部外面まで煤が付着。

S20−SD01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第45図 −1		土師器小皿	A 7.9 B 1.5	良好	橙色	良好	平底。底部外面に板目状圧痕。 内外面ともヨコナデ。	
−2			A 8.0 B 1.9	良好	淡黄色	良好	平底。内外面ともヨコナデ。 底に板目状圧痕を残す。	
−3	図版第 28−1		A 8.3 B 1.4	良好	淡黄色	良好	平底。内外面ともヨコナデ。	
−4			A 8.2 B 1.5	良好	橙色	良好	底に板目状圧痕を残す。 内外面ともヨコナデ。	
−5			A 8.3 B 1.6	良好	橙色	良好	底に板目状圧痕を残す。 内外面ともヨコナデ。	
−6	28−2		A 9.9 B 1.6	良好	橙色	良好	内外面ともにヨコナデ。 底に板目状圧痕を残す。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第45図 －7		土師器杯	A 13.6 B 3.9	良好	淡橙色	普通	小さな平底。 ヨコナデ	
－8			A 13.3 B 3.7	良好	淡橙色	普通	小さな平底。器壁はやや分厚。 ヨコナデ。	
－9	図版第 28－3		A 14.6 B 3.9	良好	橙色	普通	小さな平底。 ヨコナデ。	
－10	28－4		A 14.8 B 3.9	良好	淡黄色	普通	やや大きい底をもつ。 ヨコナデ調整。	
－11			A 14.7 B 4.1	良好	淡黄色	普通	大きい平底をもち，体部に数本の鋭い稜線をもつ。ヨコナデ	
－12	28－5	土師器椀	A 13.3 B 4.5 C 6.1	良好	淡橙色	良好	高く粗雑な貼り付け高台をもつ。ヨコナデ	
－13		黒色土器椀	A 13.6 B 3.2 C 5.8	良好	内 灰白色 外 黒灰色	良好	内面は煤付着。外面は回転ヘラ磨き。	
－14	28－6		A 16.6 B 5.5 C 5.8	普通	内 黒灰色 (剥落) 外 黒灰色	不良	底部内面まで煤が付着。口縁端部を平坦にする。外面は回転ヘラ磨き。内面もヘラ磨き。貼り付け高台。	
－15			A 14.7 B 5.2 C 5.2	普通	内 黒灰色 外 黒灰色	不良	内外両面に煤付着。外面にヘラ磨き。内面は不規則な暗文状ヘラ磨き。	
－16	28－7	瓦質土器椀	A 15.7 B 5.1 C 6.5	良好	内 灰色 外 灰色	良好	外面は回転ヘラ磨き。内面は放射状のヘラ磨き。	
－17			A 15.5 B 5.2 C 6.8	良好	内 灰白色 外 灰白色	不良	外面回転ヘラ磨き。内面一部回転ヘラ磨き。	
－18	28－8		A 15.4 B 5.3 C 6.6	良好	内 淡黄色 外 淡黄色	不良	土師質を呈す。内面はナデののち，ヘラ磨き。外面は回転ヘラ磨き。	土師器の可能性がある。
－19			A 15.3 B 5.2 C 6.7	良好	内 灰白色 外 灰白色	良好	内面はヨコナデののちヘラ磨き。外面はヘラ磨き。	
－20		須恵器壺	A 14.8 B 10.3	良好	内 灰白色 外 灰白色	普通	頸部上端まで格子状叩き目を残す。	

N17－ST01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第46図 －2	図版第 31－9	土師器杯	A 14.6 B 3.5	普通	橙黄色	普通	平底より緩やかに外反して体部にいたり鋭く端部をつくる。ヨコナデ	
－3		瓦質土器椀	C 4.0	普通	黒灰色	普通		磨耗

S17－SK201

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第47図 －1	図版第 31－11	土師器小皿	A 8.0 B 1.2	普通	橙色	普通	やや丸味をおびた平底より外反気味に口縁部に至る。	
－2	31－10		a 8.3 B 1.3	普通	橙色	普通	やや丸味をおびた平底より外反気味に口縁部に至る。	
－3	31－12		A 8.6 B 1.5	普通	橙色	普通	底の成形不良。	
－4	31－13	土師器杯	A 13.9 B 3.4	普通	黄灰色	良好	平底をもつ。体部に数本の段があり，口縁端部は肥厚。	
－5	31－15	瓦質土器鉢	A 23.0 B 7.0	普通	灰黒色	普通	ヨコナデ調整。口縁端部は凹線状にくぼむ。	
－6	31－14	瓦質土器椀	A 15.6 B 5.1 C 5.3	普通	灰色	普通	口縁周縁は黒っぽい。	

山原地区出土　小型羽釜・硯・土鈴

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第50図 －1	図版第 33－2	土師器 小型羽釜		良好	内 赤褐色 外 上部は赤褐色 下部は茶褐色	良好	脚付羽釜の小型である。 体部内面はヨコナデによる調整をうけてきれいに仕上げられている。底部に指頭痕あり。 脚の取付部分はヘラで比較的ていねいに仕上げられている。	N20 －SD04
－2				やや粗 小砂粒を含む。	内 乳灰白色 外 乳灰白色	普通	脚付羽釜の小型であろう。	S17第5層
－3	33－3			やや粗 小砂粒を含む。	内 乳白色 外 乳白色	やや不良	脚付羽釜の小型と思われる。脚は取り付け部分からとれている。	N20 －SD03
－4	33－1－7	土師器 小型羽釜 (脚)		普通	灰白色	やや不良	付け根からほぼまっすぐに端部にいたる。 脚先端は外側におれている。表面はヘラによって面取り。	S17 －SD02
－5	33－1－9	瓦質土器 小型羽釜 (脚)		良好	赤褐色	良好	付け根からほぼまっすぐに端部にいたる。 脚先部は外側におれている。	S17 －SD03
－6	33－1－8			良好	灰白色	やや不良	取り付け部分から先端にむけ，ゆるやかな曲線をえがいて下向し，脚先端は外側にまきこまれている。	N20第6層
－7	33－1－6			良好	灰黒色	良好	取り付け部分からゆるやかな曲線をえがいて先端にいたる。脚先端は外側にまきこまれている。表面はていねいに仕上げられている。	N20第6層

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第50図 −8	図版第 33−1−2	土器 瓦質土器 羽釜 小型(鍋)	A 4.5	良好	表 灰黒色 裏 灰黒色	普通	羽釜の蓋と思われる。天井部は平らで口縁端部にかけてなだらかな丸みをもって下降している。が，多少の歪みが生じている。裏面はていねいに調整されている。	N20 −SD04
−9	33−1−3		A 4.0	良好	表 灰黒色 裏 灰黒色	普通	羽釜の蓋であると思われる。8よりも多少丸みをおびている。	S17遺構面
−10	33−1−1		A 5.5	良好	表 灰黒色 裏 灰黒色	良好	羽釜の蓋と思われる。口縁部内側はていねいにヨコナデで調整されている。	N20 −SD04
−11	33−1−12	瓦質土器 硯		良好	灰黒色	良好	二面硯。中心部しか残存しておらず，背面が剥離しているので海部と陸部の傾斜は不明である。表面はていねいなヘラ磨き」	N20 −SD04
−12	33−1−13	須恵器 硯		良好	暗灰白色	良好	二面硯であろう。 側面および前面には縁があり，背面を含めてヘラ磨き。	N20 −SK14
−13	33−1−11	土師器 土鈴		普通	内 乳灰白色 外 乳灰白色 半分は茶色く変色している。	不良	最大径4.7cmの歪んだ球形をしている。 内面に指頭痕がある。粗雑な仕上げである。	S18第4層
−14	33−1−10			やや粗 小砂粒を含む。	内 乳白色 外 乳白色 半分黒く煤が付着している。	やや不良	直径4.5cmの歪んだ球形をしている。内面に指頭痕がみられる。器壁は厚く，均等でない。	S17遺構面

山原地区出土　瓦

挿図番号	図版番号	器種	法量 cm.	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第51図 −1		平瓦	幅 24.8 厚さ 4.0	やや粗	表 赤褐色 裏 〃 断 〃	不良	表 布目 裏 ナワ目	
−2		丸瓦	直径13.2	普通	表 灰黒色 裏 〃 断 黄土色	普通	右巻の陽刻巴文軒丸瓦	
−3			直径13.0	やや粗 小砂粒を含む。	表 黄土色 裏 灰黒色 断 黄土色	不良	右巻の陽刻巴文軒丸瓦 丸瓦の表面はヘラ磨きがほどこされている。	
−4			直径13.2	普通	表 灰黒色 裏 〃 断 灰色	普通	右巻の陽刻巴文軒丸瓦 丸瓦の裏面は布目，表面はヘラ磨きによる調整。	
−5			直径 約11.5	やや粗	表 灰白色 裏 〃 断 〃	やや不良	複弁八弁蓮華文軒丸瓦。 丸瓦裏面はナワ目。	

N・S24，S25－SD01　出土円盤状土製品

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第55図 −1		円盤状土製品	径 2.5 厚さ 0.5	良	濃青灰褐色	良	須恵器片周縁を打ち欠き円形にしたもの	
−2			径 4.7 厚さ 1.2	良	暗灰茶褐色	良	須恵器片周縁を打ち欠き円形にしたもの	
−3			径 5.5 厚さ 1.2	良	表 淡青灰色 裏 灰色	良	須恵器片周縁を打ち欠き円形にしたもの	
−4			径 3.0 厚さ 0.7	2㎜までの砂粒を含む	淡赤茶褐色	良	土師器片周縁を打ち欠き円形にしたもの	
−5			径 4.0 厚さ 0.8	金雲母を含む	淡白灰色	良	土師器片周縁を打ち欠き円形に近いもの	
−6			長径 6.5 短径 5.5 厚さ 1.0	金雲母を含む	淡茶褐色	良	土師器すり鉢片周縁を打ち欠き楕円形にしたもの。	
−7			径 4.7 厚さ 0.8 ～1.4	良	淡黄茶褐色 見込に暗紫褐色釉	良	陶器高台周縁を打ち欠き円形にしたもので高台は残る。	
−8			径 5.0 厚さ 1.0 ～1.4	良	見込に淡白紫色釉	良	陶器高台周縁を打ち欠き円形にしたもので高台は残る。	
−9			径 5.5 厚さ 0.4 ～1.7	良	淡橙色 全面に透明釉	良	陶器高台周縁を打ち欠き円形にしたもので高台は残る。 ½欠失	

N・S24，S25－SD01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第56図 −1		土師器羽釜	A 18.4	砂粒と共に金雲母を含む。	内 灰茶褐色 外 濃灰茶褐色	良	体部は内彎し，口縁端部は垂直に立ち上がる。鍔はほぼ水平に付く。 内外面共にヨコナデ。	
−2			A 24.0	やや粗 砂粒を含む。	内 淡橙色 外 淡茶褐色 スス付着	良	体部はまっすぐに立ち上がり，口縁部は内彎する。短い鍔が付く。	内外面ともに磨耗が激しい。
−3			A 27.0	砂粒を多く含む。	内 赤褐色 外 暗灰茶褐色	良	体部は内彎し，口縁部は若干外反する。鍔下部に指頭圧痕が残る。内面不定方向刷毛目，外面ヨコナデ。	
−4		土師器羽釜鍔		3㎜までの砂粒を多く含む。	淡赤褐色	良	ヨコナデ	
−5				3㎜までの砂粒を多く含む。	淡茶褐色	良	ヨコナデ	磨耗が激しい
−6		土師器鍔		砂粒を多く含む。	内 淡橙色 外 赤黒褐色	良	体部から口縁部にかけて内彎する。把手と口縁部の間は3㎝。把手は内彎する。	磨耗が激しい
−7		土師器すり鉢	底部径10.0	砂粒を若干含む。	内 淡橙色 外 淡灰茶褐色	良	擂目は4条，上から下へ。 内面ヨコナデ調整，外面不調整。	
−8				金雲母を含む。	内 淡灰褐色 外 淡灰茶褐色	良	体部より口縁部は内彎する。 擂目は6条，下から上へ。 内面 口縁部ヨコナデ。 外面 体部不調整。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第56図 −9		土師器 すり鉢	A 22.0	金雲母を含む	淡橙色	良	体部は内彎する。口縁部は垂直に立ち上がる。 擂目は6条，下から上へ 内面 口縁部ヨコナデ	
−10			底部径12.0	良	淡橙色	良	体部は底部に対して貼り付け，内面不定方向のナデ調整 底部貼り付け部不調整	
−11		土師器鉢	A 29.2	金雲母を含む	淡橙色	良	体部は内彎する。口縁部上端は水平であり，内面にむかって丸く内彎する。 内面一部刷毛目を残す。外面ヨコナデ調整。	
−12			A 59.0	細砂粒を多く含む。	内 淡茶褐色 外 暗黒茶褐色	良	体部から口縁にかけかすかに外反する。 内外面共にヨコナデ調整であるが，外面は荒い。	
−13		須恵器甕		良	淡灰褐色	良	頸部は「く」の字にくびれる。 体部はタタキ目，頸部は内外面ともにヨコナデ。	
−14			A 35.0	良	青灰褐色	良	頸部は，外反し口縁部にて大きく開く。 内外面ともに刷毛目調整。	
−15			A 33.0	若干の砂粒がみられる	灰褐色	良	頸部から口縁にかけて「く」の字に屈曲。口縁，端部はやや丸味を帯びる。 内部タタキ目，頸部外面ヨコナデ	

N・S24，S25−SD01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第57図 −1		陶器皿	C 4.4	良	内面淡緑灰色釉 外面淡黄茶褐色 素地淡黄茶褐色	良	高台は低く削り出した三日月高台である。外面にも内面と同じ色釉がある。	
−2			C 4.2	良	内面淡黄灰色釉 外面淡赤茶褐色 素地淡赤茶褐色	良	高台は低く削り出し，外面は不定方向ナデ。 外面にも内面と同色釉がかかる。	
−3			A 12.0 B 3.4 C 4.5	良	内 明青灰色釉 外 〃釉＋茶褐色 素地灰褐色	良	高台は削り出し。外面ヨコナデ。 外面釉は，体部立ち上がりまで認められる。外面若干の凹凸あり。	
−4			C 8.0	良	内 赤茶褐色釉 外 茶褐色 素地淡黄茶褐色	良	高台は削り出し。 高台内は，断面と同色。 内外面共にヨコナデ。	
−5			C 7.0	良	内 暗灰緑色釉 外 茶褐色 素地灰褐色	良	高台は削り出し。 高台から体部にかけて，小さな段がつく。	
−6			C 11.0	良	内 灰茶褐色釉 外 茶褐色 素地黒褐色	良	高台は削り出し。高台外面に稜線が鋭利にはいる。 底部は厚めである。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第57図 −7		陶器皿	C 11.0	良	内 淡灰茶褐色釉 外 濃茶褐色 素地灰褐色	良	高台は削り出し。高台中央部に稜線がはいり，ここまで釉がかかる。 外面はヨコナデ調整。	
−8			C 12.0	良	内 黄白色釉 外 淡茶色 素地灰褐色	良	高台は削り出し。高台内は削りによる三つの稜が見られる。体部に削りによる稜が見られる	
−9		陶器椀	A 11.0 B 7.8 C 5.0	良	内外面共 透明釉 素地淡橙色	良	高台は削り出し。かすかに開きぎみである。器壁は均等に薄くなる。透明釉は畳付き部を除き全体にかかる。体部に緑色釉にて文様。	
−10			A 12.0 B 7.9 C 5.0	良	内外面共半透 明淡緑黄色釉 素地淡灰褐色	良	高台は削り出し，垂直に近い。器壁は均等に薄くなる。外面は内面より色調が落ち，高台近くでは緑色が薄くなる。	N24第2層出土椀と接合
−11			C 5.0	良	内外面共 透明釉 素地淡橙色	良	高台は削り出し。釉は畳付きを除き全体にかかる。	
−12			C 5.0	良	内外面共 赤茶褐色 素地灰褐色	良	高台は削り出し。外面ヨコナデ調整。 高台周辺には一部釉がかかる。	
−13				良	内外面共 透明釉 素地淡橙色	良	腕中央部器壁が少し厚くなる。 胴部淡緑色釉で文様	
−14		磁器椀	C 4.0	良	内外面共 透明釉 素地白色	良	高台は削り出し。高台は薄い。 淡紺色の線にて文様。	
−15			A 11.0 B 6.8 C 5.4	良	内外面共 透明淡青色釉 素地灰褐色	良	高台は削り出し。畳付きは茶褐色。淡藍色にて胴部に文様。	
−16		陶器鉢	A 18.6	良	内外面共 濃茶緑色釉 素地濃灰褐色	良	口縁端部は水平であり，断面は隅丸方形である。口縁部は，釉がかからず濃茶褐色。 胴部は外反ぎみに立ち上がる。	
−17		陶器すり鉢	A 25.4	砂粒を多く含む。	内 灰褐色 外 灰茶褐色 口縁部 濃赤茶褐色釉	良	内外面共にヨコナデ調整。 外面凹凸が激しい。内面巾2〜4㎜の沈線。 擂目は7条で下から上へ，上端で左へ振る。左回りで口縁部三段に作る。	
−18			A 30.6	良。砂粒を若干含む。	内 暗赤茶褐色 外 赤茶褐色	良	内外面共にヨコナデ調整。 口縁部二段に作る。 擂目は8条で下から上へ。	S24第3層出土鉢と接合
−19		砥石	長さ 5.8+α 厚さ 3.3 幅 4.6				長方形，断面方形。4面使用痕あり。前後共折れている。	
−20			長さ 6.0+α 厚さ 0.9〜1.7 幅 4.2				長方形，断面台形。上面側面3面の使用痕あり。	
−21			長さ 7.9 厚さ 2.0 幅 2.7				長方形，断面方形。5面使用痕あり。	

S24－SX01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第60図 －1		須恵器壺		良。砂粒を多く含む。	灰褐色	良	内外面共に回転ナデ調整。 底部は不調整，底部から体部にかけて器壁は均等である。	磨耗が激しい。
－2		土師器鉢	A 24.4	良。金雲母を含む。	口縁端部から内面にかけて淡灰茶褐色。 外面暗茶褐色	良	口縁端部は内部におりこまれる。 ヨコナデ調整。 外面は不調整	

S24－SX04

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第60図 －3		磁器皿		良	淡白緑色釉 素地淡白灰色	良	見込は釉を切り，茶褐色にて同心円をかく。口縁部近くで急激に内湾する。	

S24－SX06

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第60図 －4		土師器 羽釜鍔		3㎜までの砂粒を多く含む。	明白灰色	良	ヨコナデ	
－5		陶器すり鉢	A 28.4 B 11.3	良	明赤褐色 口縁部は内面暗赤茶褐色，外面灰褐色	良	体部は内外面共に波状を呈する。 底部は不調整。 摺目は10条単位で底部より始まる。右回りで隙間なく施される。	S－25SD01出土鉢と接合
－6		磁器椀	A 12.0	良	内外面共に半透明淡灰緑色釉 素地淡白灰色	良	外面口縁近く一本の線，植物文様	
－7		須恵器壺		3㎜までの砂粒を含む。	内外面共に灰褐色。	良	内面回転ナデ調整。外面底部近くには回転ナデ調整。上部一定方向のナデ調整	

S24－SX08

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第60図 －8		土師器 羽釜脚		3mmまでの砂粒を多く含む。	白茶褐色 内面一部淡赤茶褐色	良	上部若干細くなる。	
－9		円盤状 土製品	径 3.6 厚さ 1.0	2mmまでの砂粒を含む。	明茶褐色	良	土師器片の周縁を打ち欠き，周囲を磨き円形にしたもの。	
－10			径 4.9 厚さ 1.1	2mmまでの砂粒を含む。	表 明茶色 裏 明黒茶褐色	良	陶器片周縁を打ち欠き，円形に近くしたもの。	
－11			径 5.0 厚さ 1.5	良	表 明茶褐色 裏 明黒茶褐色	良	陶器片周縁を打ち欠き，円形に近くしたもの。	

N31・32－SD01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第67図 －1		土師器椀	A 14.7 B 5.6 C 6.6	普通	淡黄色	良好	外面に回転ヘラ磨き。内面には不規則なヘラ磨き。	N31
－2			A 15.4 B 6.3 C 5.4	普通	淡黄色	良好	口縁周縁に煤付着。内面に回転ヘラ磨き(暗文状)。外面はヘラ削り。	N31
－3	図版第 34－1	黒色土器椀	A 14.7 B 5.9 C 6.0	普通	内 黒色 外 淡黄色	良好	外面に回転ヘラ磨き。内面には太い井桁状の暗文。	N31
－4	34－2		A 15.0 B 6.1 C 6.9	普通	内 黒色 外 淡黄色	良好	外面に回転ヘラ磨き。内面には井桁状の暗文。	N31
－5		土師器鍋	A 32.4	不良	淡黄色	不良	胎土に多量の砂粒を含む。	N31・32
－6	34－3	土師器小皿	A 9.0 B 1.5	不良	淡橙色	不良	尖底気味の平底をもつ。体部上半は鋭く立ち上る。	N31
－7			A 8.0 B 1.8	不良	淡黄色	不良	尖底気味の平底。	磨耗。N32
－8	34－4		A 8.7 B 1.9	不良	淡黄色	不良	尖底気味の底より鈍角に体部にいたる。	N31
－9		土師器 有脚小皿	A 9.3 B 2.3 C 5.1	普通	淡黄色	普通	平坦な小皿に脚をつける。脚は途中より外方に踏み出す。	N32
－10	34－5		A 8.0 B 2.6 C 5.0	普通	淡黄色	普通	ヨコナデ	N32
－11		土師器皿	A 12.5 B 2.3	良好	橙区	良好	小さな平底より鋭く体部にいたり，広い口縁をもつ。ヨコナデ	N31
－12	34－6	土師器杯		良好	淡黄色	良好	平坦な底をもつ。底部直上の体部にカキ目状の条痕をもつ。	N31
－13		土師器 有脚皿	A 14.0	普通	淡黄色	普通		N32
－14	34－7	須恵器壺		普通	灰色	普通	頸部直下に平行叩きを残す。底部は粗雑な仕上げ。	N31

S30－SK19

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 －1		土師器椀	A 15.8	普通	淡黄色	普通	外面に回転ヘラ磨き。	磨耗
－2		土師器小皿	A 9.4 B 2.0	普通	淡黄色	普通	粗いヨコナデが見られる。	
－3		黒色土器椀	A 15.1 B 5.8 C 6.3	普通	内 黒灰色 外 淡橙色	普通	外面に回転ヘラ磨き。内面上半部に暗文状の回転ヘラ磨き。	磨耗
－4	図版第 34－8		A 14.6 B 5.6 C 6.8	普通	内 黒灰色 外 淡橙色	普通	外面に回転ヘラ磨き。	磨耗
－5		土師器鍋	A 31.0	普通	橙色	普通		磨耗

S33－SK01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 －6		土師器椀	A 15.0 B 6.4 C 6.2	良好	淡黄色	良好	外面に回転ヘラ磨き。 内面にヘラ状工具による条痕。	

S31－SK15

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 －7		土師器椀	A 15.5 B 6.0 C 6.7	不良	淡黄色	不良	貼り付け高台	磨耗

S33－P01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 －8	図版第 34－9	土師器椀	A 15.7 B 5.9 C 6.5	良好	淡黄色	良好	外面にヘラ磨き。	

N31－P12

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 －9		黒色土器椀	A 14.7 B 5.2 C 5.3	良好	内 黒色 外 淡黄色	普通	外面に回転ヘラ磨きを施す。 内面上半部に周回する暗文。	磨耗

S33－P06

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 －10		黒色土器椀	A 14.7 B 5.1 C 5.7	普通	内 黒色 外 淡黄色	普通	外面に回転ヘラ磨き。内面に周回する暗文。	

S30－SK21

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 －11		黒色土器椀	C 5.6	普通	内 黒色 外 淡黄色	普通		磨耗

S31－SK12

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 －12		土師器 有脚小皿	A 8.4 B 1.8 C 4.4	普通	淡黄色	普通	ヨコナデ	

S31−ST01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 −13		土師器小皿	A 8.6 B 1.7	普通	淡黄色	普通	丸味をもつ底より内湾気味に体部にいたる。	
−14			A 8.2 B 1.3	良好	淡黄色	良好	ヨコナデ	
−15			A 8.0 B 1.3	良好	淡黄色	良好	平底より鋭く体部にいたる。 ヨコナデ	

S31−P07

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 −16		土師器小皿	A 8.2 B 1.5	普通	淡黄色	良好	ヨコナデ	

S31−P34

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 −17		土師器小皿	A 8.9 B 1.6	普通	橙色	良好	平底より鋭く立ち上る薄い体部をもつ。	

S31−P02

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第68図 −18		須恵器小壺	A 2.5 B 3.6 C 4.3	普通	灰色	普通		

S33－SK01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第69図 －1		瓦質土器椀	A 13.0 B 3.9 C 4.5	普通	灰色	普通	ヨコナデ。器壁が薄い。外反しながら立ち上がる。	
－2			A 14.1 B 3.6 C 5.2	普通	黒灰色	普通	ヨコナデ。不明瞭な高台。内湾しながら立ち上る。	
－3			A 14.1 B 3.6 C 4.9	普通	灰色	普通	ヨコナデ。不明瞭な高台。内湾しながら立ち上る。	
－4		瓦質土器杯	A 12.0 B 3.0	普通	灰白色	普通	ヨコナデ。器壁が薄い。	
－5		土師器杯	A 11.0 B 3.0	普通	淡黄色	普通		
－6	図版第 34－10	土師器小皿	A 7.1 B 1.2	普通	淡黄色	普通	ヨコナデ	
－7		土師器羽釜	A 25.5	良好	淡黄色	良好		

N35－SK24

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第70図 －1		土師器小皿	A 7.3 B 1.3	密 細砂粒を含む。	橙色がかった茶色	良好	体部は大きく外反し，口縁端部は丸い。	磨耗
－2			A 8.0 B 1.1	密 細砂粒を含む。	乳白色	良好	体部はなだらかにたちあがる。	
－3		土師器椀	A 15.4	密 細砂粒を若干含む。	茶色がかった橙色（内面やや白っぽい。）	良好	器壁は比較的肥厚している。内外面とも回転ナデ調整	磨耗
－4			C 5.8	やや密 小砂粒を若干含む。	乳白色（内面やや橙色がかっている）	普通	貼り付け高台はやや外方に張り出し，断面三角形を呈す。	磨耗
－5		瓦質土器椀	C 6.5	粗 大粒の砂粒を多く含む。	灰白色	不良	高台は分厚く，外方に丸く張り出している。	

N35－SK26

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第70図 －6		土師器小皿	A 7.8 B 1.4	やや粗 大粒の砂粒を含む。	やや黄色がかった乳白色	良好	体部は外反し，端部は丸い。 器壁は著しく薄い。 内外面とも回転ナデ調整。	やや磨耗
－7			A 7.7 B 1.5	やや粗 小砂粒を若干含む。	橙色がかった乳白色	普通	内外面とも回転ナデ調整	
－8			A 8.4 B 1.4	やや粗 小砂粒を若干含む。	乳白色	普通	底部から体部への移行は緩やかである。 内外面とも回転ナデ調整。 底部外面に長さ2cm前後の板目状圧痕が深く刻まれている。	
－9		土師器杯		密 砂粒をほとんど含まず。	乳白色	良好	内面は回転ナデ調整，底部中央は仕上げナデ。 底部外面に不明瞭ながら板目状圧痕が認められる。	
－10		土師器椀	a 14.9 B 5.7 C 5.4	やや粗 大粒の砂粒を多く含む。	暗い乳白色	普通	口縁部外面は明瞭な稜を有す。 貼り付け高台は断面三角形。	磨耗
－11		黒色土器椀	A 15.3 B 5.3 C 5.8	やや密 細砂粒を多く含む。	黒褐色（高台内側とその接地の底部外面は茶褐色。）	良好	内面は一定方向の刷毛目調整。体部上半の一部に回転ナデ調整が認められる。外面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整。 外面高台の少し上方を弱い指頭圧痕がまわっている。	磨耗
－12		瓦質土器椀	A 15.2 B 5.7 C 6.2	密 小砂粒を若干含む。	青灰色	良好	内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらに一定方向ナデ調整を施す。体部下半から底部にかけて，最終的に輪状のヘラ磨き調整で仕上げている。外面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整。 高台の少し上の方に爪状の窪みが1～2cmの間隔で施されている。 口縁外周はうすく帯状に黒っぽい。	
－13		土師器小皿	A 8.3 B 1.6	密 細砂粒を多く含む。	橙色がかった乳白色	良好	体部はやや肥厚し，若干外反している。内外面とも回転ナデ調整。底部内面は仕上げナデ。	
－14			A 8.1 B 1.3	やや粗 小砂粒を多く含む。	橙色がかった乳白色	良好	内外面とも回転ナデ調整。	磨耗
－15			A 8.6 B 1.5	やや密 小砂粒を多く含む。	橙色がかった乳白色	良好	内外面とも回転ナデ調整。 底部外面に板目状圧痕。	磨耗
－16		瓦質土器小皿	A 9.3 B 1.7	やや密	内 黒灰色 外 灰白色	良好	内外面とも回転ナデ調整。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
図版第70 −17		土師器杯	A 14.1 B 4.1	やや密 小砂粒を多く含む。	黄白色	良好	器壁はうすく，口縁部はやや外反ぎみにおわっている。 内外面とも回転ナデ調整。	
−18			A 14.0 B 3.4	密 大粒の砂粒を若干含む。	橙色	良好	底部中央がやや肥厚している。 内外面とも回転ナデ調整。	
−19		土師器椀	A 15.5 B 5.5 C 6.2	密 細砂粒を含む。	内 橙色がかった乳白色 外 乳白色	良好	内面は回転ナデ調整後，口縁部付近に回転ヘラ磨き調整，体部中ほどから底部にかけては不規則なヘラ磨き調整を施す。外面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整。	
−20	図版第 34−12	黒色土器椀	A 16.4 B 5.6 C 6.3	やや密 小砂粒を多く含む。	内 黒褐色（部分的にやや白っぽい） 外 体部上半黒褐色，下半赤褐色。	普通	器壁はうすく，高台は外方に張り出している。 内面は回転ナデ調整後，放射状のナデ調整，さらに回転ヘラ磨き調整。底部に不規則なヘラ磨きが観察される。外面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整。	
−21			A 15.3 B 5.3 C 6.0 〜6.4	密 細砂粒を含む。	黒灰色	普通	内面は回転ナデ調整後，不定方向のナデ調整，さらに口縁部付近に回転ヘラ磨き調整，体部下半から底部にかけて不規則なヘラ磨き調整を施す。外面は回転ヘラ磨き調整が観察される。	磨耗
−22		瓦質土器椀	A 15.3 B 5.4 C 5.5	密 細砂粒を含む。	内 青灰色 外 灰色	良好	口縁部は明瞭に段をなし，焼成時のひずみが認められる。 内面は不規則なヘラ磨きが認められるが，磨耗のため不明瞭。 外面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整。 外面底部から体部に至る箇所に指頭圧痕がまわっている。 口縁外周はやや黒っぽいが，途中で体部の色調と融合している。	
−23			A 15.4 B 5.2 C 7.6	やや密 小砂粒を含む。	灰白色	普通	高台は肥厚し，外反ぎみで大きい。 内面は回転ナデ調整後，放射状にナデ調整を施し，さらにほぼ全面にわたる不規則なヘラ磨き調整で仕上げている。 高台のすぐ外側に一部指頭圧痕が認められる。 口縁外周と内面の一部が黒っぽい。	
−24		須恵器壺	A 21.7	やや粗 大粒の砂粒を多く含む。	灰色	普通	口縁部内面は回転ナデ調整。外面は叩きの後，回転ナデ調整。 肩部は格子状叩き目を施す。	

N35－SK06

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 －1		瓦質土器椀	A 15.1 B 5.0 C 6.5	やや密 小砂粒を若干含む。	少し黄色がかった乳白色（内外面とも部分的にやや赤い）	不良	内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらにナデを重ねていると思われるが，磨耗が進んでおり不明瞭。体部下半から底部にかけてはヘラ磨き調整で仕上げている。外面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整を施している。 高台はやや外方に張り出している。	土師器の焼きあがりを呈す。

N35－SK08

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 －2		瓦質土器椀	A 14.9 ～15.4 B 4.9 C 5.3	密 小砂粒を若干含む。	内外面とも灰色をベースとし，部分的に青灰色を呈している。	良好	高台は粘土を輪状にして，貼りつけたあとが明瞭に認められる。 内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらに不定方向ナデがうすくのこっている。外面は回転ナデ調整。不明瞭ながら体部から口縁部にかけて広範囲に黒っぽい部分が観察できる。	
－3			A 15.7 B 5.1 C 5.1	密 小砂粒を若干含む。	灰白色	良	内面は粗い回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整。底部から体部にかけての一部にうすく放射状のナデ調整痕が認められる。 口縁周縁は，うすく黒味がかっている。	

N35－SK17

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 －4		瓦質土器椀	A 15.2 B 4.6 C 5.5	やや密 小砂粒を若干含む。	灰白色	良	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨き調整，さらに刷毛目（8条/cm）を底部中央から放射状左まわりに施す。 外面は回転ナデ調整。 底部外面高台の内側に粗い板目状圧痕が観察される。 口縁周縁は黒っぽい。	
－5			A 16.1 B 5.0 C 5.2	密 細砂粒を若干含む。	内 黒灰色 外 灰白色	良好	内面は粗い回転ナデ調整の後，回転ヘラ磨き調整，さらに底部中央から放射状に刷毛目が施される。外面は回転ナデ調整。高台は粗雑な貼り付けによる。口縁外周と内面の一部を除いた部分がうすく黒味をおびている。	磨耗のため，刷毛目は不鮮明

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 −6		瓦質土器椀	A 15.3 B 4.9 C 5.9	密 小砂粒を若干含む。	灰白色	良好	内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらに底部中央から放射状に刷毛目（8条/cm）を施す。外面は回転ナデ調整。口縁内周と口縁外周の一部から高台にかけて黒っぽい。	

N35−SK35

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 −7		瓦質土器 小皿	A 9.1 B 1.9	やや密 小砂粒を比較的多く含む。	灰白色	良	内外面とも回転ナデ調整で器壁は滑らかに仕上げられている。外面は口縁部を除く大部分がはっきりと黒っぽく，内面は底部を中心にぼんやりと黒っぽい部分が認められる。	
−8		土師器杯	A 12.8 〜13.7 B 3.5	やや密 細砂粒を多く含む。	橙色がかった乳白色	良好	内外面とも回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ。 焼きひずみのため口縁部は楕円形を呈している。	

N35−SK30

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 −9		土師器小皿	A 8.2 B 1.2	密 小粒の砂粒を若干含む。	乳白色	良好	内外面とも回転ナデ調整。	
−10			A 8.5 B 1.4	やや密 細砂粒を多く含む。	赤色がかった乳白色	良好	内外面とも回転ナデ調整	
−11			A 8.1 B 1.3	密 砂粒ほとんど含まず。	黄色がかった乳白色	良好	体部は角度をもってたちあがり，口唇部はやや肥厚している。内外面とも回転ナデ調整	
−12			A 8.8 B 1.4	やや密 小砂粒を多く含む。	乳白色	良好	内外面とも回転ナデ調整	

N35－SK13

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 －13		土師器小皿	A 8.5 B 1.5	密 細砂粒を若干含む。	淡赤褐色	良好	底部から弱い稜をもって体部に至る。内外面とも回転ナデ調整	
－14			A 8.7 B 1.4	密 小砂粒を若干含む。	乳白色	良好	体部の器壁は薄く，外反し，底部中央は肥厚している。 内外面とも回転ナデ調整。内面底部中央は仕上げナデ，底部外面に板目状圧痕。	

N35－SK18

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 －15		黒色土器椀	A 14.9 B 4.7 C 5.2	やや密 小砂粒を若干含む。	黒褐色（部分的に内面は赤く，外面は灰白色を呈す。）	良好	椀部は扁平で，高台は丸味をおびて粗雑である。 内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらに不定方向に刷毛目調整を施す。外面は回転ナデ調整。	
－16		瓦質土器椀	A 15.4 B 4.8 C 5.7	やや密 大粒の砂粒を比較的多く含む。	灰白色	普通	内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨きを施し，底部中央付近から口縁部に向けて5条/cmの粗い刷毛目を放射状左まわりに施している。外面は回転ナデ調整を施し，部分的に不定方向ナデが観察できる。口縁周縁は黒っぽい。	体部から底部にかけて焼成時のものと考えられる亀裂が生じている。
－17			A 15.4 B 5.0 C 5.6	やや粗 小砂粒を多く含む。	灰白色	普通	内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらに6条を単位とする刷毛目がほぼ2.5cm間隔で口縁部近くから底部中央に向かって施される。外面は回転ナデ調整。 口縁周縁は黒味をおびている。	やや磨耗
－18			A 15.7 B 4.7 C 4.6	やや粗 大粒の砂粒を多く含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整。さらに5条/cmの刷毛目を放射状に左まわりに施している。外面は回転ナデ調整。高台は丸く粗雑である。 口縁周縁は黒っぽい。	
－19			A 15.3 B 4.9 C 4.5	やや粗 大粒の砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらに左方向放射状に粗い刷毛目を施す。外面は回転ナデ調整。 口縁周縁は黒っぽい。	
－20			A 15.9 B 4.8 C 4.5	密 小砂粒を若干含む。	灰白色	良好	貼り付け高台は小さく，断面三角形を呈す。内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整を施し，底部中央を中心に左方向放射状の刷毛目調整(9条/cm)で仕上げている。外面は回転ナデ調整，部分的に不定方向ナデがみられる。口縁周縁は，ぼんやりと黒っぽい。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第71図 −21		瓦質土器椀	A 15.7 B 5.0 C 4.3	やや密 大粒の砂粒を含む。	灰白色	普通	内面は粗い回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整。刷毛目は8条／cm，短い単位で交差し，全面に施されている。外面は回転ナデ調整。 内面口縁に沿って浅く，外面はぼんやりと広い範囲で黒っぽくなっている。	
−22			A 16.1 B 5.2 C 5.3	粗 大粒の砂粒を含む。	灰白色	普通	貼り付け高台は端部が押し潰されていびつな仕上がりとなっている。 口縁部外面には明瞭な稜をもつ。 内面は回転ナデ調整後，回転ヘラ磨き調整，さらに不定方向ナデ調整を施す。外面は回転ナデ調整。 口縁端縁は黒っぽい。	内面の回転ヘラ磨き調整は口縁部付近にかろうじて観察できるが，体部は刷毛目によって消されており，N35−SK18の他の椀とは趣を異にしている。
−23			A 15.8 B 5.0 C 4.2	粗 大粒の砂粒を含む。	灰白色	普通	貼り付け高台は小さく低い。 内面は粗い回転ナデ調整後，ヘラ磨き調整，さらに粗い放射状の刷毛目調整を左方向に施している。外面は回転ナデ調整。口縁外周にはっきりと，内周にぼんやりと黒っぽい部分が観察できる。	
−24		須恵器小壺	B 現存2.9	やや密 小砂粒を若干含む。	灰白色	やや不良	胴部が張った扁平な小壺である。内外面とも回転ナデ調整。肩部内面は，成形時の粘土のひずみを残す粗雑な仕上げである。	

川北地区出土　瓦

挿図番号	図版番号	器種	法量 cm.	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第73図 −1		平瓦		やや密	表 灰白色 裏 灰白色 断 灰白色	普通	陽刻巴文軒平瓦 右巻の巴文で尾は長く，半周するあたりで他の巴と接している。表あらい布目裏ナワ目。	
−2				密	表 乳灰白色 裏 灰白色 断 灰白色	良	陽刻五連巴文軒平瓦 右巻の巴文。尾は長く，他の巴に接している。表布目，裏ナワ目	
−3				やや密	表 黄土色 裏 黄土色 断 黄土色	不良	陽刻巴文軒平瓦 右巻の巴文 表布目，裏ナワ目	
−4				密	表 暗灰黒色 裏 暗灰黒色 断 暗灰白色	良	陽刻巴文軒平瓦 右巻の巴文。尾は長く他の巴と接している。表布目，裏ナワ目	
−5				密	表 暗灰黒色 裏 暗灰黒色 断 暗灰黒色	良	陽刻巴文軒平瓦 右巻の巴文。尾は長いが，尾の形状は三本とも異なる。	

挿図番号	図版番号	器種	法量 cm.	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第73図 −6		平瓦		密	表 暗灰白色 裏 暗灰黒色 断 暗灰白色	良	陽刻巴文 右巻の巴文，尾は比較的長いが他の巴とは明確に接しない。表布目，裏ナワ目。	
−7				やや粗 砂粒を含む。	表 灰白色 裏 灰白色 断 茶灰色	普通	陽刻巴文。右巻の巴文で尾は長く，他の巴と接する直前で切れている。 表布目，裏ナワ目。調整不良	
−8				普通	表 灰白色 裏 灰白色 断 灰白色	普通	陽刻巴文。右巻の巴文で尾は長いが，他の巴とは接していない。 表布目，裏ナワ目	
−9				密	表 灰色 裏 灰色 断 灰色	良	右巻の巴文で尾はさほど長くない。 他の巴とは接しない。 表布目，裏ナワ目	
−10				やや密	表 黄土色 裏 黄土色 断 黄土色	不良	右巻の巴文，尾は他の巴とつながっている。 表布目，裏ナワ目	
−11				普通	表 灰黒色 裏 灰黒色 断 灰黒色	普通	右巻の巴文だが仕上げがほどこされておらず，文様は不良。 表布目	
−12				粗 小砂粒を多く含む	表 灰白色 裏 灰白色 断 茶灰色	普通	右巻の巴文。尾は長く半周以上まわる。 表布目，裏ナワ目	
−13				粗 小砂粒を多く含む。	表 灰黒色 裏 灰黒色 断 灰黒色	普通	陰刻巴文軒平瓦	
−14			厚さ 5.0	やや粗	表 暗灰黒色 裏 暗灰黒色 断 暗灰黒色	普通	偏行唐草文軒平瓦 表布目，裏ナワ目	

川北地区出土　硯

挿図番号	図版番号	器種	法量 cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第74図 −1	図版第34-11-1	須恵器硯	縦 15.8 横 12.8 高 4.8	良好	表 暗灰白色 裏 暗灰白色	良好	二面硯	
−2	34-11-2		横 5.8 高 1.8	普通	表 灰白色 裏 灰白色	良好	方形硯	

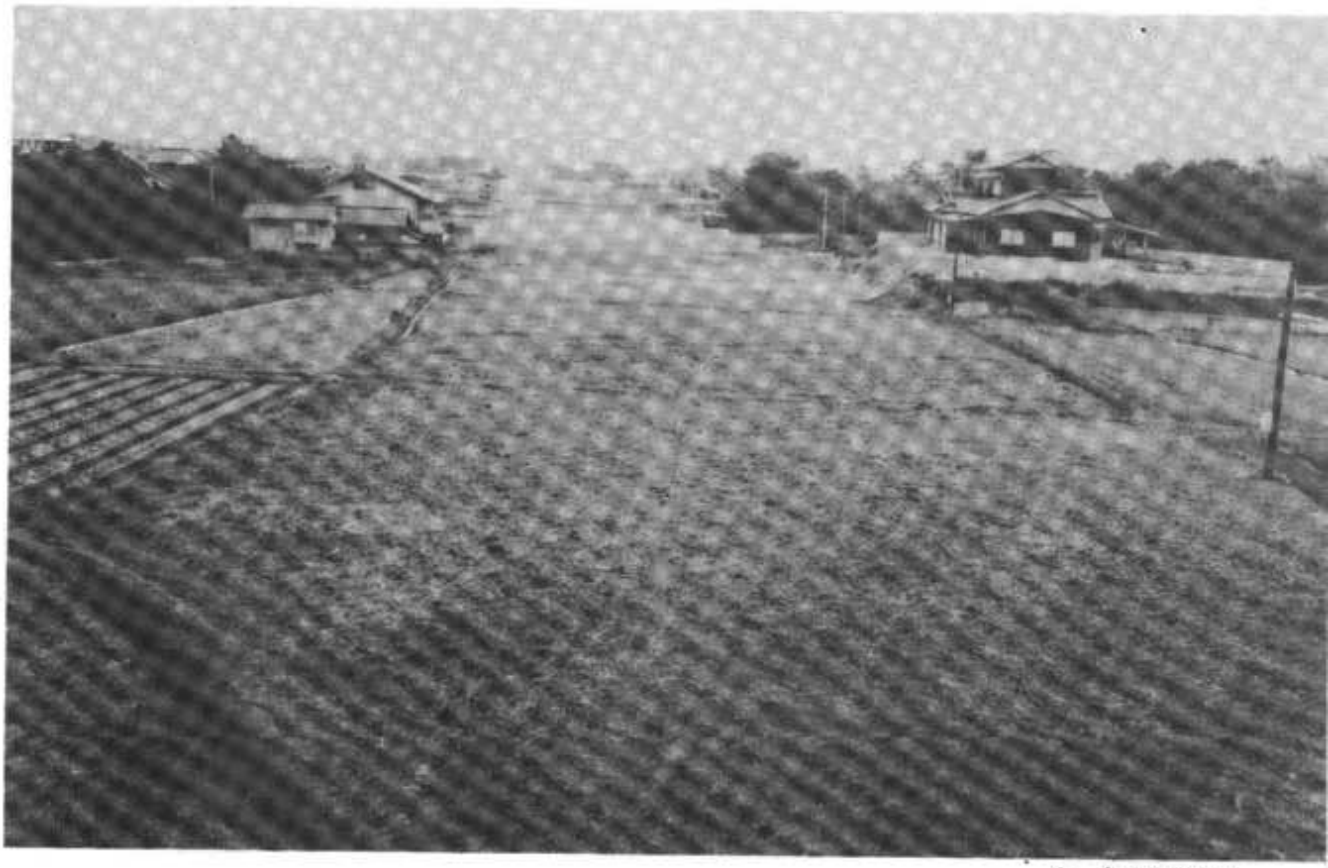
N3－SK01

挿図番号	図版番号	器種	法量 A口径 B器高 C高台径cm	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
第78図 －1	図版第 34－13	黒色土器椀	A 15.6 B 7.1 C 7.2	普通	内 黒色 外 黄灰色	良好	外面に回転ヘラ磨き。内面に井桁状の暗文。	
－2	34－14		A 15.6 B 6.6 C 7.0	普通	内 黄灰色 外 黄灰色	良好	外面に回転ヘラ磨き。内面には不規則な暗文	
－3			A 14.8 B 6.2 C 6.2	普通	内 黒色 外 黄灰色	良好	外面に回転ヘラ磨き。 内面は井桁状の暗文。	
－4			A 15.7 B 6.1 C 6.7	普通	内 黒色 外 黄灰色	良好	外面に回転ヘラ磨き。 内面は井桁状の暗文	磨耗
－5			A 15.3 B 6.9	普通	内 黒色 外 黄灰色	良好	外面に回転ヘラ磨き。内面は井桁状の暗文	
－6		土師器小皿	A 10.8 B 1.2	良好	淡黄色	良好	ヨコナデによる調整。	口径は推定
－7			A 7.7 B 1.6	不良	淡黄色	不良		磨耗
－8		土師器鉢	A 35.5	不良	赤褐色	不良		磨耗

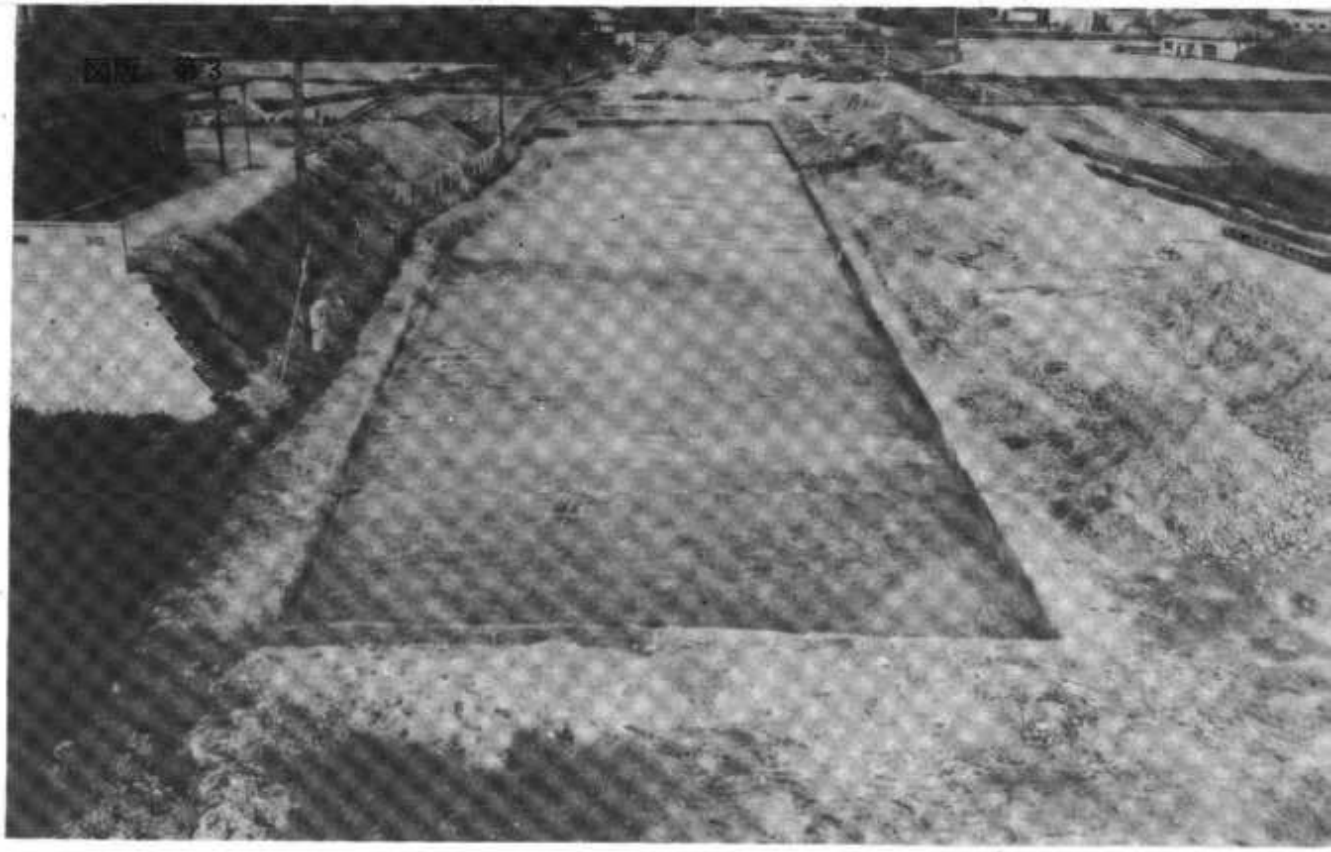
府中貯水池
南前谷
赤尾
石井
府中町
小屋
柏原
北側
東側
波指
新名
中新名
南新名
石井
橋池
下野坂
打越
内間
丸山西
丸山田
猿王
屋敷
掌床
松崎
北内
宮薮
新開
本松
宮西
北小路
陶畑
高松琴平電鉄琴平線
畳原
畳原下
畳原上
西原
山原
陶
滝宮
御林
畳清
畳来
田所
綾南
綾川北
九十原
北蓮西浦
蓮池

図版　第2

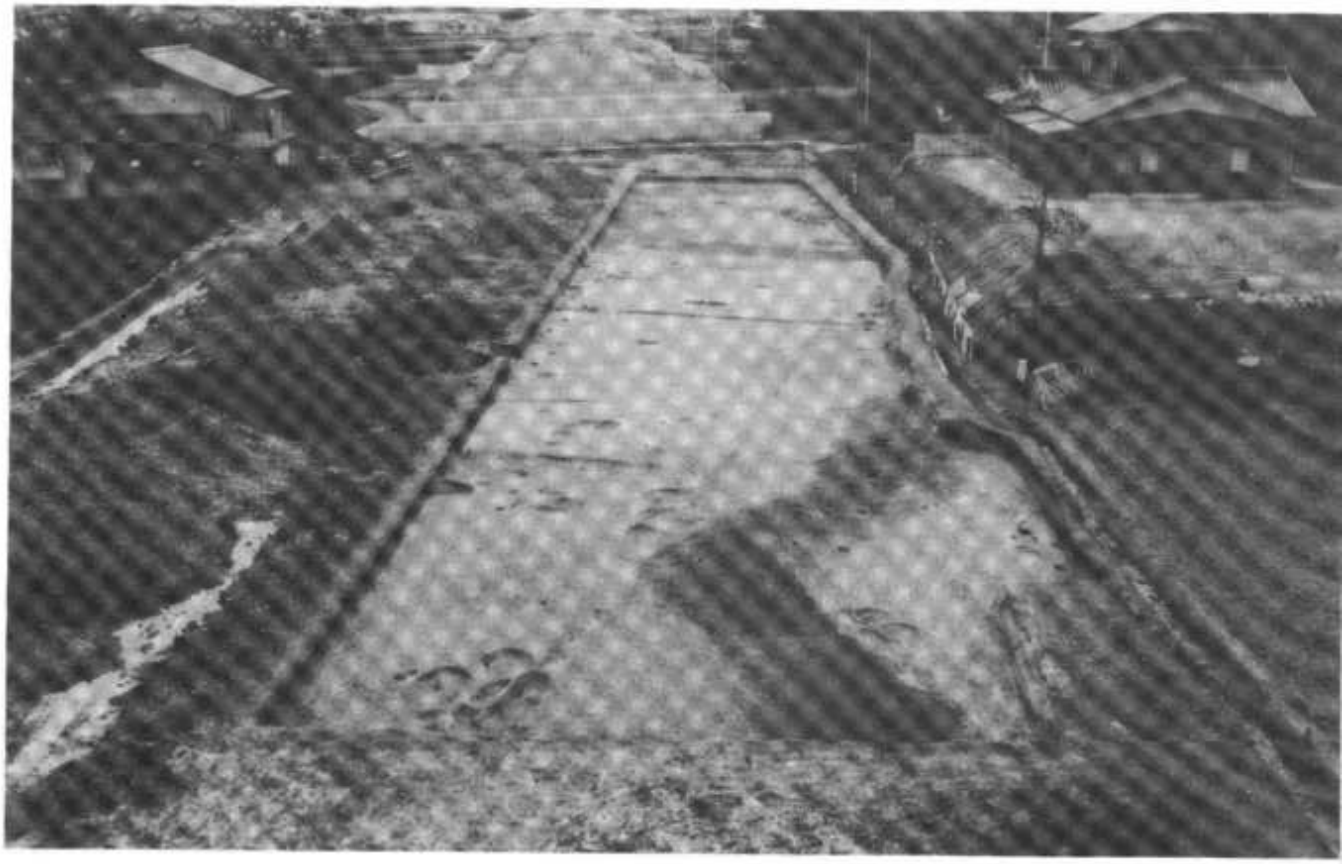
1．遠望
（城山より）



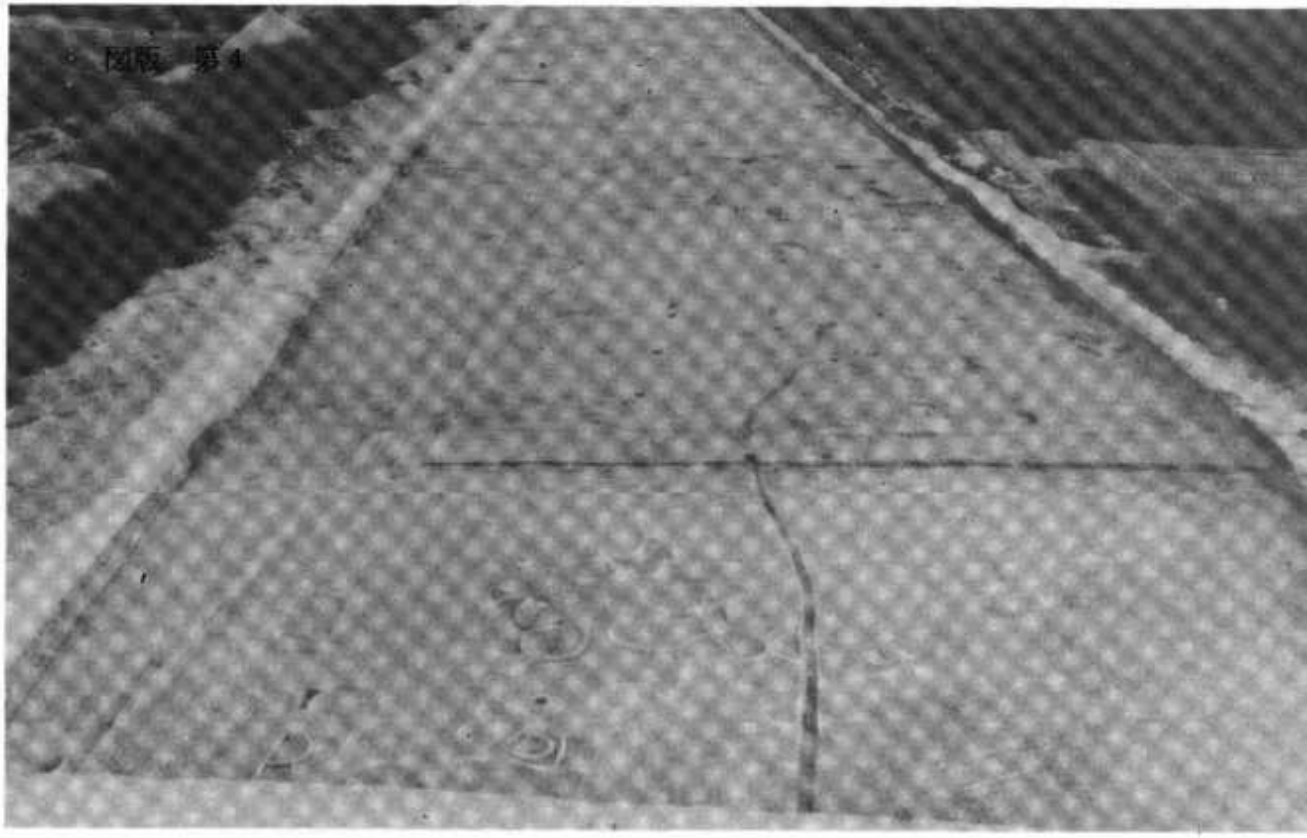
2．山原地区全景
（東より）



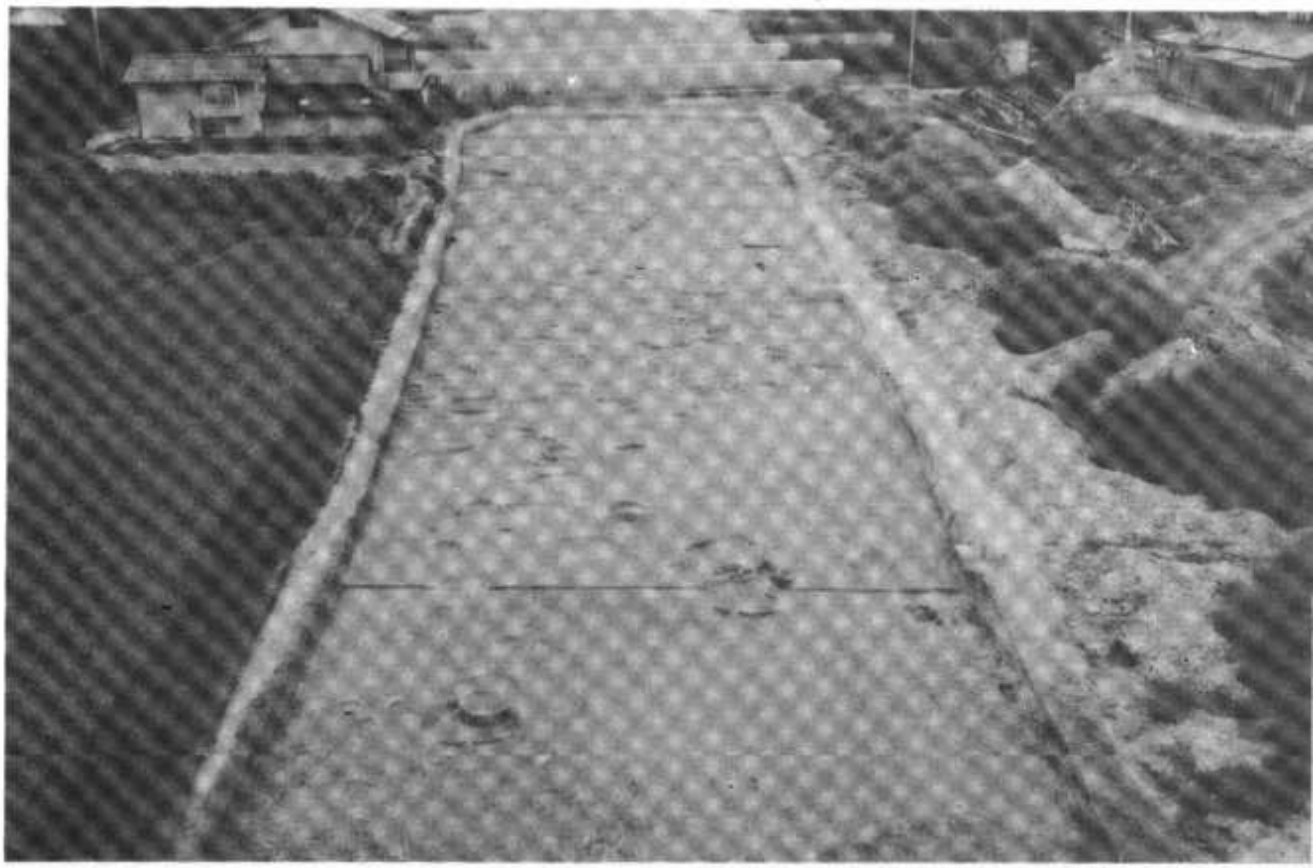
1．山原地区　N15～18全景（西より）



2．山原地区　N15～18全景（東より）



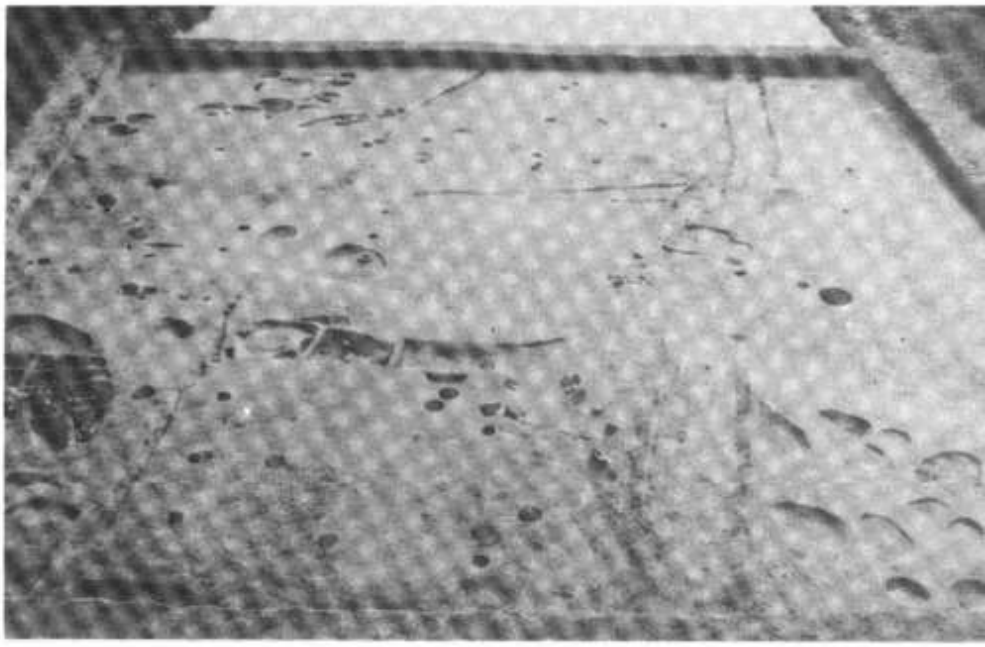
1．山原地区　S15～18全景（西より）



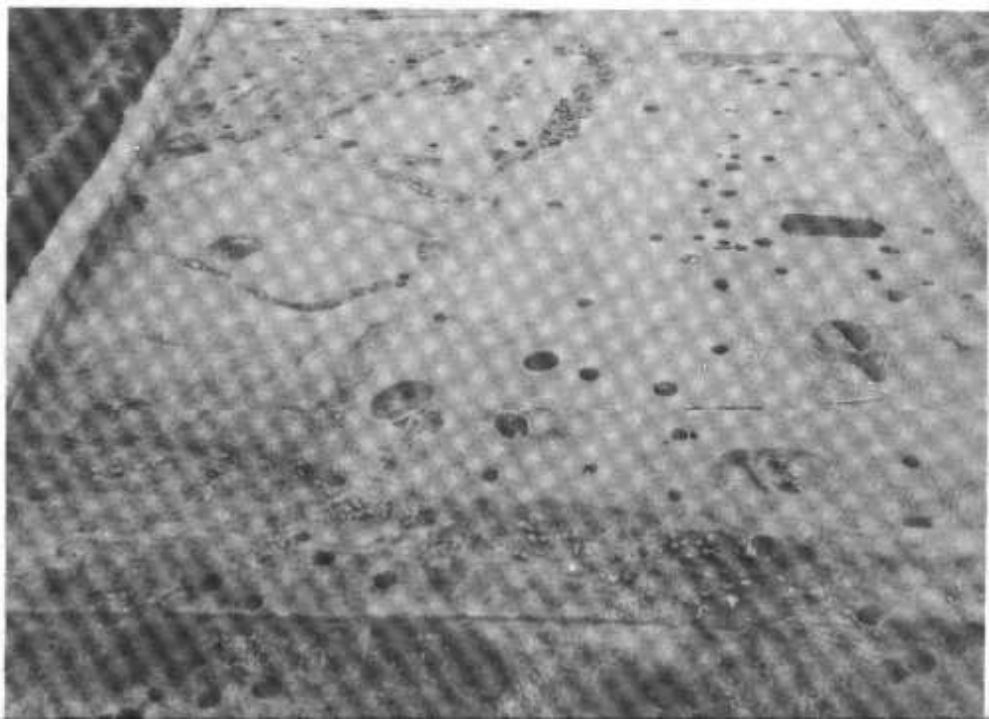
2．山原地区　S15～18全景（東より）

図版　第5

1．山原地区
S15全景（東より）

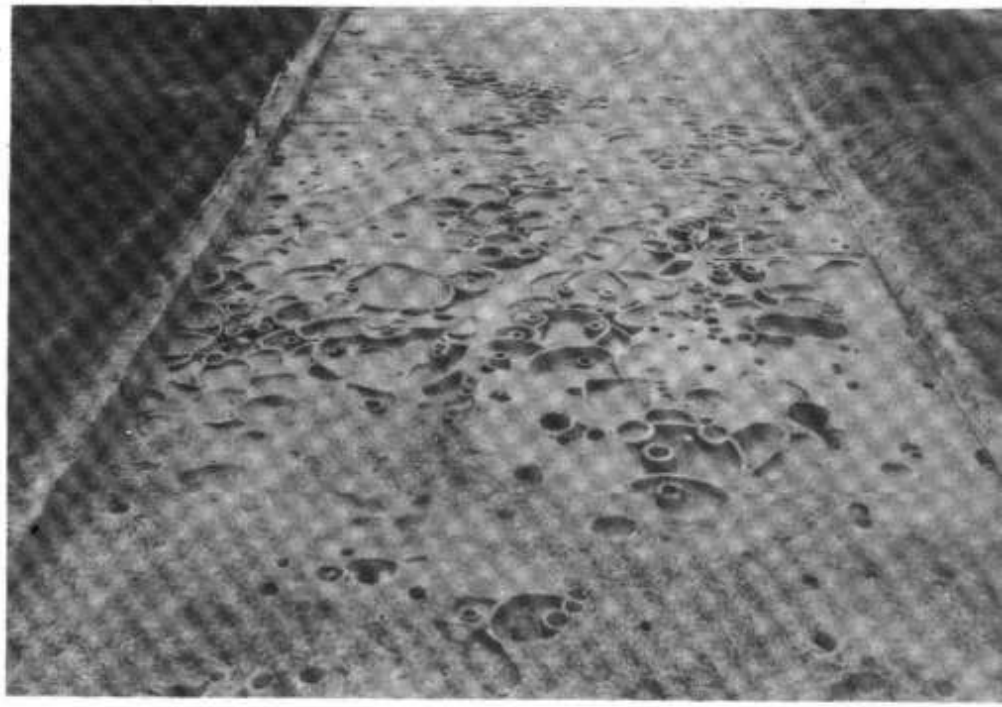


2．山原地区
S16全景（東より）

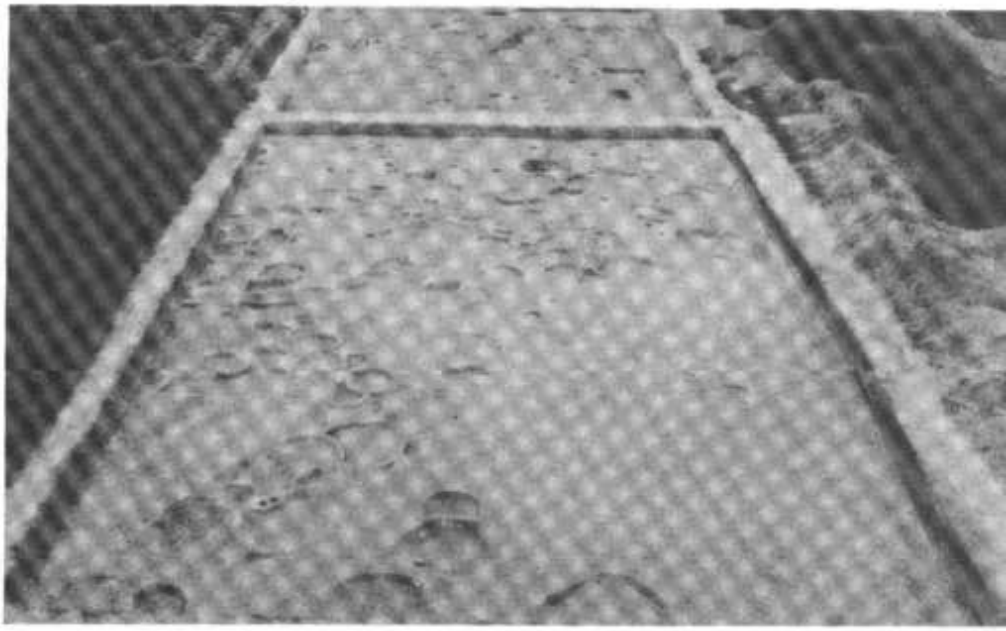


3．山原地区
S17全景（東より）

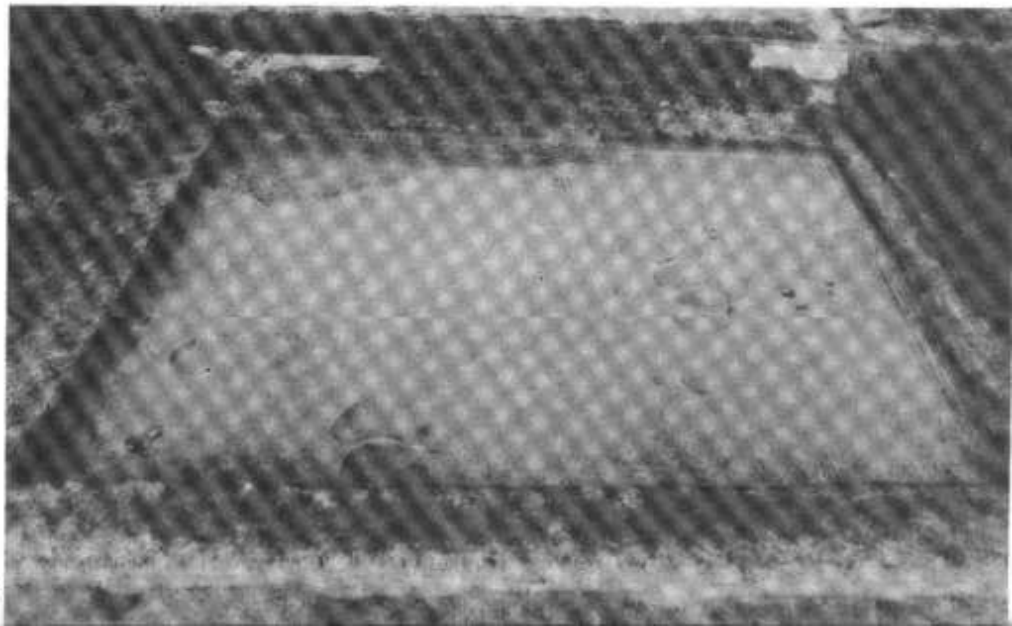
図版　第6



1．山原地区
S17全景（東より）

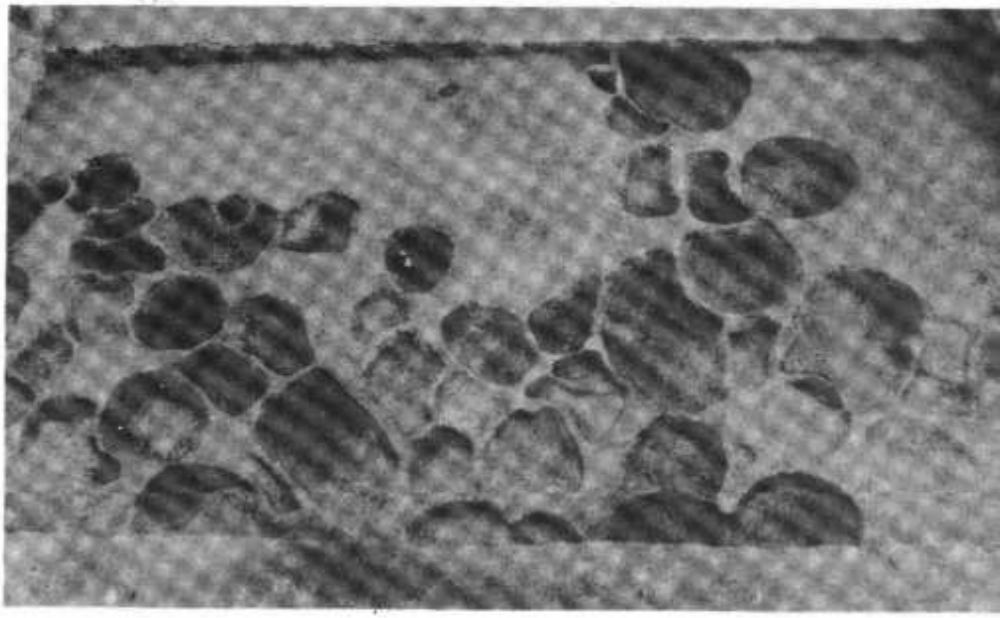


2．山原地区
S18全景（東より）

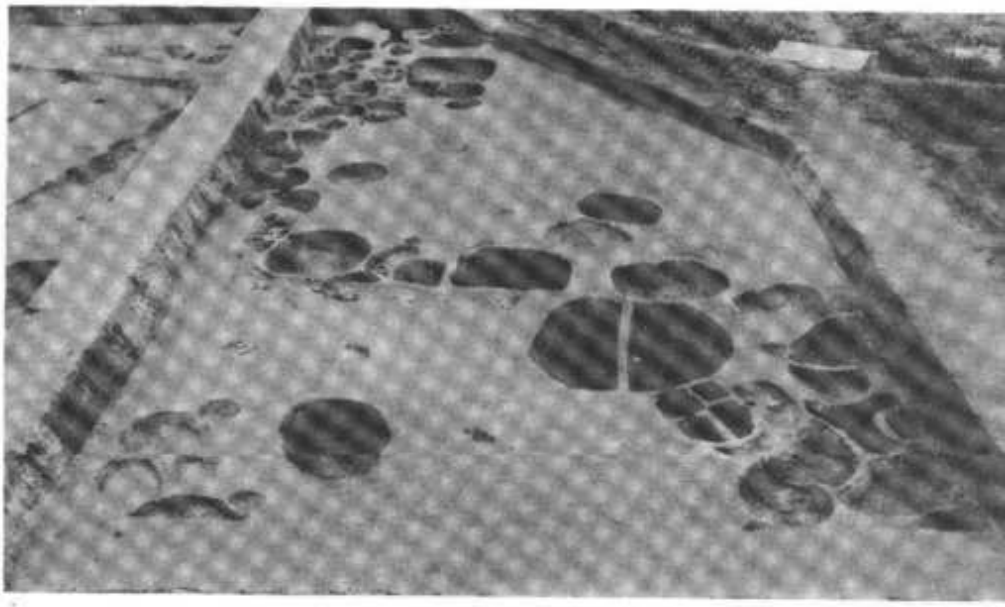


3．山原地区
S19W全景（西より）

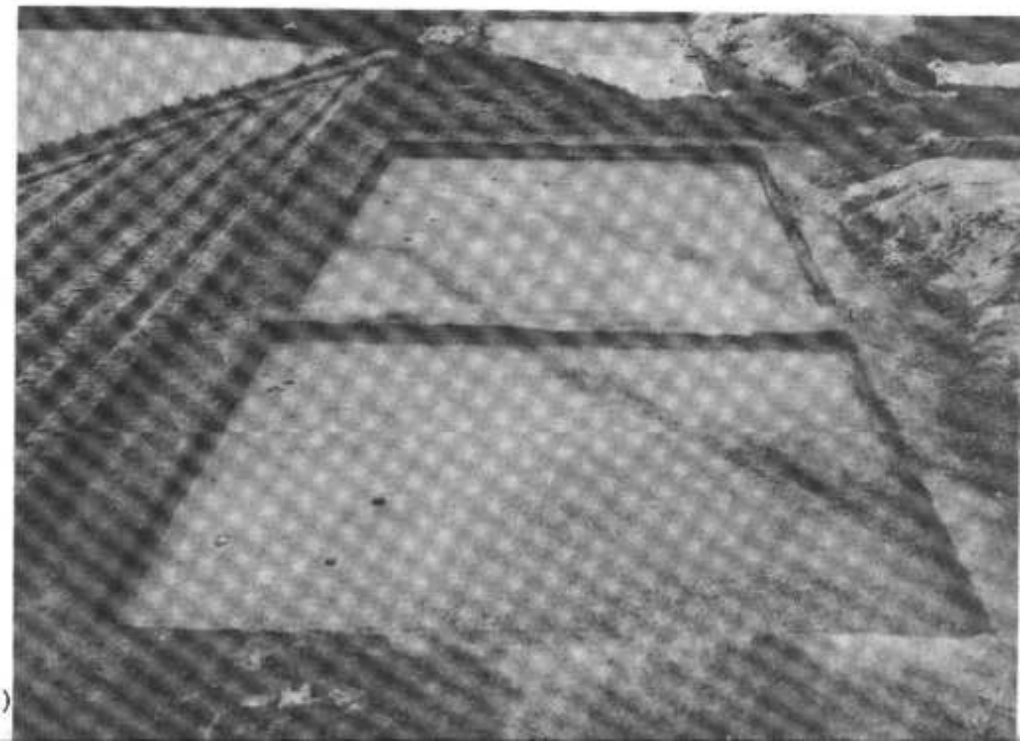
図版　第7



1．山原地区
S19E全景(西より)

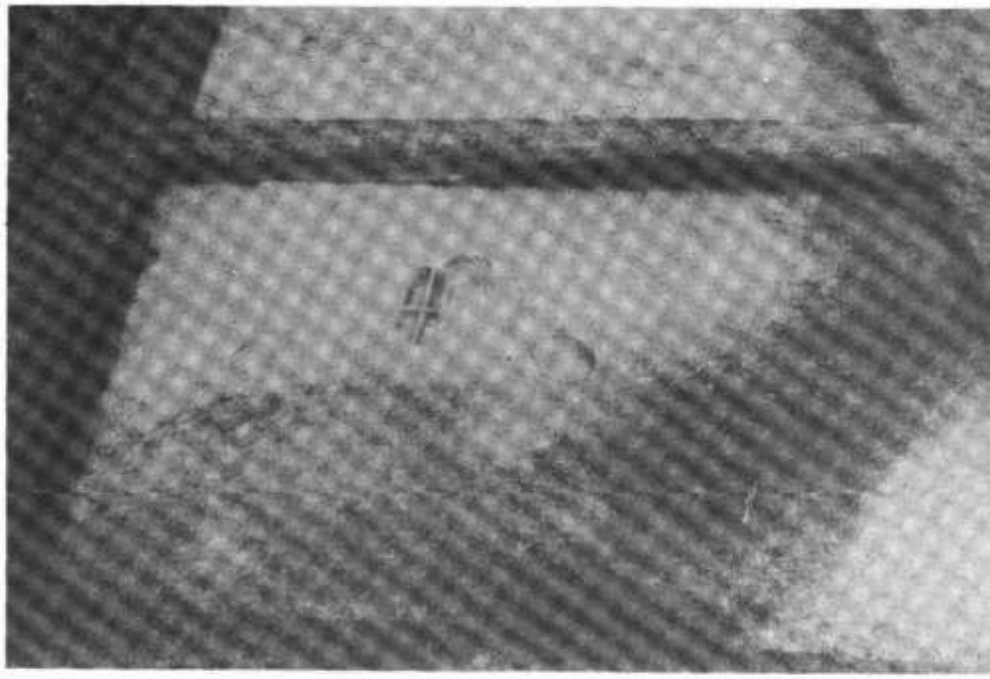


2．山原地区
S20全景（西より）

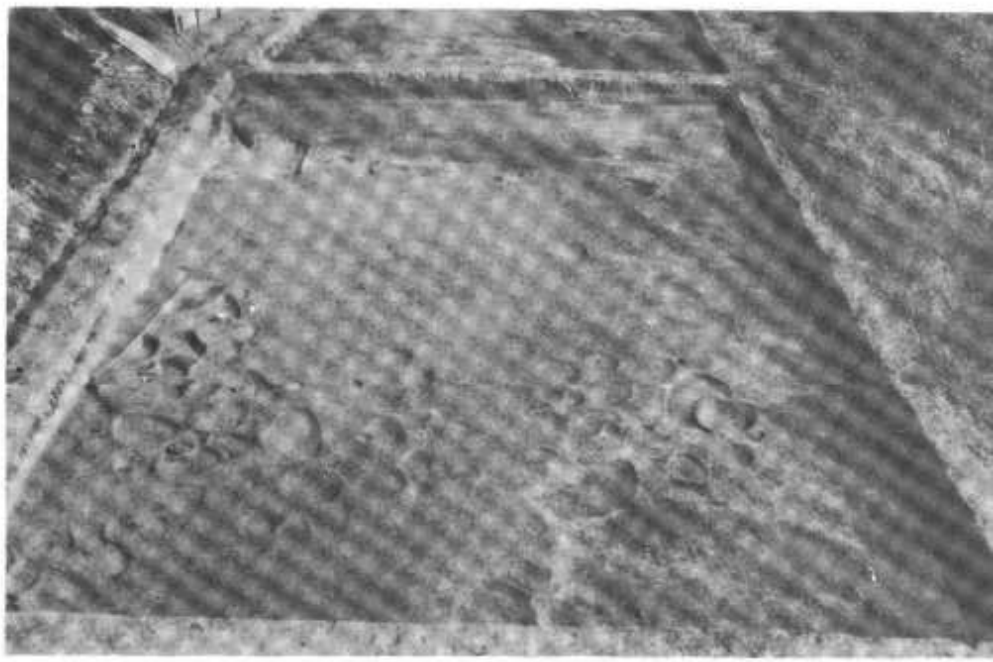


3．山原地区
S21・22全景（東より）

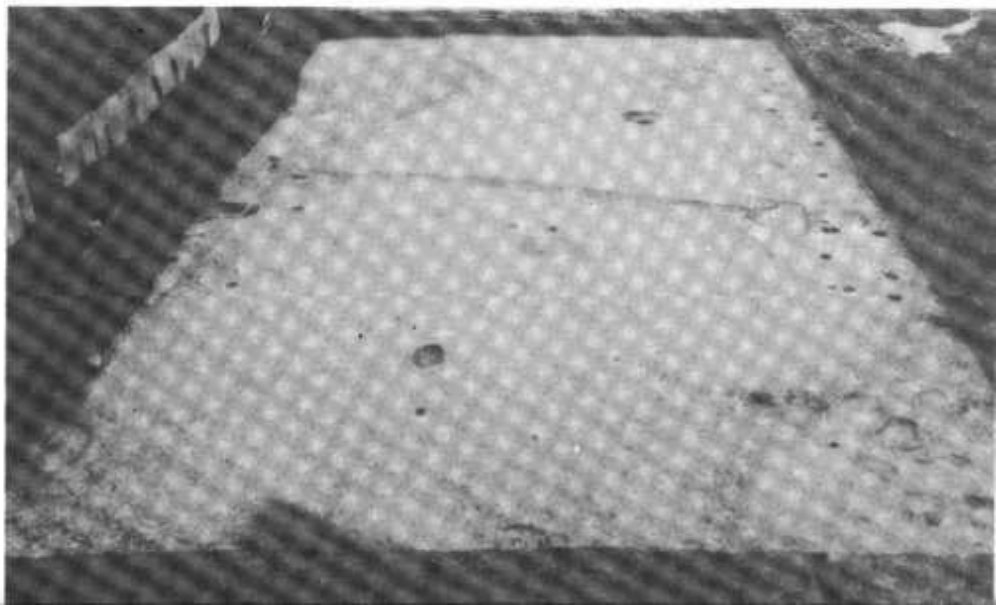
図版　第8



1．山原地区
N15全景（西より）

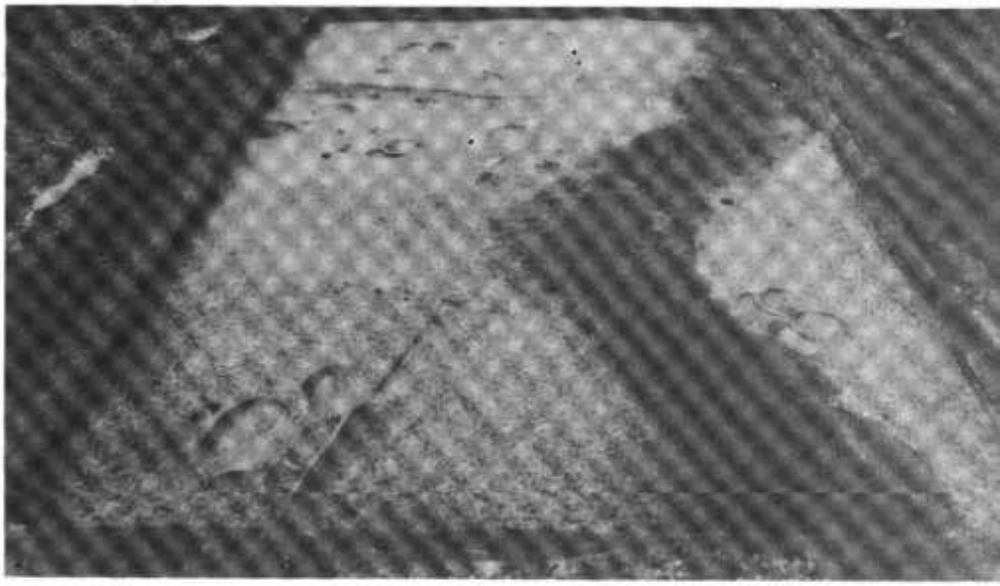


2．山原地区
N16全景（西より）

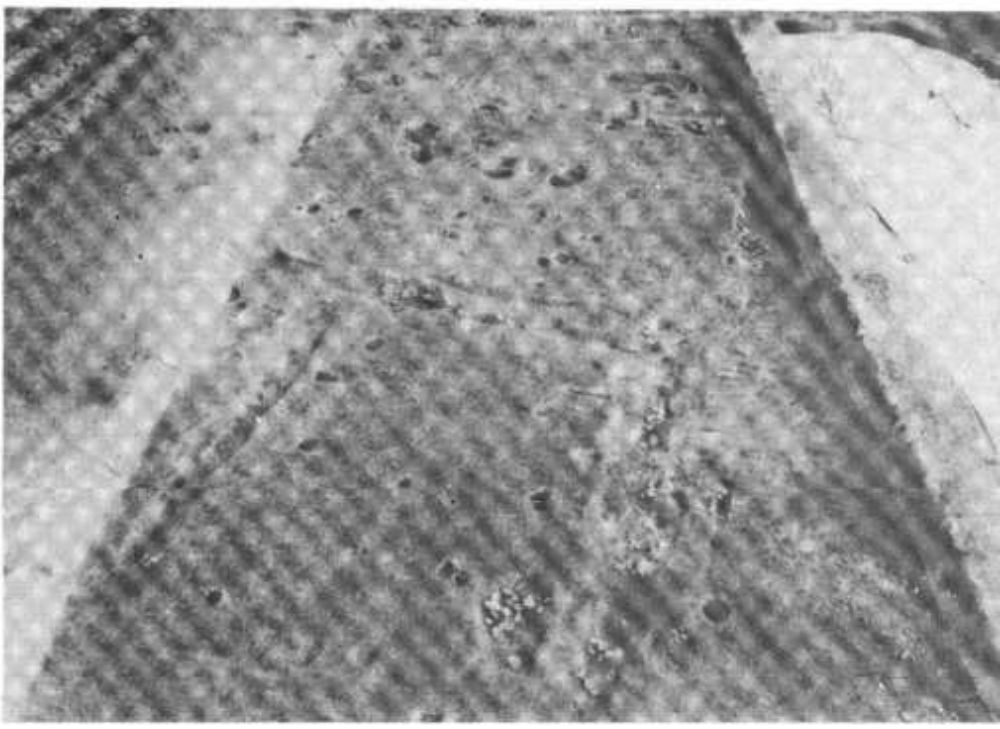


3．山原地区
N17全景（西より）

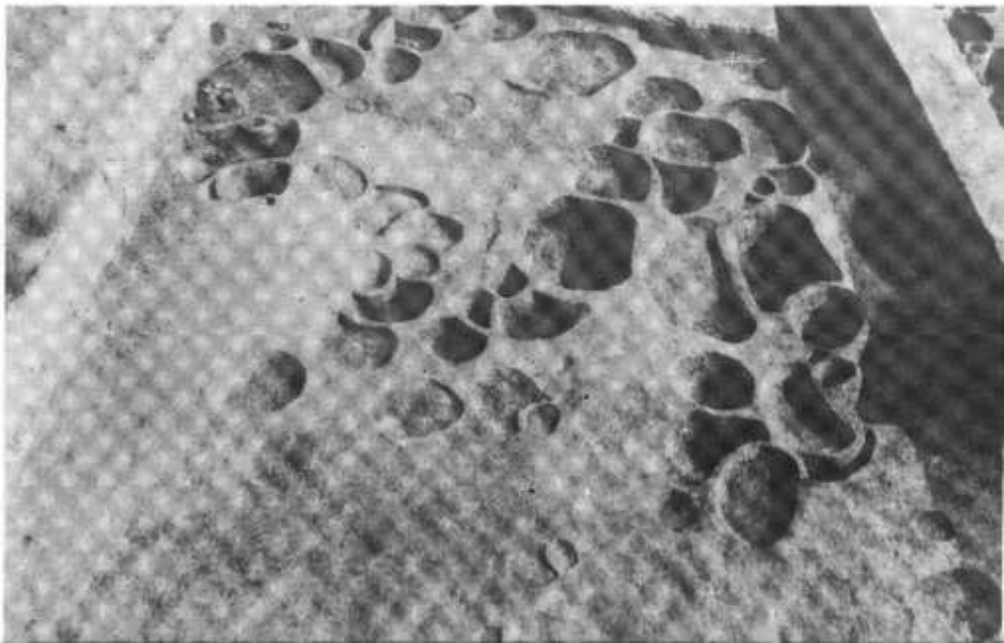
図版　第9



1．山原地区
N18全景（東より）

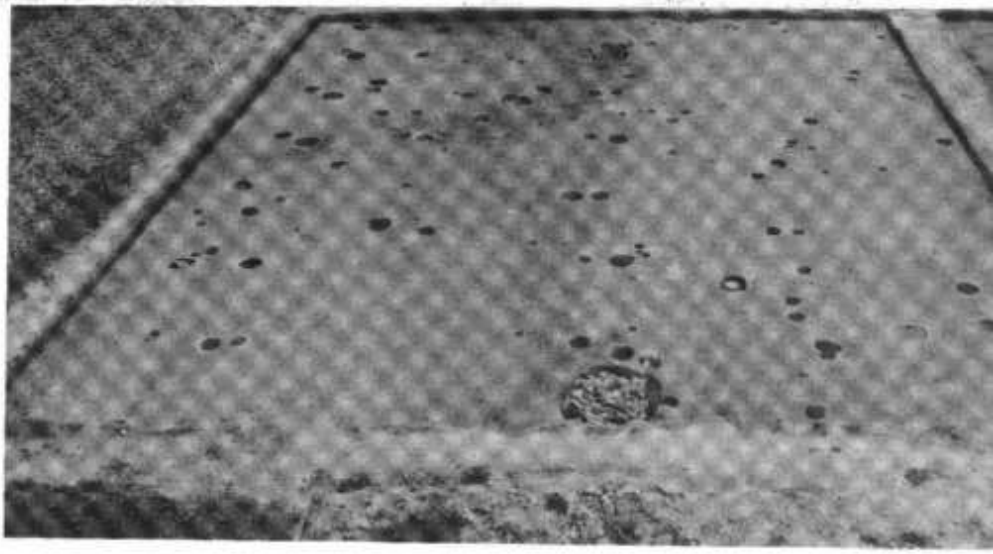


2．山原地区
N20全景（西より）

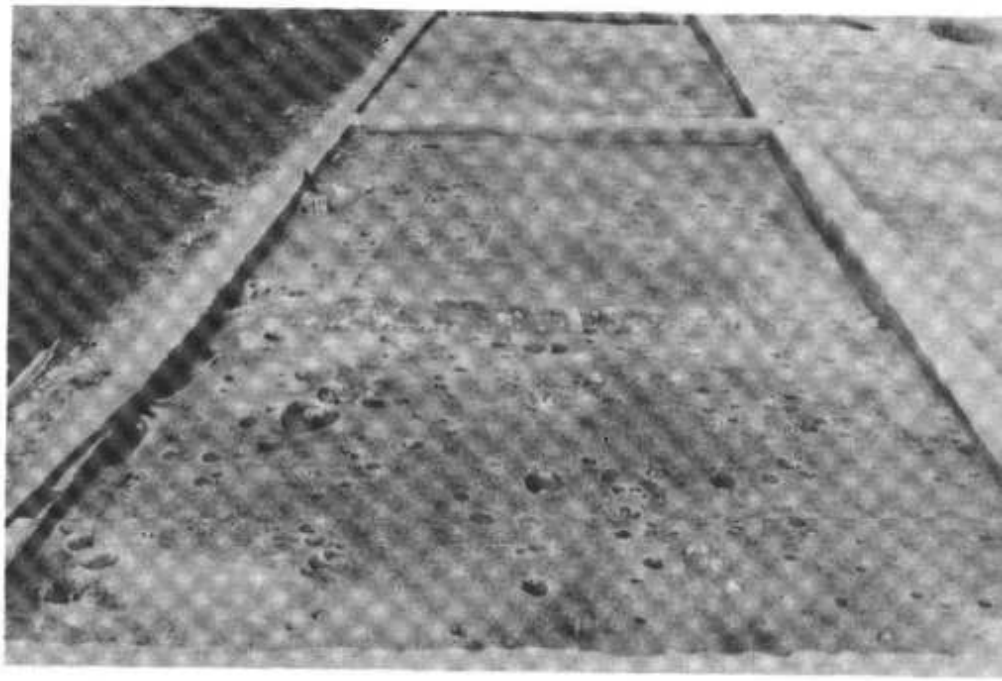


3．山原地区
N20全景（西より）

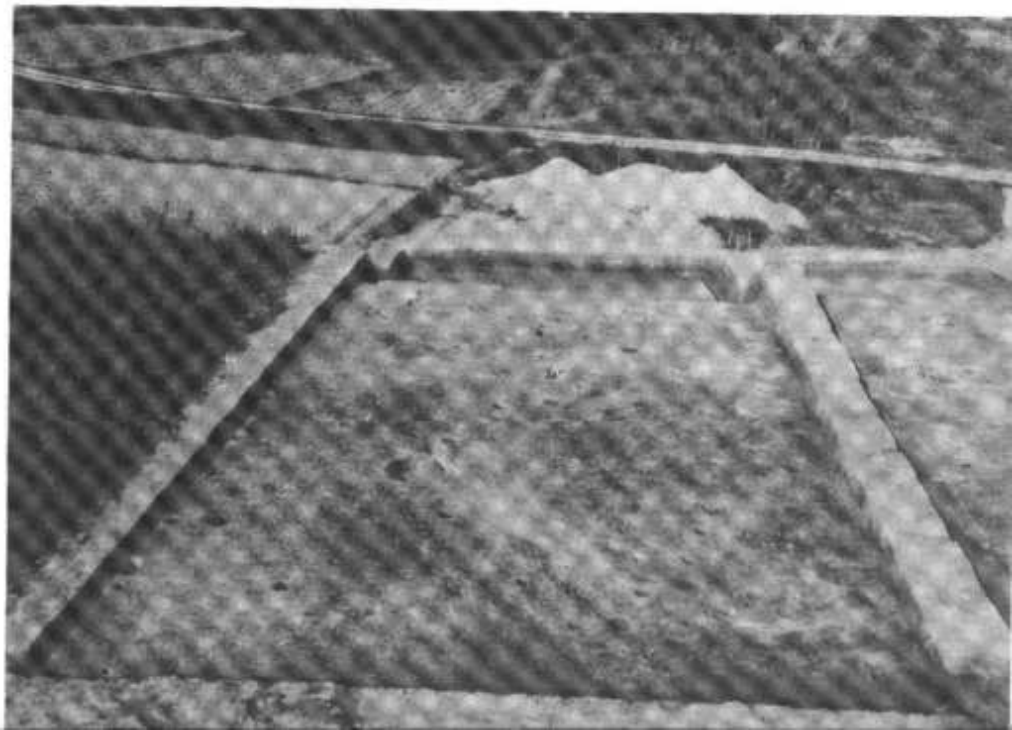
図版　第10



1.山原地区
N23全景(西より)



2.山原地区
N24全景(西より)



3.山原地区
N25全景(西より)